

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第171集

ながのきたうら いせき

長野北浦遺跡

とうのこし いせき

塔の越遺跡

2012

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

濃尾平野に人々が住み始めたのは、縄文海進が終わり、海が後退を始めて平野の拡大が始まった5000年程前です。それ以後、濃尾平野では木曾川支流（日光川・三宅川・青木川等）と五条川によって絶えず土砂が運ばれて居住に適した自然堤防の形成が進み、1300年程前にはほぼ現在に近い地勢がかたちづくられました。その頃に古代尾張国の政治的中枢としての国府が、現在の稲沢市東部の三宅川沿いに設けられました。濃尾平野にようやく中心地が姿を現したのです。長野北浦遺跡・塔の越遺跡はこの中心地の東に位置します。

この度、当センターでは稲沢市北部を東西に貫通する都市再生総合整備事業3・3・14稲沢・西春線の建設に先立ち、平成19年度から平成22年度にかけて、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じた委託事業として、4ヶ年にわたってこの長野北浦遺跡・塔の越遺跡の発掘調査を行ってまいりました。

その結果、古墳時代、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代、江戸時代というように連綿と続く人々の営みだけでなく、尾張国府の一端にも迫ることができました。往時の政治中心地周辺の様相が掴めたのは大きな成果です。そのほかにも、本書には重要な成果が盛り込まれています。

この報告書が地域の貴重な歴史を記録したのとして皆様に活用されるとともに、埋蔵文化財への理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、関係各機関および関係者の皆様からのご指導とご配慮、また地域住民の方々のご協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成24年3月

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 加藤高明

例言

1. 本書は、愛知県稲沢市長野・塔の越・治部丸に所在する長野北浦（ながのきたうら）遺跡・塔の越（とうのこし）遺跡の発掘調査報告書である。
 2. 長野北浦遺跡・塔の越遺跡の発掘調査は、「都市再生総合整備事業3・3・14 稲沢西春線」に伴う事前調査であり、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じた委託事業として、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターが、平成19年度から平成22年度までの、のべ4ヶ年（長野北浦遺跡：平成19年度・20年度；計7,000㎡、塔の越遺跡：平成19年度～平成22年度；計9,450㎡）にわたって行ったものである。調査面積は両遺跡を合わせて16,450㎡である。
整理・報告は平成22年度から平成23年度の2ヶ年で実施し、平成24年3月に報告書を発行した。
 3. 調査・記録方法は愛知県埋蔵文化財センター・調査マニュアルに拠っている。
 4. 調査担当は以下のとおりである。
 - ・平成19年度 調査課長：城ヶ谷和宏（現・愛知県立熱田高校教頭）、主査：石黒立人（調整）
調査研究員：樋上昇（両遺跡調査総括）、藤山誠一（長野北浦遺跡調査担当）、永井邦仁（長野北浦遺跡調査担当）
早野浩二（塔の越遺跡調査担当）、支援業者：（株）アコード
 - ・平成20年度 調査課長：城ヶ谷和宏（同上）、主任専門員：石黒立人（調整）、調査研究員：藤山誠一（長野北浦遺跡調査担当）、鶴岡雅弘（塔の越遺跡調査担当；現・愛知県埋蔵文化財調査センター主任）、支援業者：（株）イビソク
 - ・平成21年度 調査課長：赤塚次郎、主査：小澤一弘（調整）、調査研究員：宇佐見守（調査担当；現・愛知県埋蔵文化財調査センター部長補佐）、伊奈和彦（調査担当；現・愛知県埋蔵文化財調査センター）、支援業者：（株）東海アナース
 - ・平成22年度 調査課長：赤塚次郎、統括専門員：石黒立人（調査担当）
 5. 整理・報告担当は以下のとおりである。
 - ・平成22年度 統括専門員：石黒立人
 - ・平成23年度 統括専門員：石黒立人整理報告にあたって、以下の業務支援があった。
 - ・自然科学分析：（株）パレオ・ラボ
 - ・遺物実測・デジタルトレース：（株）イビソク
（株）文化財サービス
 - ・デジタルデータ加工・調整：（株）国際文化財
 - ・写真撮影：写真工房 遊
 6. 調査にあたっては、愛知県教育委員会学習部文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県建設部都市整備課、愛知県一宮建設事務所、稲沢市教育委員会、稲沢市土木部、長野町自治会役員、塔の越町自治会役員、治部丸町自治会役員、周辺地域住民の皆様のご理解・ご協力をえて円滑に進めることができた。このことに対し深く感謝申し上げる。
 7. 本書の執筆分担は以下のとおりで、必要があれば文末に記した。
第1章：石黒立人、第2章：石黒・樋上昇・早野浩二・宇佐見守（同上）・鶴岡雅弘（同上）、第3章：石黒・樋上・藤山誠一、第4章・1：奥野絵美（愛知県埋蔵文化財調査センター）・第4章・2：鬼頭剛、第5章・1：早野浩二、第5章・2：永井邦仁、第6章：石黒
全体の編集は石黒が行った。古代の評価を含めて城ヶ谷和宏氏（同上）に多々ご教示を賜った。
なお、事実記載に関わる第2章・第3章について執筆者が複数であるのは、報告書担当が調査担当者から部分的に原稿の提供を受け、遺物についても同様に個別資料について原稿の提供を受けたことによる。もちろん、調査状況について個別に情報提供を受けたことは当然だが、報告担当として調査担当の認識との間に齟齬が生じた場合には該当分について記述した。
自然科学分析関係（動物遺存体・植物種子・放射性炭素年代測定・材質分析等）の報告については結果のみ掲載することにどめた。
なお、それぞれについての報告データは当センターで保管している。
 8. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センター（0567-67-4164）が、写真を含めた記録類は公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター（0567-67-4161）が保管している。
両機関の所在地 〒498-0017 愛知県稲沢市南ヶ須野野方802-24
- ### 凡例
1. 用語のうち、「検1」「検2」「検・・・」は作業工程のうち、遺構検出のための包含層順の順序を示す。つまり、1面目の遺構面精査までが「検1」、次に遺構掘削（遺構面）、その次ぎに掘り下げを始めて2面目の遺構面精査までが「検2」、そして次、というように作業手順に対応している。基本的にそれぞれの「面」は作業面であり層位区分には対応せず、ましてや有意な地表面を意味するわけではない。
 2. 時期区分は、古墳前期前半、古墳前期後半、古墳前期末、古墳中期、古墳後期、古代（奈良・平安）、中世（鎌倉・室町）、戦国、近世、近・現代（明治・大正・昭和）、もしくは*世紀と呼称し、特に必要があれば特定型式名や部式名（『愛知史』に準拠）を用いた。
 3. 調査時に付付した遺構の個別認識はそのままとした。ただ、井戸の場合に最初「SK」で後に「RG」に変更されることがあったが、番号は唯一なので、むしろ遺構認識の変化として旧層別を抹消せずそのまま記載した。また、「報告」に際して、建物跡や複数調査区にまたがる遺構については、記述の便宜上、「建物1」「大溝」「河道」というように、別に名称を与えた。
 4. 遺構図や文中の標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。
遺構実測図は、土器（拓図を含む）・陶磁器・土製品（土器加工彫刻・陶片部石）等について基本1/4とし、特に大形品は1/8にした。それ以外、瓦・フイゴ羽口・土鏝・製瓦土器・1/3、石器：1/2・1/4、鉄器：1/1・1/2、としてその断面図中に表記した。本器については基本1/4、大形品を1/8とした。
 - 拓図については、必要があれば1/2図を追加した。古代以降の土器類は清刷彫像を除き断面にアミ掛けをした。
 6. 遺物番号は、土器・陶磁器・土製品等については調査区ごとに、石器・金属器・木器など点数の少ないものは遺跡ごとに通番をふっている。そのため、レイアウト上は番号が前後する場合がある。

目次

本文

第1章 調査と遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・1

1. 調査の概要・・・・・・・・・・・・・1

(1) 調査の経緯・・・・・・・・・・・・・1

(2) 調査の経過・・・・・・・・・・・・・1

2. 遺跡の環境

(1) 地理的環境・・・・・・・・・・・・・1

(2) 歴史的環境・・・・・・・・・・・・・1

第2章 塔の越遺跡・・・・・・・・・・・・・3

1. 調査の概要・・・・・・・・・・・・・3

(1) 遺跡の状況・・・・・・・・・・・・・3

(2) 作業工程・・・・・・・・・・・・・3

2. 遺構・遺物の各説・・・・・・・・・・・・・4

(1) 古墳・・・・・・・・・・・・・4

A. 概要・・・・・・・・・・・・・4

B. 遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・4

(2) 古代・・・・・・・・・・・・・23

A. 概要・・・・・・・・・・・・・23

B. 遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・23

(3) 中世・・・・・・・・・・・・・125

A. 概要・・・・・・・・・・・・・125

B. 遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・125

(4) 近世・・・・・・・・・・・・・131

A. 概要・・・・・・・・・・・・・131

B. 遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・131

第3章 長野北浦遺跡・・・・・・・・・・・・・139

1. 調査の概要・・・・・・・・・・・・・139

(1) 遺跡の状況・・・・・・・・・・・・・139

(2) 作業工程・・・・・・・・・・・・・139

2. 遺構・遺物の各説・・・・・・・・・・・・・140

(1) 古墳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・140

A. 概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・140

B. 遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・140

(2) 古代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・163

A. 概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・163

B. 遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・163

(3) 中世・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・165

A. 概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・165

B. 遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・165

(4) 近世・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・179

A. 概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・179

B. 遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・179

第4章 自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・217

1. 昆虫化石を用いた長野北浦遺跡の古環境復元／奥野絵美・・・・217

2. 長野北浦・塔之越遺跡の地下層序と表層地形解析／鬼頭剛・・・・225

第5章 考察・・・・・・・・・・・・・・・・・235

1. 長野北浦遺跡・塔の越遺跡における

古墳時代の遺構・遺物について／早野浩二・・・・・・・・235

2. 古代の塔の越遺跡／永井邦仁・・・・・・・・・・・・・・249

第6章 総括・・・・・・・・・・・・・・・・・259

塔の越遺跡遺構写真図版

長野北浦遺跡遺構写真図版

等の越遺跡・長野北浦遺跡遺物写真図版

報告書抄録

挿図

第1章

図1 長野北浦遺跡・塔の越遺跡周辺関連分布図及び調査区割全体図・2

第2章

図2 塔の越遺跡調査区配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
(1) 古墳

図3 塔の越遺跡古墳時代遺構全体図及び遺構外出土遺物分布図・実測図・4-5

図4 塔の越遺跡 08Bb・Be 区遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

図5 塔の越遺跡 08Bb 区北壁土層セクション図・・・・・・・・・・6

図6 塔の越遺跡 08Bd 区出土埴輪実測図・・・・・・・・・・7

図7 塔の越遺跡 09C1 区 2075D 検出状況 西から・・・・・・・・8

図8 塔の越遺跡 09C2 区 2075D 掘り下げ状況 東から・・・・・・・・8

図9 塔の越遺跡 09C2 区 2075D 土層セクション図・・・・・・・・8

図10 塔の越遺跡 09C2 区 2075D 遺物出土状況図・・・・・・・・8

図11 塔の越遺跡 09C2 区 2075D 遺物出土状況・・・・・・・・9

図12 塔の越遺跡 09C2 区 2075D 出土遺物実測図・・・・・・・・9

図13 塔の越遺跡 09C3 区古墳前期遺物出土分布・・・・・・・・9

図14 塔の越遺跡 08Aa 区出土遺物実測図区出土遺物実測図・・・・・・・・9

図15 塔の越遺跡 09C3 区他出土古墳前期遺物実測図・・・・・・・・10

図16 塔の越遺跡 08Ba・09C・08Aa・08Ac 区遺構図・出土遺物実測図・11

図17 塔の越遺跡 08Aa・08Ab・08Ac・09B 区遺構図・・・・・・・・12

図18 塔の越遺跡 08Aa・Ac 区 149SD ブラン・セクション図・遺物分布図・・・・・・・・13

図19 塔の越遺跡 08Aa 区 149SD 土層セクション図・・・・・・・・13

図20 塔の越遺跡 08Aa 区 149SD 附遺物実測図・・・・・・・・13

図21 塔の越遺跡 08Ac 区 149SD 土層セクション図・・・・・・・・13

図22 塔の越遺跡 08Aa 区 149SD 出土遺物実測図・・・・・・・・14

図23 塔の越遺跡 08Ac 区 149SD 充て紙状況 南東から・・・・・・・・14

図24 塔の越遺跡 08Ab 区 154SD 周辺遺構プラン・セクション図・15

図25 塔の越遺跡 08Ab 区 154SD 土層セクション図・・・・・・・・15

図26 塔の越遺跡 08Ab 区 154SD 土層セクション図・・・・・・・・16

図27 塔の越遺跡 08Ab 区 154SD 出土遺物実測図・・・・・・・・16

図28 塔の越遺跡 08Ab 区 175SK 遺物出土状況 東から・・・・・・・・17

図29 塔の越遺跡 08Ab 区 175SK 土層セクション図・・・・・・・・17

図30 塔の越遺跡 08Ab 区 175SK 出土遺物実測図・・・・・・・・17

図31 塔の越遺跡 08Ab 区 181SX 土層断面・・・・・・・・・・17

図32 塔の越遺跡 08Ab 区 182SX 遺物 平面及び垂直分布図・・・・・・・・18

図33 塔の越遺跡 08Ab 区 182SX 土層セクション図・・・・・・・・18

図34 塔の越遺跡 08Ab 区 182SX 出土遺物実測図・・・・・・・・18

図35 塔の越遺跡 08Ab 区遺構外出土遺物実測図・・・・・・・・18

図36 塔の越遺跡 07A・07B・10 区遺構図・・・・・・・・・・19

図37 塔の越遺跡 07A 区出土埴輪実測図・・・・・・・・・・19

図38 塔の越遺跡 07A 区・B 区 050SD と近世以降の遺構との関係・20

図39 塔の越遺跡 07A 区・B 区 050SD 出土遺物実測図・・・・・・・・20

図40 塔の越遺跡 07A・B 区東壁土層セクション図・・・・・・・・21

図41 塔の越遺跡 07A・B 区 050SD 土層セクション図・・・・・・・・21

図42 塔の越遺跡 07B 区 737SX 遺物出土状況図及び写真・・・・・・・・22

図43 塔の越遺跡 07B 区 737SX 出土遺物実測図・・・・・・・・22

図44 塔の越遺跡 07A 区 256SX 遺物出土状況図及び遺物実測図・・22

図45 塔の越遺跡 07B・C 区出土遺物実測図・・・・・・・・22

(2) 古代

図46 塔の越遺跡調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・・23

図47 塔の越遺跡 08G 区東部の砂層・・・・・・・・・・23

図48 塔の越遺跡 08Ic 区南壁セクション図・・・・・・・・・・23

図49 塔の越遺跡 08Ia 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・23

図50 塔の越遺跡 08G 区出土遺物分布図・・・・・・・・・・24

図51 塔の越遺跡 08G 区甕出土状況・・・・・・・・・・24

図52 塔の越遺跡 08G 区土層セクション図・・・・・・・・・・25

図53 塔の越遺跡 08G 区硝砂検出状況・・・・・・・・・・25

図54 塔の越遺跡 08G 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・26

図55 塔の越遺跡 08G 区北壁土層セクション図・・・・・・・・27

図56 塔の越遺跡 08Ha 区 010SE 土層セクション図・・・・・・・・28

図57 塔の越遺跡 08Ha 区 010SE 掘削状況・・・・・・・・・・28

図58 塔の越遺跡 08Ha 区 010SE 出土遺物・・・・・・・・29

図59 塔の越遺跡 08Ha 区 010SE 井戸材及び出土木製品実測図・・30

図60 塔の越遺跡 08Ha 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・31

図61 塔の越遺跡 08Hb 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・31

図62 塔の越遺跡 08Ha 区北壁土層セクション図・・・・・・・・31

図63 塔の越遺跡 08A・08Ha・08Ea・Ec・08Fa 区遺構図・・・・32

図64 塔の越遺跡 08Ea 区準備工事・・・・・・・・・・33

図65 塔の越遺跡 08Ea 区トレンチ掘削・・・・・・・・・・33

図66 塔の越遺跡 08Ea 区遺構掘削・・・・・・・・・・33

図67 塔の越遺跡 08Ea 区・Ec 区土層セクション図・・・・・・・・34

図68 塔の越遺跡 08Ea 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・35

図69 塔の越遺跡 08Ea・08Ec・08Eb・08Fc 区遺構図・・・・36

図70 塔の越遺跡 08Eb 区 023SK・025SX 土層セクション図・・・・37

図71 塔の越遺跡 08Eb 区南壁東部土層セクション図・・・・37

図72 塔の越遺跡 08Eb 区北壁土層セクション図・・・・37

図73 塔の越遺跡 08Eb 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・38

図74 塔の越遺跡 08Eb 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・39

図75 塔の越遺跡 08Fa・08Fc 区遺構図・・・・・・・・・・40

図76 塔の越遺跡 08Fa 区土層セクション図・・・・・・・・・・41

図77 塔の越遺跡 08Fa 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・41

図78 塔の越遺跡 08Fa 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・42

図79 塔の越遺跡 08Fc 区土層セクション図・・・・・・・・・・43

図80 塔の越遺跡 08Fc 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・43

図81 塔の越遺跡 08D・08Cd・08Cc・08Fb・08Fd 区遺構図・・・・44

図82 塔の越遺跡 08D 区1面遺物(検2遺物群)出土状況・・・・45

図83 塔の越遺跡 08D 区遺物分布状況図・・・・・・・・・・45

図84 塔の越遺跡 08D 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・45

図85 塔の越遺跡 08D 区南壁土層セクション図・・・・・・・・46

図86 塔の越遺跡 08D 区南壁 018SK 付近土層セクション図・・・・46

図87 塔の越遺跡 08Cd 区南壁 004SD 付近土層セクション図・・・・47

図88 塔の越遺跡 08Cd 区南壁(仲からへ、010SD、003SD、008SD)の竈・47

図89 塔の越遺跡 08Cd 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・48

図90 塔の越遺跡 08Cd 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・48

図91 塔の越遺跡 08Cd 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・49

図92 塔の越遺跡 08Cd 区南壁土層セクション図・・・・・・・・49

図93 塔の越遺跡 08Cb・Cd 区・08F 区遺構図・・・・・・・・50

図94 塔の越遺跡 08Cc 区竈穴建物プラン図及び土層セクション図、014SI 出土鉄鍋(鉄鍋?)実測図・・・・・・・・50

図95 塔の越遺跡 08Cc 区北壁土層セクション図・・・・・・・・52

図96 塔の越遺跡 08Cc 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・52

図97 塔の越遺跡 08Cd 区遺構図・・・・・・・・・・53

図98 塔の越遺跡 08Fd 区 025SK 遺物出土分布図・土層セクション図・53

図99 塔の越遺跡 08Fd 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・54

図100 塔の越遺跡 08Fd 区 042SX 土層セクション図・・・・55

図101 塔の越遺跡 08Fd 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・55

図102 塔の越遺跡 08Fd 区北壁土層セクション図・・・・56

図 103	塔の越道跡 08Fd 区出土遺物実測図	57
図 104	塔の越道跡 08Fd・Fb・Fe 区遺構図	58
図 105	塔の越道跡 08Fe 区北壁土層セクション図	58
図 106	塔の越道跡 08Fe 区北壁土層セクション図	58
図 107	塔の越道跡 08Fe 区出土遺物実測図	59
図 108	塔の越道跡 08Fe 区 075D 近景	59
図 109	塔の越道跡 08Cc-Cb-Cc-A・08Fe 遺構図	60
図 110	塔の越道跡 08Cb 区北壁土層セクション図	61
図 111	塔の越道跡 08Cb 区出土遺物実測図	62
図 112	塔の越道跡 08Ca 区北壁土層セクション図	63
図 113	塔の越道跡 08Ca 区 040SX 出土金箔実測図	63
図 114	塔の越道跡 08Ca 区 040SX 近景	64
図 115	塔の越道跡 08Ca 区出土遺物実測図	64
図 116	塔の越道跡 08Ca 区出土遺物実測図	65
図 117	塔の越道跡 08Bc-Be 区遺構図	66
図 118	塔の越道跡 08Bc 区北壁土層セクション図	67
図 119	塔の越道跡 08Bd 区出土遺物実測図	68
図 120	塔の越道跡 08Bc 区出土遺物実測図	68
図 121	塔の越道跡 08Bb 区北壁土層セクション図	69
図 122	塔の越道跡 08Bb 区出土遺物実測図	69
図 123	塔の越道跡 08Bd-Ba・09C・08Ab 区遺構図	70
図 124	塔の越道跡 08Ba 区東壁土層セクション図	71
図 125	塔の越道跡 08Ba 区 046SE・047SE 土層セクション図	71
図 126	塔の越道跡 08Ba 区 047SE 上層遺物出土状況	72
図 127	塔の越道跡 08Ba 区出土遺物実測図	72
図 128	塔の越道跡 09C 区 205SE・208SE の検出状況	73
図 129	塔の越道跡 09C 区北壁土層セクション図	73
図 130	塔の越道跡 09C 区 205SE 平面図・側面図	74
図 131	塔の越道跡 09C 区 205SE 出土遺物実測図	74
図 132	塔の越道跡 09C 区 205SE 側面図・土層断面図	75
図 133	塔の越道跡 09C 区 205SE 出土の大型植物遺体	75
図 134	塔の越道跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (1)	77
図 135	塔の越道跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (2)	78
図 136	塔の越道跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (3)	79
図 137	塔の越道跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (4)	80
図 138	塔の越道跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (5)	81
図 139	塔の越道跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (6)	82
図 140	塔の越道跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (7)	83
図 141	塔の越道跡 09C 区出土遺物実測図	84
図 142	塔の越道跡 09C 区 208SE 平面図・土層断面図	85
図 143	塔の越道跡 09C 区 208SE 出土遺物	85
図 144	塔の越道跡 09C 区 206SD 土層断面図	85
図 145	塔の越道跡 09C 区刻書須恵券実測図	85
図 146	塔の越道跡 09C 区出土遺物実測図	86
図 147	塔の越道跡 08B 区・09C 区据立建物等配置図	87
図 148	塔の越道跡 09C 区据立建物柱穴土層セクション図	87
図 149	塔の越道跡 08Bb 区建物 2・3 南西から	87
図 150	塔の越道跡 09C 区据立建物柱穴土層セクション図	88
図 151	塔の越道跡 09C 区建物 1 布疋溝と 207SD	88
図 152	塔の越道跡 09C 区建物 1 東辺布疋溝下部の柱穴列	88
図 153	塔の越道跡 09C 区遺構外出土遺物実測図 (1)	89
図 154	塔の越道跡 09C 区遺構外出土遺物実測図 (2)	90
図 155	塔の越道跡 08Aa-b-c 区・09B 区遺構図	91
図 156	塔の越道跡 08Ac 区 257SX 土層セクション図	92
図 157	塔の越道跡 08Ac 区 257SX 出土遺物実測図	92
図 158	塔の越道跡 08Ac 区 333SE 土層セクション図	92
図 159	塔の越道跡 08Aa 区北壁土層セクション図	93
図 160	塔の越道跡 08Aa 区 075SD 土層セクション図	94
図 161	塔の越道跡 08Aa 区 075SD 出土遺物実測図	94
図 162	塔の越道跡 08Ac 区 F ライン土層セクション図	94
図 163	塔の越道跡 08Ac 区 208SX・210SX 出土遺物実測図	94
図 164	塔の越道跡 08Ac 区 334SX 他土層セクション図	95
図 165	塔の越道跡 08Ac 区 266・276・281SD 出土遺物実測図	95
図 166	塔の越道跡 08Aa 区 B・C ライン土層セクション図	95
図 167	塔の越道跡 08Ac 区 270SX・08Aa 区 101SX 出土遺物実測図	96
図 168	塔の越道跡 08Aa 区出土遺物実測図	97
図 169	塔の越道跡 08Ac 区出土遺物実測図	97
図 170	塔の越道跡 08Ac 区出土遺物実測図	98
図 171	塔の越道跡 08Aa 区・Ac 区：近世以降の遺構から出土した遺物実測図	99
図 172	塔の越道跡 08Aa 区：近世以降の遺構から出土した古代遺物実測図	100
図 173	塔の越道跡 08Aa 区遺構外出土遺物実測図	101
図 174	塔の越道跡 08Ac 区遺構外出土遺物実測図	102
図 175	塔の越道跡 09B 区遺構土層セクション図	103
図 176	塔の越道跡 09B 区出土遺物実測図	103
図 177	塔の越道跡 08Aa 区・Ac 区据立建物等配置図	104
図 178	塔の越道跡 08Aa 区柱穴出土遺物及び遺構出土遺物実測図	104
図 179	塔の越道跡 08Aa 区遺構土層セクション図	105
図 180	塔の越道跡 08Ac 区遺構土層セクション図	105
図 181	塔の越道跡 08Ac 区建物・橋等柱穴出土遺物実測図	106
図 182	塔の越道跡 08Ab・09A・07A-C-D 区遺構図	107
図 183	塔の越道跡 08Ab 区・09A 区出土遺物実測図	107
図 184	塔の越道跡 08Ab 区・09A 区据立建物等の配置および遺構土層セクション図	108
図 185	塔の越道跡 07A-B-C 区遺構図	109
図 186	塔の越道跡 07 区 SB 土層セクション図	110
図 187	塔の越道跡 07 区 SB 出土遺物実測図	111
図 188	塔の越道跡 07C 区 400SE 平面図・側面図・土層セクション図	112
図 189	塔の越道跡 07C 区 400SE 出土遺物実測図	112
図 190	塔の越道跡 07A 区遺構外出土遺物実測図	113
図 191	塔の越道跡 07C 区遺構外出土遺物実測図	114
図 192	塔の越道跡 07A-B-C 区遺構図	115
図 193	塔の越道跡 07A 区東部遺構出土遺物実測図	116
図 194	塔の越道跡 10 区南壁土層セクション図	116
図 195	塔の越道跡 07B 区出土遺物実測図	116
図 196	塔の越道跡 07 区据立建物等配置図	117
図 197	塔の越道跡 07A 区欄 1 柱穴土層セクション図	118
図 198	塔の越道跡 07A 区欄 1 柱穴出土遺物実測図	118
図 199	塔の越道跡 07C 区据立建物柱穴土層セクション図及び出土遺物実測図	118
図 200	塔の越道跡 07A 区北壁土層セクション図	119
図 201	塔の越道跡 07Ac 区・07D：遺構外及び近世以降の遺構から出土した古代遺物実測図	120
図 202	塔の越道跡 07C 区遺構外出土遺物実測図	121
図 203	塔の越道跡 07C 区 400SE 出土木製品実測図	120
図 204	塔の越道跡 07C 区 400SE 出土木製品実測図	123
図 205	塔の越道跡出土木製品実測図	124
(3) 中世		
図 206	塔の越道跡 08G 区遺構平面図	125
図 207	塔の越道跡 08G 区土坑土層セクション図	125
図 208	塔の越道跡 08Bc 区出土遺物実測図	125
図 209	塔の越道跡 08G 区出土遺物実測図	125

図 210	塔の越道跡 Ha 区道構平面図	125
図 211	塔の越道跡 08Ha 区出土遺物実測図	125
図 212	塔の越道跡 08Ca 区道構平面図	126
図 213	塔の越道跡 08Ca 区道構土層セクション図	126
図 214	塔の越道跡 08Ca 区出土遺物実測図	126
図 215	塔の越道跡 08Ba 区出土遺物実測図	126
図 216	塔の越道跡 09C 区道構平面図、204SD 土層セクション図	127
図 217	塔の越道跡 09C 区出土遺物実測図	127
図 218	塔の越道跡 07A・C 区道構平面図	128
図 219	塔の越道跡 07A・B・C 区区出土遺物実測図	129
図 220	塔の越道跡 07 区道構外出土遺物実測図	129
図 221	塔の越道跡 07B 区 690SE 土層セクション図	129
図 222	塔の越道跡 10 区南壁土層セクション図	129
図 223	塔の越道跡 07A・B 区、10 区道構平面図	130
(4) 近世		
図 224	塔の越道跡 08Ea・08Ec-Eb・08Fa 区道構図	131
図 225	塔の越道跡各調査区出土遺物実測図	131
図 226	塔の越道跡 08Ba-b-c 区道構図	132
図 227	塔の越道跡 08B 区各遺物土層セクション図	132
図 228	塔の越道跡 08Bb 区 040SD 出土遺物実測図	132
図 229	塔の越道跡 08Ba・09C・08Aa-c 区道構図	133
図 230	塔の越道跡 08A 区道構土層セクション図	133
図 231	塔の越道跡 08Aa 区道構出土遺物実測図	133
図 232	塔の越道跡 09C 区道構土層セクション図	133
図 233	塔の越道跡 09C 区道構出土遺物実測図	133
図 234	塔の越道跡 08Ac 区出土遺物実測図	134
図 235	塔の越道跡 07A 区出土遺物実測図	134
図 236	塔の越道跡 07C 区出土遺物実測図	134
図 237	塔の越道跡 07A-C-D 区道構図	135
図 238	塔の越道跡 07D 区出土鉄器実測図	135
図 239	塔の越道跡 10 区出土遺物実測図	135
図 240	塔の越道跡 07A 区各遺物土層セクション図	135
図 241	塔の越道跡 07A-B・10 区道構図	136
図 242	塔の越道跡 07B 区 700SE 土層セクション図	136
図 243	塔の越道跡 07B 区出土遺物実測図	137
図 244	塔の越道跡 07 各区出土土器実測図	138
図 245	塔の越道跡 07A 区 044SD 出土遺物実測図	138
第 3 章		
図 246	長野北浦道跡調査区配置図	139
(1) 古墳		
図 247	長野北浦道跡古墳前期後遺構全体図	140-141
図 248	長野北浦道跡 07Ba 区 0240SD 北から	141
図 249	長野北浦道跡 07A 区北部竪穴建物群 北から	141
図 250	長野北浦道跡 07D 区 012SK 出土土器形複製品実測図	141
図 251	長野北浦道跡西部古墳前期道構図	142
図 252	長野北浦道跡 07Bb 区 0259SD 土層セクション図	142
図 253	長野北浦道跡 07Bb 区 0259SD 遺物出土分布図-短軸	142
図 254	長野北浦道跡 07Bb 区 0259SD 遺物出土分布図-長軸	142
図 255	長野北浦道跡 07Bb 区 0259SD 土層セクション図	143
図 256	長野北浦道跡 07Bb 区 0259SD 土器群出土状況 北西から	143
図 257	長野北浦道跡 07Bb 区 0259SD 土器群出土状況	143
図 258	長野北浦道跡 07Bb 区 0259SD 出土土器実測図	144
図 259	長野北浦道跡 08D 区 048SD 土層セクション図	145
図 260	長野北浦道跡 08D 区 048SD 出土土器実測図	145
図 261	長野北浦道跡 08D 区 048SD 土層断面	145
図 262	長野北浦道跡中央部古墳前期道構図	146
図 263	長野北浦道跡 07Ba 区 0240SD 土層セクション図	147
図 264	長野北浦道跡 08C 区 0167SD・07Ba 区 0240SD 周辺遺物出土分布図	147
図 265	長野北浦道跡 07Ba 区 0240SD 土器群分布状況・土層断面 南西から	147
図 266	長野北浦道跡 07Ba 区 0240SD 土器群出土状況	148
図 267	長野北浦道跡 07Ba 区 0240SD 出土土器実測図	149
図 268	長野北浦道跡 07Ba 区 0242SD 下層出土土器実測図	149
図 269	長野北浦道跡 07Ba 区 0241SD・08C 区 167SD 出土器分布図	149
図 270	長野北浦道跡 07Ba 区 0241SD 出土土器実測図	149
図 271	長野北浦道跡 07Ba 区 0241SD 出土土器実測図	150
図 272	長野北浦道跡 07Ba 区 0241SD 土器出土状況	150
図 273	長野北浦道跡 07Ba 区 0257SX 出土土器実測図	150
図 274	長野北浦道跡 07Ba 区 0242SD 土層セクション図	151
図 275	長野北浦道跡 07Ba 区 0242SD 出土土器実測図	151
図 276	長野北浦道跡 08D 区 029S・07Ba 区 0242SD 土器出土分布図	151
図 277	長野北浦道跡 08D 区 029・30Si 出土遺物実測図	151
図 278	長野北浦道跡 08D 区 050Si 051Si 054SX 土器出土分布図	152
図 279	長野北浦道跡 08D 区北壁土層セクション図	152
図 280	長野北浦道跡 08D 区 050Si 出土土器実測図	152
図 281	長野北浦道跡 08D 区 054SX 出土土器実測図	153
図 282	長野北浦道跡 08D 区 054SX 土層セクション図	153
図 283	長野北浦道跡 08D 区 054SX 土層断面 北西から	153
図 284	長野北浦道跡 08D 区 0245SD 周辺プラン	154
図 285	長野北浦道跡 08D 区 0245 出土土器実測図	154
図 286	長野北浦道跡 08D 区 0245SD 北から	154
図 287	長野北浦道跡 08D 区 0172SK 出土土器実測図	154
図 288	長野北浦道跡 08D 区 0245SD 土層セクション図	154
図 289	長野北浦道跡東部古墳前期道構図	155
図 290	長野北浦道跡 07Ba 区 140SK 土器出土分布図	156
図 291	長野北浦道跡 07Ba 区 SK140 土層セクション図	156
図 292	長野北浦道跡 07B 区 0140SK 出土土器実測図	156
図 293	長野北浦道跡 07Ba 区 SX140 土層断面	156
図 294	長野北浦道跡各調査区出土遺物実測図	156
図 295	長野北浦道跡 07A 区 096S、08B 区 094Si、095Si 出土状況	157
図 296	長野北浦道跡 07A 区 086Si 土層セクション図	157
図 297	長野北浦道跡 08B 区 094Si 出土様子	157
図 298	長野北浦道跡 08B 区 094Si、095Si 土層セクション図	157
図 299	長野北浦道跡 07A 区 086Si 出土土器実測図	157
図 300	長野北浦道跡 07Ab 区 086Si 遺物分布状況	158
図 301	長野北浦道跡 08B 区 094Si、095Si 出土土器実測図	158
図 302	長野北浦道跡 07A 区 090Si、091Si、092SK 土器群出土状況	159
図 303	長野北浦道跡 07A 区 090Si、091Si 土層セクション図	159
図 304	長野北浦道跡 07A 区 090Si 出土土器実測図	159
図 305	長野北浦道跡 07A 区 092SK 出土土器実測図	159
図 306	長野北浦道跡 07A 区 090Si 土器群出土状況	159
図 307	長野北浦道跡 08B 区 096Si、097SK 出土土器分布図	160
図 308	長野北浦道跡 08B 区 097SK 出土土器実測図	160
図 309	長野北浦道跡 08B 区 097SK 土層セクション図	160
図 310	長野北浦道跡 08B 区 097SK 断面 南から	160
図 311	長野北浦道跡 08B 区 096Si 土層セクション図	160
図 312	長野北浦道跡 07A 区 083SD、0106NR 出土器出土分布図	161
図 313	長野北浦道跡 07A 区 083SD、0106NR 土層セクション図	161
図 314	長野北浦道跡 07A 区 083SD、0106NR 掘り下げ状況 西から	161
図 315	長野北浦道跡 07A 区 083SD、0106NR 出土土器実測図	161

図 316	長野北浦遺跡 07A 区各遺構出土土器実測図	161
図 317	長野北浦遺跡 07A 区 005SD 土層セクション図	162
図 318	長野北浦遺跡 07A 区 005SD フラン図	162
図 319	長野北浦遺跡 07A 区 005SD 掘り下げ状況 北西から	162
(2) 古代		
図 320	長野北浦遺跡古代遺構図	163
図 321	長野北浦遺跡 08D 区 068SD 土層セクション図	163
図 322	長野北浦遺跡 07Ba 区 0240SD 黒色粘土シルト層上部返り蓋出土状況	163
図 323	塔の越道跡・長野北浦遺跡瓦片出土分布図	164
(3) 中世		
図 324	長野北浦遺跡 08D 区南北土層セクション図 1	165
図 325	長野北浦遺跡 08D 区南北土層セクション図 2	165
図 326	長野北浦遺跡 08D 区 036SD 出土遺物実測図	165
図 327	長野北浦遺跡 08D 区 036SD 層下層出土遺物実測図	165
図 328	長野北浦遺跡中世遺構全体図	166-167
図 329	長野北浦遺跡 08C 区東壁土層セクション図	166-167
図 330	長野北浦遺跡 07C 区南北土層セクション図	167
図 331	長野北浦遺跡 08D 区 069SK 出土土器実測図	167
図 332	長野北浦遺跡 08D 区各遺構出土遺物実測図	167
図 333	長野北浦遺跡 08C 区各遺構出土遺物実測図	168
図 334	長野北浦遺跡 08C 区 0232SE 出土土器実測図	168
図 335	長野北浦遺跡 07Ba 区 232SE プラン・土層セクション図	169
図 336	長野北浦遺跡 07Ba 区 0232SE 南西から	169
図 337	長野北浦遺跡 07Ba 区 0232SE 出土遺物実測図	169
図 338	長野北浦遺跡 07B 区各遺構出土遺物実測図	170
図 339	長野北浦遺跡区画清東部遺構図	171
図 340	長野北浦遺跡 07A 区各遺構出土遺物実測図	171
図 341	長野北浦遺跡 07A 区南壁土層セクション図	171
図 342	長野北浦遺跡 08B 区 081SX 土層セクション図	172
図 343	長野北浦遺跡 07B 区各遺構出土遺物実測図	172
図 344	長野北浦遺跡 07A 区各遺構出土遺物実測図	172
図 345	長野北浦遺跡 07A 区北西壁土層セクション図	172
図 346	長野北浦遺跡 08A 区 005SE 井戸検出状況 北西から	172
図 347	長野北浦遺跡 08A 区 005SE 井戸底掘り出し状況 北西から	172
図 348	長野北浦遺跡中世東部プラン	173
図 349	長野北浦遺跡 07A 区 006SE 出土遺物実測図	173
図 350	長野北浦遺跡 07A 区各井戸土層セクション図	173
図 351	長野北浦遺跡 08A 区 005SE 井戸底掘り出し後の状況	174
図 352	長野北浦遺跡 08A 区 006SE 井戸材実測図 (1)	175
図 353	長野北浦遺跡 08A 区 006SE 井戸材実測図 (2)	176
図 354	長野北浦遺跡 08A 区 006SE 井戸材実測図 (3)	177
図 355	長野北浦遺跡 07A 区 001・003SD 出土遺物実測図	178
(4) 近世		
図 356	長野北浦遺跡東端の南北溝群 北から	179
図 357	長野北浦遺跡近世 1 期遺構図	180-181
図 358	長野北浦遺跡近世 1 期遺構図	182-183
図 359	長野北浦遺跡近世 1 期遺構図	184
図 360	長野北浦遺跡近世 2 期遺構図	185
図 361	長野北浦遺跡近世 2 期遺構図	186-187
図 362	長野北浦遺跡近世 2 期遺構図	188-189
図 363	長野北浦遺跡近世 3 期遺構図	190-191
図 364	長野北浦遺跡近世 3 期遺構図	192-193
図 365	長野北浦遺跡近世 3 期遺構図	194
図 366	長野北浦遺跡近世 2 期建物・井戸分布図	195
図 367	長野北浦遺跡近世 2 期建物・井戸分布図	196-197
図 368	長野北浦遺跡 07Ba 区 034SE 土層セクション図	198
図 369	長野北浦遺跡 07Ba 区 020SE 土層セクション図	198
図 370	長野北浦遺跡 07Ba 区 020SE 出土遺物実測図	198
図 371	長野北浦遺跡 07C 区 001ST 出土遺物実測図	198
図 372	長野北浦遺跡 07Ba 区 020SE 出土土製品実測図	199
図 373	長野北浦遺跡 07B 区各遺構出土遺物実測図	200
図 374	長野北浦遺跡 07Ba 区 187SD 出土遺物実測図 (1)	201
図 375	長野北浦遺跡 07B 区 187SD 出土遺物実測図 (2)	202
図 376	長野北浦遺跡 07B 区出土土製品実測図	203
図 377	長野北浦遺跡 07B 区水田関係遺構出土遺物実測図	204
図 378	長野北浦遺跡 07B 区各遺構出土遺物実測図	204
図 379	長野北浦遺跡 08D 区井戸土層セクション図	204
図 380	長野北浦遺跡 08D 区 011・028・030SD 土層セクション図	204
図 381	長野北浦遺跡 08D 区 001・002SE 出土遺物実測図	204
図 382	長野北浦遺跡 08D 区 011SD 出土遺物実測図	205
図 383	長野北浦遺跡 08D 区 011SD 他各遺構出土遺物実測図	206
図 384	長野北浦遺跡 08C 区 050SK (下層が 050SE) 土層セクション図	207
図 385	長野北浦遺跡 08C 区 050SK (下層が 050SE) 出土遺物実測図	207
図 386	長野北浦遺跡 08C 区 050SE (上層が 050SK) 出土遺物実測図	207
図 387	長野北浦遺跡 08C 区井戸土層セクション図	208
図 388	長野北浦遺跡 08C 区 104・105SE 出土遺物実測図	208
図 389	長野北浦遺跡 08C 区柱穴土層セクション図・その他遺構出土遺物実測図	208
図 390	長野北浦遺跡 08B 区東西土層セクション図	209
図 391	長野北浦遺跡 08B 区 019SE 土層セクション図	209
図 392	長野北浦遺跡 08B 区 019SE 出土遺物実測図	209
図 393	長野北浦遺跡 08B 区柱穴土層セクション図	209
図 394	長野北浦遺跡 08B 区 061SK 土層セクション図・出土遺物実測図	210
図 395	長野北浦遺跡 08B 区 022SE 出土遺物実測図	210
図 396	長野北浦遺跡 08B 区各遺構出土遺物実測図	210
図 397	長野北浦遺跡 07A 区 101SE 土層セクション図	211
図 398	長野北浦遺跡 07A 区 101SE 検出状況 南から	211
図 399	長野北浦遺跡 07A 区 006SD 土層セクション図	211
図 400	長野北浦遺跡 07A 区東端溝群土層セクション図・出土遺物実測図	211
図 401	長野北浦遺跡 07A 区各遺構出土土製品実測図 (1)	212
図 402	長野北浦遺跡 07A 区各遺構出土土製品実測図 (2)	213
図 403	長野北浦遺跡 07A 区各遺構出土土製品実測図 (3)	214
図 404	長野北浦遺跡各区出土土製品実測図 (1)	215
図 405	長野北浦遺跡各区出土土製品実測図 (2)	216

第 4 章

1

図 406	試料採取位置平面図 (奥野・藤山 2009 を改変)	217
図 407	試料採取位置断面図 (奥野・藤山 2009 を改変)	218
図 408	長野北浦遺跡から出土した昆虫化石	223

2

図 409	長野北浦・塔の越道跡周辺の表層地形と等高線図	226
図 410	表層地形等高線図を基にした鳥瞰図	227
図 411	調査範囲を通る東西地形断面図	227
図 412	長野北浦・塔の越道跡における深掘層序断面図	229
図 413	長野北浦・塔の越道跡における試掘柱状図	230

第 5 章

1

図 414	古墳時代前期の土器群 (1)	237
図 415	古墳時代前期の土器群 (2)	238
図 416	土器群の変遷 (1)	239

図 417	土器群の変遷 (2)	239
図 418	礫形石製品の諸例	241
図 419	周辺における前期後半の古墳の分布	241
図 420	地形の復元と古墳の分布	242
図 421	塔の越遺跡出土鉄製品	243
図 422	周辺における中・後期古墳の分布	243
図 423	朝日遺跡 SZ1001 (検見塚) 出土埴輪	245
図 424	岩倉城遺跡の古墳	245
図 425	岩倉城遺跡 2003 年度立会い調査出土埴輪	246
2		
図 426	三宅川旧河道周辺の地形概略と遺跡分布	250
図 427	瓦塔出土地点からみた遺立推定地と表層土の移動	250
図 428	塔の越遺跡における古代の主要な遺構	252
図 429	塔の越遺跡における古代の遺構変遷	254
図 430	塔の越遺跡の刻書土器実測図とその分布状況	256
第 6 章		
図 431	長野北浦・塔の越遺跡の変遷図 (等高線図は鬼頭論文に拠る)	260

表

第 2 章

表 1	塔の越遺跡調査工程	3
表 2	塔の越遺跡 09C 区 2055E 出土の動物遺体	75
表 3	塔の越遺跡 09C 区 2055E 出土の大型動物遺体 (括弧内は破片数を示す)	75

第 3 章

表 4	長野北浦遺跡調査工程	139
-----	----------------------	-----

第 4 章

表 5	長野北浦遺跡採取試料一覧	220
表 6	長野北浦遺跡から出土した昆虫化石	222
表 7	深掘層序の放射性炭素年代測定結果 (1)	232
表 8	深掘層序の放射性炭素年代測定結果 (2)	233
表 9	深掘層序 (TK1) の放射性炭素年代測定結果	233
表 10	深掘層序 (TK2) の放射性炭素年代測定結果	233

第 5 章

表 11	尾張平野における中小古墳一覧表 (発掘調査によって検出された古墳)	244
------	---	-----

長野北浦遺跡東端



長野北浦遺跡中部



長野北浦遺跡西端・塔の越遺跡東端



塔の越遺跡東部・跨線橋入口付近：08Ab 区・09A 区



塔の越遺跡東部：08Ba 区以東



長野北浦遺跡・塔の越遺跡
現況

平成 24 年 2 月 28 日現在

塔の越遺跡遺構写真図版

- 1 塔の越遺跡・長野北浦遺跡航空写真 垂直方向
- 2 塔の越遺跡・長野北浦遺跡航空写真/西側斜め 南から
- 3 塔の越遺跡・長野北浦遺跡航空写真/東側斜め 南から
- 4 08G区2面・検出2遺物出土状況
- 5 08Ha区1面・0105E断面。08Ea区1面
- 6 08Ea区12面・土坑断面。08Eb区1面 025SX 他
- 7 08Eb区 0225K・0235K 遺物出土状況・断面
- 8 08Fa区1面・調査区壁断面。各遺構
- 9 08Fc区1面各遺構。08D区近景。各遺構
- 10 08D区2面 018SK 他。08Cd区全景
- 11 08Cd区 0105D
- 12 08Cc 区壁穴建群
- 13 08Cc区 014SI・015SI 掘り下げ状況
- 14 08Cb区 028SD 他
- 15 08Ca区遺物群出土状況。08Ca区 040SX 他
- 16 08Fd区1面全景。025SX 船部
- 17 08Fd区各遺構
- 18 08Fe区 0575D。08Bc区全景
- 19 08Bc区柱六断面。0115D。下層確認状況
- 20 08Bb区1面検出状況・柱六群掘り下げ状況
- 21 08Bb区柱六断面
- 22 08Ba区検出状況・遺構掘り下げ状況。0465E 近景
- 23 08Ba区 0465E・0475E 掘り下げ状況
- 24 09C区1面・2面全景
- 25 09C区2面全景。404-408SE 掘り下げ状況。207SD 他各遺構遺物出土状況
- 26 09C区 2055E 掘り下げ状況
- 27 09C区 2055E 掘り下げ状況。208SE 掘り下げ。251SD 遺物出土状況
- 28 08Aa区1面・2面
- 29 08Aa区北部1面・2面
- 30 08Aa区柱六・土坑断面
- 31 08Aa区 101SX 他遺物出土状況等船部
- 32 08Aa区 149SD
- 33 08Aa区遺構全景・検出状況
- 34 08Ac区柱六断面。270SX 遺物出土状況。333SE断面。257SX 断面
- 35 08Ac区近景。149SD各方向。140SD断面
- 36 09B区1面・2面。1125E 掘り下げ状況
- 37 08Ab区2面。1545D。1545D断面
- 38 08Ab区 175SK・135-136SK 断面
- 39 08Ab区柱六検出状況・柱六断面
- 40 08Ab区 1825X 掘り下げ状況。09A区全景・柱六断面
- 41 07A区1面全景・近景
- 42 07A区2面全景・中景。擬立柱建群近景
- 43 07A区柱六断面。1705B・2265B
- 44 07A区各遺構
- 45 07A区 0505D・2565K
- 46 07B区1面全景・各遺構
- 47 07B区 7375X 出土状況
- 48 10区1面・2面。215D 遺物出土状況
- 49 07C区1面・2面全景
- 50 07C区3面全景。4005E 掘り下げ状況
- 51 07C区 621-624SK 検出状況・柱六断面他
- 52 07C区 SB435・SB673・SB675

長野北浦遺跡遺構写真図版

- 1 07A区1面全景
- 2 08A区1面全景。0055E・0065E 他
- 3 07A区礎板出土状況。各井戸
- 4 07A区中世区面溝渠部コーナー付近。08B区 0815X
- 5 08B区2面柱六群。礎板・柱根。0195E・0225E
- 6 07A区 0055D・古溝前期遺構群
- 7 07A区古溝前期遺構と遺物。08B区古溝前期遺構と遺物
- 8 07Ba区1面全景。0205E・0345E・礎板
- 9 07Ba区2面全景。0140SK 検出状況。0238SD
- 10 07Ba区 0240SD 近景。01240SD 遺物出土状況。242SD 断面
- 11 07Ba区 0241SD 近景。0242SD 近景
- 12 08C区1面全景。柱六礎板出土状況
- 13 08C区2面全景。柱六礎板出土状況。同柱根出土状況。0505E 検出状況他

- 14 08C区 0885E 掘り下げ状況。01040105SE
- 15 08D区1面検出状況。1面遺構。001-002SE 断面
- 16 08D区 0485D・050-0519S 近景。土盛出土状況
- 17 07Bb区1面全景。同近景。07Ba区 02325E 掘り下げ状況
- 18 07Bb区 02595D 周辺。02595D 遺物出土状況
- 19 07C区全景。0105D 近景。0295D 近景
- 20 07D区全景。0125K 磨形石製品出土状況

遺物写真図版

●塔の越遺跡

- 1 07A区
- 2 07A区 /07C区
- 3 07B区 7375X 集合 /07C区 /08Aa区
- 4 08Aa区
- 5 08Ab区 175SK 集合 /08Ab区 /08Ac区
- 6 08Ac区 /08Ba区
- 7 08Ba区 /08Ca区 /08Cb区
- 8 08Cc区 /08Cd区 /08Ce区
- 9 08D区 /08Eb区
- 10 08Eb区 /08Fa区 /08Fc区 /08Fd区 /08Fe区
- 11 08G区 /08Ha区 /08Cb区
- 12 09C2区 刻溝溝壱壱
- 13 刻溝溝壱壱。漆付磨須磨器。羽口
- 14 地輪。管玉。石弁

●長野北浦遺跡

- 14 土師器。磨形石製品。軒平瓦片。五塔片
- 15 07Bb区 02595D 出土土器
- 16 09C区 2055E 井桁復元。溝水弁復元
- 17 09C区 2055E 集水弁部材
- 18 09C区 2055E 障柱。08A区 0065E 横棧
- 19 下駄。曲物

塔の越遺跡西部：08G・E・H・F区境界交差点付近



塔の越遺跡西端：大江用水付近



大江用水

第1章 調査と遺跡の概要

1. 調査の概要

(1) 調査の経緯

愛知県は稲沢市において懸案であったJR線をまたぐ東西交通の緩和を目的に、都市計画道路稲沢西春線の建設を策定した。建設事業は平成19年度に開始されることになり、計画予定地に所在する長野北浦遺跡と塔の越遺跡の発掘調査が必要になった。愛知県教育委員会は愛知県建設部と協議を行い、長野北浦遺跡と塔の越遺跡の平成19年度における本調査開始と、同年度に塔の越遺跡の試掘調査を計画した。

公益財団法人愛知県スポーツ・振興財団愛知県埋蔵文化財センターは、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、平成19年度に長野北浦遺跡・塔の越遺跡の発掘調査を開始した。

(2) 調査の経過

平成19年度は長野北浦遺跡の橋脚及び道路建設部分と塔の越遺跡の道路建設部分、平成20年度は工事計画の変更によって追加調査が必要になった長野北浦遺跡JR敷地寄りの該当箇所と塔の越遺跡西部の泉道沿い地区、平成21年度は塔の越遺跡の買収が遅れた地区、平成22年度には塔の越遺跡で最後まで残った地区の調査を行った。このように長野北浦遺跡は平成19年度から平成20年度の2ヶ年、塔の越遺跡は平成19年度から平成22年度までの4ヶ年にわたり発掘調査を実施した。

その間、平成19年度と平成20年度には塔の越遺跡で現地（および地元）説明会を実施し、多くの見学者を得て調査成果を県民に公開した。長野北浦遺跡については平成19年度に随時見学を受け入れ、また毎週速報を配布して成果の公開に努めた。

(3) 整理報告業務

平成22年から平成23年にかけて報告書作成にむけた整理業務を進め、平成23年度末に報告書を刊行した。従来は当センターにおいて整理業務と報告書作成を一体で進めて、刊行は最終年度に実施していたが、今回は愛知県建設部の事業計画にあわせて、整理業務2年目での刊行となった。

出土遺物はコンテナ211箱に加えて大形の木製品が含まれており、当センターで可能な作業量を勘案して一部作業を外部に委託して進めた。報告書掲載遺物には登録番号を付してコンテナに収納して整理業務は終了し、報告書の刊行をもって業務全体が完了した。

2. 遺跡の環境

(1) 地理的環境

長野北浦遺跡と塔の越遺跡は稲沢市道を挟んで隣接して東西に広がる二つの遺跡で、時期的には一部が重複しており、考古学的に截然と区分することは難しい。

遺跡は旧三宅川の左岸自然堤防を中心に展開しており、遺跡（現地表ではない）の上面高度は最高所で標高5.5mである。この自然堤防における遺跡形成は4世紀を遡らないので、それ以降に形成されたものである。それ以前の旧地表面と想定される堆積層は遺跡のさらに下部、標高2.5mあたりで検出された黒色粘土質シルト層であり、下津城下層でも近い高度で類似層が検出されている。関係する遺物は縄文後期末から弥生前期であり、おそらく当該期には別のエリアに自然堤防が形成されていたのであろう。塔の越遺跡07A区で出土した明らかに縄文時代に属す定角式石斧は下層に包含層が存在したことを示唆するが、所在は不明である。

(2) 歴史的環境

塔の越遺跡に深く関係するのが尾張国府（国衙）である。塔の越遺跡の平成20年度最西端調査区である08c区から約370m南西に位置している。そのため、今回の調査では古代に属す遺構・遺物の出土が予想され、結果もまさその通りであった。とりわけ塔の越遺跡で9世紀を遡る井戸が検出されたことは注目される。また、塔の越遺跡が属す字名である「治部丸」は中世の「名」の遺名であった可能性が高いが、調査では耕作地を検出したに過ぎず、核心を掴むまでは至らなかった。他方、古墳前期に始まり、古墳後期に続く墳墓群を検出したことは、従来は台地や丘陵を中心に考えられてきた「古墳群」を考え直す上で大きな成果であった。

一方、長野北浦遺跡はまったく未知数であったが、古墳前期の遺構群を検出したことは大きな成果であった。また、長野北浦遺跡の南に隣接して古刹「万徳寺」が位置していることから中世の遺構・遺物の存在も想定されたが、近世以降の開田が広範囲に及んでかなりの部分が消失していた。しかし、近世について長野北浦遺跡では礎石をもつ掘立柱建物群が多数検出された。調査例も少ない近世集落の詳細が把握できたことは大きな成果であった。実際には明治期まで下る遺構・遺物も存在するわけだが、地域の歴史資料として重要であることは確かである。

旧河道の復元

青木川は日光川とともに旧河床跡を覆下する本昔川水系の主要河川であり、扇状地は両河川に形成されている。しかし、扇状地が厚い砂質土質であることが、河川が扇状地を流下する際に河川が扇状地を掘削する原因となる。また、扇状地が厚い砂質土質であることが、河川が扇状地を掘削する原因となる。また、扇状地が厚い砂質土質であることが、河川が扇状地を掘削する原因となる。

●古代の扇状地調査(「扇状地調査」調査結果から)

調査年度 3年(79年) 調査(8年) 調査年度

調査年度 4年(79年) 調査年度

調査年度 5年(79年) 調査年度

上記のように、本昔川は近代には高度な河川治水を引き起こしている。異常な大雨による扇状地の浸食や河川床上昇、扇状地によって河川をせきこみ、道路を損傷させたのあり、それこそ扇状地に伴う大災害である。おそれなく、河川の管理によって河川に近づけられた青木川、古代扇状地跡跡に扇状地の上層を掘削して扇状地を露出させ、そのために扇状地跡跡に扇状地の上層を掘削して扇状地を露出させる。そのために扇状地跡跡に扇状地の上層を掘削して扇状地を露出させる。そのために扇状地跡跡に扇状地の上層を掘削して扇状地を露出させる。

古墳

古墳時代前期下の遺物は標高3.8mが標高となる群石山山頂跡でややままだりて見られるが、遺跡は扇状地の外縁にない。古墳時代前期下の遺物は、扇状地の外縁にない。古墳時代前期下の遺物は、扇状地の外縁にない。古墳時代前期下の遺物は、扇状地の外縁にない。

扇状地に扇状地の外縁にない。古墳時代前期下の遺物は、扇状地の外縁にない。古墳時代前期下の遺物は、扇状地の外縁にない。古墳時代前期下の遺物は、扇状地の外縁にない。

古代

扇状地調査委員会による扇状地調査結果報告書

調査年度 3年(79年) 調査(8年) 調査年度

調査年度 4年(79年) 調査年度

調査年度 5年(79年) 調査年度

調査年度 6年(79年) 調査年度

調査年度 7年(79年) 調査年度

調査年度 8年(79年) 調査年度

調査年度 9年(79年) 調査年度

調査年度 10年(79年) 調査年度

調査年度 11年(79年) 調査年度

調査年度 12年(79年) 調査年度

調査年度 13年(79年) 調査年度

調査年度 14年(79年) 調査年度

調査年度 15年(79年) 調査年度

調査年度 16年(79年) 調査年度

調査年度 17年(79年) 調査年度

調査年度 18年(79年) 調査年度

調査年度 19年(79年) 調査年度

調査年度 20年(79年) 調査年度

調査年度 21年(79年) 調査年度

調査年度 22年(79年) 調査年度

調査年度 23年(79年) 調査年度

調査年度 24年(79年) 調査年度

調査年度 25年(79年) 調査年度

調査年度 26年(79年) 調査年度

調査年度 27年(79年) 調査年度

調査年度 28年(79年) 調査年度

調査年度 29年(79年) 調査年度

調査年度 30年(79年) 調査年度

調査年度 31年(79年) 調査年度

調査年度 32年(79年) 調査年度

調査年度 33年(79年) 調査年度

調査年度 34年(79年) 調査年度

調査年度 35年(79年) 調査年度

調査年度 36年(79年) 調査年度

調査年度 37年(79年) 調査年度

調査年度 38年(79年) 調査年度

調査年度 39年(79年) 調査年度

調査年度 40年(79年) 調査年度

調査年度 41年(79年) 調査年度

調査年度 42年(79年) 調査年度

調査年度 43年(79年) 調査年度

調査年度 44年(79年) 調査年度

調査年度 45年(79年) 調査年度

調査年度 46年(79年) 調査年度

調査年度 47年(79年) 調査年度

調査年度 48年(79年) 調査年度

調査年度 49年(79年) 調査年度

調査年度 50年(79年) 調査年度



図1 長野北清通路・塔の越道跡周辺開闢分布図(1/25,000) 及び調査区別全体図

第2章 塔の越遺跡

1. 調査の概要

(1) 遺跡の状況

塔の越遺跡は尾張国府推定地の旧三宅川を挟んだ東側に位置し、現況は主要道路沿いが宅地化しているとはいえ、畠を中心に、ところどころに水田が分布する、濃尾平野の低平地においても比較的高所となっている。その原因こそが、旧三宅川へと取東する主要な水系が木曽川に始まり、多量の土砂を運搬して自然堤防を形成したことにある。本書の第4章でも自然堤防の形成による地表面の起伏の大きなことが示されている。

今回の調査では、当初は塔の越遺跡の残存状況は良好であったと予想していたのに反して、高まりとして残っている畠であっても耕作だけでなく天地返しによって深く攪乱が及び、また水田に至っては旧微高地を深く掘り下げて造成されているためにほとんど遺構の残存していない箇所が少なくないことが判明した。

結局、濃尾平野では弥生時代までは埋積が大きく進行して多くの遺跡は遺存状況も良好であったが、古墳時代以降は地表面の平準化によって深く埋積するエリアは河川氾濫原に取込まれていったということである。だから、塔の越遺跡が位置するような高所ではよほどの洪水でもなければ新たな堆積層によって上部が覆われることはなく、場合によっては浸食されることさえあったと考える。

さて、塔の越遺跡の形成時期は、大きく古墳、古代、中世、近世以降に分かれる。古墳は前期末と5世紀末～6世紀、古代は遺物について7世紀代も認められるが遺構は希薄であり明確には8～9世紀にまとまり、中世は15世紀代、近世は18世紀以降となる。以下の記述は上記の時期区分を中心に進める。

(2) 作業工程

調査は平成19年～平成22年の4々に及んだ。調査区配置図にある記号は、頭の数字が調査年度（西暦2000年以降の下二桁）、アルファベットが調査区の大

(小) 区名である。さらにアルファベットの次ぎに数字が付く場合は、調査の面数を意味し、例えば「09C1」なら09C区の1面目、「09C2」なら09C区の2面目という具合である。

調査区は、住宅街を横断する東部は事業者の工程等による制限があっても比較的広くとることができたが、県道に沿う西側の範囲は歩道と宅地や畠に挟まれ、出入口や安全確保のために小刻みに分割することを余儀なくされ、そのために短期間の調査となったことは工程表に示されているとおりである。その中で、調査計画は対象とされた範囲でも極端に狭小な部分については調査を断念した箇所もあった。

発掘調査における基本作業はマニュアルに即して実施した。本文記載に関わる部分を以下に示しておく。

表1.2.3：包含層階層に対応し、1面遺構群を検出するまでが検1で、1面の調査を終了後、2面遺構群を検出するまでが検2となる。
T：試掘溝。

表1 塔の越遺跡調査工程

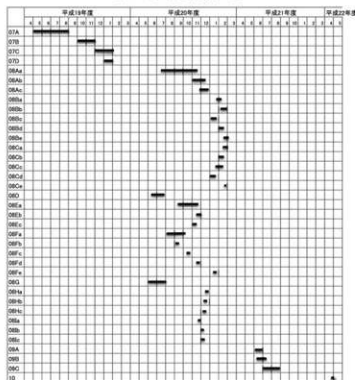
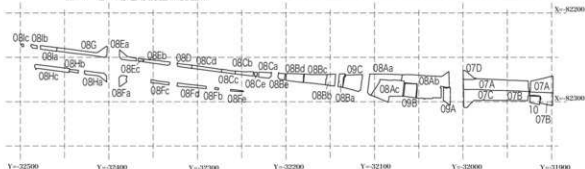


図2 塔の越遺跡調査区配置図



2. 遺構・遺物の概要

(1) 古墳

A. 概要

古墳時代の遺構・遺物の両者が揃い、性格も明らかなのは墳墓が展開する5世紀末以降であり、それ以前の4世紀代については不明な点が多い。

塔の越道跡の西端は、基盤が下降を始める変換点を08G区と08Ha区で検出している。詳細な時期は不明だが、三宅川の氾濫源から自然堤防への移行帯がこのあたりに存在すると考えられる。古墳時代の遺物は概ねこのラインより東側に分布しているが、08Ca区以西では遺構に伴う資料は皆無である。器種は土師器の高杯や甕、須恵器の坏蓋が主で、後者にも大形品や特殊品は無いが、鉄鏝の分布も勘案すれば墳墓が展開していた可能性は否定できない。

4世紀代は09C区から08Ab区にかけて遺物の分布があり、08Ab区では土坑(182SX)も検出されたが堅穴建物等の居住関連遺構は検出されていない。07A・B区、10区にかけては円墳を囲繞する周溝の一部を検出しており、出土遺物から当該期に属す可能性が高いと推測された。

B. 遺構・遺物

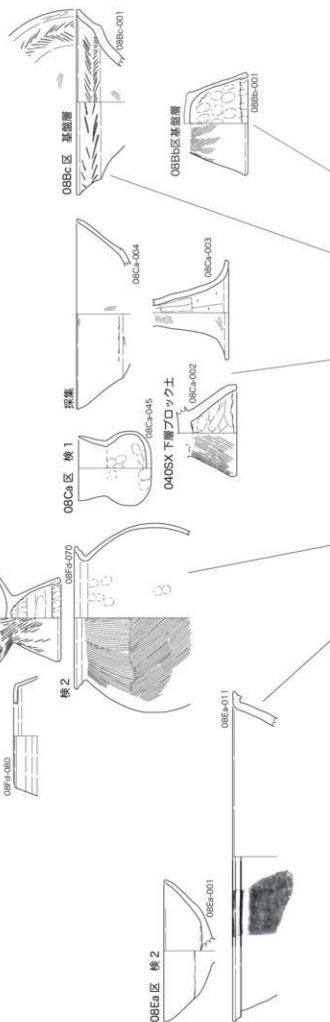
● 08B区

08Bd区出土埴輪片 08Bd区では瓦礫を含む攪乱坑から朝顔形や門筒形の埴輪片が出土した。瓦礫の埋め立てに伴うが、何処から持ち込まれたというよりはもともと包含されたものが攪乱坑の掘削と埋め立てに際し埋藏されたもので、原位置に近いと推測する。付着していた土は黒褐色シルトであり、058SXの堆積層に近い。

058SXは調査区北壁に沿う落ち込みとなっており、東から西にむかって深くなっているのも、調査区の壁面が斜めに切断しているのだとすれば直線的な溝が推測できる。埴輪片が確実に058SXに伴っていたとする根拠は無いが、無関係とはいえない。

08Bd区060SD 攪乱坑によって破壊され、かろうじて一部が残った。北に向かってやや弧を描いている。堆積層は058SXに類似している。

08Bb・Bc区011SD・026SX 遺構面は畚の耕作で削平されており、黒褐色シルトが堆積する011SDは掘り込みも浅い、輪郭も不確かな溝となっている。北で途切れているのは削平のためであり、本来は続いていたものと推測する。



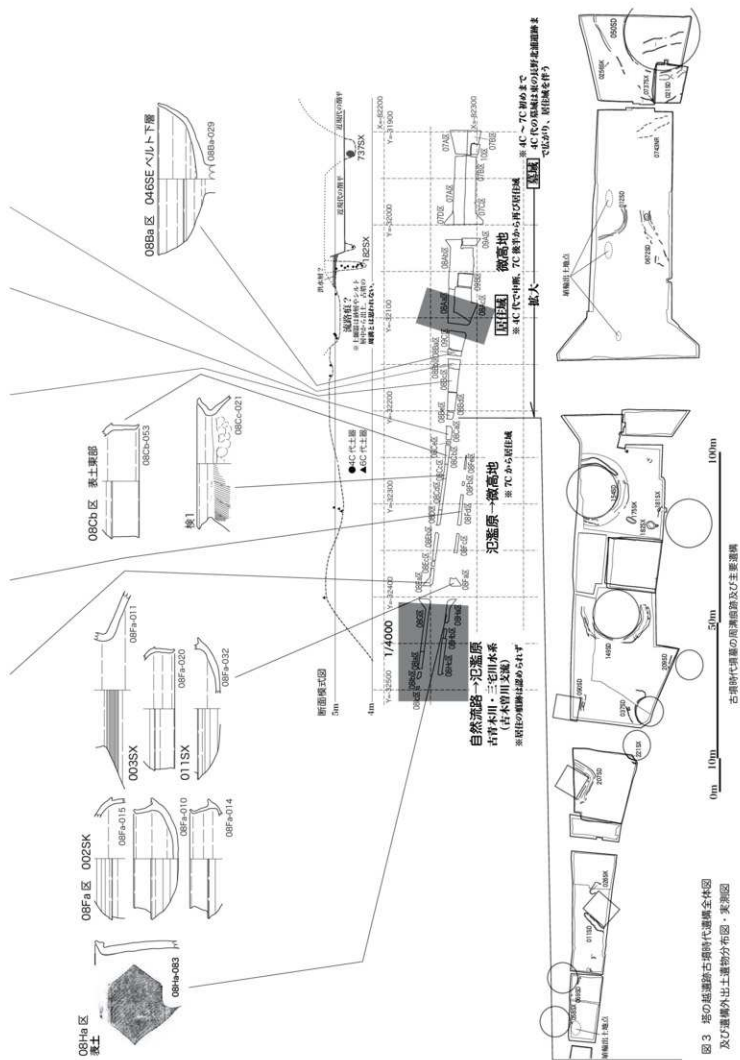


図3 碓の縄文遺跡全図
及び遺跡外出土遺物分布図・実測図

右端時代情報の高瀬遺跡及び主要遺跡

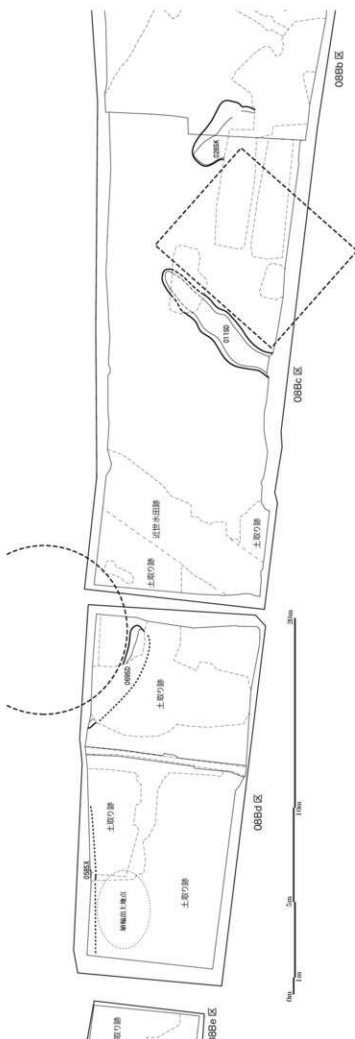


図4 塔の越道跡 O8Bb-E 区遺構図

埴輪について

埴輪は朝顔形埴輪と円筒埴輪が出土している。形象埴輪は確認されていない。いずれも無黒斑で、堅緻に焼成されるが、須恵器質に焼成された個体はない。なお、埴輪は遺構に伴って出土したものではないが、器表面はあまり風化していないことから、これらの埴輪が使用された古墳は出土地点付近に存在していた可能性が高いと思われる。特に O8Bd 区出土の一群は、質感等も相互に共通することから、比較的まとまった資料として把握される。

O8Bd-019, O8Bd-018 は朝顔形埴輪の口縁部、口縁部から花状部の破片で、内外面に赤彩が残る。

円筒埴輪は全形を復原できる個体はないが、いずれも二突帯三段の通常の「尾張型埴輪」と考えられる。

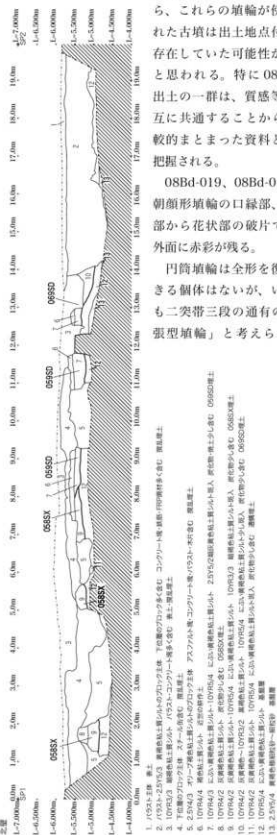


図5 塔の越道跡 O8Bb-E 区北壁土層セクション

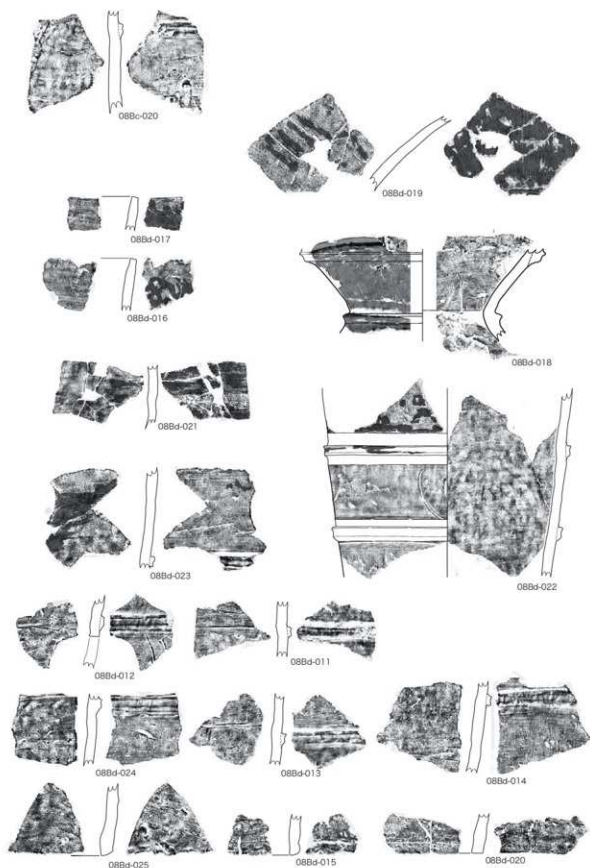


図6 塔の越遺跡 O8Bd 区出土埴輪実測図

O8Bd-022のみ第二段の一段以上が残存し、突帯間の間隔は8cmを計測する。この突帯間の間隔についても、第二段が第一段と第三段に対して狭いという小型の通常の円筒埴輪の規格に合致するものである。突帯間には円形の透かし孔が鋭利な刀子状の工具によって切削される。透かし孔の周囲には線刻がある。他にO8Bd-012に円形の透かし孔と線刻、O8Bd-023、O8Bd-024に円形

の透かし孔が認められる。突帯はいずれもやや低平な断面M字形の形状である。なお、O8Bd-021は突帯が剥離するが、突帯設定時の痕跡は認められない。O8Bd-022、O8Bd-023、O8Bd-013、O8Bd-021などには外面に赤彩が残る。口縁部(O8Bd-017、O8Bd-016)はいずれも直立する形状で、外反する形状のものは認められない。外面には赤彩が残る。

外面調整は、いずれも1次調整としてタテハケを施し、突帯の付加後、2次調整として回転ヨコハケ（C種ヨコハケ）を施す。B種ヨコハケを施す埴輪、タテハケのみに終始する埴輪は認められない。なお、（市教委2次調査区出土埴輪に認められる）タタキ調整は認められない。内面は断続的なヨコハケとナデ調整が施される。

底部（08Bd-025、08Bd-015、08Bd-020）には回転ヘラケズリが認められ、08Bd-020には底面に「味美技法」とも呼称されたかすかな段とユビズレの痕跡が認められる。底面にはヘラケズリの痕跡も観察される。ユビズレの痕跡は08Bc-020にも認められ、08Bd-025には市教委2次調査区出土埴輪底部に認められた「底部調整のため倒立させた際さらに一段底部に粘土を積みあげ、底部調整後その部位の補強のため施した手法」と同様の痕跡が認められる。

これらの埴輪は、口縁部に反外する形状のものが認められない点、外面調整として回転ヨコハケを施す埴輪のみで、B種ヨコハケを施す埴輪やタテハケに終始する埴輪が含まれない点、底部の回転ヘラケズリなどの底部調整が明確化している等の諸点から、「尾根型埴輪」の技法が完備され、普遍化する段階の所産で、東山11号窯式に対応する時期を充てておくのが妥当であろう。なお、ここで想定した時期は（本報告出土埴輪にタタキ調整は認められないものの）、市教委2次調査区で検出された古墳の時期とも概ね対応する。（早野浩二）

●09C区

古墳時代は2面に分かれ、上面は6世紀以降、下面は4世紀代である。

上面

207SD 主要部分はL字をなすが、西端で再び北に向けて曲がり始めているので、コ字形、もしくは方形溝の



図7 塔の越遺跡09C1区207SD 検出状況 西から



図8 塔の越遺跡09C2区207SD 掘り下げ状況 東から

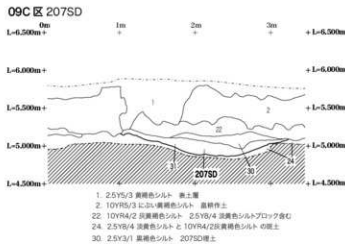


図9 塔の越遺跡09C区207SD土層セクション図

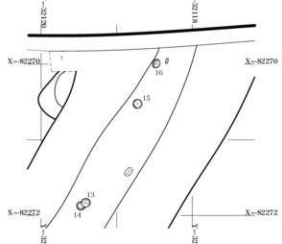


図10 塔の越遺跡09C2区207SD 遺物出土状況図

南辺両隅を検出したものと判断する。

溝幅は1.5～2m、深さは調査区壁面で計測しても20cmほどである。溝は浅く、断面も皿状であり、溝の両壁面への立ち上がりか認められないので、底面を検出したものと考えられる。よって、溝幅・深さともに不明である。

出土遺物は溝底面近くから、須恵器坏身と坏蓋の組み合わせが2セットと管玉が出土した。身と蓋はともに内面を上に向けた状態で出土したが、南側の一組は重なっていた。

古代になると207SD周辺には建物群が展開するようになるが、溝は埋設しても墳丘は残存していたようで、建物の配置も溝で区画された内側までは及んでいない。
221SX 調査区南東隅で検出された暗褐色シルトの堆積する範囲である。古墳周溝の縁辺の可能性が高い。

下面

下面は基盤層の浅黄色極細粒砂層が上昇して、その上面がつくる凹地に4世紀代の土器群が集積しており、調査上それらに番号を付けて遺物を取り上げたものが「SX」である。しかし、一部の浅黄色極細粒砂層からも遺物が出土することから当該の遺構に特段の人為性が窺えるというものではなく、浅黄色極細粒砂層の堆積中に遺物が含まれたという状況である。

よって、これらの遺物の由来が問題となるのだが、現

状では判断する材料は無い。しかし、ローリング等の風化が認められないことから、付近の包合層を浸食して持ち運ばれてきたものと推測する。

同様の現象は08Aa区でも認めることができ、これら遺物が分布する範囲は大規模な洪水が微高地上面に与えた影響の痕跡である可能性が高い。

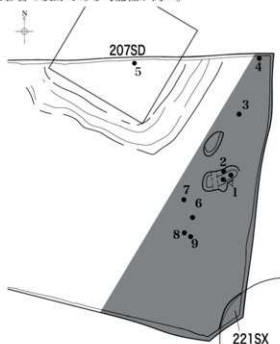


図13 塔の越道跡 09C3区 古墳前期遺物出土分布



図11 塔の越道跡 09C2区 207SD遺物出土状況

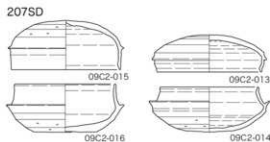


図12 塔の越道跡 09C2区 207SD出土遺物実測図

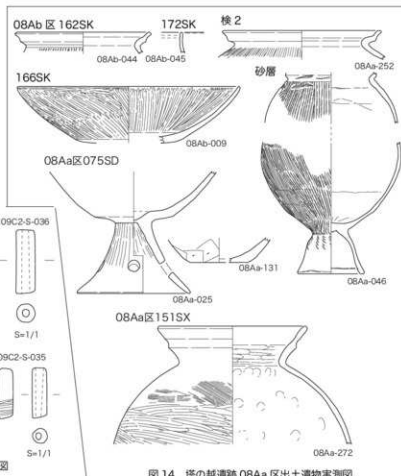


図14 塔の越道跡 08Aa区出土遺物実測図

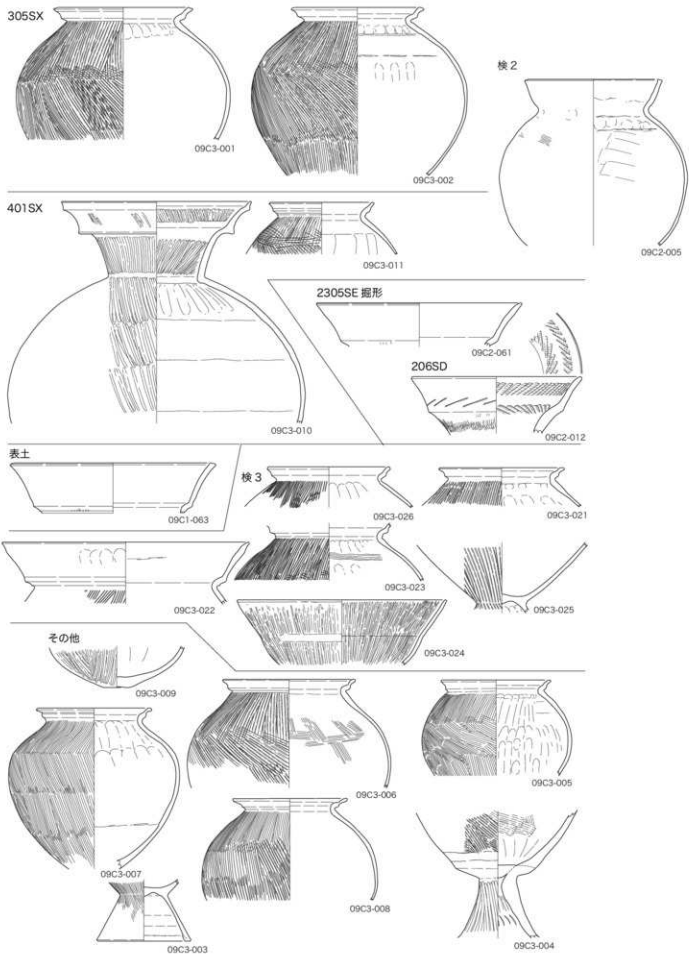


図 15 塔の越遺跡 09C3 区 (層下層) 他出土古墳前期遺物実測図

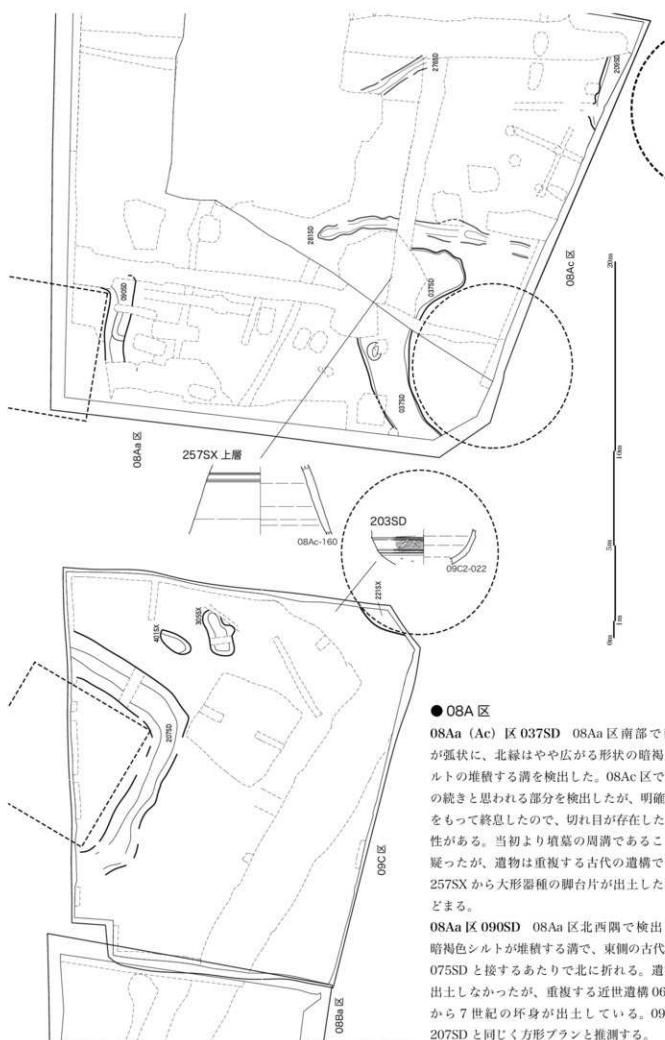


図16 塔の越道跡 08Ba・09C・08Aa・08Ac区遺構図、出土遺物実測図

● 08A区

08Aa (Ac) 区 037SD 08Aa区南部で南縁が弧状に、北縁はやや広がる形状の暗褐色シルトの堆積する溝を検出した。08Ac区でもその続きと思われる部分を検出したが、明確な段をもって終息したので、切れ目が存在した可能性がある。当初より墳墓の周溝であることを疑ったが、遺物は重複する古代の遺構である257SXから大形器種の脚台片が出土したにとどまる。

08Aa 区 090SD 08Aa区北西隅で検出した暗褐色シルトが堆積する溝で、東側の古代の溝075SDと接するあたりで北に折れる。遺物は出土しなかったが、重複する近世遺構067SDから7世紀の坏身が出土している。09C区207SDと同じく方形プランと推測する。

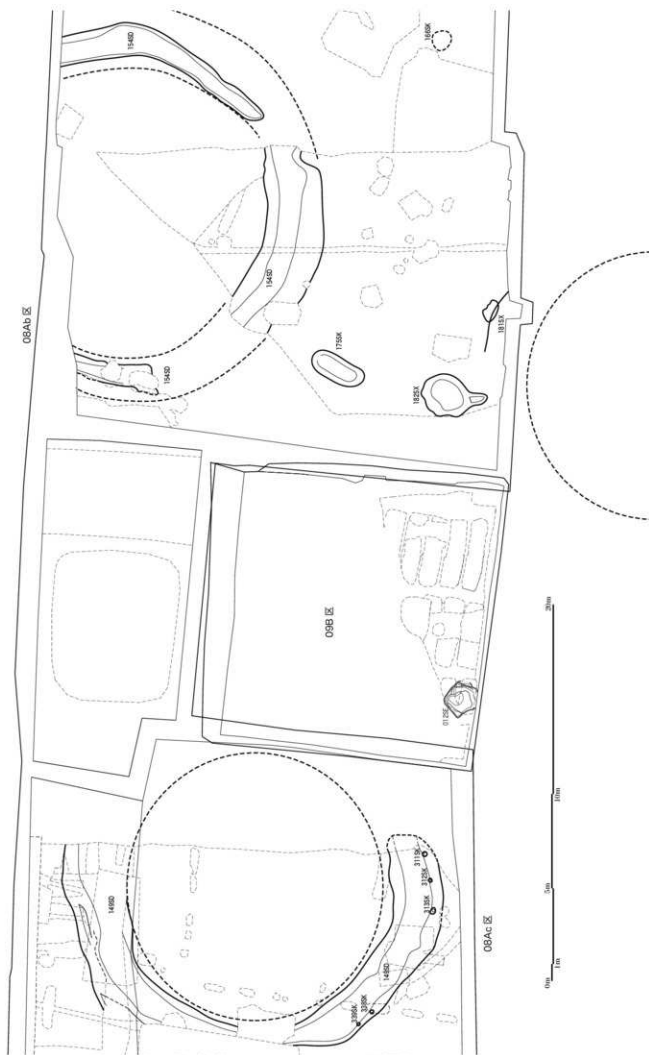


図 17 塔の越遺跡 O8Aa・O8Ab・O8Ac・O9B 区遺構図

08Aa区149SD

1. 1.4-3.00m 黒褐色粘土質シルト 149SDcSP1
1.4-3.00m 黒褐色粘土質シルト 149SDcSP2
2. 2.5V5/2 黒褐色粘土質シルト 10VR4/2
黒褐色粘土質シルト 149SD埋土
3. 2.5V5/3 黒褐色粘土質シルト 10VR3/1
黒褐色粘土質シルトで支えられた生物腐敗が認められる層

図19 塔の越道跡 08Aa区
149SD 土層セクション図

075SD

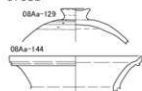


図20 塔の越道跡 08Aa区
149SD 関連遺物実測図

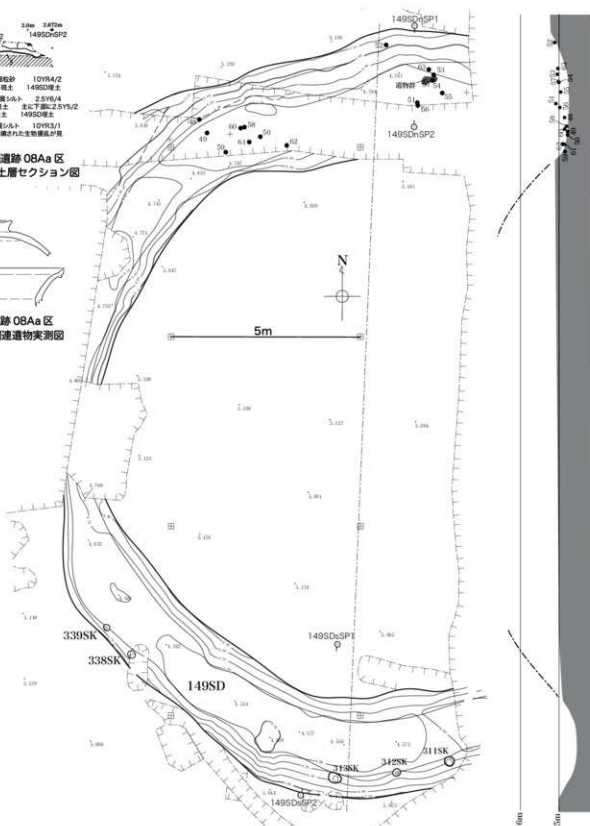


図18 塔の越道跡 08Aa・Ac区 149SD プラン・セクション図、遺物分布図

08Ac区149SD-334SX-335SK

1. 1.4-3.00m 黒褐色粘土質シルト 149SDcSP1
1.4-3.00m 黒褐色粘土質シルト 149SDcSP2
2. 10VR4/2 黒褐色粘土質シルト 10VR4/3 黒褐色粘土質シルトの埋土
2.5V5/3 比色褐色粘土質シルト(多量) 腐敗物(土)少量付 335SK埋土
3. 10VR4/2 黒褐色粘土質シルト 10VR4/3 比色褐色粘土質シルトの埋土
10VR3/1 黒褐色粘土質シルト 10VR5/4 比色褐色粘土質シルト(多量)付入
334SX埋土下層
4. 10VR3/1 黒褐色粘土質シルト 2.5V6/3 比色褐色粘土質シルト付入
149SD埋土上層
5. 10VR3/2 黒褐色粘土質シルト 149SD埋土下層
6. 2.5V6/3 比色褐色粘土質シルト(少量)付 黒腐層

図21 塔の越道跡 08Ac区 149SD 土層セクション図

09Aa (Ac) 区 149SD ほぼ半周を検出し、上端の内径は約 14m である。検出面での溝幅は 1.2~3m で、西側で狭くなっている。深さは約 50cm を測る。溝の断面は逆台形で、底面と壁面の識別は可能である。溝の内縁は滑らかな弧状ではなく、外縁も同様である。溝底面は平坦で、土坑等が存在して凹凸をなす様相は認められない。

堆積層は底部付近が黒褐色粘土質シルトで、09C 区

149SD

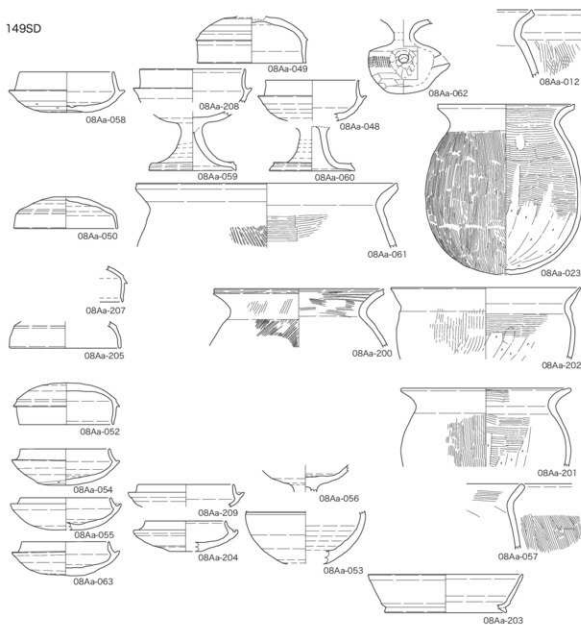


図22 塔の越道跡 O8Aa 区 149SD 出土遺物実測図

以西の溝に比べて黒味は強い。カーボンの含有量の多さに起因するなら、周辺環境を反映している可能性がある。

溝の南部では南側下端に沿うように小穴が検出された。明らかに溝が埋まり切る前に掘削されたもので、掘削は認められなかったので杭痕と考えられる。

遺物がまとまって出土した北部は、掘乱坑と古代溝 075SD によって溝内の遺物が遊離したが、それでもまとまった量が出土した。それに対して、それ以外の部分ではほとんど遺物が出土せず対照的である。

出土遺物は6世紀から8世紀までを含み、それが遺物量の多さにも関連しているが、8世紀の高台坪は混入の可能性が高い。溝の埋没過程に関わる遺物は7世紀代までであり、8世紀には

埋没し、9世紀には墳丘の削平を伴う整地等が行われて滅失したと考えられる。

なお、O8Ac 区 149SD 上部には古代の再掘削と整地の痕跡である 334SX があり、周溝のカーブに重なりつつも内側の肩を削って設けられているので、まず円丘の縮小があり、後に墳丘の削平に至ったと思われる。

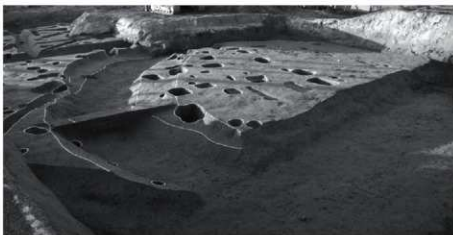
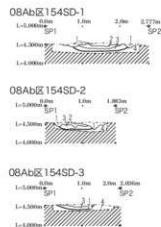


図23 塔の越道跡 O8Ac 区 149SD 完掘状況 南東から



1. 2.5V6/1 オリーブ灰色粘土層シルト-2.5V6/3 に3-1黄色粘土層シルトの混入 10YR4/1 黄灰色粘土層シルトのわずかな混入 黄灰色粘土層シルトの混入
2. 10YR4/1 黄灰色粘土層シルト 2.5V6/3 に3-1黄色粘土層シルト-粘細砂の混入 154SD埋土
3. 2.5V6/3 に3-1黄色粘土層シルト-粘細砂の混入 10YR4/1 黄灰色粘土層シルトの混入 154SD埋土
4. 2.5V6/3 に3-1黄色粘土層シルト-粘細砂の混入

図25 O8Ab区 154SD 土層セクション図

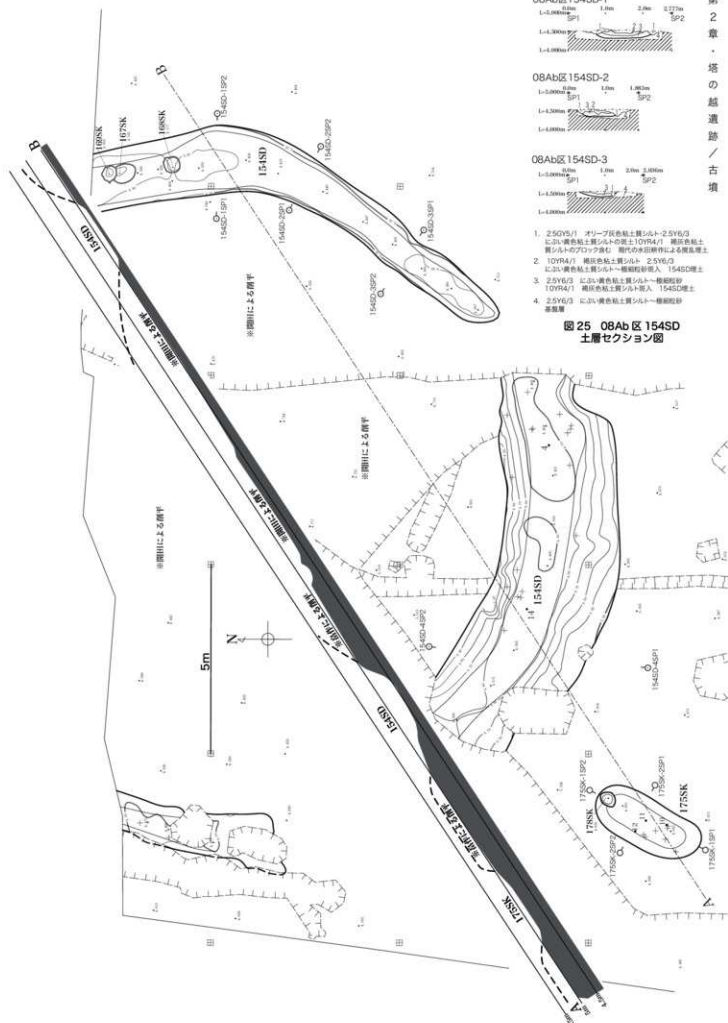


図24 塔の越道路 O8Ab区 154SD 周辺遺構プラン・セクション図

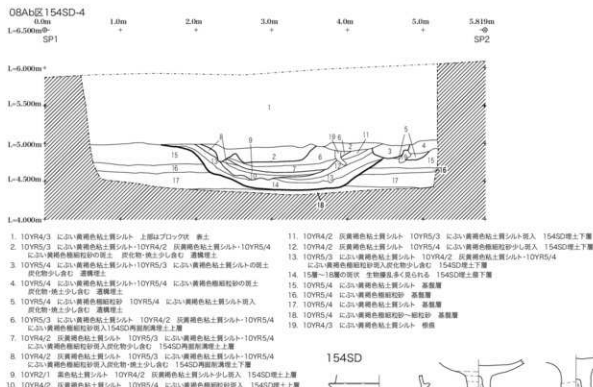


図26 塔の越遺跡 08Ab区 154SD 土層セクション図

08Ab区 154SD はほぼ南半分を検出したが、北と東は近世以降の開田で深く削平されて、溝底面付近を検出したに過ぎない。とくに東部分では耕作機等による耕起溝が深く及んで、周溝は寸断されてしまっていた。径は15m程であったと推測する。

旧田に位置して遺存状況が良好であった南部では、溝幅約3m、深さは約60cmを測る。最下層は基盤の斑土であり、溝掘削後の整地層と考えられる。

溝への流入土は炭化物を含む13層以上である。埋積は連続的ではなく、10層・7層が不整合面をなし、再掘削の痕跡が窺える。上部の2層は東西方向に重複する現代溝の堆積層で、溝とは無関係である。10層上部の9層が黒色粘土質シルトであり、他の溝でも認められた鍵になる堆積層で、古代に堆積した可能性がある。

出土遺物はまとまりをもつほどではないが、溝の北側から流入した状況で出土した。堆積層には古墳前期の遺物も含まれていた。

東部や北部の溝は、輪郭はもとより底面から両壁面への立ち上がりも不明である。

東部では調査区の北寄りでは短径40～50cmの穴が3ヶほど溝に重複して検出された。黒色粘土質シルトが堆積しているので、同層上面から掘り込まれた可能性が高い。とすれば、並びも溝の方向に一致しているので溝の埋没過程中に掘り込まれたものと考えられるが、154SD(及び墳墓)に関連する遺構であるかどうかは不明である。

図27 塔の越遺跡 08Ab区 154SD 出土遺物実測図



図28 塔の越遺跡 08Ab区 175SK 遺物出土状況 東から

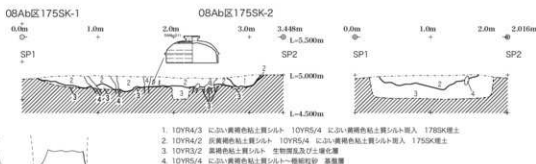


図29 塔の越遺跡 08Ab区 175SK 土層セクション図

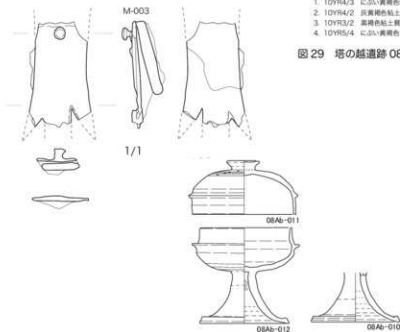


図30 塔の越遺跡 08Ab区 175SK 出土遺物実測図

08Ab区 175SK 154SDの南北中心軸から少し西に寄った位置で検出した。長軸3m、短軸1.3mの長楕円形で、深さは最大で20cm、平均10cmと浅いのは、上部が削平されているためである。断面は土坑壁の立ち上がり不明瞭であり、よってプランも本来の規模は不明である。底面には凹凸があり、整っていない。

堆積層は斑土ブロックを含む単一層で、地割れによる基盤の噴砂がところどころに認められる。下部には土壌化層があり、開口していた様相を示す。出土遺物も高杯が横転したり移動しており、掘削直後に整地された痕跡は窺えない。そのことから175SKは独立した土坑ではなく、154SDにつながる溝の最下部が残存した疑いも残るが、確証はない。有蓋高杯の他に鉄鏝が出土した。

08Ab区 181SX 調査区の南端で検出した黒色粘土質シルトの広がりである。壁際に掘削した土層観察用トレンチのために、溝状というような明確な形状は把握できなかったが、堆積層の北縁が弧状をなすことから154SDと同様の溝が調査区南に存在すると推測する。

下の写真は調査区を拡張して検出した181SXの断面である。黒色粘土質シルトの下部にも堆積層があり、南にむかって層厚を増しているの、周溝の可能性が高いと考える。



図31 塔の越遺跡 08Ab区 181SX 土層断面

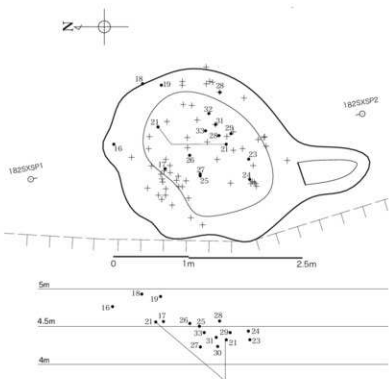
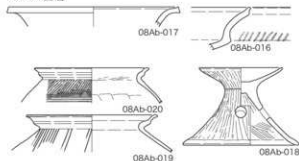


図 32 塔の越遺跡 08Ab 区 182SX 遺物 平面及び垂直分布図

182SX 上層



182SX 下層

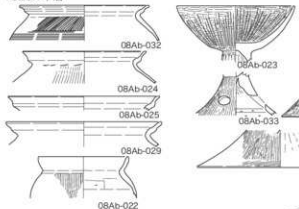


図 34 塔の越遺跡 08Ab 区 182SX 出土遺物実測図

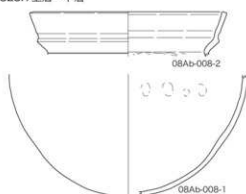
08Ab 区 182SX 長軸 2.7m、短軸 2.15m を測る楕円形のプランで、南側にステップ状の段が取り付く。深さは約 60cm である。底面は基盤の細粒砂層まで掘り抜かれており、調査時にも湧水が著しかったことから「井戸」の可能性も考えたが、断面形状が円筒状ではないので「SX」記号を付した経緯がある。出土遺物は古墳前期後葉に限られる。



1. 10YR5/2 灰黄褐色粘土層(ハトのフコック産(動物)骨)を含む 182SX 埋土
2. 10YR5/2 紅棕色粘土層(シルト) 基盤層
3. 10YR5/3 紅棕色粘土層(シルト) 基盤層
4. 10YR5/3 紅棕色粘土層(シルト) 基盤層
5. 10YR5/3 紅棕色粘土層(シルト) 基盤層
6. 10YR5/2 灰黄褐色粘土層 基盤層

図 33 塔の越遺跡 08Ab 区 182SX 土層セクション図

182SX 上層～下層



基盤層

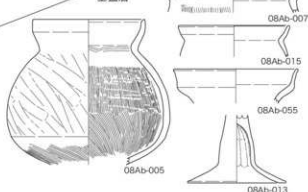


図 35 塔の越遺跡 08Ab 区遺構外出土遺物実測図

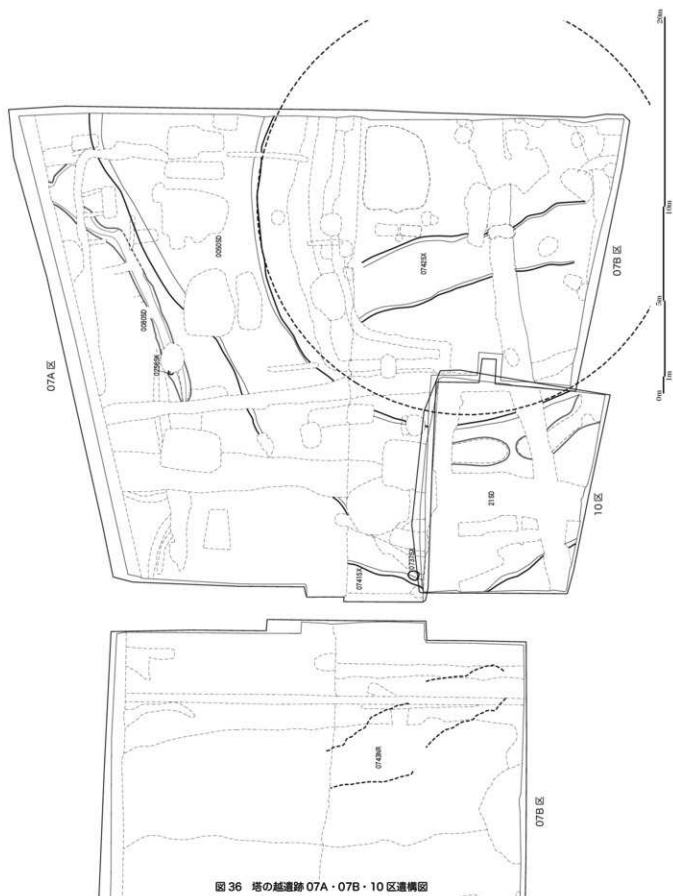


図 36 塔の越遺跡 07A・07B・10区遺構図

007SD (近世溝)



07A-04B



07A-050



07A-049

008SX (近世)



07A-067

図 37 塔の越遺跡 07A区出土土輪実測図

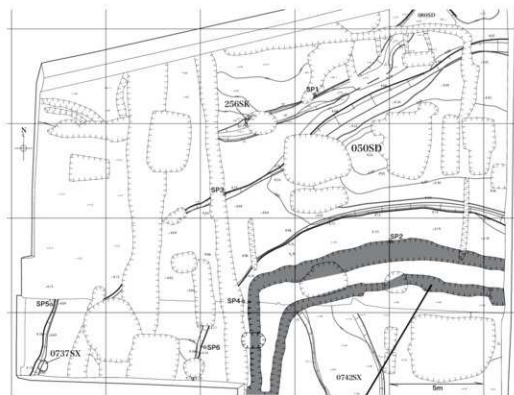
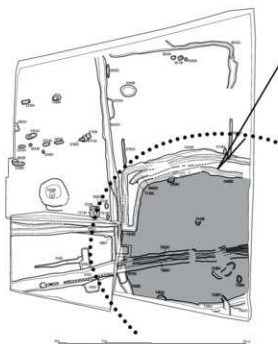


図38 塔の越遺跡 07A区・B区 050SDと近世以降の遺構との関係



● 07C区

古墳時代の遺構ではないが、古代溝 07A区 012SDは弧状をなし、墳墓跡の区画溝の遺構である可能性がある。埴輪片も散布しており、いずれも近世遺構からの出土とはいえず、由来が問題になる。そのほか、最下面で検出した溝は古墳時代まで遡る可能性もあるが、確認はない。

古墳時代の遺構が希薄な中で確実なのは07A・B区 050SD、07A区 256SK、07B区 737SXである。

注目されるのは、後述する 050SDの内側に近世以降の方形溝が2重にめぐること、西側に方形の突出部が伴うことから、埴丘を基壇にして階段を付設した施設(祠堂)が存在した可能性があること、後世にまで残る埴丘の環境を示しており興味深い。

07A・B区 050SD、10区 21SD

溝は北西で狭く約3.7m、北で9.5m、西で9mを測る。内側は比較的整った弧状をなし、推定径は20mを超える。一方で外側についてみると、北と西は直線的で、07B区から10区にかけては強く屈折して方形を呈し、輪郭は内：円、外：方の組み合わせとなる。

溝壁面の立ち上がりは、外縁コーナー部分を除きそれほど明瞭ではない。底面標高は

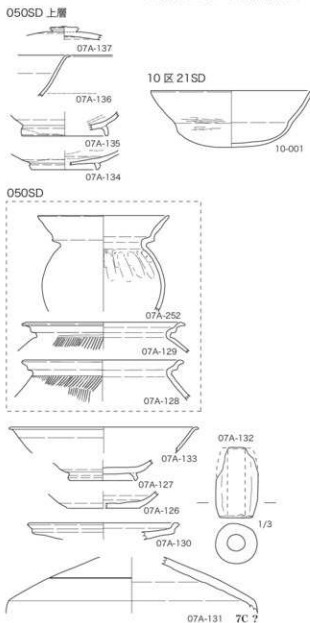


図39 塔の越遺跡 07A区・B区 050SD、10区 21SD出土遺物実測図

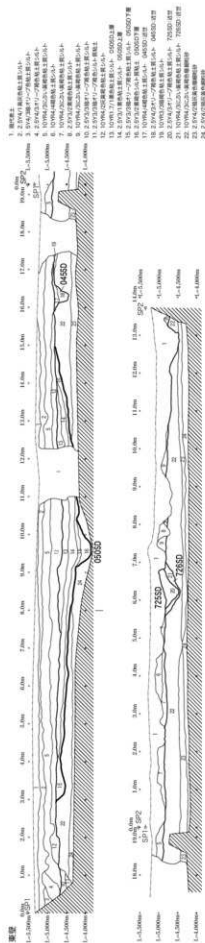


図40 塔の越道路07A・B区
東壁土層セクション図

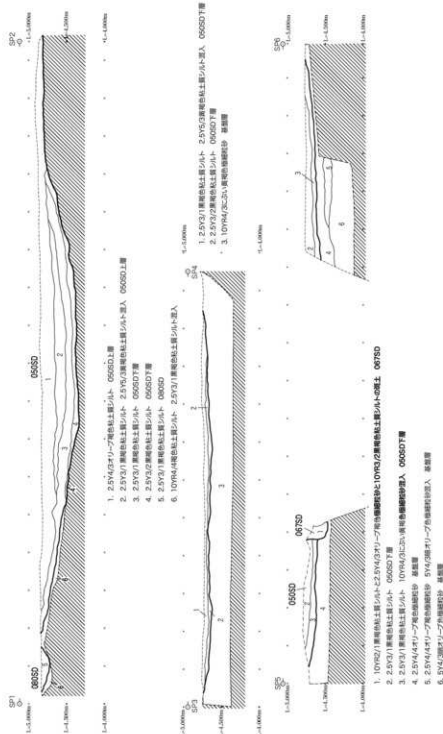


図41 塔の越道路07A・B区050SD土層セクション図

西で4.6m、北西で4.35m、東も主要部は4.35mであるが、最深部にはさらに断面逆台形の溝が設けられており、排水が考慮された底面形状になっている。

堆積層は底部付近まで黒褐色シルトとなっている。しかし、黒褐色シルトの成因や後述する737SXの検出状況を見とさらに最下層が存在した疑いも残る。

なお、10区21SDでは内縁に沿って黒褐色シルトが帯状に堆積している。溝の再掘削とすれば、古代に填丘裾を整えた可能性がある。この点は、第3章で触れる長野北浦遺跡の方形周溝と共通している。

737SX遺物出土状況図(1回目) 737SX遺物出土状況図(2回目)

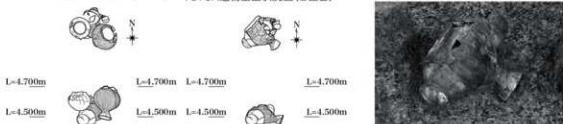


図42 塔の越遺跡 07B区 737SX 遺物出土状況図及び写真

07A区 737SX

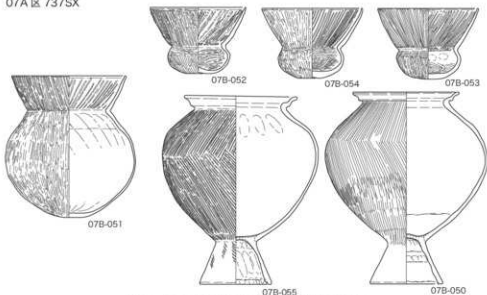


図43 塔の越遺跡 07B区 737SX 出土遺物実測図

07B区 737SX

07B区 050SDの南東端で検出された。050SD 底面の掘り下げ中に検出されたもので、土坑状の掘り込みは検出されていないので、050SD 最下層に埋置された可能性も否定できない。

丸底壺1個体、小型丸底壺3個体、S字壺2個体から構成され、いずれも密着している。丸底壺の口縁部は一部が当初から欠損していた。とりわけ小型丸底壺2つがS字壺を挟み込むように置かれていた点が注目される。まさに据え置かれたという表現が相応しい出土状況である。

07A区 256SK 柱の抜き穴に口縁部と底部を欠く壺が置かれていた。堆積層の上部は黒褐色粘土質シルトなので所属時期は古代に下るかも決らない。

07A区 256SK

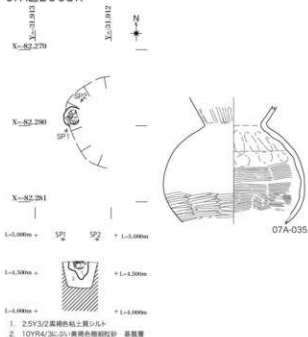


図44 塔の越遺跡 07A区 256SK 遺物出土状況図及び遺物実測図

07C区 582SK



07B区 検3

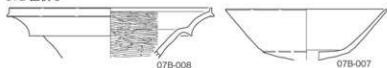


図45 塔の越遺跡 07B・C区出土遺物実測図

(2) 古代

A. 概要

遺構・遺物ともに充実しており、塔の越遺跡の中心をなす時期である。とりわけ西方に位置する尾張国府との関連から、国府周辺の様相を考える上で重要な資料である。

つまり、旧三宅川はちょうど08G区東部を左岸としていたもので、旧三宅川沿いに残る「・・・須賀」という地名も瀧尾平野では高所となった砂地の場所を示すことから、自然堤防の上面が砂層として地表に露出しているような状況にあったものと推測される。そして、これを西端として三宅川左岸域に幅広く形成された微高地上に古代の遺構群が形成されたものとする。

微高地上面については、遺跡の東部では中世以降の耕



図46 塔の越遺跡調査区位置図

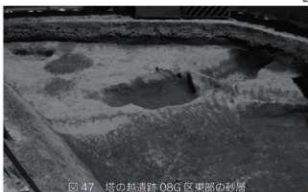


図47 塔の越遺跡08G区東部の砂層

古代関連の遺構群は、掘立柱建物群が08B区から07A・Cで井戸を伴いながら稠密であるのに対して、08Fd区や08Cc区では竪穴建物が散漫に検出されたとどまる。調査区の狭いことも影響しているとはいえ、むしろ旧地形の高低を反映している可能性がある。つまり、竪穴建物：高、掘立柱建物：低ということである。

西部の08G区では遺構検出率が砂層となっており、また旧三宅川に向かって堆積層が下降する状況を確認した。08Ib区では土取りが行われて堆積状況は確認できなかったが、08Ic区では無遺物層が深くまで及んでおり、河道周辺の堆積環境を示している可能性がある。

作や近世以降の開田によって大幅に削平されて旧地形を窺う材料は無いが、一部で検出された、とても方位を揃えたとは思えない大溝の軸線や自然流路の痕跡からみて、全くの平坦ではなかったことが窺える。この点を古墳分布と古代遺構群との関係から見ると、微高地東部から長野北浦遺跡にかけて展開する古墳群の西側に掘立柱建物群が分布するのに対して、三宅川河岸に近い微高地上に竪穴建物群が分布していることに、やはり高床式建物と地上式建物の分布に影響する環境差が存在したと考えられる（地形について詳しくは第4章参照）。

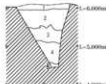
B. 遺構・遺物

● 08I区

08I区は3小区に分かれる。西端の08Ic区は擁壁で区画された畝の隅にあたってために重機の搬入は不可能であり、人力掘削で調査することになった。上部は天地返しによる攪乱層であり、その下、標高4.5mで細粒砂層を確認したが、氾濫源を構成する堆積層であるのかどうかは不確かである。

図48 塔の越遺跡08Ic区南壁セクション図

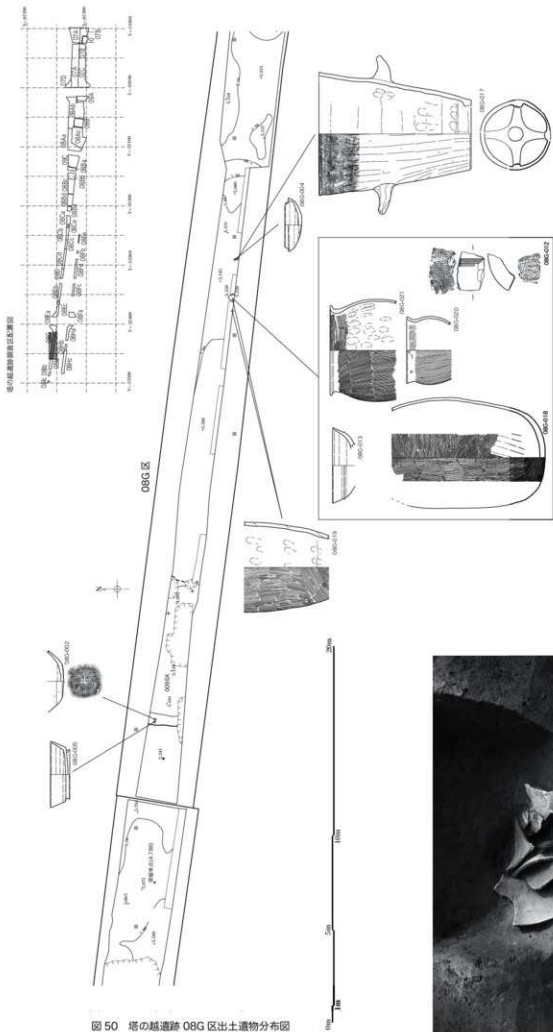
0.900m 1.000m 1.571m 1.7000m



- 2.5Y3/2 黄褐色土質シルト 2層の粘土・礫・炭化物を含む 表土、掘削までの掘削作土
- 10Y9/3 濃い黄褐色粘土質シルト・2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルトのブロック 5層のブロック・炭化物含む 天地返しによる攪乱層
- 2.5Y4/2 緑灰黄色土質シルト・10Y9/4 灰褐色粘土質シルトのブロック 炭化物含む 天地返しによる攪乱層
- 2.5Y4/2 緑灰黄色土質シルト 2.5Y6/3 濃い黄褐色細粒砂土 炭化物含む 天地返しによる攪乱層
- 10Y9/4 濃い黄褐色細粒砂 礫層

図49 塔の越遺跡08Ia区出土遺物実測図





●08G区

08G区は東端に小規模な覆乱坑が存在し、部分的に天地返し坑もあったが、古代の遺構面を大きく破壊するほどではなかった。

堆積層は比較的安定しており、標高5.5mあたりか、やや上部を旧地表面として、浅い遺構が展開していた。

基盤層の28層は細粒砂であり、08Ea区以東がシルト層であるとは異なる。自然堤防の本体に近いことを

窺わせる

注目されたのは、遺構外に集積された7～8世紀の時期幅をもつ遺物群である。ただ、これら遺物群の集積



図5 塔の越遷跡 08G区土層セクション図

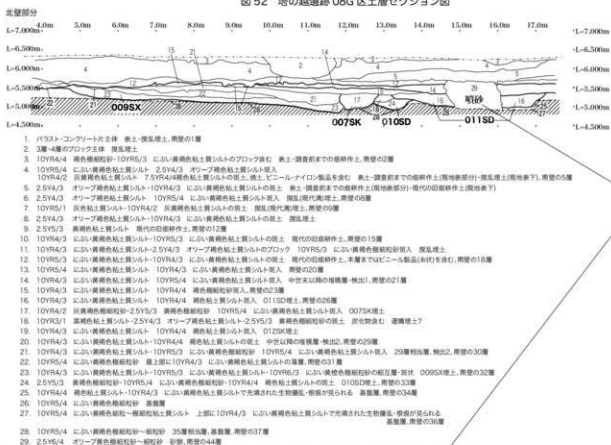
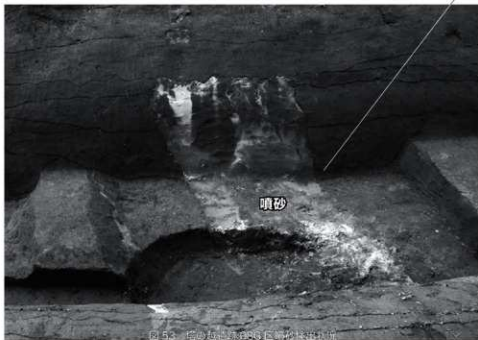


図6 塔の越遷跡 08G区土層セクション図



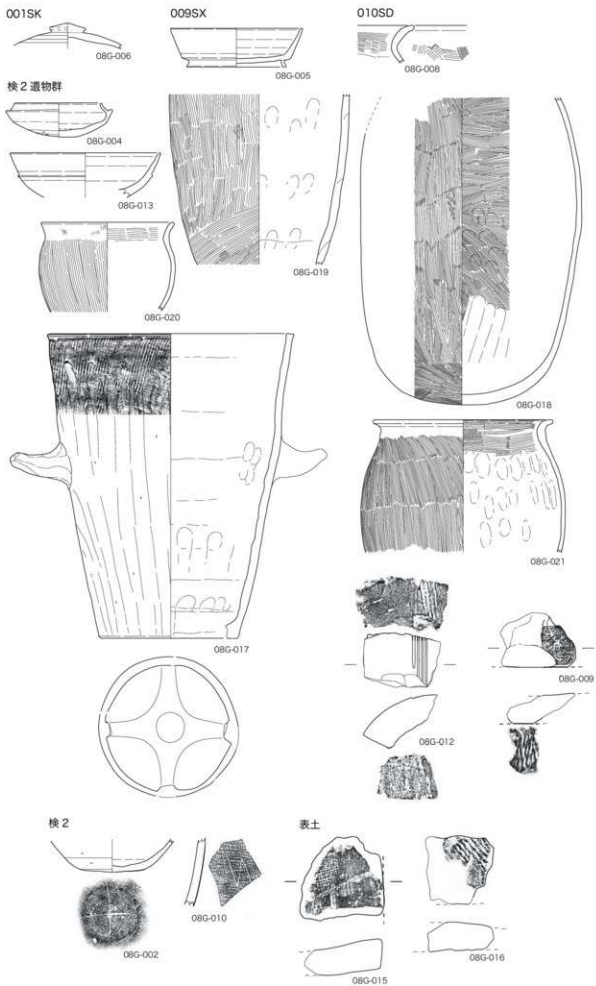
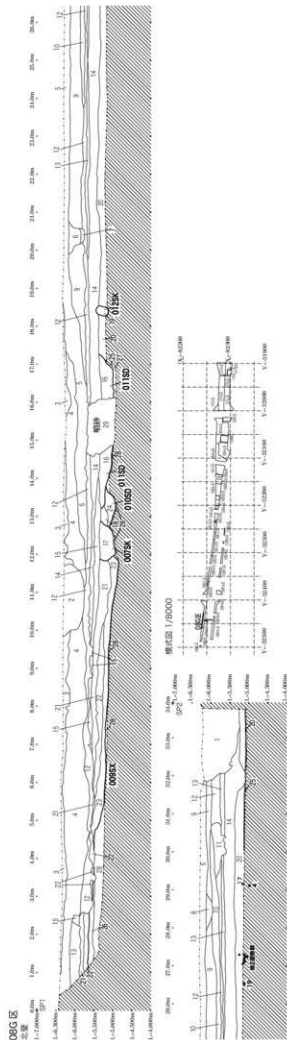


図 54 塔の越遺跡 OBG 区出土遺物実測図



1. 作年不明の土
2. 3層-4層の70年代前半
3. 10795/4 東側土層(10795/3)に引続く
4. 10794/2 東側土層(10794/3)に引続く
5. 2374/2
6. 2374/3
7. 2374/4
8. 2374/5
9. 2374/6
10. 10795/3
11. 10795/4
12. 10795/5
13. 10795/6
14. 10795/7
15. 10795/8
16. 10795/9
17. 10795/10
18. 10795/11
19. 10795/12
20. 10795/13
21. 10795/14
22. 10795/15
23. 10795/16
24. 10795/17
25. 10795/18
26. 10795/19
27. 10795/20
28. 2374/1
29. 2374/2
30. 2374/3
31. 2374/4

図55 塔の越遺跡 O8G区北壁土層セクション図

が当該期に属すのかどうかについては、それらを覆っている20層の年代が遡っても古代末以降であると調査所見にあることから、年代的に調和していないことになる。もちろんその下部には基礎層である25層があるのだが、25層上面との関係は調査では明確にできなかった。

一つの可能性としては、25層上面を地表面として集積された遺物群が、後に新たな堆積層に覆われたとするものであるが、不確かである。しかし、甕も底部を抜かれているというように、O8G区における初期の活動が、居住域縁辺とはいえ、居住に関わるものではなかった可能性は高い。

009SX 西層は小さな段をなし、底面は東に向かって緩やかに下降して、深さが50cmとなるあたりで東辺となり、壁面が立ち上がる。

南北の広がりが不明で、浅く、底面も平坦であることから「溝」ともいえない。

● 08H区

08G・1区の渠道を挟んだ南側に位置する。3小区に区分して調査を行った。このうち、08Hb区の大部分と08Hc区全域は土取りのために遺構面は破壊されていた。削平を免れた08Ha区でも、標高5.5mを遺構確認面としたものの、旧地表面ではない。調査区東部では基盤層である20層が粗粒砂であり、それが西に向かって急激に下降し、上層を19層のシルト層が覆っている。08G区と同様に、この部分がある時期の三宅川左岸といえよう。

調査は、南に新築住宅が接しており、出入り口の確保は当然として、万が一にも地盤崩壊によって家屋に損傷をまねかないように慎重を要した。そのような中で、古代でも末期の井戸を検出した。他に土坑や小穴を検出したが、建物の存在は窺えない。

なお、08Ha区からも7世紀代の遺物が出土しており、やはり08G区に対応する。

010SE 遺構検出面では炭化物を濃密に含む黒褐色粘土質シルトの広がりや当初は土坑と認識していたが、トレンチを設けて土層断面を観察したところ、その下部に大規模な掘り込みを確認したので、井戸の可能性を想定した。しかし、上記の理由から掘形の全掘を断念して断ち割り調査に切り替えた。下部からは井戸材を検出することができたが、湧水のためにそれ以下の掘り下げを断念した。

井戸構造物としては縦板組の井戸枠と横板の一部を検出した。それに至までの掘削過程では、灰軸陶器類の小片が出土したことからそれらが裏込めに含まれていたものと推測したが、構造物の抜き取りに伴う再掘削の痕跡は土層断面で確認できなかった。井戸枠上部の堆積層は

ブロック土を中心としており、整地層との印象が強い。したがって、井戸枠上部が抜き取られたとするなら、裏込めはもとより、当初の井戸設置時の掘形を残さない程に周囲を大きく掘り抜いた可能性を考えなければならないことになる。

井戸の抜き取りと整地後に設けられた土坑状の落ち込みの性格については、中世資料に参考例がある。須賀市土田遺跡では井戸廃絶後に炭化物や焼土を充填した土坑が上部に設けられることが複数事例確認されている。010SEに竹が立てられていた痕跡は未確認だが、井戸廃絶に伴う行為の痕跡として土坑が残ったものと考えられ、本例のように炭化物の濃密な土坑は同様の遺構であった可能性が高い。

010SEから出土した遺物は10～11世紀の遺物群で



図 56 塔の越遺跡 08Ha 区 010SE 土層セクション図



図 57 塔の越遺跡 08Hc 区 010SE 掘削状況

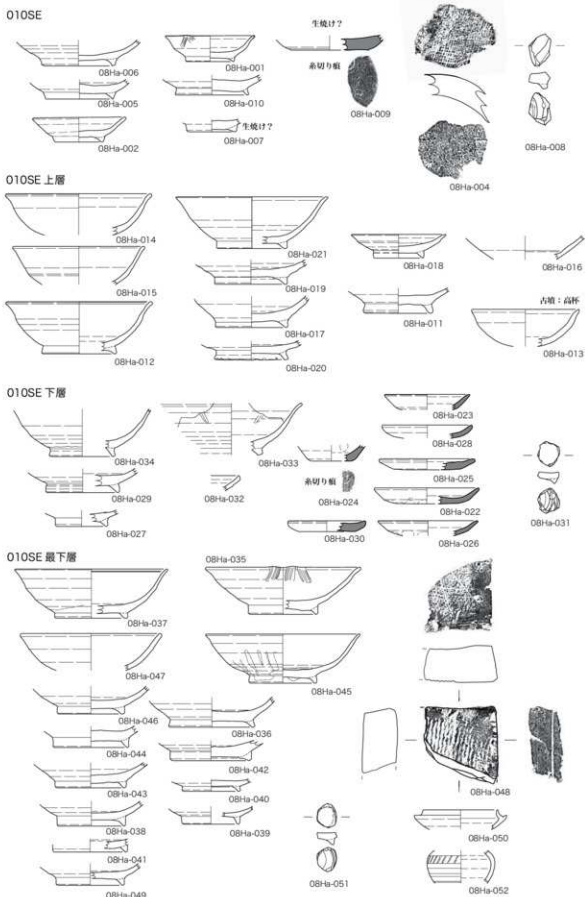
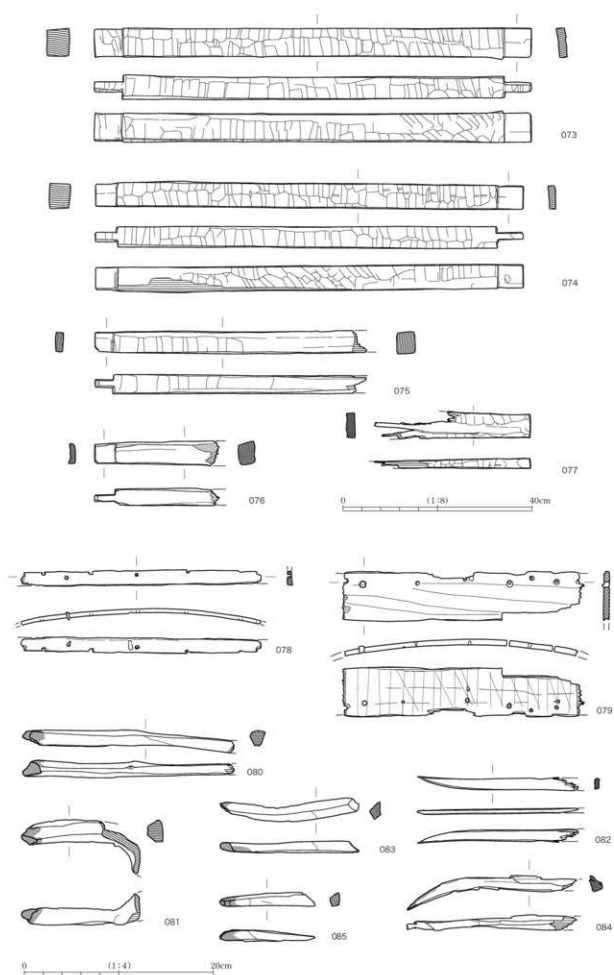
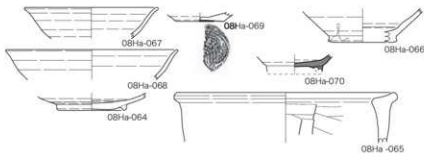


図 58 塔の越遺跡 OBHa 区 O10SE 出土遺物

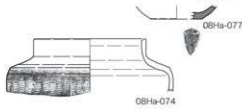
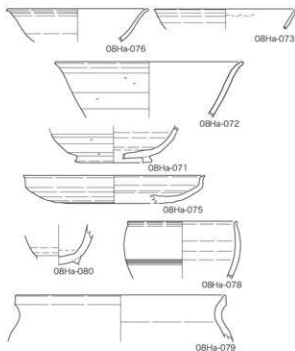
図 59 塔の越遺跡 08H-a 区 010SE 井戸材及び出土木製品実測図



014SK



椀1



表土

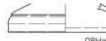


図60 塔の越道跡 OBHa区
出土遺物実測図

あり、一部に初期の山茶碗を含む。

最下層からは0.53 窯式の碗も出土しており、井戸の設置年代はそのあたりに置かれよう。そして、同じく最下層から加工円盤が出土していることは、陶丸に先行して打ち欠きの加工品が存在することを示すものとなる。しかも、近世とは異なって明らかに高台部分が素材に用いられており、この点は土田道跡やその他の事例とも共通している。大型品も無く、「円盤」というより「丸」状加工品というほうが相応しい。

003SK



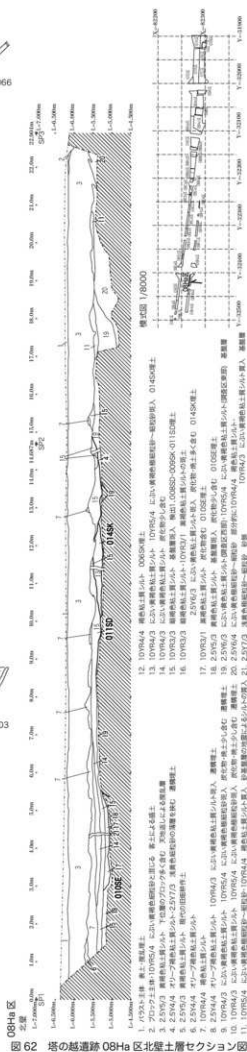
椀1



表土



図61 塔の越道跡 OBHb区
出土遺物実測図



OBHa区
北壁

図62 塔の越道跡 OBHa区北壁土層セクション図

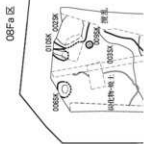
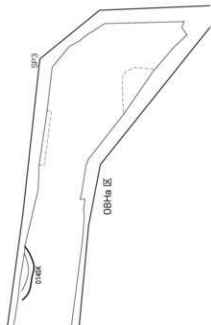
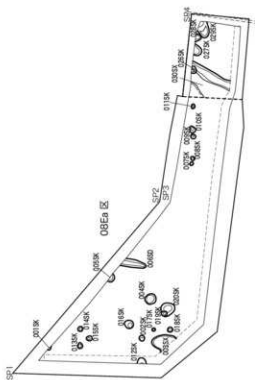
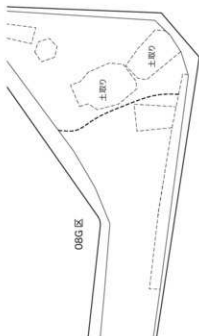


図 63 塔の越遺跡 OBG・OBHa・OBECa-Ec・OBFa区遺構図

● 08Ea区

近世以降の耕作痕は深くまで及んでいるが、さいわい下部の遺構を破壊するまでには至っていない。遺構は多数の小穴と溝が2条検出された。

遺構は25層を基盤とするものがほとんどである。25層は斑土で、下面是東がやや高く、北東に向けて下降しており、上面も同様である。030SXは25層の下部に形成されており、それを埋める26層が基盤層の土壌化層であるとの所見によれば、当初に形成されていた地表面の凹凸が25層の形成に際して削平されずに残されたものと考えられる。25層は斑土であり、基盤層である27層との境界が明瞭なことから、当該層は整地層と推測される。

小穴にはサイズの定まらないものも多いが、014SKのように礫を埋め込んだものもあり、根固めとすれば柱穴ということになる。しかし、掘立柱建物が建つような整然さは調査区内では認められず、もちろん掘立柱建物の痕跡も認められない。隣接地といった印象である。



図 64 塔の越遺跡 08Ea区準備工事



図 65 塔の越遺跡 08Ea区トレンチ掘削



図 66 塔の越遺跡 08Ea区遺構掘削

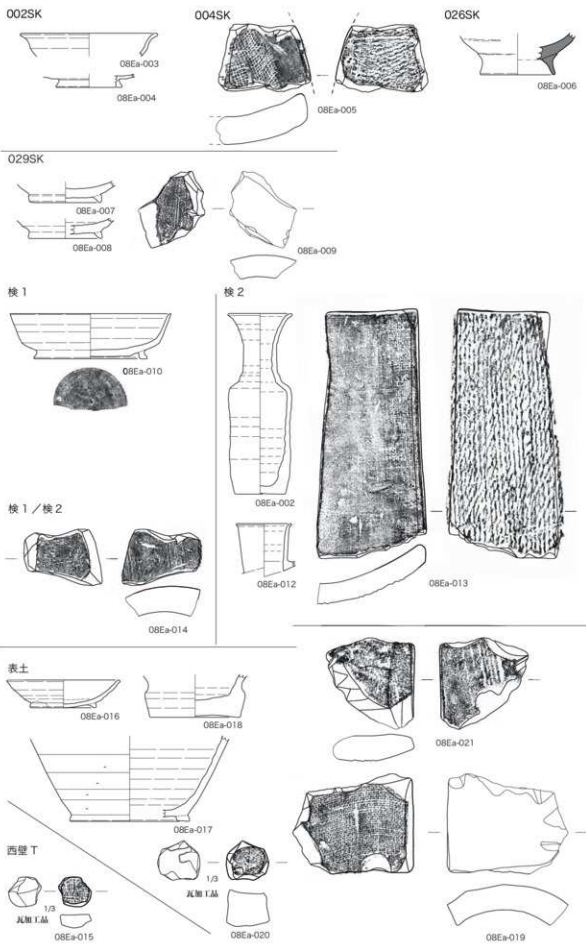
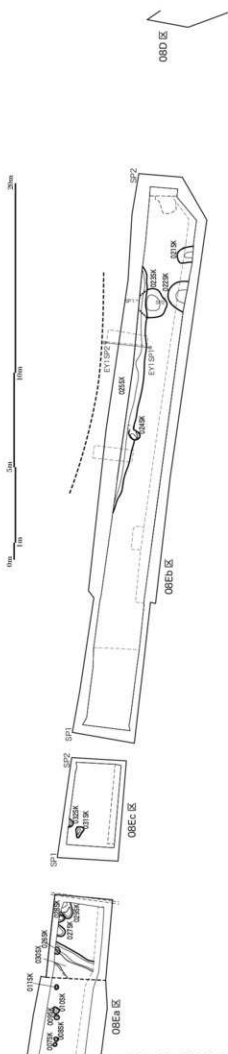
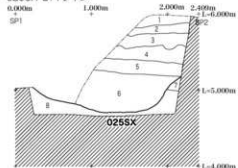


図 6B 塔の越遺跡 OBEa 区出土遺物実測図



Q25SX-EY1 ライン



1. 2.5V4/2 緑沢黄色粘土質シルト・2.5V4/3 オリーブ褐色粘土質シルトの混土
2. 2.5V3/2 黄褐色粘土質シルト混入 黄土
3. 2.5V4/3 オリーブ褐色粘土質シルト 10YR4/3 に近い黄褐色粘土質シルト混入
4. 10YR4/2 に近い黄褐色粘土質シルト 黄化帯(シルト含む)
5. 10YR5/3 に近い黄褐色粘土質シルト Q25SX混土
6. 10YR5/3 に近い黄褐色粘土質シルト 2.5V5/2 緑沢黄色粘土質シルト混入 Q25SX混土
7. 10YR5/4 に近い黄褐色粘土質シルト 基礎層
8. 10YR5/4 に近い黄褐色砂粘粒砂-細粒砂 基礎層

塔の越境跡 O8Eb 区 Q25SX 土層セクション

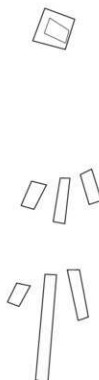
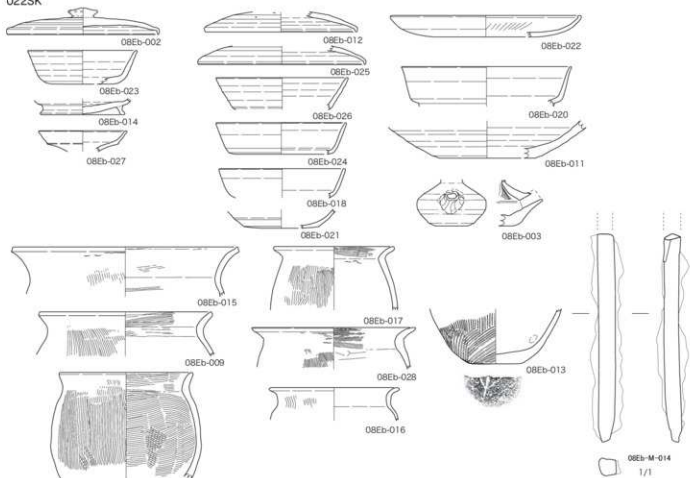
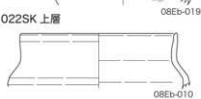


図 69 塔の越境跡 O8Ea・O8Ec・O8Eb・O8Ec 区連携図

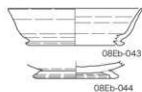
022SK



022SK 上層



022SK/023SK



検 1

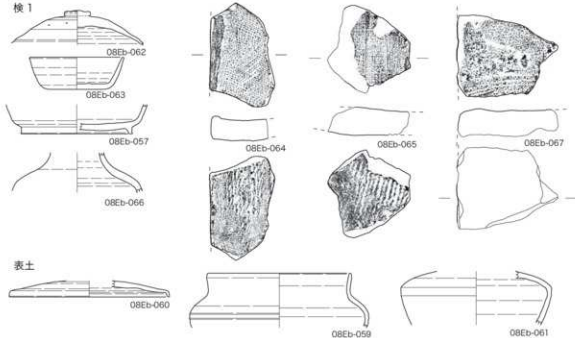


図 73 塔の越遺跡 08Eb 区出土遺物実測図

痕跡をイメージさせる。民地との境界際までトレンチを掘削して確認した結果、幅2m、深さ50cmの斑土を埋土とする溝であることを確認したが、東端で終息するかどうかは不明である。出土物には11世紀まで下る清郷形甕やフィゴの羽口片が含まれていた。

021SK やや楕円形のプランで、炭化物や焼土が堆積している。生活残滓の廃棄坑であろう。

022SK 堆積土の大半をなす2層は炭化物や焼土、そ

して歯や肩甲骨等の動物骨片等を含み、いわゆる廃棄土坑に属する。

出土遺物は8世紀前半を中心とする時期で、畿内系の暗紋土師皿も含まれていた。

023SK 堆積土は隣接する022SKとほぼ同じ様相であり、直接の切り合い関係は無いこと、接合資料があることから、近接した時期であろう。

(石黒立人・鶴岡雅弘)

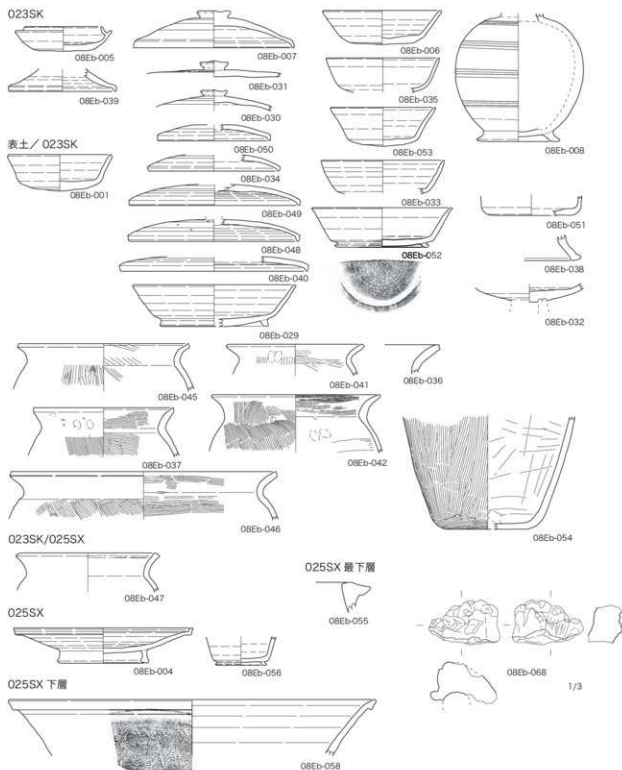
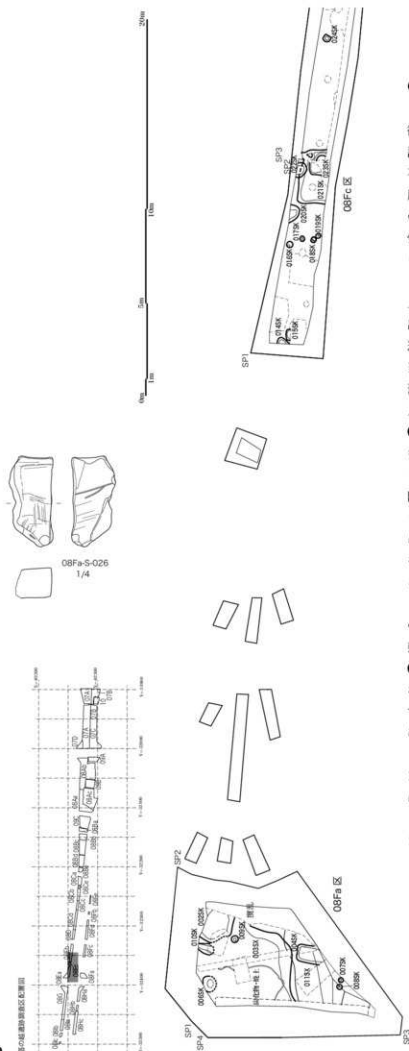


図74 塔の越遺跡 O2Eb 区出土遺物実測図



●08Fa 区

他の地区に比べて古代の包含層の厚いのが特徴で、遺構内部といった印象が強い。しかし、調査範囲の狭さから遺構であるとしても輪郭は不明である。部分的に焼土と炭化物を含む堆積層が不定形な広がりを見せており、それを遺構の輪郭と捉えたが、堆積状況の違いによる可能性もある。残念ながら断面でのみ検出した遺構もある。

古代の遺構は下部 (011SX) が8世紀後半、上部 (003SX) が9世紀で、7世紀代の遺物は遺離して出土しており、他の調査区と同様に該当する遺構の痕跡は無い。右に掲載した鉄鏝は形状から当該期に属し、後代の遺構堆積層に混入したと推測される。

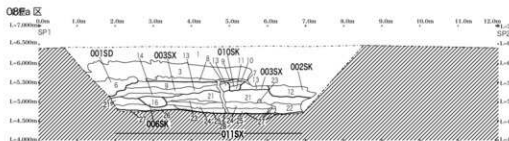
003SX 下部の堆積層 (北壁14層相当) には多量の焼土が含まれ、灰釉陶器碗や磁石が出土した。遺構としての底面標高は一定せず、北西隅がやや低くなる傾向にあり、竪穴建物跡という印象は無い。下部にある011SXの埋まり方に関わる堆積層の可能性もあるが、西壁15層を介する不整合面があるので区別できると考える。

出土遺物は9世紀後半を中心に行先する時期の遺物を若干含む。碗・蓋・盤など供膳具が主で、甕も出土している。

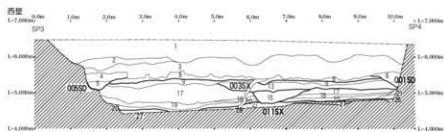
011SX 調査区内で輪郭を押さえることはできなかった。竪穴建物跡というには底面が一定せず、南寄りには溝状の凹地が存在した。堆積層は別にして、形状は08G区009SXに似ていないもない。上半部は炭化物や焼土を含み (西壁17層に対応)、下部には極細粒砂 (西壁19層に対応) が堆積していた。

出土遺物は8世紀後半を中心として、比較的まとまっているが、破片が主である。

図75 塔の越遺跡 08Fa・08Fc区遺構図



1. P5スト主層 赤土・埋込層土
2. 25Y5/1 辰色粘土質シルト 現代の埋込層土
3. 25Y4/2 褐色黄色細砂 下部に3層のブロック 現代の埋込層土
4. 10YR4/2 辰黄褐色粘土 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルトのブロック含む O05SD埋土
5. 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルト 10YR5/3 辰黄褐色細砂の互層 O05SD埋土
6. 10YR4/2 辰黄褐色粘土質シルト 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルトのブロック含む
層下部に10YR6/2 辰黄褐色細砂層 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルトの相互層 O015D埋土
7. 埋込25Y4/2 褐色黄粘土質シルトの埋土
8. 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルト 埋込1近位の埋込層土
9. 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルト 10YR4/4 褐色粘土質シルトの埋土 埋込土含む O10SK埋土
10. 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルト 25Y4/2 褐色黄褐色粘土質シルトの埋土 埋込土含む O10SK埋土
11. 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルト 10YR4/4 褐色粘土質シルトの埋土 炭化物・焼土を含む O10SK埋土
12. 13層-20層 10YR5/2 黄褐色粘土質シルトの埋土 O02SK埋土
13. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 25Y5/3 黄褐色粘土質シルト 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルト混入 O03SK埋土
14. 13層と同じ 炭化物・焼土含む O03SK埋土
15. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルトの埋土 25Y5/3 黄褐色細砂砂混入 遺構埋土
16. 25Y5/2 褐色黄粘土質シルト 10YR4/2 辰黄褐色粘土質シルト混入 炭化物・焼土含む O05SK埋土
17. 10YR4/3 褐色粘土質シルト 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルトの埋土 炭化物・焼土含む O11SK埋土
18. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルト混入 O11SK埋土
19. 10YR4/2 黄褐色細砂層 10YR4/4 褐色粘土質シルト混入 O11SK埋土
20. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 10YR4/3 辰黄褐色細砂層混入 O11SK埋土
21. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 炭化物・焼土少量含む O11SK埋土
22. 24層-25層の埋土 10YR4/4 褐色粘土質シルト混入 O11SK埋土
23. 10YR4/3 辰黄褐色細砂層層一層砂層 O11SK埋土
24. 25Y5/3 黄褐色細砂層層一層砂層 O11SK埋土
25. 10YR5/3 辰黄褐色細砂層層一層砂層 O11SK埋土
26. 10YR4/3 辰黄褐色細砂層層一層砂層 10YR5/4 辰黄褐色粘土質シルト混入 O11SK埋土
27. 10YR5/4 辰黄褐色粘土質シルト一層細砂層 遺構層
28. 25Y5/3 黄褐色細砂層 砂層



1. P5スト主層 赤土・埋込層土
2. 25Y5/1 辰色粘土質シルト 現代の埋込層土
3. 25Y4/2 褐色黄色細砂 下部に3層のブロック 現代の埋込層土
4. 10YR4/2 辰黄褐色粘土 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルトのブロック含む O05SD埋土
5. 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルト 10YR5/3 辰黄褐色細砂の互層 O05SD埋土
6. 10YR4/2 辰黄褐色粘土質シルト 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルトのブロック含む
層下部に10YR6/2 辰黄褐色細砂層 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルトの相互層 O015D埋土
7. 埋込25Y4/2 褐色黄粘土質シルトの埋土
8. 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルト 埋込1近位の埋込層土
9. 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルト 10YR4/4 褐色粘土質シルトの埋土 埋込土を含む O10SK埋土
10. 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルト 25Y4/2 褐色黄褐色粘土質シルトの埋土 埋込土を含む O10SK埋土
11. 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルト 10YR4/4 褐色粘土質シルトの埋土 炭化物・焼土を含む O10SK埋土
12. 13層-20層 10YR5/2 黄褐色粘土質シルトの埋土 O02SK埋土
13. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 25Y5/3 黄褐色粘土質シルト 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルト混入 O03SK埋土
14. 13層と同じ 炭化物・焼土含む O03SK埋土
15. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルトの埋土 25Y5/3 黄褐色細砂砂混入 遺構埋土
16. 25Y5/2 褐色黄粘土質シルト 10YR4/2 辰黄褐色粘土質シルト混入 炭化物・焼土含む O05SK埋土
17. 10YR4/3 褐色粘土質シルト 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルトの埋土 炭化物・焼土含む O11SK埋土
18. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 10YR4/3 辰黄褐色粘土質シルト混入 O11SK埋土
19. 10YR4/2 黄褐色細砂層 10YR4/4 褐色粘土質シルト混入 O11SK埋土
20. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 10YR4/3 辰黄褐色細砂層混入 O11SK埋土
21. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 炭化物・焼土少量含む O11SK埋土
22. 24層-25層の埋土 10YR4/4 褐色粘土質シルト混入 O11SK埋土
23. 10YR4/3 辰黄褐色細砂層層一層砂層 O11SK埋土
24. 25Y5/3 黄褐色細砂層層一層砂層 O11SK埋土
25. 10YR5/3 辰黄褐色細砂層層一層砂層 10YR5/4 辰黄褐色粘土質シルト混入 O11SK埋土
26. 10YR4/3 辰黄褐色細砂層層一層砂層 10YR5/4 辰黄褐色粘土質シルトの埋土 O11SK埋土
27. 10YR5/4 辰黄褐色粘土質シルト一層細砂層 遺構層
28. 25Y5/3 黄褐色細砂層 砂層

図 76 塔の越遺跡 O8Fa 区土層セクション図

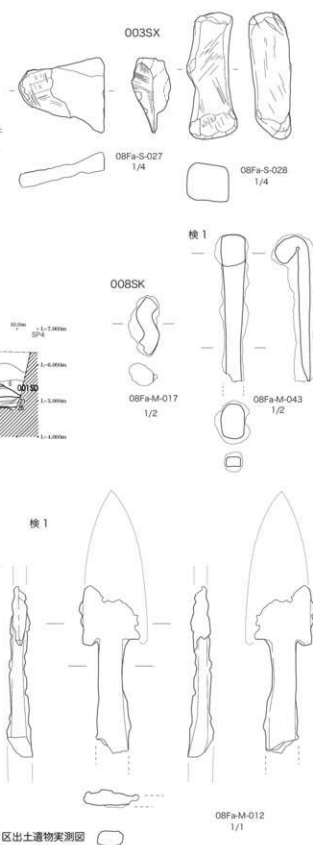


図 77 塔の越遺跡 O8Fa 区出土遺物実測図

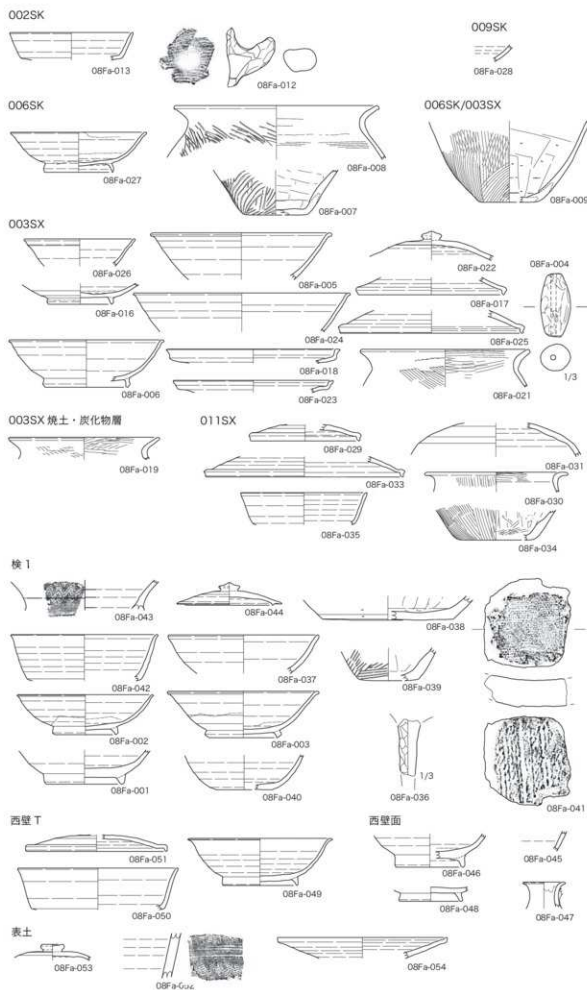


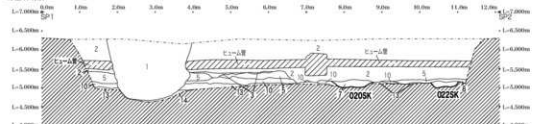
図 78 塔の植遺跡 OBFa 区出土遺物実測図

● 08Fc区

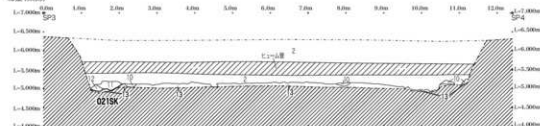
08Fa区との間は完全に破壊されていた。08Fc区も集合住宅の基礎でかなり破壊されていたが、かろうじて残った幾つかの遺構を調査することができた。遺物には7世紀代のものであるが、遺構は9世紀代が中心である。

08Fc区

北壁(西側)



北壁(東側)



1. 下位層のブロック主柱 確認調査トレンチ壁土
2. パラスト・コンクリート基土のブロック主柱 下部は、コンクリート・パラスト 表土・腐乱層土・ヒュム層と埋設物の敷設パラスト
3. 2.5V4/1 磁器片・写実土質シルト・2.5V4/2 オリーブ褐色粘土質シルト混入 漆喰付 電気の配線土
4. 2.5V4/2 磁器片赤土質シルト 主に下部に10層(東壁)で10層のブロック主柱 現代の居住土
5. 10VR5/3 におい・黄褐色粘土質シルト
6. 10VR4/3 におい・黄褐色粘土質シルト・10VR5/4 におい・黄褐色粘土質シルト 10VR3/1 黄褐色粘土質シルト混入 014SK埋土
7. 10VR4/3 におい・黄褐色粘土質シルト 10VR5/4 におい・黄褐色粘土質シルト混入 漆喰付付 022SK埋土
8. 10VR4/3 におい・黄褐色粘土質シルト 10VR5/4 におい・黄褐色粘土質シルト 10VR3/2 黄褐色粘土質シルト混入 漆土・炭化物多量付 022SK埋土
9. 10VR4/3 におい・黄褐色粘土質シルト 10VR5/4 におい・黄褐色粘粒砂混入 炭化物・漆土少量付 遺構埋土?
10. 10VR4/3 におい・黄褐色粘土質シルト 13層混入 燻出し
11. 10VR4/3 におい・黄褐色粘土質シルト 10VR5/4 におい・黄褐色粘土質シルト混入 漆土・炭化物多量付 021SK埋土
12. 10VR4/3 におい・黄褐色粘土質シルト 10VR5/4 におい・黄褐色粘土質シルト混入(1)層より多量付 021SK埋土
13. 10VR5/4 におい・黄褐色粘粒砂混入前→2.5V5/3 黄褐色粘粒砂(下層) 最基礎
14. 0VR5/4 におい・黄褐色粘粒砂(下層) 最基礎

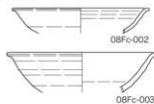
図79 塔の越遺跡 08Fc区土層セクション図

018SK



08Fc-001

021SK

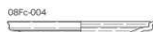


08Fc-002

08Fc-003



08Fc-005



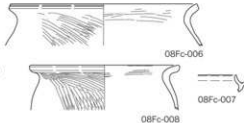
08Fc-004

022SK



08Fc-010

08Fc-009

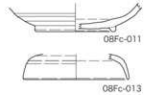


08Fc-006

08Fc-007

08Fc-008

023SK



08Fc-011

08Fc-013

検1



08Fc-015



08Fc-014

図80 塔の越遺跡 08Fc区出土遺物実測図

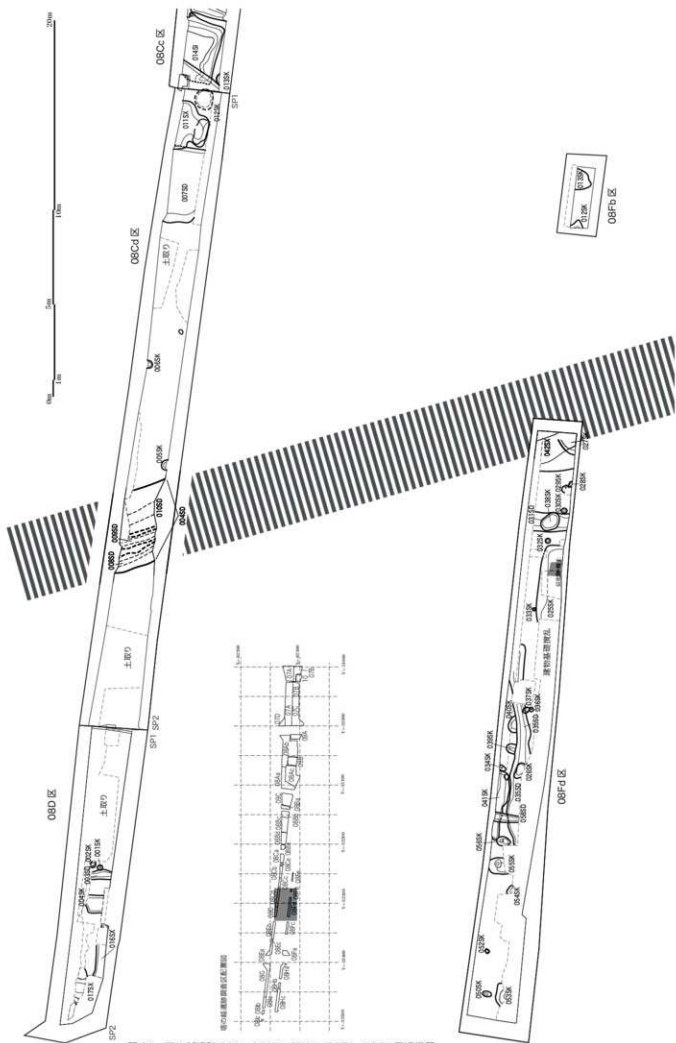


図 81 塔の越道路 08D・08Cd・08Cc・08Fb・08Fd区構造図

● O8D 区

基盤は細粒砂であり、自然堤防の本体に位置していることが窺える。後述する竪穴建物群の展開とも無関係ではないだろう。ただ、土取りや天地返しによって遺構面が破壊されているために調査できた遺構も少ない中で、7世紀後半の遺構が確認できた意義は大きい。また、炭化物層を含む均平な堆積層が複数確認できたので、竪穴建物群が重複して存在する可能性は窺えた。カマド支脚片は出土したが、残念ながらカマド本体の検出には至ら



図 82 塔の越遺跡 O8D 区 1 面遺構 (検 2 遺物群) 出土状況

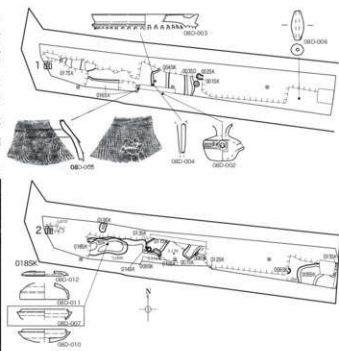


図 83 塔の越遺跡 O8D 区遺物分布状況図

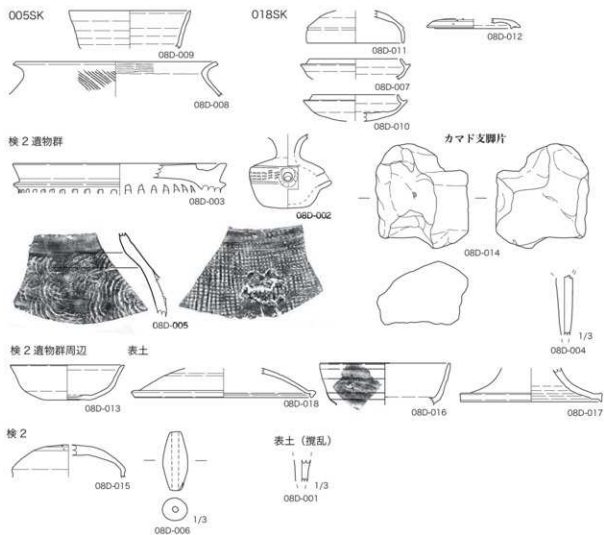


図 84 塔の越遺跡 O8D 区出土遺物実測図

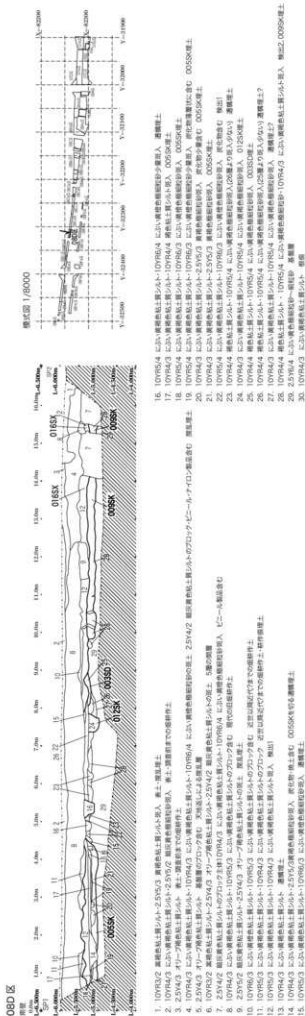


図 85 塔の越道跡 08D 区南壁土層セクション図



図 86 塔の越道跡 08D 区南壁 O18SK 付近土層セクション図

なかった。

1 面 面的な遺物の散布状況が認められたので、「検 2 遺物群」として取り上げた。カマド支脚片や 8 世紀前半に属す大形の円面硯も含まれている。

O16SX は平坦面を持つ広がり、竪穴建物の掘形の可能性がある。底面標高がほぼ同じ O17SX も同様である。いずれも 8 世紀代に属す。

2 面 O18SK は確実な 7 世紀後半の遺構である。残存長 2m、幅 0.7m、深さ約 40cm を測る。

下部の堆積層には炭化物を含み、給源は周辺に展開した同時期の活動域であったとすれば、竪穴建物群が展開する公算も大きい。

O09SK は O18SK に切られており、確実に先行する。輪郭がやや不整形ながら軸線をもって方形を呈するかのようであり、これも竪穴建物の掘形の可能性がある。他に、炭化物を含む北壁 22 層も床面覆土上の可能性がある。

調査区東端に位置する O05SK は、堆積層上部に炭化物薄層が形成され、竪穴建物跡の可能性が非常に高い。8 世紀に属し、以東に展開する 9 世紀の竪穴建物群との間をつなぐ資料である。

●08Cd区

調査区全体が大きく天地返しされて、遺構面や土層断面にはそれに使われた重機バケットの爪痕が明瞭に残されていた。そのため、011SXの輪郭については些か不明瞭さが残った。

基盤層はシルト質が強く、08D区が砂質であったのとは明らかに異なる。基盤層下部の細粒砂上面標高も004SD周辺で下降しており、その上部を覆う旧地表面もやや低くなっていた可能性がある。

004SD 当初は幅4.5mの溝状部分を一体の溝として調査を進め、遺物の取り上げも004SDとして行った。しかし、調査が進むにつれ、この004SDは単一の溝ではなく、東側に008SD・009SDの2条が伴うことも判明し、また下部には断面逆台形の010SDが重複していることを確認した。

時系列では、010SD埋設過程中に溝上部の幅を広げられたり断面不整形に再掘削されたことになる。溝として再掘削したというよりは、流入土を浚えたという印

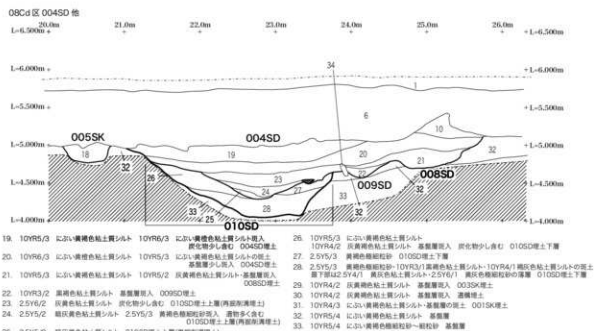
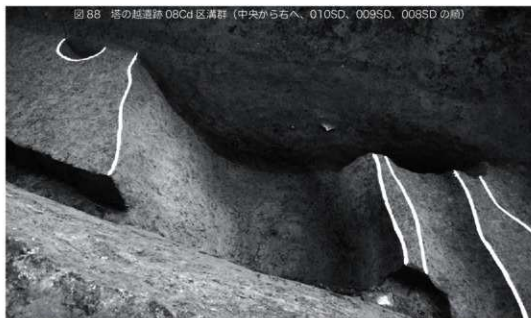


図 87 塔の越道跡 08Cd 区南壁 004SD 付近土層セクション図



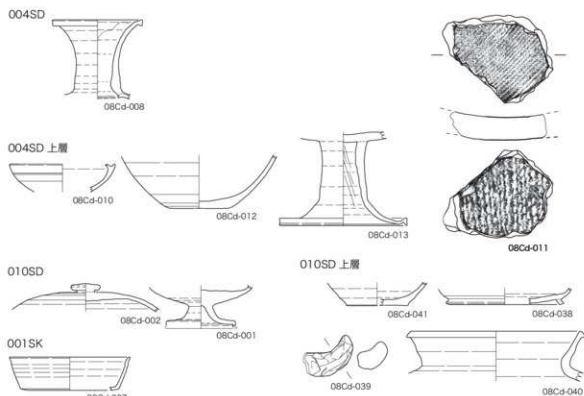


図 89 塔の越遺跡 O8Cd 区出土遺物実測図

象である。

上部の溝は最深部を 004SD とし、西側のテラスに 008SD・009SD が新しく別に設けられたようにも見えるが、むしろ溝 010SD が埋積する過程で、西側にそって溝斜面の形状を整えた印象が強い。それらの溝底面に小さな凹凸は確認されていないが、溝に沿う通路が圧力によって溝状の凹地となった可能性は排除できない。

010SD 断面逆台形で、東側壁面の傾斜は緩いが、西は急斜面になっている。最下層である 28 層の下部には極細粒砂のラミナが形成されており、水流のあったことが窺える。

なお、堆積層の中层より上部は自然の埋積のよるもので、特段整地された様相は窺えない。

007SD O8Cd 区東部で検出した遺構であり、調査時には SD 記号が付与された。しかし、断面形状やプランから「溝」というには違和感がある。底面標高も約 5m と高く「溝」といえるのかどうかは怪しい。

炭化物や焼土を部分的に密に含むとはいえ、堅穴建物跡の掘形ではないともいえず、遺構の性格は不明である。

011SX 007SD を覆うように堆積している 11 層を指標に検出されたが、O8Cd 区内での輪郭は明確ではない。底面は平坦で炭化物・焼土、骨片等を含み、08Eb 区で検出された廃棄土坑と共通した様相を示す。

底面の平坦さは堅穴建物の掘り方を想像させるが、後述するように凹凸のある事例もあるのでそれだけでは判

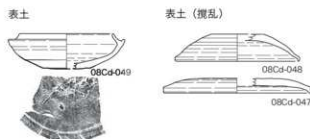
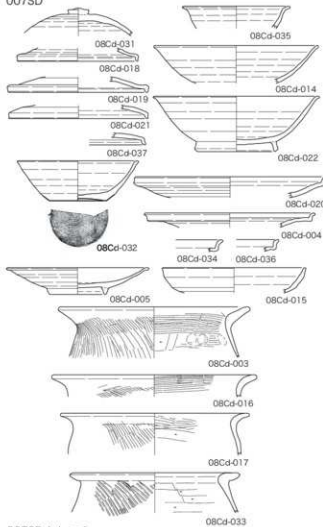


図 90 塔の越遺跡 O8Cd 区出土遺物実測図

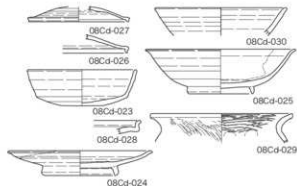
定できない。なお、骨片は焼けており砕片で、詳細は不明である。

上層にある 10 層は中世の耕作土と推測されるが、含まれている焼土や炭化物は 11 層に由来する公算が高く、11 層も本来は厚く堆積していたのであろう。

007SD



007SDトレッチ



011SX

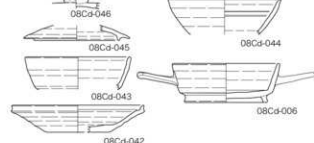


図91 塔の越道跡08Cd区出土遺物実測図

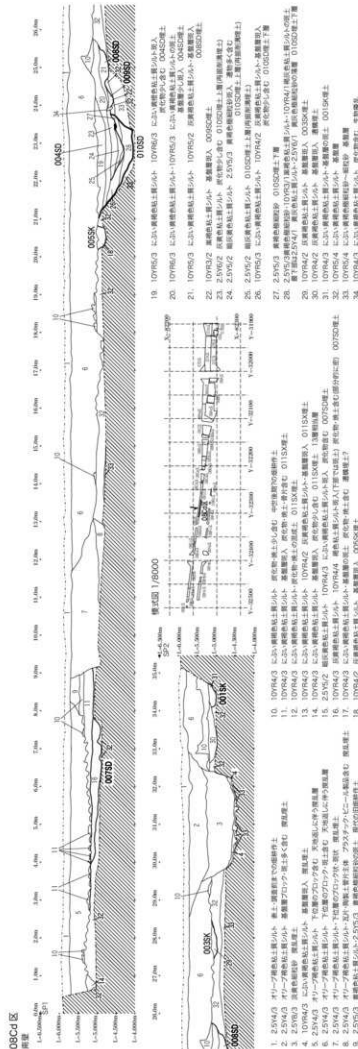


図92 塔の越道跡08Cd区南壁土層セクション図

1. 2594/3 サウワ層焼土片(小) 壁土・溝敷面直下の埋積物土
2. 2594/3 サウワ層焼土片(小) 壁土・溝敷面直下の埋積物土
3. 2594/3 溝敷面直下の埋積物土
4. 10794/3 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
5. 2594/3 サウワ層焼土片(小) 700cmの2層(埋積物土)
6. 2594/3 サウワ層焼土片(小) 700cmの2層(埋積物土)
7. 2594/3 サウワ層焼土片(小) 700cmの2層(埋積物土)
8. 2594/3 サウワ層焼土片(小) 700cmの2層(埋積物土)
9. 2594/3 サウワ層焼土片(小) 700cmの2層(埋積物土)
10. 10794/3 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
11. 10794/3 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
12. 10794/3 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
13. 10794/3 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
14. 10794/3 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
15. 10794/3 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
16. 10794/3 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
17. 10794/3 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
18. 10794/3 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
19. 10794/3 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
20. 10794/3 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
21. 10794/3 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
22. 10794/3 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
23. 10794/3 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
24. 2594/2 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
25. 2594/2 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
26. 10794/3 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
27. 2594/3 溝敷面直下の埋積物土
28. 10794/3 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
29. 10794/2 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
30. 10794/2 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
31. 10794/2 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
32. 10794/4 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
33. 10794/4 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土
34. 10794/3 比古川層焼土片(小) 溝敷面直下の埋積物土

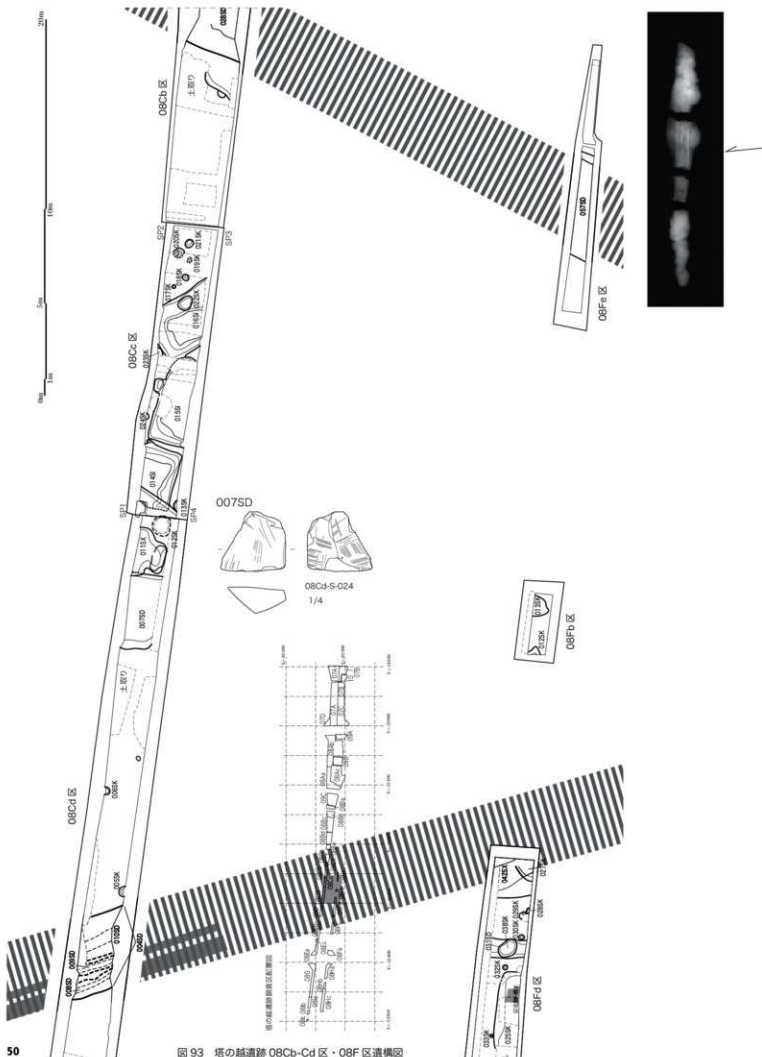


図93 塔の墓道跡 OBCb-Cd区・OBF区遺構図

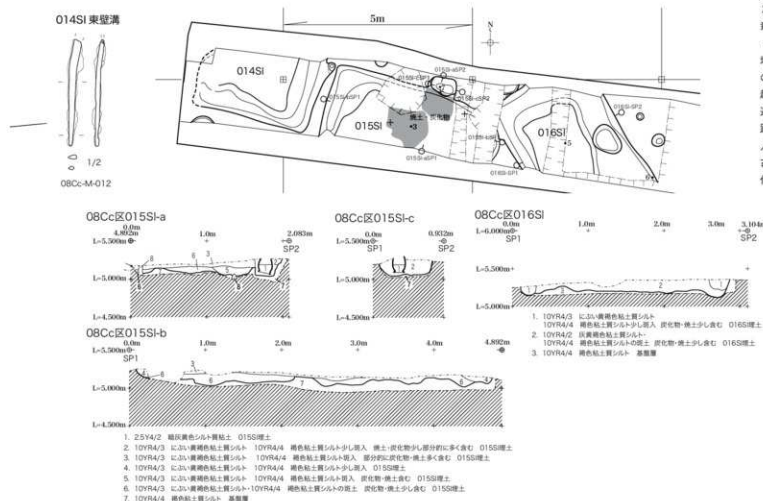


図94 塔の越遺跡08Cc区竪穴建物跡平面図及び土層セクション図、014SI出土鉄器（鉄鏝？）実測図

●08Cc区

調査区全体が大きく天地返しされ、遺構検出には重機バケットの爪痕が残されていた。それでもかろうじて竪穴建物跡を3棟検出することができたことは幸運であった。なお、土層断面観察では、016SIに切られる竪穴建物を1棟追加したが、ほんの痕跡である。軸線が揃う014SIと015SIも近接して同時並存は不可能であり、一時期1棟の累積がこれら竪穴建物群であろう。掘形充填土や床面覆土には炭化物や焼土が含まれるが、炭化物の薄層は形成されていない。本事例を参照すれば、他の調査区で「SX」や「SK」としたものに竪穴建物が含まれている可能性は高いであろうが、掘形底面の形状に差異がある点は無視できない。

基礎は褐色粘土質シルトである。

014SI 西辺を011SXに切られる。よって、011SXは竪穴建物群よりも新しいことがわかる。重複部分以外も掘り方上面まで削平されていたが、壁沿いの幅広溝は形状は安定している。

014SIは、おそらく南北に長い長方形と推測される。床面下の掘り方底面には、東辺と南辺にそって深さ3～5cmの幅広い溝が設けられている。

柱穴は確認できなかった。

015SI 西・北・東辺を確認した。上部の3層は床面覆土と推測され、4層は壁溝の埋土である。016SIを切る。北辺の南北中軸線交点からやや東寄りには、竪穴建物の外縁に重なって土坑が設けられ、中からは上半部に土が充填されなくて空洞となった甕が倒立状態で出土した。土坑の南側竪穴床面上には焼土や炭化物が分布しており、土坑がカマドの痕跡であった可能性が高い。つまり、「伏甕」は、カマド廃棄後の意図的な行為と推測される。一宮市門間沼遺跡ではカマドの支脚として長胴甕下半部に粘土を詰めて倒立に設置した事例を検出しており、本例も一見類似しているが、粘土の充填が欠いて内部が空洞であったことから同類ではない。

床下の掘形底面には5cm程の深さの幅広溝が北西コーナー付近に認められたが、掘り方底面は全面に凹凸があるので、北東コーナー付近のみを幅広溝と認識することにそれほどの有意性は無いかもしれない。

柱穴は確認できなかった。

016SI 上2棟とは軸線を異にする。床面は削平されて遺存しない。掘形底面は比較的平坦であり、幅広溝も北・東・西の三方をめくり、深さも10cm内外と深い。溝底の深さは一定ではなく、凹凸がある。

柱穴は確認できなかった。

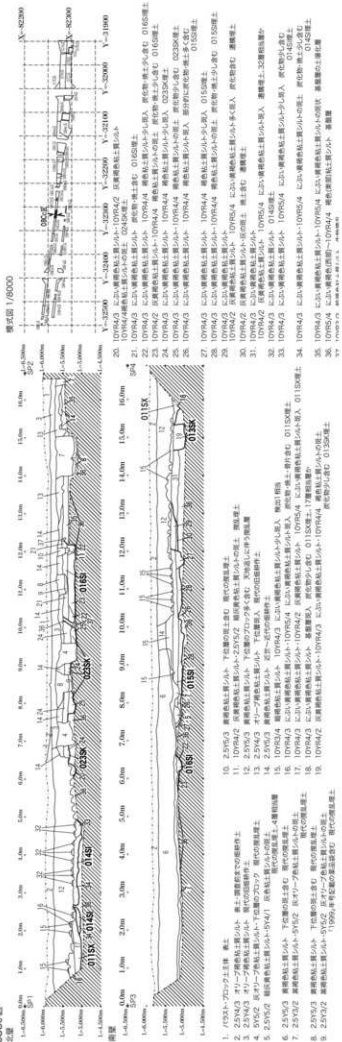


図 95 塔の越道跡 08Cc 区北壁土層セクション図

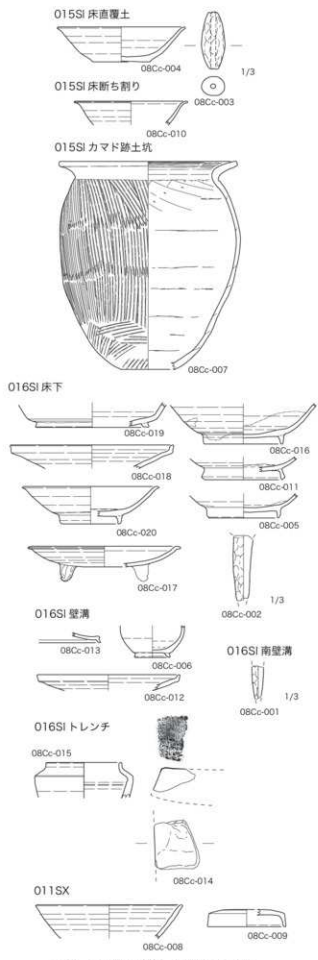


図 96 塔の越道跡 08Cc 区出土遺物実測図

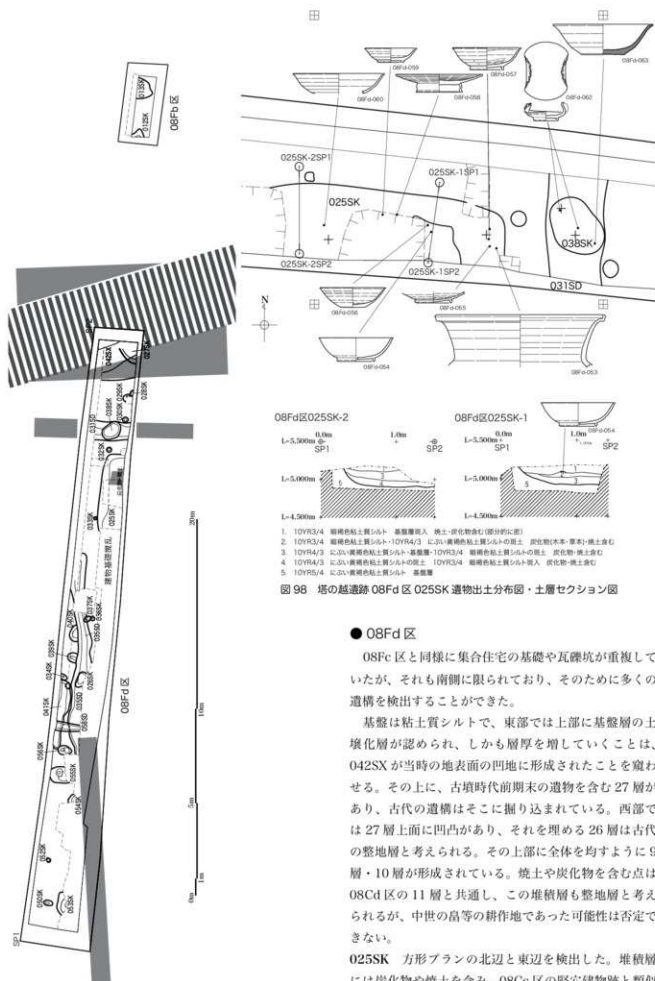


図97 塔の越遺跡 O8Fd区区構図

図98 塔の越遺跡 O8Fd区 O25SK 遺物出土分布図・土層セクション図

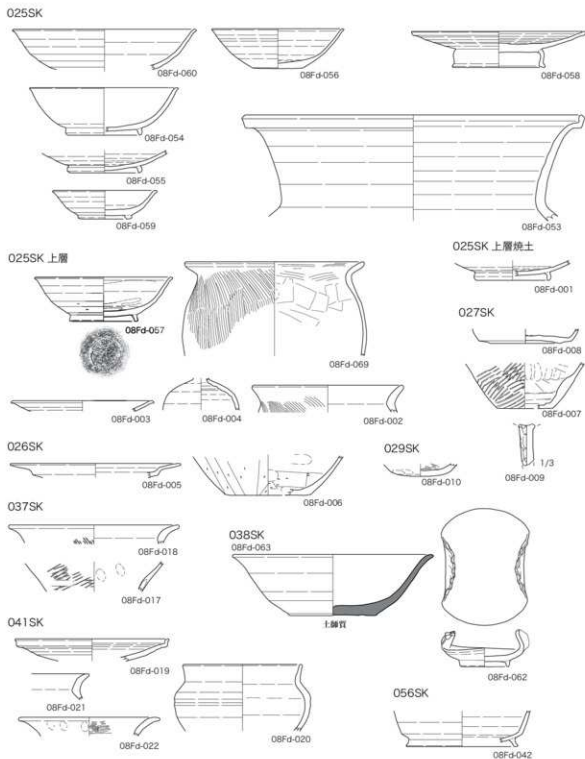


図 99 塔の越遺跡 OBF-d 区出土遺物実測図

辺にカマドは無いし、形を残す須恵器や灰軸陶器が出土しており、判断に迷う。9世紀後半に属す。

038SK 031SDに重複して設けられており、端部を細波状に揃んだ大形の耳皿が出土した。

041SK 堆積土に焼土を含み、断面形状は025SKに類似している。

031SD 南北軸の溝で、025SK東辺に平行する。038SKが重複する。

035SD 東西方向に掘削された溝だが、側縁は蛇行し

ており規格性は窺えない。そのため、東端が調査区壁際で終結しているとは判断できない。9世紀前半の完形の皿以外は8世紀後半の須恵器片なので、前者の時期と判断する。

042SX 調査区東端で検出した大溝で、東部は調査区外にはずれ、幅は不明である。当初は性格が不明で、「SX」記号が付された。

深さは1m程で、壁面は下部の傾斜が急であるのに対して上部は斜行しており、再掘削された可能性がある。

08Fd区 042SX

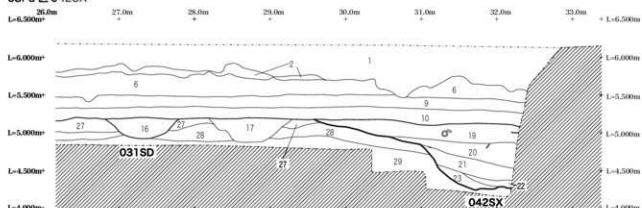


図10 塔の越遺跡 08Fd区 042SX 土層セクション図

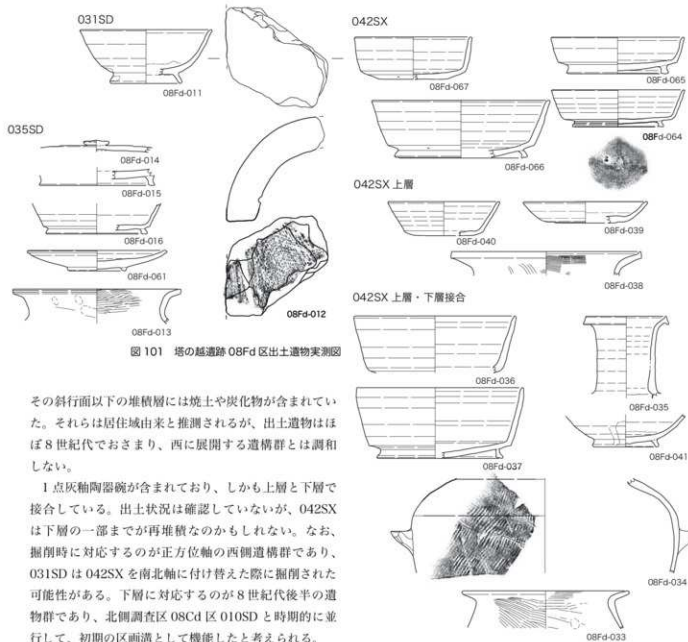


図11 塔の越遺跡 08Fd区出土遺物実測図

その斜行面以下の堆積層には焼土や炭化物が含まれていた。それらは居住域由来と推測されるが、出土遺物はほぼ8世紀代でおさまり、西に展開する遺構群とは調和しない。

1点灰釉陶器碗が含まれており、しかも上層と下層で接合している。出土状況は確認していないが、042SXは下層の一部までが再堆積なのかもしれない。なお、掘削時に対応するのが正方伎軸の西側遺構群であり、031SDは042SXを南北軸に付け替えた際に掘削された可能性がある。下層に対応するのが8世紀後半の遺物群であり、北側調査区08Cd区010SDと時期的に並行して、初期の区画溝として機能したと考えられる。

08FdP 2
1-1
1-2
1-3
1-4
1-5
1-6
1-7
1-8
1-9
1-10
1-11
1-12
1-13
1-14
1-15
1-16
1-17
1-18
1-19
1-20
1-21
1-22
1-23
1-24
1-25
1-26
1-27
1-28
1-29
1-30

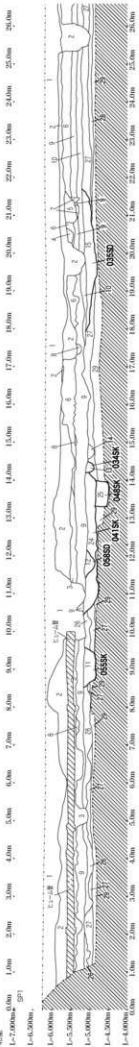
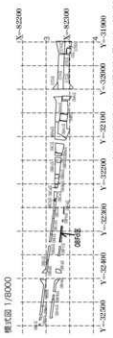


図 201 北北西-南南東断面 P80 観測線沿いの土質断面図



1. 0355C 埋立土質
2. 2534Z オープン埋立土質(小) 1/2土(8Z) 埋立土質(土質改良土)のフタ(1/2土)コンクリート電柱付 埋立土質(土質改良土)の埋立土
3. 2534Z オープン埋立土質(小) 2535Z 埋立土質(土質改良土)のフタ(1/2土)コンクリート電柱付 埋立土質(土質改良土)の埋立土
4. 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 10795Z 比水浸透性埋立土質(小) 埋立土質(土質改良土)の埋立土
5. 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 10795Z 比水浸透性埋立土質(小) 埋立土質(土質改良土)の埋立土
6. 2534Z 埋立土質(土質改良土)のフタ(1/2土) 埋立土質(土質改良土)の埋立土
7. 2534Z 埋立土質(土質改良土)の埋立土
8. 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 2534Z 埋立土質(土質改良土)の埋立土
9. 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 埋立土質(土質改良土)の埋立土
10. 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 埋立土質(土質改良土)の埋立土
11. 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 埋立土質(土質改良土)の埋立土
12. 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 埋立土質(土質改良土)の埋立土
13. 10794Z 埋立土質(小) 10795Z 比水浸透性埋立土質(小) 埋立土質(土質改良土)の埋立土
14. 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 10795Z 比水浸透性埋立土質(小) 埋立土質(土質改良土)の埋立土
15. 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 10795Z 比水浸透性埋立土質(小) 埋立土質(土質改良土)の埋立土
16. 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 10795Z 比水浸透性埋立土質(小) 埋立土質(土質改良土)の埋立土
17. 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 10795Z 比水浸透性埋立土質(小) 埋立土質(土質改良土)の埋立土
18. 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 10795Z 比水浸透性埋立土質(小) 埋立土質(土質改良土)の埋立土
19. 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 10795Z 比水浸透性埋立土質(小) 埋立土質(土質改良土)の埋立土
20. 10795Z 比水浸透性埋立土質(小) 埋立土質(土質改良土)の埋立土
21. 2534Z 埋立土質(小) 埋立土質(土質改良土)の埋立土
22. 2534Z 埋立土質(小) 埋立土質(土質改良土)の埋立土
23. 2534Z 埋立土質(小) 埋立土質(土質改良土)の埋立土
24. 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 埋立土質(土質改良土)の埋立土
25. 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 埋立土質(土質改良土)の埋立土
26. 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 埋立土質(土質改良土)の埋立土
27. 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 埋立土質(土質改良土)の埋立土
28. 10795Z 比水浸透性埋立土質(小) 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 埋立土質(土質改良土)の埋立土
29. 10795Z 比水浸透性埋立土質(小) 10794Z 比水浸透性埋立土質(小) 埋立土質(土質改良土)の埋立土

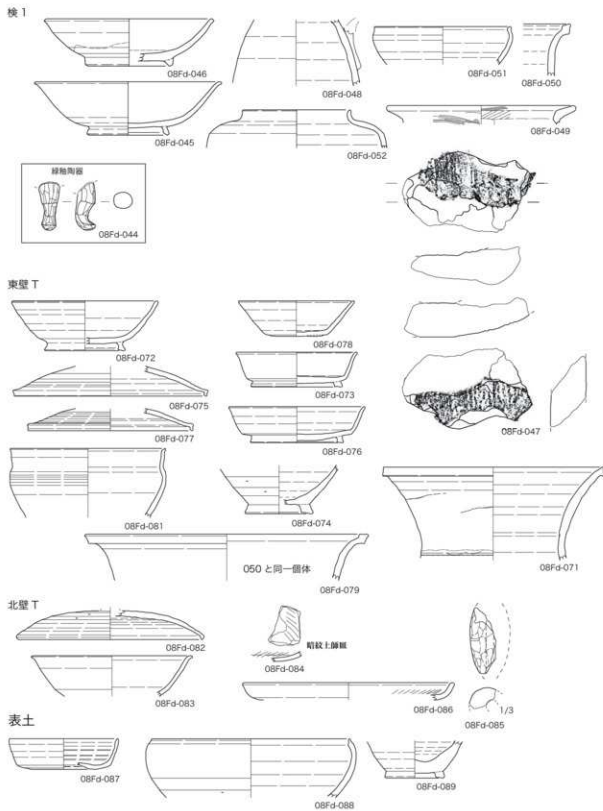


図 103 塔の越遺跡 OBFd 区出土遺物実測図

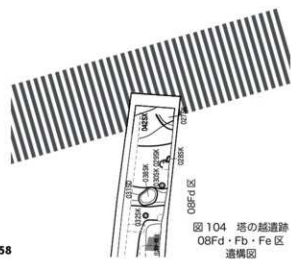
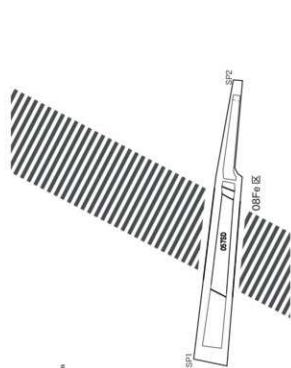


図 104 塔の越道跡
08Fd・Fb・Fe区
遺構図

08Fb区

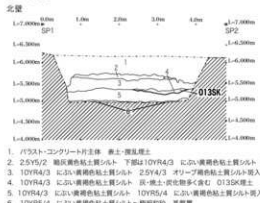


図 105 塔の越道跡 08Fe区北壁土層セクション図

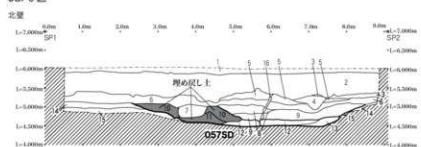
● 08Fe区

県道南側東端の調査区であり、検出面の幅は60cmと、極端に狭い。057SD以外に遺構は検出できなかった。掘り込んでいる14層は土壌化層と判断されており、08Fe区と状況は類似している。

057SD 溝幅約5.2m、深さ約50cmを測り、断面逆台形と一応は言えるが、両壁の傾斜は極めて緩やかである。

堆積層は東西で大きく異なり、西斜面では基盤土ブロックの再堆積が認められた。再堆積層は最下部の12層が堆積を始めてから形成されたようであり、西斜面寄りに12層が形成されていないのは結合の緩い土が水を含んで堆積する中、西からの土圧で移動したためと考えられる。そして、9層以上が基盤ブロック土流入後の堆

08Fe区



模式図 1/8000



1. バラスト 主壁 土
2. 2.5V4/2 緑灰褐色粘土質シルトのブロックバラスト・アスファルト層、コンクリート塊の周辺土
塩化ビニールパイプを含む 遺土・埋戻し土
3. 10YR4/3 におい黄褐色粘土質シルト 遺構壁土
4. 10YR5/3 におい黄褐色粘土質シルト 遺構壁土
5. 10YR4/3 におい黄褐色粘土質シルト 遺構壁土
6. 10YR5/3 におい黄褐色粘土質シルト 下層壁土、堆土・埋戻し
7. 10YR5/3 におい黄褐色粘土質シルト(2.5OY4) 藍オリーブ灰色粘粉砂
→粘粉砂の埋土 遺構壁土
8. 10YR4/3 におい黄褐色粘土質シルト 057SD埋土
9. 10YR5/3 におい黄褐色粘土質シルト 遺物多量区 057SD埋土
10. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 基礎層土 057SD埋土
11. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 基礎層土 057SD埋土
12. 2.5Y5/2 緑灰色粘土質シルト 炭化物を含む 遺物多量区 057SD埋土
13. 2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルト 炭化物を含む 遺物多量区 057SD埋土
14. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 基礎層の土壌化層
15. 10YR5/4 におい黄褐色粘土質シルト 基礎層
16. 10YR5/1 褐色粘粉砂 埋土

図 106 塔の越道跡 08Fe区北壁土層セクション図

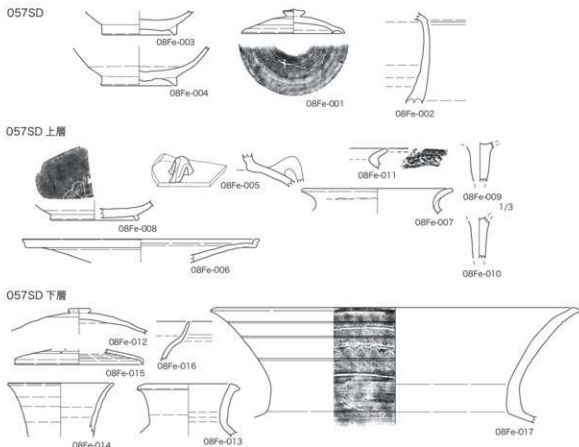


図 107 塔の越遺跡 O8Fe 区出土遺物実測図

積となる。9層以下の通常堆積層には炭化物や7世紀から9世紀前半の遺物が含まれており、周辺における活動の時期幅に一致している。掘削時期については8世紀後半から9世紀前半と推測する。

なお、基盤ブロック土については、O57SD 掘削時の

排出土が溝沿いに盛られており、それを埋め戻したことによると考えられる。つまり、「土手状」の高まりが溝の西側に並走していた可能性があり、この点では O8Fd 区の O48SX と O31SD も「土手」状の高まりを挟んでいたと言えるかもしれない。



図 108 塔の越遺跡 O8Fe 区 O57SD 近景

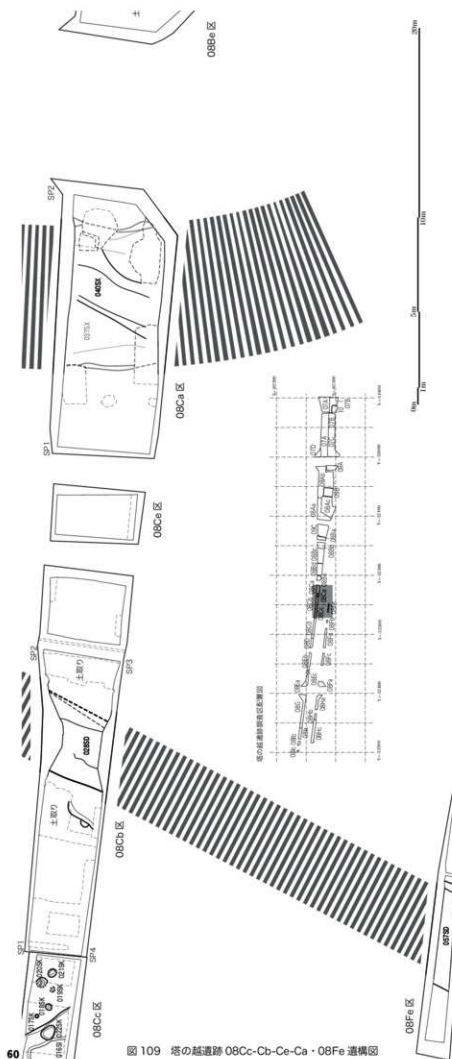


図 109 塔の基壇跡 O8Cc-Cb-Ce-Ca・O8Fe 遺構図

● O8Cb 区

周辺では土取りや天地返しが進んで遺構面近くまで削平が及び、多くの情報を減失している。

028SD 幅約4m、深さ約1mを測る断面逆台形の溝で、底面標高は4m以下に達している。

堆積層は大きく3層に区別できる。

最上層は、調査時には「036SX」と把握され、埋没の最終段階である。斑土を含むので、周辺の土地利用と並行して堆積層が形成されたものと考えられる。

中層はウミナ形成層(34層)以上を堆積層とする028SD上層で、033SK・034SKはこの面より下で掘り込まれている。両SKとも堆積層は斑土であり、掘削後、それほど間を置かず埋め戻されたものである。

こうした斑土は、通常「井戸」の掘形や「柱穴」の充填土が該当するが、今回の事例については深いので後者の可能性は無い。028SDの下層上面(もしくは埋没時の上面)から掘り込まれているので、前者の可能性も低いと考える。

下部の34層から31層まで不整合面が累重し、また028SD上層堆積層にも部分的とはいえウミナが含まれていることから、流水によって堆積と削削が繰り返されたものと考えられる。

下層は当初の溝下部であり、多少は水流もあったようだが、028SD中層層ではない。

泉道を挟んだO8Fe区057SDに軸線が一致しており、时期的にも両者がつながると推測する。

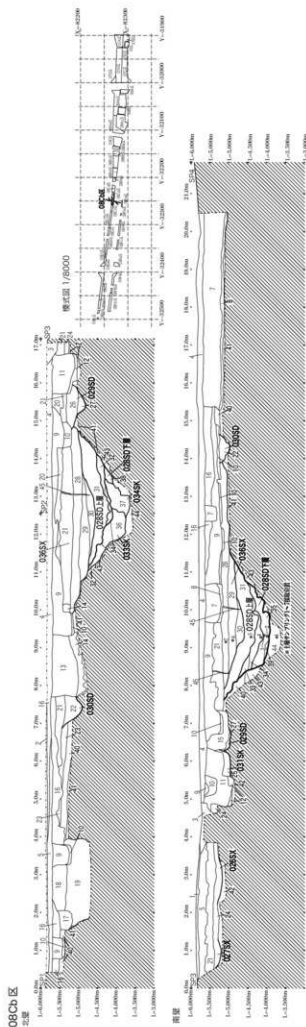


図110 塔の越道跡 08Cb区北壁土層セクション図

1. 1973年1号土層 敷土
2. 1973年2-7号土層 敷土
3. 量産20層土層の中心、内径1.0m、底面が南側傾斜している
4. 2594/0 瓦葺平瓦土層の中心、敷土、南側傾斜している
5. 2594/0 瓦葺平瓦土層の中心、敷土、南側傾斜している
6. 2594/0 瓦葺平瓦土層の中心、敷土、南側傾斜している
7. 2594/0 瓦葺平瓦土層の中心、敷土、南側傾斜している
8. 2594/0 瓦葺平瓦土層の中心、敷土、南側傾斜している
9. 2594/0 瓦葺平瓦土層の中心、敷土、南側傾斜している
10. 2594/0 瓦葺平瓦土層の中心、敷土、南側傾斜している
11. 10795/3 北土層の中心、敷土、南側傾斜している
12. 10795/3 北土層の中心、敷土、南側傾斜している
13. 2594/0 瓦葺平瓦土層の中心、敷土、南側傾斜している
14. 2594/0 瓦葺平瓦土層の中心、敷土、南側傾斜している
15. 2594/0 瓦葺平瓦土層の中心、敷土、南側傾斜している
16. 2594/0 瓦葺平瓦土層の中心、敷土、南側傾斜している
17. 2594/0 瓦葺平瓦土層の中心、敷土、南側傾斜している
18. 2594/0 瓦葺平瓦土層の中心、敷土、南側傾斜している
19. 2594/0 瓦葺平瓦土層の中心、敷土、南側傾斜している
20. 2594/0 瓦葺平瓦土層の中心、敷土、南側傾斜している
21. 10794/3 北土層の中心、敷土、南側傾斜している
22. 10794/3 北土層の中心、敷土、南側傾斜している
23. 10794/3 北土層の中心、敷土、南側傾斜している
24. 10794/3 北土層の中心、敷土、南側傾斜している
25. 10794/3 北土層の中心、敷土、南側傾斜している
26. 10794/3 北土層の中心、敷土、南側傾斜している
27. 10794/3 北土層の中心、敷土、南側傾斜している
28. 10794/3 北土層の中心、敷土、南側傾斜している
29. 10794/3 北土層の中心、敷土、南側傾斜している
30. 10794/3 北土層の中心、敷土、南側傾斜している
31. 10794/3 北土層の中心、敷土、南側傾斜している
32. 2594/0 瓦葺平瓦土層の中心、敷土、南側傾斜している
33. 2594/0 瓦葺平瓦土層の中心、敷土、南側傾斜している
34. 2594/0 瓦葺平瓦土層の中心、敷土、南側傾斜している
35. 10793/1 南土層の中心、敷土、南側傾斜している
36. 2594/1 瓦葺平瓦土層の中心、敷土、南側傾斜している
37. 2594/1 瓦葺平瓦土層の中心、敷土、南側傾斜している
38. 2594/0 瓦葺平瓦土層の中心、敷土、南側傾斜している
39. 2594/0 瓦葺平瓦土層の中心、敷土、南側傾斜している
40. 10794/3 北土層の中心、敷土、南側傾斜している
41. 10794/3 北土層の中心、敷土、南側傾斜している
42. 10794/3 北土層の中心、敷土、南側傾斜している
43. 10794/3 北土層の中心、敷土、南側傾斜している
44. 10794/3 北土層の中心、敷土、南側傾斜している
45. 2594/1 瓦葺平瓦土層の中心、敷土、南側傾斜している

028SD 中層

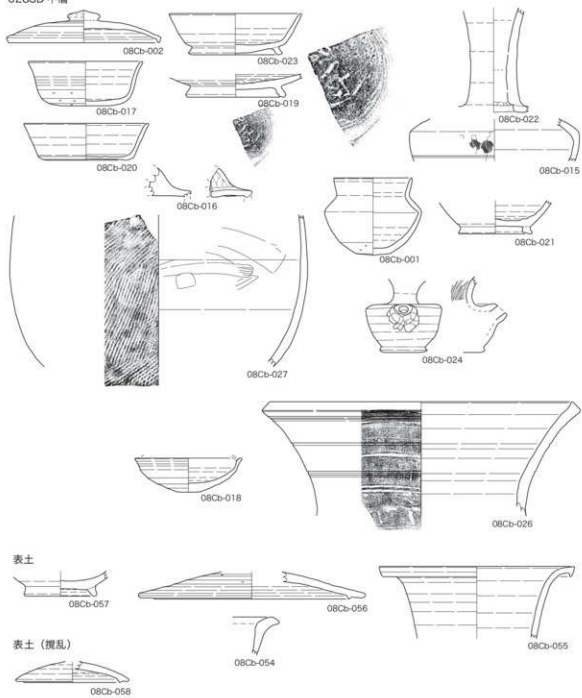


図 111 塔の越遺跡 08Cb 区出土遺物実測図

● 08Ca区

幅約7.5m、深さ1.5mの流路(上層 037SX、下層 040SX)が検出された。上層の037SXは中世に属す。

040SX 底面幅は約5mで、底面幅高は4m程である。周辺基盤面の標高は約5.5mであり、旧地表がそれより高いのは確実なので深さは2m近くに達したかもしれない。底面は一部が10cmほど落ち込み、平面図でも北東から南西に走る溝状のラインが示されている。重複した溝下部の痕跡とすれば、他の溝等とも軸線が共通する。

堆積状況は、両壁付近で堆積後に壁面が地滑りを起こして崩落しており、地震の影響がもしれない。堆積層はほぼ水平に累重し、最下部には植物遺体が多く含まれていたため、澱んだ状態であったのだろう。とすれば、本流とは切れていたとも推測されるが、上層である037SXのカーブ(水流による浸食か?)をみれば自然

河川とつながっていた可能性は浮上する。

他の大溝と異なって土壌化層を掘り込んでいるわけではなく周辺の旧地表が低かった可能性を窺うこともできないし、また自然防御の傾斜に平行するので、人工の溝(水路)であったと考える。

出土遺物は9世紀後半～10世紀前半を中心としている。

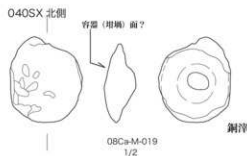
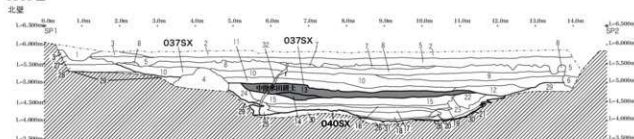


図 113 塔の越道跡 08Ca区 040SX出土金属実測図

08Ca区



模式図 1/8000



1. 下位層のフロッグ主体、バラスト多量含む 黄土・凝灰土
2. 2.5/4/2 凝灰質赤土-2.5/4/3 オリーブ褐色粘土質シルト 障・炭化物含む 黄土・凝灰質土での面状伴生
3. 2.5/3/3 凝灰粘土質シルト 現代の面状伴生
4. 2.5/3/3 凝灰粘土質シルト 下位層のフロッグ主体多量含む 障・凝灰土
5. 2.5/4/3 オリーブ褐色粘土質シルト・10YR5/4 土壌化凝灰粘土質シルト混入 天地返しに伴う障灰層土
6. 2.5/4/2 凝灰質粘土質シルト・10YR5/4 土壌化凝灰粘土質シルト混入 天地返しに伴う障灰層土
7. 2.5/4/2 凝灰質粘土質シルト・10YR5/4 土壌化凝灰粘土質シルトの混入 037SX土
8. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 037SX土上層、中位の堆積層
9. 10YR5/4 土壌化凝灰粘土質シルト 037SX土上層、中位の堆積層
10. 10YR5/3 土壌化凝灰粘土質シルト・10YR5/4 土壌化凝灰粘土質シルト・10YR3/2 凝灰粘土質シルトのフロッグ含む 037SX土上層、中位の堆積層
11. 10YR5/3 土壌化凝灰粘土質シルト 037SX土上層、中位の堆積層
12. 2.5/3/2 凝灰質粘土質シルト 040SX土上層、現代堆積の自然堆積層
13. 2.5/3/2 凝灰質粘土質シルト 凝灰砂礫層状の混入 040SX土上層、中位の伴生伴生土
14. 10YR4/2 灰質粘土質シルト 040SX土上層、中位の伴生伴生土
15. 10YR5/3 凝灰粘土質シルト・10YR5/3 土壌化凝灰粘土質シルト少し混入 炭化物含む 障七層(障状)層状 040SX土上層、中位の伴生伴生土
16. 2.5/3/1 褐色粘土質シルト 040SX土上層、現代堆積の自然堆積層
17. 2.5/4/1 黄灰色シルト質粘土 040SX土上層、古代堆積の自然堆積層
18. 5Y4/1 灰色シルト質粘土 障状堆積層(障本・障中・障下)多量含む 040SX土上層、古代堆積の自然堆積層
19. 2.5/3/2 土壌化凝灰砂礫層(障中) オリーブ褐色粘土質シルトの混入含む 040SX土上層、障状堆積の基盤層の砂礫
20. 2.5/4/1 障中・障下褐色粘土質シルト・7.5Y4/1 灰色粘土質シルト混入 040SX土上層、障状堆積の基盤層の砂礫
21. 7.5Y4/1 灰色シルト質粘土 040SX土上層、障状堆積の自然堆積層
22. 2.5/3/2 土壌化凝灰砂礫層・10YR2/2 凝灰粘土質シルト・10YR4/2 灰質粘土質シルト少し混入 040SX土上層、障状堆積層上か
23. 2.5/3/2 土壌化凝灰砂礫層 040SX土上層、障状堆積の基盤層の砂礫
24. 2.5/3/2 凝灰質粘土質シルト・10YR5/4 土壌化凝灰砂礫層の混入・10YR4/2 灰質粘土質シルト少し混入 040SX土上層、障状堆積の基盤層の砂礫
25. 10YR2/2 褐色粘土質シルト・2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト混入 障中・障下褐色粘土質シルトの混入 040SX土上層、障状堆積の基盤層の砂礫
26. 2.5/3/1 オリーブ褐色粘土質シルト・10YR2/2 凝灰粘土質シルト・5Y3/1 オリーブ褐色粘土質シルトの小混入 040SX土上層、障状堆積の基盤層の砂礫
27. 10YR4/2 土壌化凝灰粘土質シルト 障中
28. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 障中層、障中2層状、08Ca区0415X土層土相混層
29. 10YR5/4 土壌化凝灰粘土質シルト-凝灰砂 基盤層
30. 2.5/4/1 障中・障下褐色粘土質シルト 基盤層
31. 5Y3/1 オリーブ褐色粘土質シルト 基盤層
32. 2.5/3/2 灰質粘土質シルト 基盤層

図 112 塔の越道跡 08Ca区北壁土層セクション図



図 114 塔の経道跡 08Ca区 040SX 近景

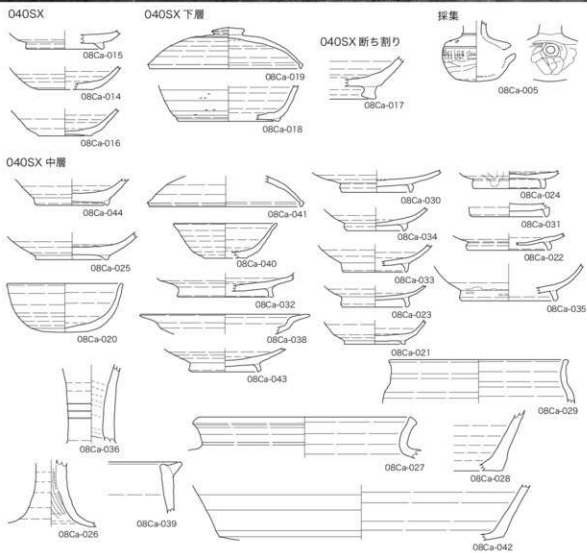


図 115 塔の経道跡 08Ca 区出土遺物実測図

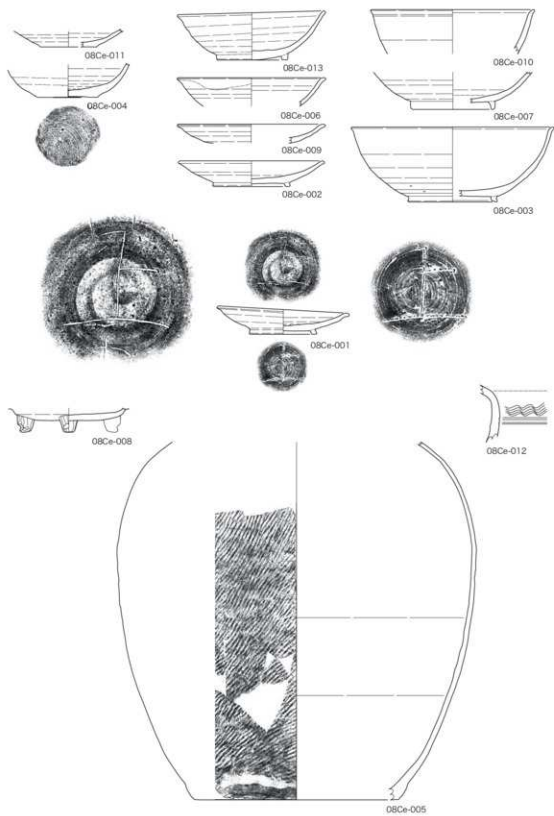


図 116 塔の越遺跡 08Ce 区出土遺物実測図

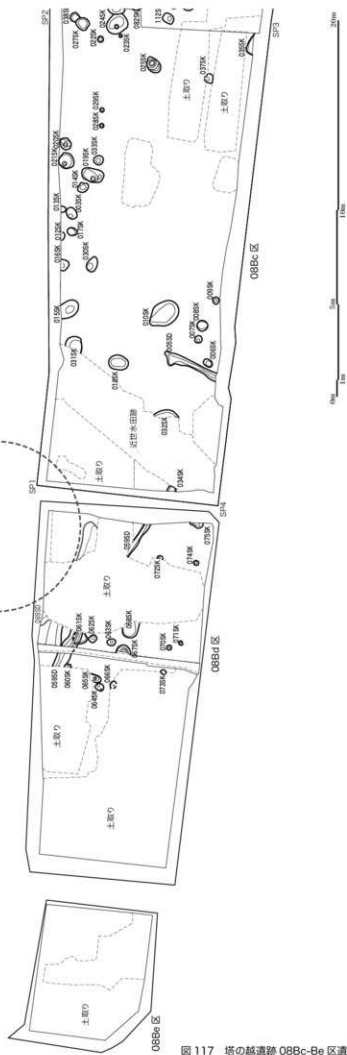


図 117 塔の基遺跡 O8Bc-Be 区遺構図

● 08B区

08B区は東から5小区に区分した。このうち、08Be区から08Bd区西部は土取りと瓦礫の投棄によってほぼ遺構が滅失していた。その一方、以東では多数の柱穴や井戸跡を検出し、集落の一部であることが判明した。

08Bd区は基盤面の標高は約5.5mである。西北西-東南東軸の059SDの他に柱穴が多数検出されたが、滅失部分が広いので建物の復元は難しい。

08Bc区の基盤層は粘土質シルトで、上部を土壌化層(黒褐色粘土質シルト)が覆っており、古代の遺構はこの地層を掘り込んでいる。しかし、天地返しに伴う掘乱がこの地層まで及んでいる範囲が広く、浅い遺構は削平されてしまったようである。

08Bb区の基盤層は粘土質シルトで、上部に土壌化層は認められない。やや大形の柱穴が並び、掘立柱建物の分布は明瞭である。

08Ba区は基盤層の上部に整地層(37層)が形成されており、その上部から掘り込む遺構も多いが、当該層の本来の厚さは不明である。井戸が2基検出された。

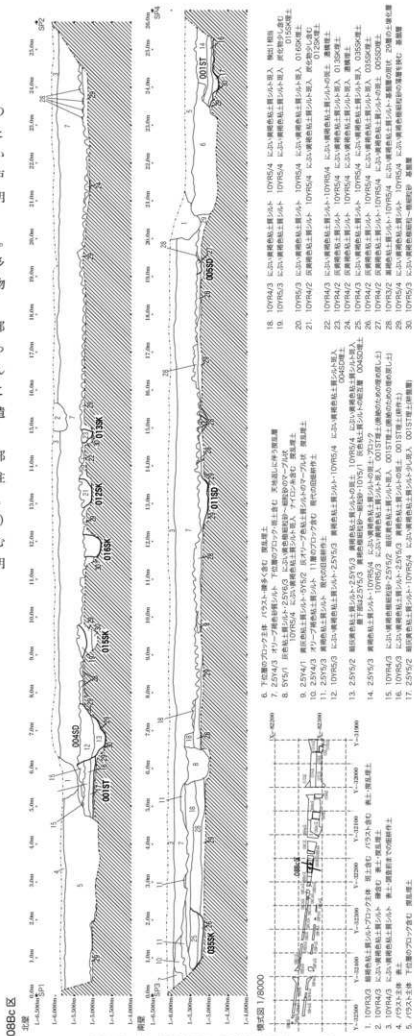


図118 塔の越遷跡 08Bc区北壁土層セクション図

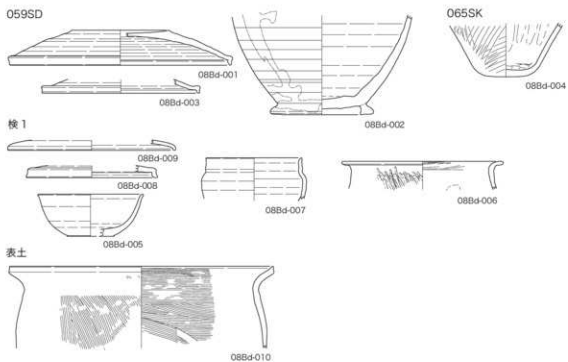


図 119 塔の越道跡 08Bd 区出土遺物実測図

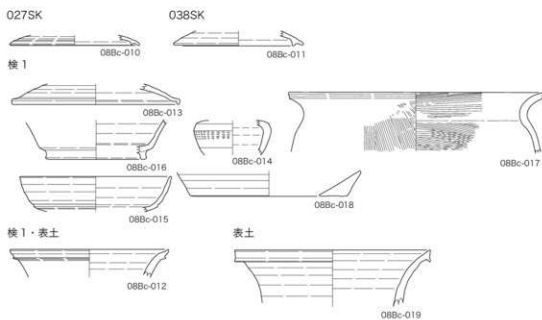
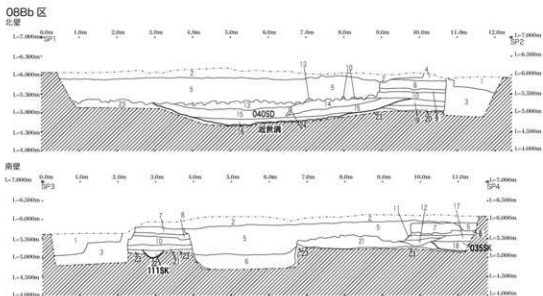


図 120 塔の越道跡 08Bc 区出土遺物実測図



1. P35ト主律 敷土
2. 10YR4/3 赤い黄褐色粘土質シルト 敷土・積層前までの粘粉状土
3. 下位層のプロック主律・P353&1・コンクリート地・アイロウ地 敷土・硬底コンクリート地・瓦片土
4. 2.5Y5/3 黄褐色土質シルト 敷土・現代の粘粉状土
5. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト 下位層のプロック主律・土皮・灰色返しに伴う埋込層
6. 5Y4/1 灰赤粘土質シルト・2.5Y5/3 黄褐色土質シルトのプロック主律 下位層のプロック主律・土皮・灰色返し 埋込層
7. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト 下位層のプロック主律 灰化地・ヒールホウ 現代の粘粉状土
8. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 下位層少し混入 灰化地少し混入 近代70年代土
9. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 近郊の粘粉状土・物産1相地
10. 10YR4/3 赤い黄褐色粘土質シルト 灰化地少し混入 近郊の粘粉状土・物産1相地
11. 10YR5/3 赤い黄褐色粘土質シルト 灰化地少し混入 近郊の粘粉状土
12. 10YR4/3 赤い黄褐色粘土質シルト 2.5Y5/2 磁気黄赤粘土質シルト混入 近郊の粘粉状土
13. 10YR4/2 灰黄褐色土質シルト・2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルトの混入 10YR5/4 赤い黄褐色粘土質シルト混入 O40S0埋土
14. 10YR4/2 灰黄褐色土質シルト・10YR5/4 赤い黄褐色粘土質シルト・2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルトの混入・プロック多く含む O40S0埋土・15層物出層で現土・プロック土を多く含む
15. 10YR4/2 灰黄褐色土質シルト O40S0埋土
16. 2.5Y4/2 磁気黄赤粘土質シルト 10YR5/4 赤い黄褐色粘土質シルト少し混入 O40S0埋土
17. 10YR4/3 赤い黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 赤い黄褐色粘土質シルト混入 O35SK埋土
18. 10YR4/2 灰黄褐色土質シルト 10YR5/4 赤い黄褐色粘土質シルト混入 O35SK埋土
19. 10YR5/3 赤い黄褐色粘土質シルト・10YR4/4 赤い黄褐色粘土質シルトの混入 物産2相地
20. 10YR4/2 灰黄褐色土質シルト 10YR5/4 赤い黄褐色粘土質シルト混入 灰化地少し混入 物産2相地
21. 10YR4/2 灰黄褐色土質シルト・10YR4/3 赤い黄褐色粘土質シルトの混入 10YR5/4 赤い黄褐色粘土質シルト少し混入 物産2相地・20層物出層中
22. 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 赤い黄褐色粘土質シルト混入 灰化地・土少し混入 111SK埋土
23. 10YR5/4 赤い黄褐色粘土質シルト・10YR5/4 赤い黄褐色粘土質シルトの混入 物産2相地
24. 10YR4/3 赤い黄褐色粘土質シルト・10YR7/3 赤い黄褐色粘粉状土を薄層状に混入 生物層

図 121 塔の越遺跡 O8Bb 区北壁・南壁土層セクション図

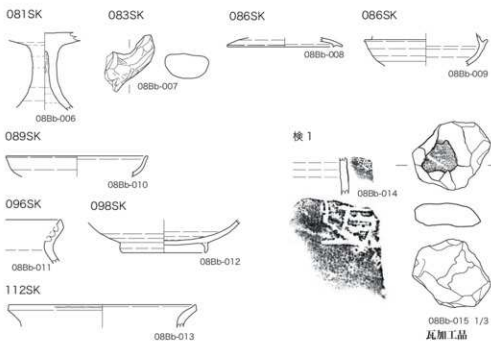


図 122 塔の越遺跡 O8Bb 区出土遺物実測図

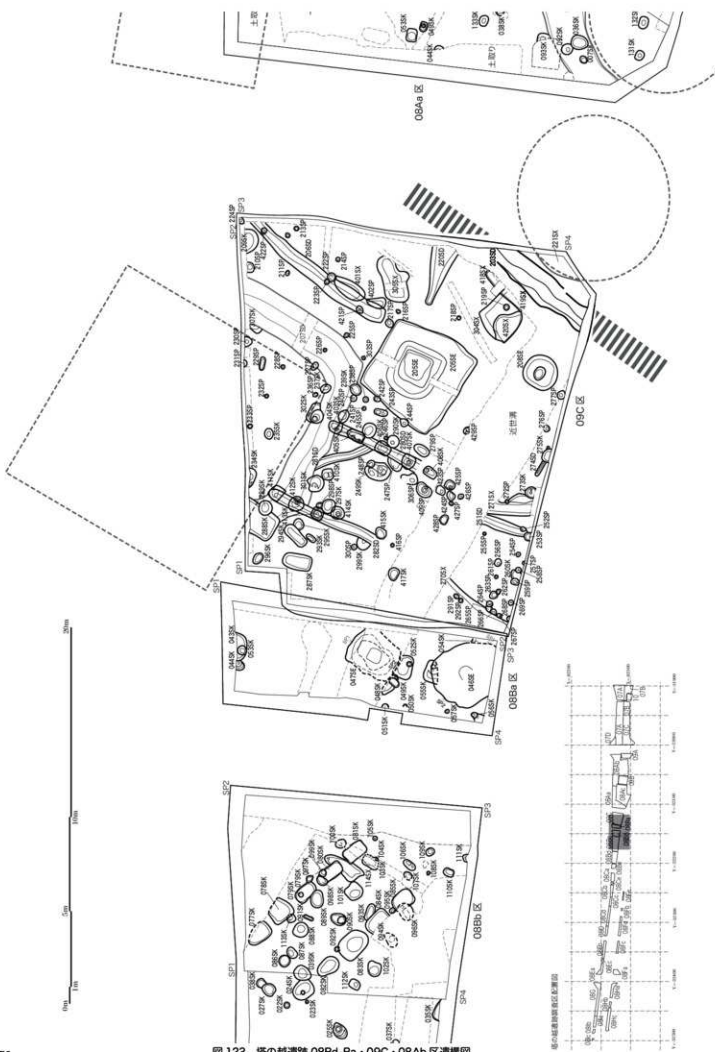
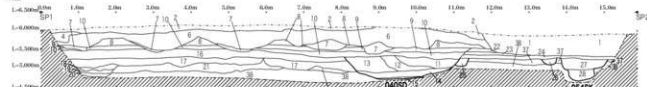


図 123 塔の越遺跡 08Bd-Ba・09C・08Ba 区遺構図

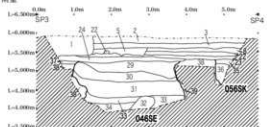
08Ba区

東壁



1. 2.5V4/2 凝灰質粘土質シルト 下部のブロック状土・堆積物、黄土・黄灰土
2. 2.5V4/3 オリーブ褐色粘土質シルト 所より10V9R5/4 黄土の即成凝結物
3. 2.5V5/3 黄褐色粘土質シルト-2.5V5/1 黄灰色細粒砂の堆積 現代の客土による整地層
4. 2.5V3/2 黄褐色粘土質シルト 黄灰土
5. 10V9R4/3 土引い黄褐色粘土質シルト-10V9R4/3 土引い黄褐色粘土質シルトのブロック状土含む 黄灰土
6. 2.5V5/2 黄褐色粘土質シルト 基礎層少し埋入 近代の凝結物土
7. 2.5V4/2 凝灰質粘土質シルト 下部のブロック状土を含む 現代の即成凝結物土
8. 10V9R4/4 黄褐色粘土質シルト 近辺への凝結物土
9. 10V9R4/3 土引い黄褐色粘土質シルト 近代の凝結物土
10. 10V9R4/2 土引い黄褐色粘土質シルト 近代の凝結物土
11. 10V9R5/3 土引い黄褐色粘土質シルト O4650埋土
12. 2.5V5/2 凝灰質粘土質シルト-10V9R5/3 土引い黄褐色粘土質シルトの埋土
10V9R5/4 土引い黄褐色粘土質シルト埋入 O4650埋土
13. 10V9R5/2 土引い黄褐色粘土質シルト 近代の凝結物土 O4650埋土
14. 2.5V5/2 凝灰質粘土質シルト 凝結砂を含む O4650埋土
15. 2.5V5/2 凝灰質粘土質シルト O4650埋土
16. 10V9R4/2 土引い黄褐色粘土質シルト 基礎層少し埋入 近代の凝結物土
17. 10V9R4/3 土引い黄褐色粘土質シルト 基礎層少し埋入 近代の凝結物土 O4650埋土
18. 10V9R4/3 土引い黄褐色粘土質シルト-基礎層少し埋入 近代の凝結物土
18. 10V9R4/3 土引い黄褐色粘土質シルト-基礎層少し埋入 近代の凝結物土 O4650埋土
19. 2.5V5/2 凝灰質粘土質シルト-2.5V5/1 黄褐色粘土質シルトの埋土、灰-灰化物を伴ったもの 遺構埋土
20. 10V9R5/3 土引い黄褐色粘土質シルト-凝結砂-2.5V5/3 黄褐色粘土質シルト埋入 遺構埋土
21. 10V9R5/2 土引い黄褐色粘土質シルト 基礎層少し埋入 O4650埋土
22. 10V9R4/3 土引い黄褐色粘土質シルト 塊状に粗石、中世後期の凝結物土
23. 10V9R4/3 土引い黄褐色粘土質シルト-10V9R4/2 土引い黄褐色粘土質シルトの埋土 基礎層少し埋入
24. 10V9R4/2 黄褐色粘土質シルト-10V9R4/3 土引い黄褐色粘土質シルトの埋土 基礎層少し埋入
灰化物・堆土を含む O4650埋土の堆積
25. 10V9R4/2 黄褐色粘土質シルト 基礎層少し埋入 近代の凝結物土 O4650埋土
26. 10V9R4/2 黄褐色粘土質シルト 基礎層少し埋入 近代の凝結物土 遺構埋土
27. 10V9R4/2 黄褐色粘土質シルト-10V9R4/3 土引い黄褐色粘土質シルトの埋土
10V9R4/3 土引い黄褐色粘土質シルトの埋土 O4650埋土
28. 10V9R5/4 土引い黄褐色粘土質シルト-2.5V5/1 黄褐色粘土質シルトの埋土
10V9R4/3 黄褐色粘土質シルト埋入 灰化物多く堆土も含む O549R埋土
29. 10V9R5/4 凝灰質粘土質シルト-10V9R4/3 土引い黄褐色粘土質シルト-10V9R4/4 土引い黄褐色粘土質シルトのブロック状土を含む 灰化物少し含む O4650埋土
30. 10V9R4/4 土引い黄褐色粘土質シルト-10V9R5/4 土引い黄褐色粘土質シルトの埋土-10V9R5/4 土引い黄褐色粘土質シルトの埋土 O4650埋土
31. 10V9R4/4 土引い黄褐色粘土質シルト-10V9R5/4 土引い黄褐色粘土質シルトの埋土-ブロック状土を含む 灰化物含む O4650埋土
32. 2.5OY3/1 粗オリーブ灰色粘土質シルト-5OY3/1 オリーブ灰色粘土質シルトのマーブル状 灰化物を含む O4650埋土
33. 2.5OY3/1 オリーブ灰色粘土質シルト-5OY3/1 オリーブ灰色粘土質シルトの埋土-NDZ 黄褐色粘土質シルト少し埋入 灰化物少し含む O4650埋土
34. 5OY3/1 オリーブ灰色粘土質シルト-2.5OY3/1 粗オリーブ灰色粘土質シルトの埋土-NDZ 黄褐色粘土質シルト少し埋入 灰化物少し含む O4650埋土
35. 10V9R4/2 黄褐色粘土質シルト-10V9R4/3 土引い黄褐色粘土質シルトの埋土-10V9R5/4 土引い黄褐色粘土質シルト少し埋入 O569R埋土
36. 10V9R4/2 黄褐色粘土質シルト-10V9R4/3 土引い黄褐色粘土質シルトの埋土-10V9R5/4 土引い黄褐色粘土質シルトの埋土 O569R埋土
37. 10V9R4/2 黄褐色粘土質シルト-基礎層少し埋入-10V9R5/2 黄褐色粘土質シルト埋入 灰化物少し含む 整地層
38. 10V9R5/4 土引い黄褐色粘土質シルト 遺構埋土
39. 2.5V5/3 土引い黄褐色粘土質シルト 基礎層

南壁



図式1/800

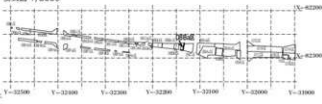


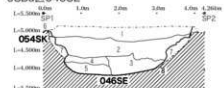
図121 塔の越遷跡 08Ba区東壁・南壁土層セクション図

08Ba区 O465E 掘形の平面はやや方形を呈し、南部は調査区外に及ぶ。底面は基礎下部の黄灰色細粒砂層まで掘り抜かれ、井戸材の残片と思われる大形の板材が出土した(後述)。調査区南壁の断面では壁面が迫り出しており、井戸構築時に崩落をまねいたようだ。8世紀の遺物が出土している。

08Ba区 O475E 掘形平面は北北東-南南西軸の長方形で、底面は黄灰色細粒砂層まで達している。堆積層の上部は抜き取り時に整地されたもので、須臾器3点が据え置かれたように埋められていた。

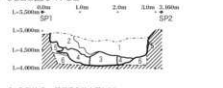
遺物群直下の堆積層中央部には灰色細粒砂が円筒状に堆積していた。地震によって砂が噴出したものとするば、

08Ba区O465E



1. 10V9R4/3 土引い黄褐色粘土質シルト-10V9R5/3 土引い黄褐色粘土質シルト
10V9R5/4 土引い黄褐色粘土質シルトの埋土 灰化物含む O465埋土
2. 10V9R4/3 黄褐色粘土質シルト-10V9R4/3 土引い黄褐色粘土質シルトの埋土
7V1/1 黄褐色粘土質シルト 近代の凝結物 O465埋土
3. 2.5OY3/1 粗オリーブ灰色粘土質シルト
5OY3/1 オリーブ灰色粘土質シルトのマーブル状 灰化物を含む O465埋土
4. 2.5OY3/1 オリーブ灰色粘土質シルト-5OY3/1 オリーブ灰色粘土質シルトの埋土-NDZ 黄褐色粘土質シルト少し埋入 灰化物少し含む O465埋土
5. 5OY3/1 オリーブ灰色粘土質シルト-2.5OY3/1 粗オリーブ灰色粘土質シルトの埋土
黄褐色粘土質シルト少し埋入 灰化物少し含む O465埋土
6. 10V9R4/3 土引い黄褐色粘土質シルト
10V9R5/4 土引い黄褐色粘土質シルトの埋土 O549R埋土
7. 10V9R5/4 土引い黄褐色粘土質シルトの埋土 基礎層
8. 2.5V5/1 黄灰色細粒砂 基礎層

08Ba区O475E



1. 2.5V4/2 凝灰質粘土質シルト
2.5V5/2 黄褐色粘土質シルトの埋土 灰化物を含む O475埋土
2. 10V9R4/4 土引い黄褐色粘土質シルト
2.5V5/3 黄褐色粘土質シルト
10V9R4/2 黄褐色粘土質シルトの埋土-ブロック O475埋土
3. 5V6/1 灰色粘土質 O475埋土
4. 2.5V4/1 黄褐色粘土質シルト
2.5V5/2 黄褐色粘土質シルト-凝結砂の埋土-ブロック O475埋土
5. 10V9R4/4 土引い黄褐色粘土質シルト 基礎層
6. 2.5V5/1 黄褐色粘土質シルト 基礎層

図125 塔の越遷跡 08Ba区O465E・O475E土層セクション図

井側は丸太材を割り貫いた井筒であった可能性が高い。
8世紀中葉の遺物が出土している。



図 126 塔の越遺跡 08Ba区 047SE 上層遺物出土状況

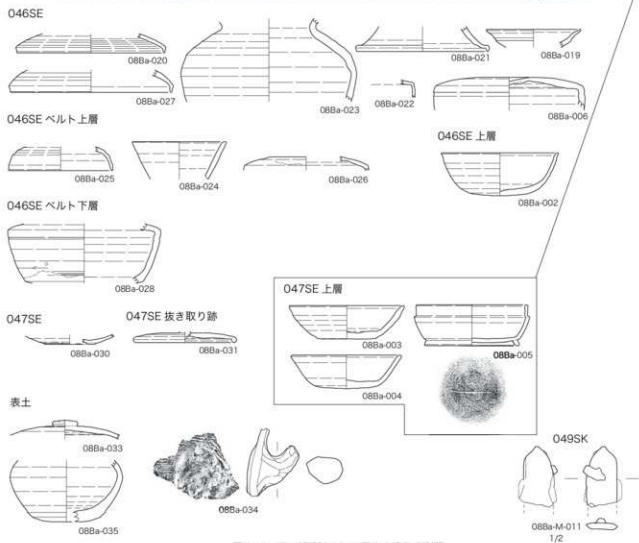


図 127 塔の越遺跡 08Ba区出土遺物実測図

● 09C 区

本調査区における地層の堆積状況や遺構の展開状況はいささか複雑である。現代（及びそれ以前を含む）畠耕作上下には平安時代から戦国時代の遺物を含む包含層があり、さらに下部で古墳の周溝を認めた時点でも古代に属す明確な遺構が把握できないという状況で、遺構検出には大きな困難を伴った。その理由としては整地層が厚かったこと、よって整地層を掘り込む遺構群の上部埋土も同様の整地層であったために両者の識別が難しかったことがあげられる。とすれば、本来は遺構面が複数存在した可能性も考えねばならない。柱痕を見出しながらも並ばない柱穴が複数あることは、遺構の精査が十分ではなかったことを意味している。

「古墳」時代の方墳の周溝 207SD がもつ軸線は、驚いたことに近世まで続く。古代には、一部の建物群が方位を異にするけれども、井戸や溝などの主要遺構は関連性を保っている。古代の布掘溝をもつ掘立柱建物の北端が周溝までは及んでいるものの填丘裾に達していない

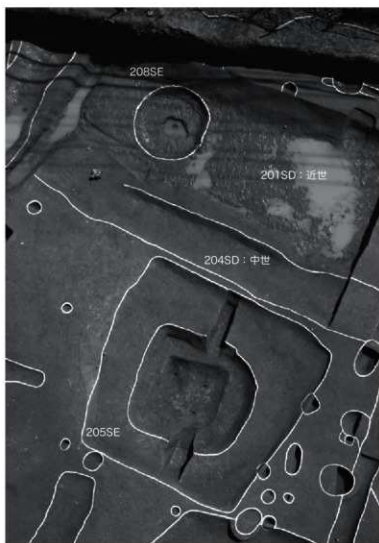


図 128 塔の越道跡 09C 区 2055E・2085E の検出状況

のことは、恐らく 8 世紀までは填丘が残存していたことを示すのだろうが、隣接する 08A 区と同様に 9 世紀には広範囲に地表の改変が行われて、多くが削平されたものと推測する。

09C 区



図 129 塔の越道跡 09C 区北壁・東壁土層セクション図

205SE 09C区中央東寄りで見出した隅柱横板組の井戸である。

掘形は、検出面で長辺4.8 m、短辺3.9 mの方形をなし、深さは2.7 mを測る。断面は二段掘りとなっている。底部は砂層に達せず、明オリープ灰色粘土層でとまっており、粘土層を透過した地下水を溜める構造である。

掘形の掘削は、まず地面を1.1 m以上掘り下げた後、井戸枠を組む足場を確保するため、さらに20cm掘り下げ、底辺が1.7 mになる方形の穴を作る。次に平場を幅20cm残し、中央部をほぼ垂直に1.4 m掘り下げている。

井戸枠は上下二段確認した。下段の井戸枠は、平行して置かれた2本の角材の上に、底部に4ヶ所の穿孔がある上面が長方形で側面がやや台形の枡（部材は鉄釘で留められていた）を設置し、その上に井桁に組んだ板材を2段積んでいる。さらに支えとして井戸枠外側に角材を打ち込んでいる。

上段の井戸枠は、先端を尖らした丸太材を、下段の井戸枠の四隅の外側に打ち込んで隅柱とし、その外側に板材を積み上げている。板材は4段残存していた。

隅柱にはほぞ穴が2ヶ所確認できた。上方のほぞ穴に接続する横木は残存していなかった。下方のほぞ穴は、下段の井戸枠の頂部より深い位置にあり、横木がはめ込まれた状態で出土した。また、下段の井戸枠の頂部の位置に、短辺を円弧状に削った板材を隅柱と隅柱の間にはめ込み、隅柱が内側に傾くのを防いでいた。さらに井戸枠を取り外したところ、板材を加工したときに出た切れ端が井戸枠の裏側から出土したため、板材の加工は現地で行われたと考えられる。

井戸の堆積層は黒色粘質シルトからなり、混水状態の中で、時間をかけて井戸が埋まっていったことがわかる。井戸の中からは、井戸の部材、曲物、櫛、ピンセット状の銅製品、灰釉陶器の手付瓶・長頸壺、銅製の、シカの骨、桃果核など、多くの遺物が出土している。（宇佐見守）

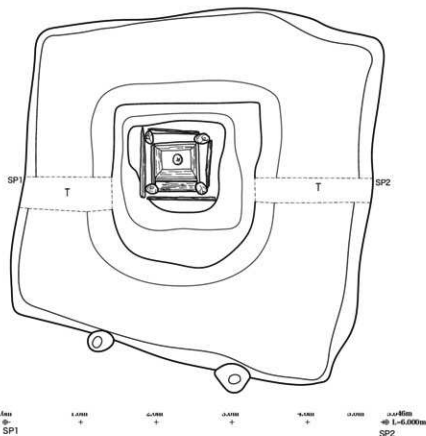


図130 塔の越遺跡09C区205SE平面図・側面図

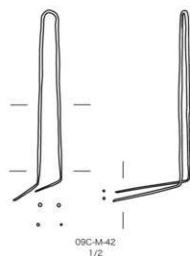
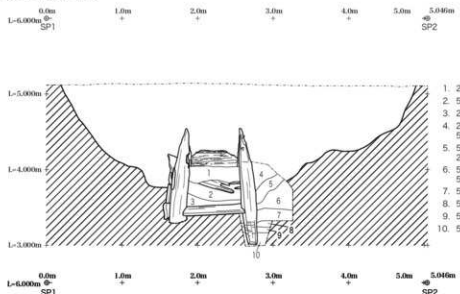
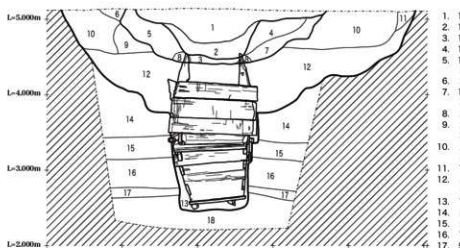


図131 塔の越遺跡09C区205SE出土遺物実測図

09C区205SE 上段



1. 25Y2/1 黒色粘質シルト
2. 5Y2/1 黒色粘質シルト
3. 25Y2/1 黒色粘質シルト
4. 25Y3/1 黒褐色シルト
- 5G4/1 暗褐色灰色シルトブロック含む
5. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト
- 25Y3/1 黒褐色シルトブロック含む
6. 5Y5/2 灰オリーブ色シルトと
- 5Y5/1 灰色粘質砂分の混層
7. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト
8. 5Y6/3 オリーブ褐色粘土
9. 5Y3/1 オリーブ褐色粘土
10. 5Y4/1 灰色粘土



1. 10YR4/3 におい黄褐色シルト 沈鉄含む
2. 10YR4/1 褐色シルト 沈鉄含む
3. 10YR3/1 黒褐色シルト 沈鉄含む
4. 10YR4/1 褐色シルト 沈鉄多く含む
5. 10YR4/1 褐色シルト
- 25YB/4 淡黄色シルトブロック含む 沈鉄多く含む
6. 25Y5/1 黄灰色シルト
7. 10YR4/1 褐色シルト
- 25YB/4 淡黄色シルトブロックをわずかに含む 沈鉄多く含む
8. 25Y5/1 黄灰色シルト
9. 25Y5/1 黄灰色シルトと
- 25YB/4 淡黄色シルトとの混土 沈鉄多く含む
10. 25Y5/1 黄灰色シルトと
- 25YB/4 淡黄色シルトとの混土
11. 10YR5/3 におい黄褐色シルト 沈鉄含む
12. 25Y3/1 黒褐色シルト
- 5G4/1 暗褐色灰色シルトブロック含む (一部グライ化)
13. 10B6G/1 暗黄褐色シルト
14. 25G5 暗オリーブ灰色シルト
15. 5Y4/1 灰色粘土
16. 10B7G/1 暗黄褐色粘土
17. 5B6Z/1 青黄色粘土
18. 25G5 暗オリーブ灰色粘土

図 132 塔の越遺跡 09C 区 205SE 側面図・土層断面図

表 2 塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土の動物遺体 分析：中村賢太郎 (ハレオ・ラボ)

調査区	遺体	位置	分析区	種別		個数	備考	
				種別	個数			
09C区 205SE	骨片	上層	ホホシジロ	行違	種別	7	1	破片なし
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
09C区 205SE	骨片	中層～下層	ホホシジロ	骨片	種別	7	1	骨片のみ
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
09C区 205SE	骨片	下層	ホホシジロ	骨片	種別	7	1	破片のみ
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	



表 3 塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土の大型植物遺体 (括弧は破片数を示す)

調査区	遺体	位置	種別		個数	備考		
			種別	個数				
09C区 205SE	骨片	中層～下層	ホホシジロ	行違	種別	7	1	破片なし
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	
				骨片	種別	7	1	

図 133 塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土の大型植物遺体

報告：佐々木由希・ハンダラ スタダシヤン (ハレオ・ラボ)

分析：佐々木由希・ハンダラ スタダシヤン (ハレオ・ラボ)

09C-205SE 出土木製品

205SE は、井戸枠を据えるために掘られた方形の堀方の一辺が5mにも達する巨大な井戸である。調査時の土層断面図をみる限り、堀方は再掘削されている。そして、太い丸太の隅柱をもつ上半部の井戸枠は再掘削時に据えられたもので、それより下の井籠組みの井戸枠が築造当初のものと考えられる。

下層 築造当初の井戸枠は大型の枘と井籠組み2段分からなっている。最下段には76×53cmの底板(120)の上に逆台形の側板4枚(093・096・118・120)を組み合わせた大型の枘を据えつけている。底板には湧水を取るために4カ所方形の穿孔をほどこし、側板を載せるために溝を切っている。底板と側板は、鉄釘2本で固定されており、側板同士は指物構造の仕口で結合している。底板・側板ともに木取りは板目。非常に精巧なもので、当初から井戸の水溜として作られたものではなく、別の用途からの転用品である可能性が高い。

この枘の上に井籠組みの井戸枠2段(142・100・104・089・097・111・099・091)が載る。この2段分の井戸枠もまた、指物構造の仕口で固定されている。木取りはすべて板目で、最下段の枘に合わせて南北の側板を短く、東西の側板を長く作る。おそらく築造当初は、この井籠組みの井戸枠が地表面まで組み上げられていたものとおもわれる。このほか108・127も下層の井戸の部材である。

最下段の枘内からは、完形の曲物(133)のほか、曲物底板3点(135・137・140)、横櫛(138・139)、板(136)が出土している。

上層 築造当初の井戸枠のうち、前述の枘と井籠組み2段分を残してそれより上が取り払われ、新たに隅柱構造の井戸枠が設置されている。

最大径が約20cmを測る巨大な隅柱(132・130・131・129)は丁寧に面取りをほどこし、下端部を尖らせている。それぞれに穿孔や納孔はあるが、これら隅柱を相互につなぐ横棧は存在していない。それゆえ、この隅柱もまた転用品であり、穿孔は建築部材(柱か?)として使用されていた当初の細工である可能性が高い。木取りはいずれも芯持ち材。

側板は北(103・105・106・098・115)、西(123・113・114・117・116)、南(101・107・102・126・112)、東(110・141・090・095・094)で、それぞれ5段分出土している。このうち北と西の最下段(第1段)については短辺側に隅柱を受けるような細工をほどこし、寝かせた状態で使用されていた(103・123)。また、北第2段(105)・北第3段(106)・南第2段(107)

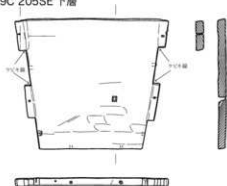
には赤彩の痕跡が残っていることから、これら側板についても転用品である可能性が高い。木取りはすべて板目である。このほか124・125も上層の井戸の部材である。

この上層の井戸枘内からは122のような建築部材のほか、板状の木製品が7点(062・086・087・088・092・121・128)が出土している。

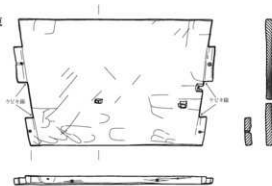
(樋上 昇)

塔の越09C 205SE 下層

北



東

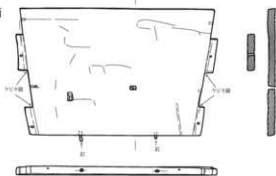


093

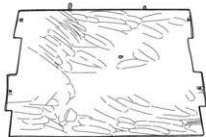
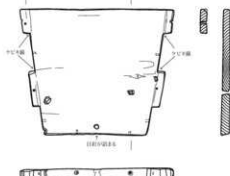


119

西



南

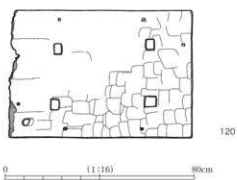
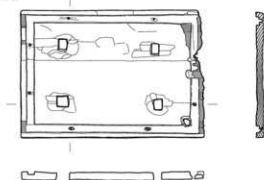


118



096

底板



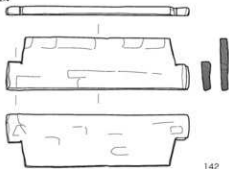
120

0 1:16 80cm

図 134 塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (1)

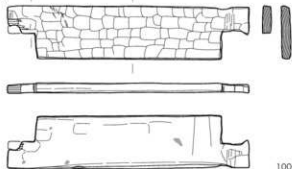
塔の基 09C 205SE 下層

北上段



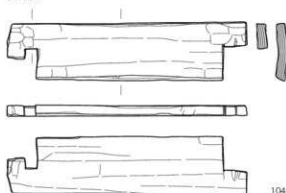
142

東上段



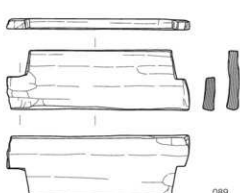
100

西上段



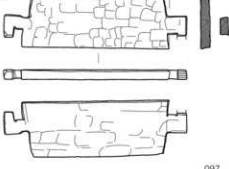
104

南上段



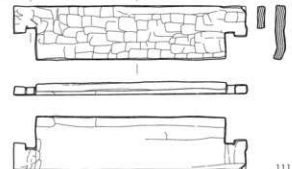
089

北下段



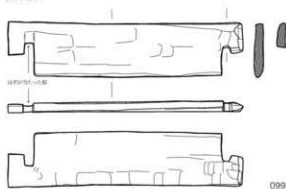
097

東下段



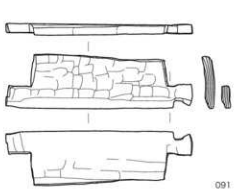
111

西下段



099

南下段



091

0 1:16 30cm

図 135 塔の基遺跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (2)

塔の越 09C 205SE 下層 井戸枠内

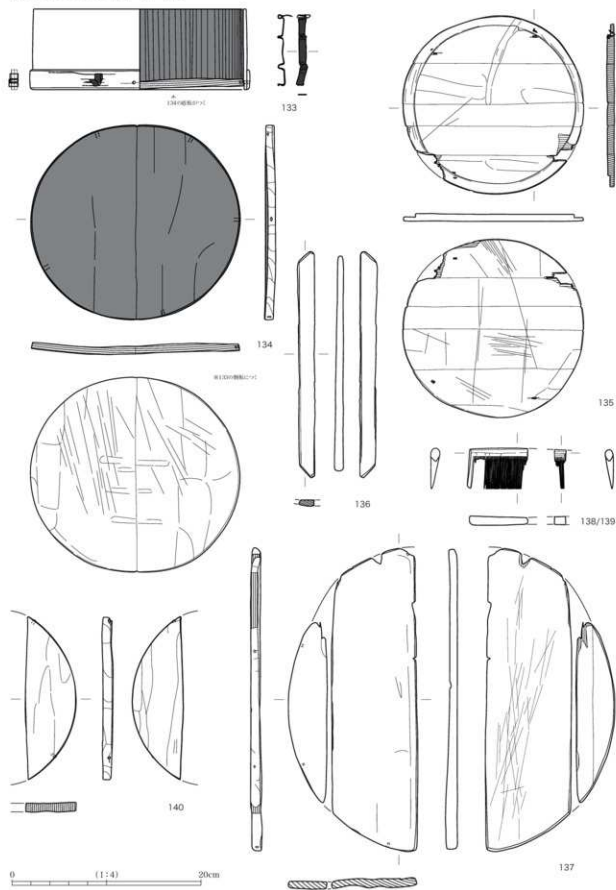
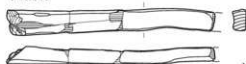


図 136 塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (3)

塔の越 09C 205SE 下層
不明部材

0 (1:16) 80cm

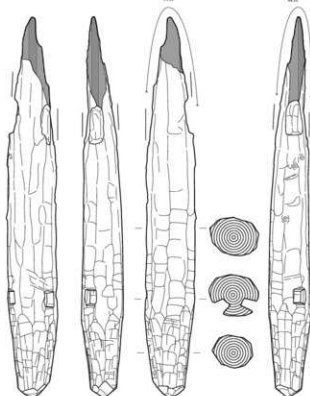


108/109



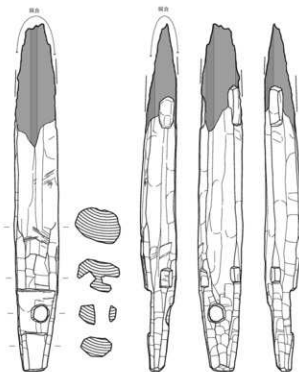
127

塔の越 09C 205SE 上層
北西隅柱



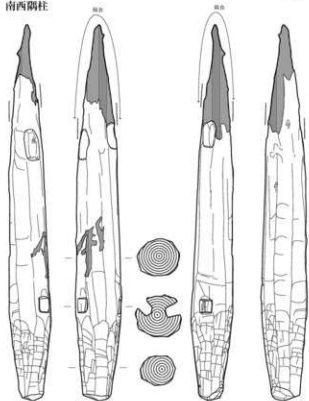
132

北東隅柱



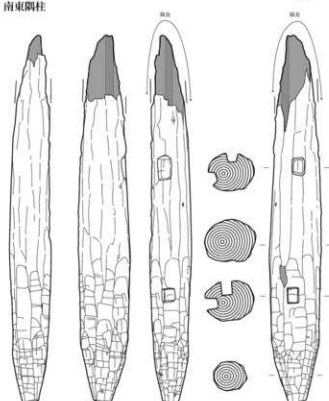
130

南西隅柱



131

南東隅柱



129

不明部材



124



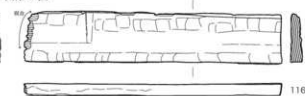
125

塔の越 O9C 205SE 上層

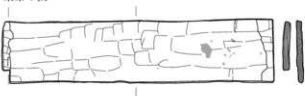
北第5段



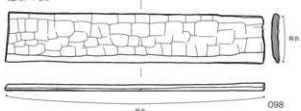
西第5段



東第4段



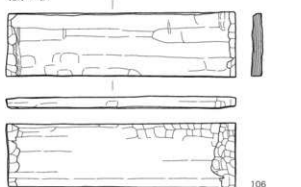
北第4段



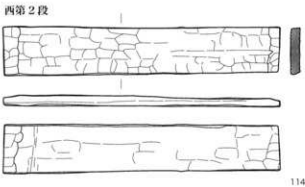
西第2段



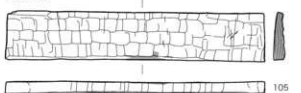
北第3段



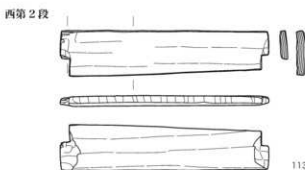
西第2段



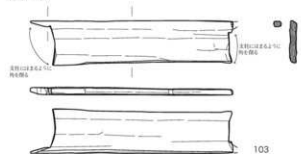
北第2段



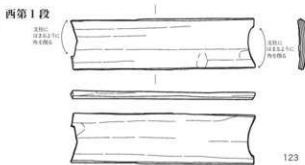
西第2段



北第1段



西第1段



0 (1:16) 50cm

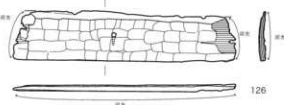
図 138 塔の越遺跡 O9C 区 205SE 出土木製品実測図 (5)

塔の越 09C 205SE 上層

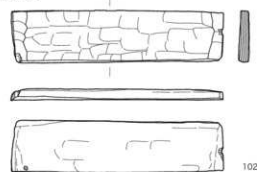
南第 5 段



南第 4 段



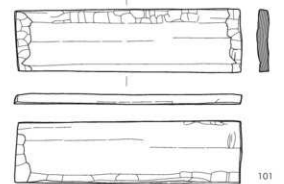
南第 3 段



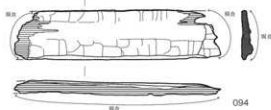
南第 2 段



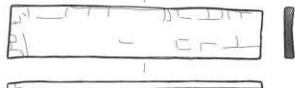
南第 1 段



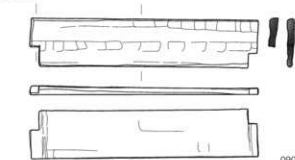
東第 5 段



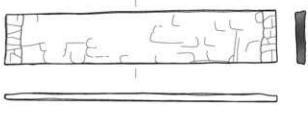
東第 4 段



東第 3 段



東第 2 段



東第 1 段



0 (1:16) 80cm

塔の越 09C 205SE 上層 井戸枠内

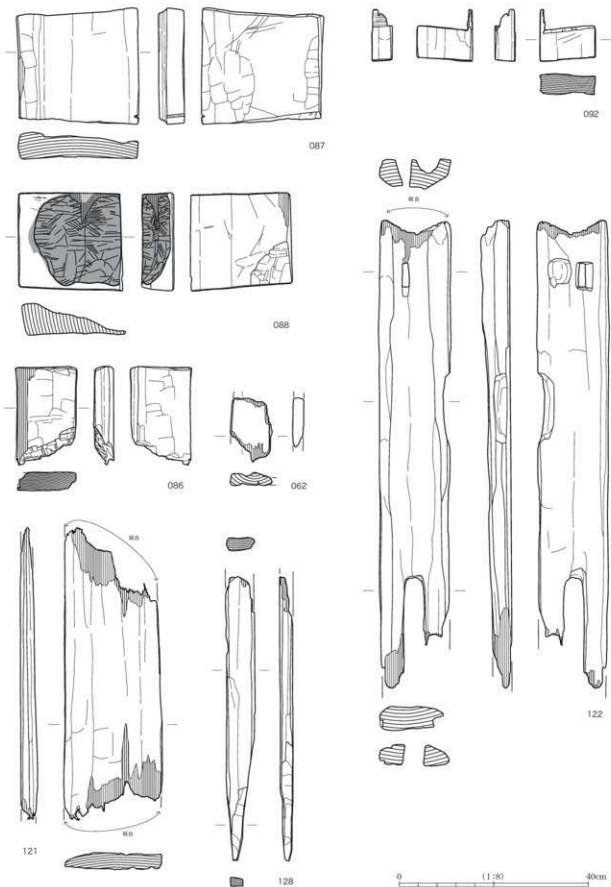


図 140 塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (7)

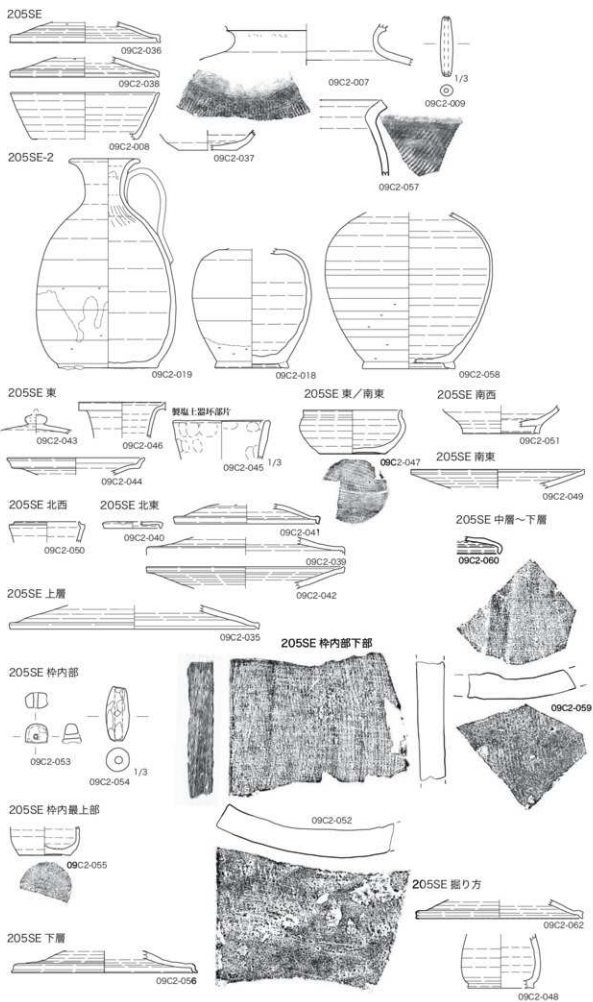


図 141 塔の越遺跡 O9C 区出土遺物実測図

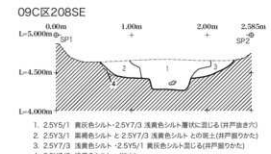
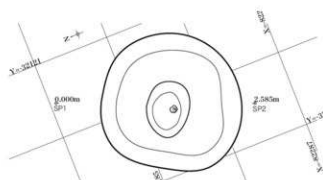


図 142 塔の越遺跡 09C 区 208SE 平面図・土層断面図

208SE 近世から近代に属す 201SD と重複しており、その下部から検出されたために、上部は大きく削平されていた。掘形平面はやや楕円形で、中央に漏斗（ろうと）状の抜き穴が認められた。抜き穴下部からは 7 世紀前半の高杯が出土した。当該期の井戸なのか、抜き取り時の混入なのか、判断に迷うところである。

抜き取り穴の径は約 1m であり、井筒が柄り貫きの井筒であった可能性を窺わせる点は 08Ba 区 047SE と同じだが、掘形の平面も方形ではないので 047SE に先行する公算が大きい。

203SD 近世から近代に属す 202SD が重複しており、厳密な形状は不明である。残存部で幅約 1.6m、深さ約 30cm を計測した。底面は西へ傾斜しており、溝としては不定型である。8 世紀代の遺物が出土している。

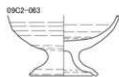


図 143 塔の越遺跡 09C 区 208SE 出土遺物

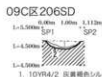


図 144 塔の越遺跡 09C 区 206SD 土層断面図

206SD 断面は皿状で、幅約 0.9m、深さ約 30cm である。南端は 217SP 直前で終わっており、205SE や周辺の遺構群と強い関連性が窺える。遺物はほとんど出土していない。

220SD 203SD や 206SD に直行する。東に向かって幅広くなっており、あたかも排水溝のように 203SD につながっているかのようなようである。

251SD 形状は布掘溝に類似して、軸線も共通しているが、下部から柱穴は検出されなかった。

280SD 桁行 302SK-408SK 柱穴列に重なる布掘溝である。下部の柱穴群とは別に調査された。

北端は 207SD に重複するが、墳丘には至っていない。7 世紀代の坏蓋は、おそらく 207SD が埋没する過程で流入した遺物が、それに重複して掘削された 208SD に移動したものであろう。

282SD 桁行 411SK-413SK 柱穴列に重なる布掘溝である。北端は 207SD に重複して、墳丘には至っていない。

7 世紀代の高杯跡は 280SD と同様に混入したもので、8 世紀後半が本遺構の時期と推測する。

340SX 北辺と西辺を検出した。深さは 10cm 程であり、灰白色シルトの単一層で埋まっていたので、竪穴建物跡の条件は整わない。廃棄土坑の一種であろう。出土遺物はほぼ 8 世紀後半までとまっている。

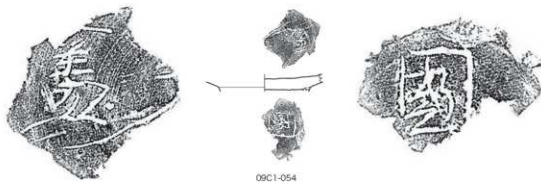


図 145 塔の越遺跡 09C 区出土銅鏡須磨実測図

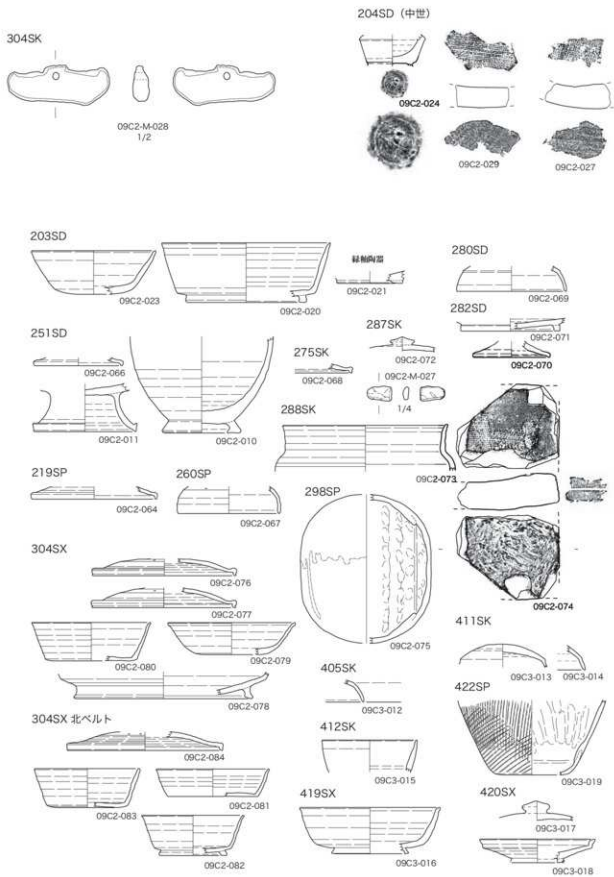


図 146 塔の越遺跡 09C 区出土遺物実測図



[O8B区建物1]

O8Bb区 033SKを南東隅にして、北に020SK、西に014SK・003SK・012SKの1棟を想定した。

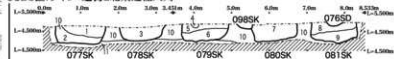
[O8B区建物1]

柱痕も確かな019SK・021SKについては関連する柱穴群が不明で、南北軸の冊列になるのかもしれない。

[O8B区建物2]

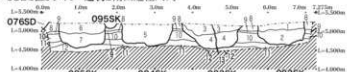
O8Bb区 077SK-081SK 桁行に長軸を揃

O8Bb区ライン:建物2北東辺柱穴列



1. 2.5V5/3 黄褐色粘土質シルト-10YR5/4 灰黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 におよぶ黄褐色粘土質シルトの混土、灰化少し含む 077SK混土
2. 10YR5/4 におよぶ黄褐色粘土質シルト中のブロック主体-2.5V5/3 黄褐色粘土質シルト 10YR4/3 におよぶ黄褐色粘土質シルトの混土、扁平なブロックを層状に含む 077SK混土
3. 10YR5/4 におよぶ黄褐色粘土質シルト-2.5V5/3 黄褐色粘土質シルト 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルトの混土、灰化物少し含む 079SK混土
4. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 079SK混土 5層の一部
5. 10YR5/4 におよぶ黄褐色粘土質シルト-2.5V5/3 黄褐色粘土質シルト 10YR3/2 灰黄褐色粘土質シルトの混土 079SK混土
6. 10YR5/4 におよぶ黄褐色粘土質シルトのブロック主体-10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 10YR3/2 灰黄褐色粘土質シルト少し混入 079SK混土
7. 10YR5/4 におよぶ黄褐色粘土質シルト中のブロック主体 黄褐色粘土質シルト 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルトの混土 灰化物少々含む 080SK混土
8. 2.5V5/3 黄褐色粘土質シルト-10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 におよぶ黄褐色粘土質シルトの混土 081SK混土
9. 10YR5/4 におよぶ黄褐色粘土質シルトのブロック主体 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト少し混入 081SK混土
10. 10YR5/4 におよぶ黄褐色粘土質シルト 基盤層
11. 10YR5/4 におよぶ黄褐色粘結砂 基盤層

O8Bb区ライン:建物2南西辺柱穴列



1. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト-10YR5/4 におよぶ黄褐色粘土質シルトの混土 082SK混土
2. 10YR5/4 におよぶ黄褐色粘土質シルト中のブロック主体 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト少し混入 灰化物少し含む 082SK混土
3. 2.5V5/3 黄褐色粘土質シルト/10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 におよぶ黄褐色粘土質シルトの混土 083SK混土
4. 10YR5/4 におよぶ黄褐色粘土質シルトのブロック主体-10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト層状に混入 083SK混土
5. 10YR5/4 におよぶ黄褐色粘土質シルトのブロック主体 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト少し混入 084SK混土
6. 10YR5/4 におよぶ黄褐色粘土質シルト-10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルトの混土 085SK混土
7. 10YR5/4 におよぶ黄褐色粘土質シルト中のブロック主体 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト混入 085SK混土
8. 10YR5/4 におよぶ黄褐色粘土質シルト 基盤層
9. 10YR5/4 におよぶ黄褐色粘結砂 基盤層
10. 10YR5/4 におよぶ黄褐色粘結砂 基盤層
11. 2.5V5/3 黄褐色粘結砂-一部砂 基盤層
12. 2.5V5/3 黄褐色粘土質シルト 基盤層
13. 2.5V5/3 におよぶ黄褐色粘結砂 砂層

図 148 O9C区区立柱建物柱穴土層セクション図

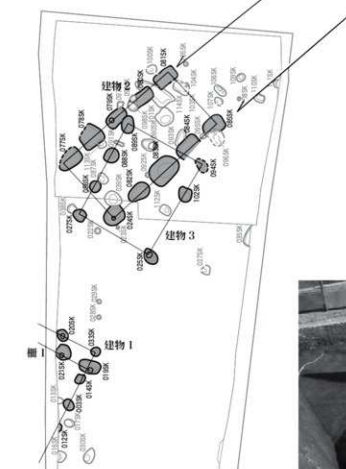


図 147 塔の越道跡 O8B区・O9C区区立柱建物等配置図



図 149 塔の越道跡 O8Bb区建物 2・3 南西から

えて整理している。柱痕は079SKのみ検出された。

08Bb区 024SK-085SK 桁行に長軸を揃えて整理している。柱痕は024SKのみ確認した。

[08B区建物3]

08Bb区 027SK-089SK 楕円形から円形の柱穴が並ぶ。柱痕は確認されていない。

08Bb区 025SK-094SK 西寄りの1つを欠く。025SKのみ柱痕を確認した。

08Ba区 052SK・055SK 井戸に切られる2本の柱穴を近接して検出した。柱痕はどちらも東寄りであり、配置が南北軸なら東側に建物位置と推測されるが、08Ba区の幅は狭く、いずれになろうとも調査区をまた

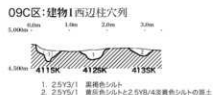
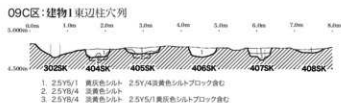


図 150 09C区掘立柱建物柱穴土層セクション図

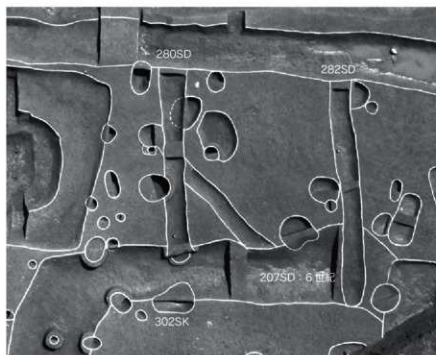


図 151 塔の越路跡 09C区建物1 布掘溝と207SD



図 152 塔の越路跡 09C区建物1 東辺布掘溝下部の柱穴列 (手前が302SK、最奥は408SK)

がり詳細は不明である。

[09C区建物1]

09C区 302SK-408SK・425SP 掘立柱建物の東桁に該当する。302SK・404SK・407SK・408SKから柱痕を検出した。

09C区 411SK-416SP 掘立柱建物の西桁に該当する。南側寄りの2本分は検出されなかったが、布掘溝の底面を掘り下げることなく柱が設置されていたためであろうか。412SK・413SKの2本から柱痕を検出した。

[09C区建物2]

09C区 403SK・406SK・290SK・239SK 桁行は東西と推測される。

[09C区柵1]

09C区 237SK・239SK・243SP・244SP 09C区建物2と重複関係にある。

[09C区柵2]

09C区 233SP・232SP・228SP・223SP 228SPと223SPの間は未検出である。穴は小径なので、杭列かもしれない。

検1

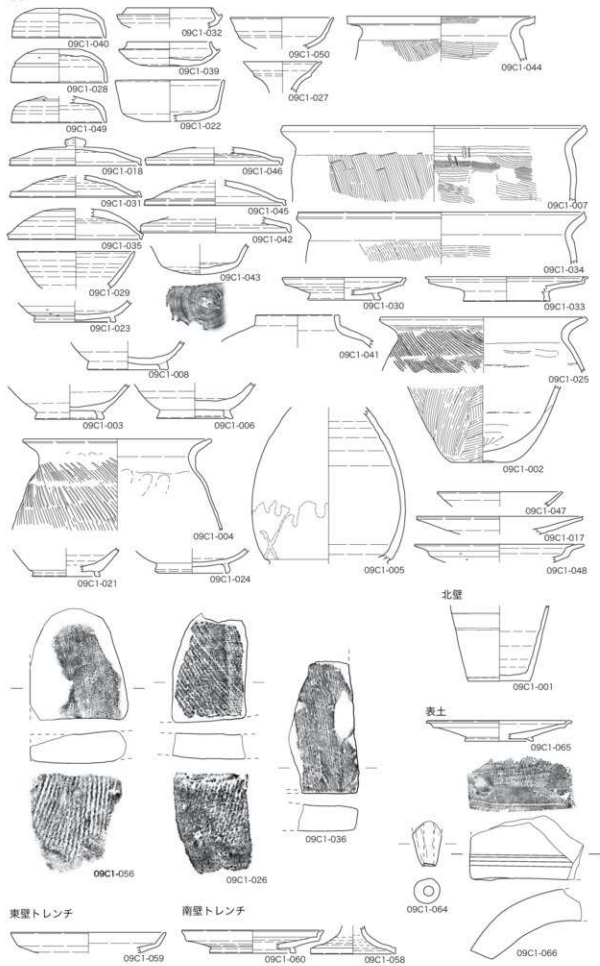
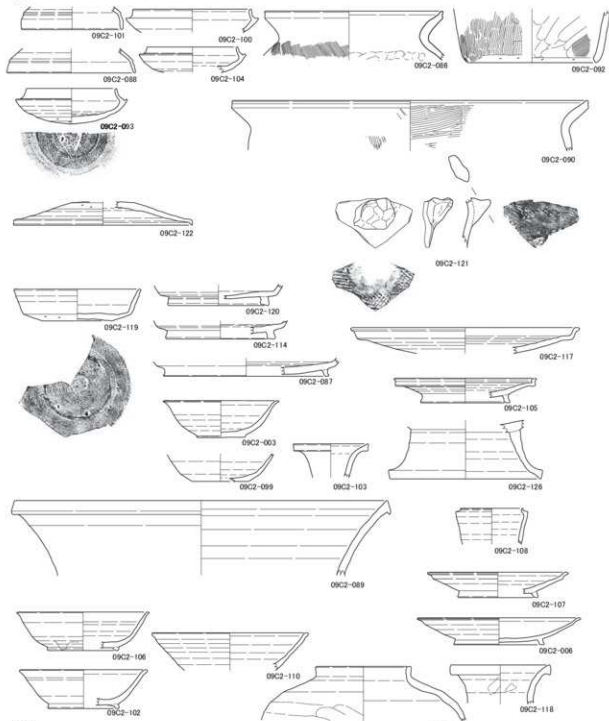


図 153 塔の越遺跡 09C 区遺構外出土遺物実測図 (1)

検 2



検 3

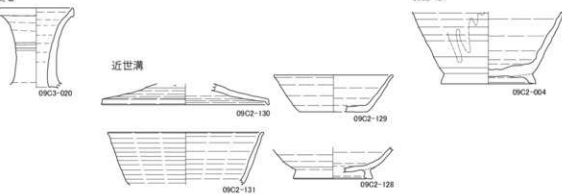


図 154 塔の越遺跡 O9C 区遺構外出土遺物実測図 (2)

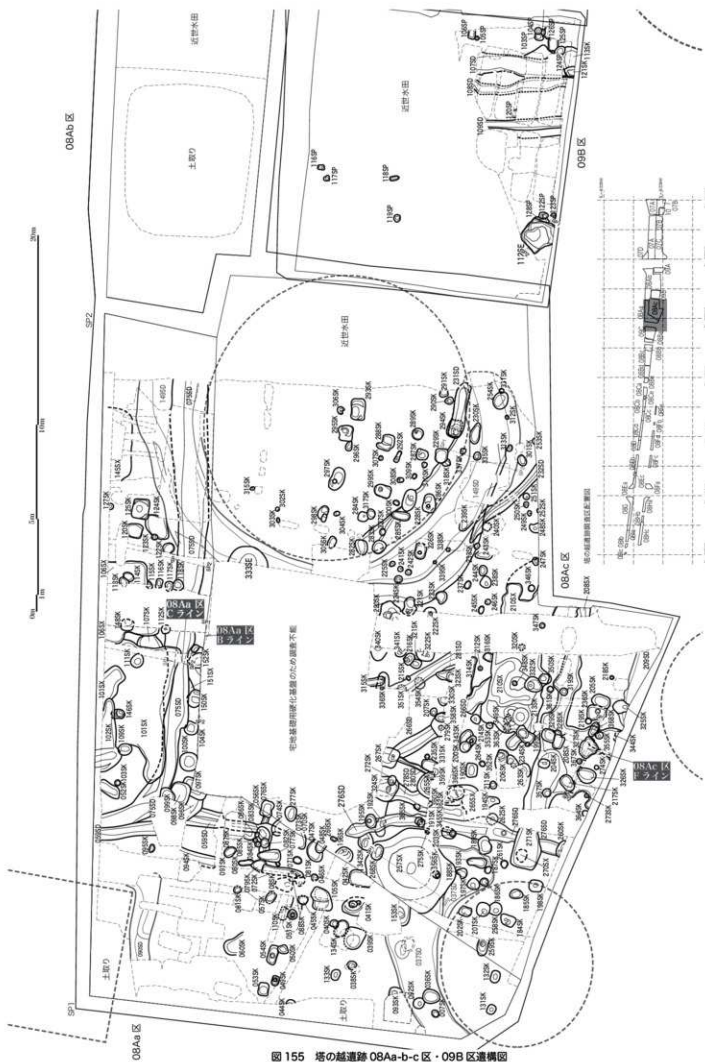


図 155 塔の越遺跡 08Aa-b-c 区・09B 区遺構図

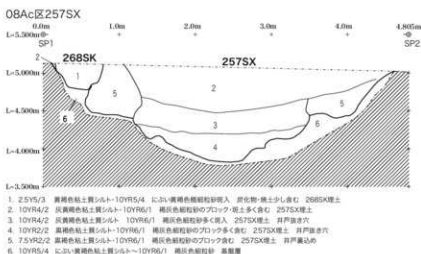


図 156 OBAC区 257SX 土層セクション図

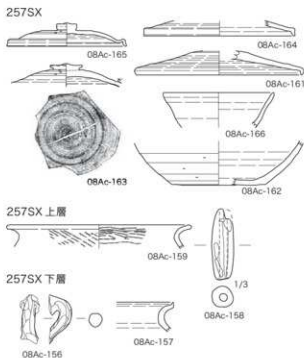


図 157 塔の越通跡 OBAC区 257SX 出土遺物実測図

● OBAA区・OBAC区

OBAA区は、出入口や作業ヤード確保等の都合上、極めて変則的な3小区分(Aa・Ab・Ac)での調査となった。また、OBAA区の西部と隣接するOBAC区はちょうど掘立柱建物群が密集する部分であったが、残念ながら住宅建設に際して地盤改良のために硬化作業が丁寧に加えられて堅固な地層となっており、遺構の検出が全く不可能であった。当該の硬化面は重機での掘削もままならず、隣接する飲食店等への振動によって被害を与える恐れがあり、そのためにやむなく調査対象から外した。そのため肝心部分を通したことは否めない。

両調査区の東部からOBAA区東部、09C区にかけては近世から近代の開田によって地盤が大きく掘り下げられ、水田域における古代遺構の遺存は極僅かにとどまった。ただ、それでも掘立柱建物の柱穴に大きな深度差がなければ見つかるはずであり、むしろ軽微な建物の展開、もしくは空白域の存在を強く示唆するものとする。

OBAA区西部における古代の遺構群は、近世の区画溝や飲溝に著しく寸断されたが、中世から近世の柱穴は分布していないのでほとんどが古代に属すると判断する。

OBAC区 333SE 円墳の周溝 149SDに重複して設けられている。堆積層の上層は自然埋没であり、その上部には整地層からなる334SXが重複している。形状や堆積状況から古代でも古い時期に属すると推測され、7世紀代に遡る可能性がある。

OBAC区 257SX 径が5m近い大形の土坑である。堆積層は斑土からなり、一応、部材と思われる大形の板材が出ているので「井戸」跡と推定している。遺構記号は「SX」だが、土層断面の注記は井戸を前提に記載している。周辺の建物群に先行する最古の遺構で、8世紀後半に属す。

OBAA区 075SD 東西に走り、西部では方墳の周溝090SD手前で北に折れる。幅は東では広いが西に向かって狭くなり、一定しない。断面も東部では逆台形だが、西部では円くなる。底面標高は北壁断面で高く、東で低くなる。

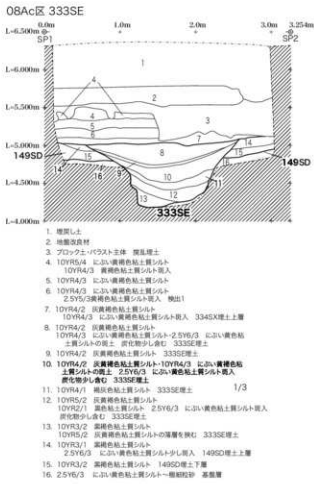
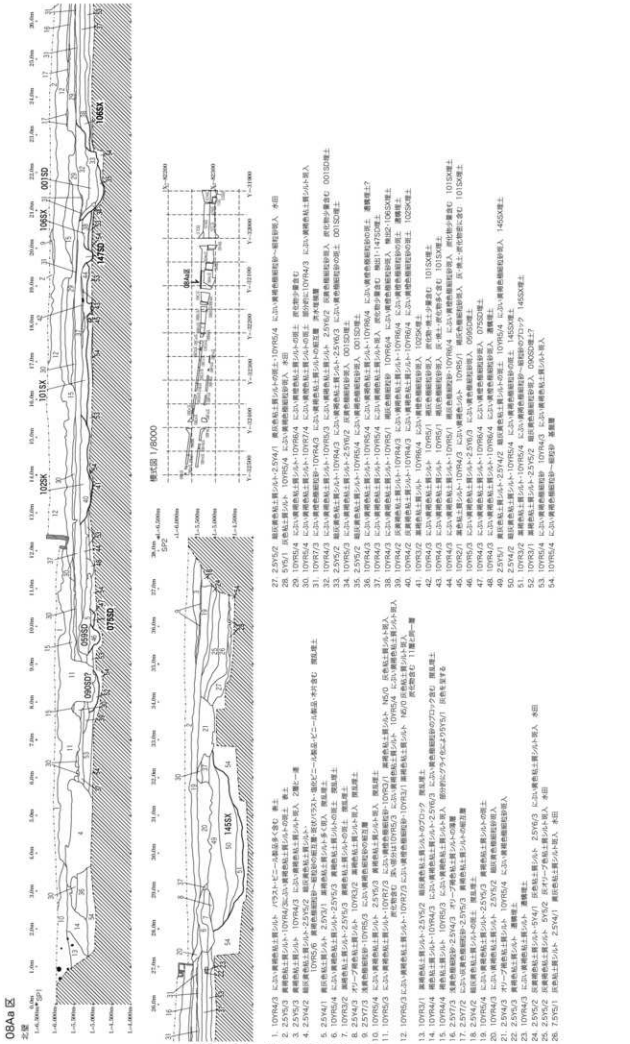


図 158 OBAC区 333SE 土層セクション図



1. 10794.3 比叡遺跡北土層部分・V53a1-2に連続する遺構、東土
2. 10794.3 比叡遺跡北土層部分・V53a1-2に連続する遺構、東土
3. 2.575.2 組立遺構北土層部分・10794.3 比叡遺跡北土層部分・東土、西土
4. 2.574.6 組立遺構北土層部分・2.575.2 組立遺構北土層部分・東土
5. 2.574.7 組立遺構北土層部分・2.575.2 組立遺構北土層部分・東土
6. 10795.4 比叡遺跡北土層部分・2.575.2 組立遺構北土層部分・東土、西土
7. 10793.2 組立遺構北土層部分・2.575.2 組立遺構北土層部分・東土
8. 10795.4 比叡遺跡北土層部分・2.575.2 組立遺構北土層部分・東土
9. 2.577.2 組立遺構北土層部分・10795.4 比叡遺跡北土層部分・東土
10. 10795.4 比叡遺跡北土層部分・2.575.2 組立遺構北土層部分・東土
11. 10795.4 比叡遺跡北土層部分・10797.7 比叡遺跡北土層部分・東土、西土
12. 10795.3 比叡遺跡北土層部分・10797.7 比叡遺跡北土層部分・東土、西土
13. 10793.1 組立遺構北土層部分・2.575.2 組立遺構北土層部分・東土
14. 10794.4 組立遺構北土層部分・10794.3 比叡遺跡北土層部分・2.576.7 比叡遺跡北土層部分・東土
15. 10794.3 組立遺構北土層部分・10795.3 比叡遺跡北土層部分・東土、西土
16. 2.574.6 組立遺構北土層部分・東土
17. 2.577.2 比叡遺跡北土層部分・東土
18. 2.574.6 組立遺構北土層部分・東土
19. 10795.4 比叡遺跡北土層部分・2.575.2 組立遺構北土層部分・東土
20. 2.575.2 組立遺構北土層部分・東土
21. 2.574.6 組立遺構北土層部分・東土
22. 2.574.6 組立遺構北土層部分・東土
23. 10794.3 比叡遺跡北土層部分・東土
24. 10795.4 比叡遺跡北土層部分・東土
25. 2.575.2 組立遺構北土層部分・東土
26. 2.575.2 組立遺構北土層部分・東土
27. 2.575.2 組立遺構北土層部分・東土
28. 10795.4 比叡遺跡北土層部分・東土
29. 10795.4 比叡遺跡北土層部分・東土
30. 10795.4 比叡遺跡北土層部分・東土
31. 10793.2 比叡遺跡北土層部分・東土
32. 2.575.2 組立遺構北土層部分・東土
33. 2.575.2 組立遺構北土層部分・東土
34. 10795.2 比叡遺跡北土層部分・東土
35. 2.575.2 組立遺構北土層部分・東土
36. 2.575.2 組立遺構北土層部分・東土
37. 10794.3 比叡遺跡北土層部分・東土
38. 10794.3 比叡遺跡北土層部分・東土
39. 10794.3 比叡遺跡北土層部分・東土
40. 10794.2 組立遺構北土層部分・東土
41. 10793.2 組立遺構北土層部分・東土
42. 10794.3 組立遺構北土層部分・東土
43. 10794.3 組立遺構北土層部分・東土
44. 10794.2 組立遺構北土層部分・東土
45. 10794.2 組立遺構北土層部分・東土
46. 10794.3 組立遺構北土層部分・東土
47. 10794.3 組立遺構北土層部分・東土
48. 10794.3 組立遺構北土層部分・東土
49. 2.574.6 組立遺構北土層部分・東土
50. 2.574.6 組立遺構北土層部分・東土
51. 10793.1 組立遺構北土層部分・東土
52. 10793.1 組立遺構北土層部分・東土
53. 10795.4 比叡遺跡北土層部分・東土
54. 10795.4 比叡遺跡北土層部分・東土

図 159 O8aB4 区北土層土層セクション図

08Aa区075SD

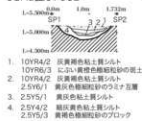


図 160 塔の越遺跡
08Aa 区 075SD
土層セクション図

075SD

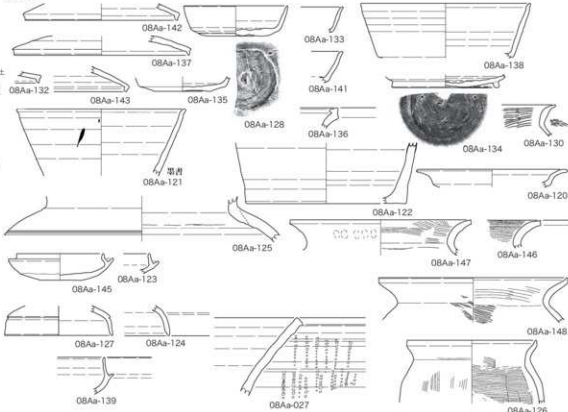
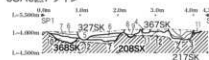


図 161 塔の越遺跡 08Aa 区 075SD 出土遺物実測図

堆積層は再掘削の様相を示し、再掘削後の中層にはラミナも形成されているので、北から東に流れるような水流があったとすれば、調査区北側エリアの旧地表面標高が高かったことを示す。8世紀後半に属す。

08Ac 区 271SK・208SX 柱穴群の下部で検出された溝状と皿状の落ち込み群から構成される。271SK は長方形の輪郭は明瞭で、底面も平坦だが、208SX は起伏があり、輪郭は不定形で一定しない。

08Ac区Fライン



1. 10YR/2 灰黄褐色粘土質シルト
2. 10YR/2 灰黄褐色粘土質シルト
3. 10YR/4 灰色黄褐色粘土質シルト
4. 10YR/2 灰黄褐色粘土質シルト
5. 10YR/2 灰黄褐色粘土質シルト
6. 10YR/2 灰黄褐色粘土質シルト
7. 10YR/3 黄褐色粘土質シルト
8. 10YR/2 灰黄褐色粘土質シルト
9. 10YR/2 灰黄褐色粘土質シルト
10. 10YR/2 灰黄褐色粘土質シルト
11. 10YR/2 灰黄褐色粘土質シルト
12. 10YR/4 灰色黄褐色粘土質シルト

図 162 塔の越遺跡 08Ac 区 F ライン土層セクション図

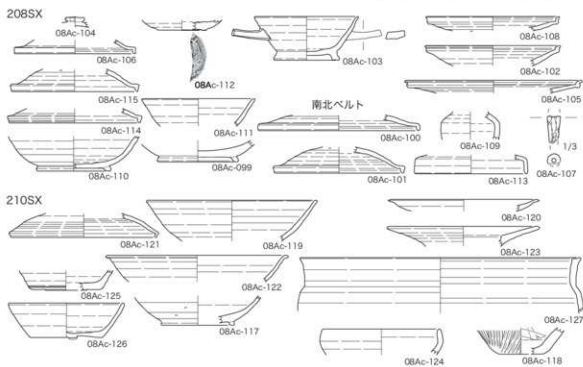


図 163 塔の越遺跡 08Ac 区 208SX・210SX 出土遺物実測図

堆積層は炭化物や焼土を含む斑土からなり、重複している土坑群も同様である。8世紀後半に属す。

08Ac区210SX 東西に長い方形の落ち込みで、底面には凹凸があり、堆積層も含めて208SXに共通している。

08Ac区334SX 円墳の周溝149SDの上部を整えた深さ約30cmを測る溝状の遺構で、北側は墳丘にも及んで、幅は4mほどである。堆積層は斑土で、炭化物等は含まない。円墳の墳丘裾の整形を含めた、周辺の建物群構築に伴う整地跡の可能性が高い。

08Ac区270SX 焼土の詰まった土坑で、出土した須

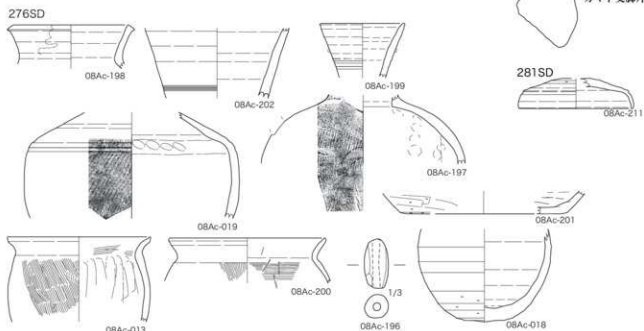


図165 塔の越遷跡08Ac区266・276・281SD出土遺物実測図

恵器類も焼熟して変色していた。推定復元ではあるが[建物1]の南面側の柱穴位置にあり、柱を抜き取った後に何らかの行為が行われたものと判断する。8世紀後半に属す。

08Ac区266SD 北西から南東に走る溝で、カマドの支脚片が出土している。灰釉陶器碗が出土しているが小片で、混入であろう。多くの遺構に切られており、8世紀代に属すであろう。

08Ac区276SD 断面は、中央付近は逆台形だが、南部では円くなる。257SX付近で屈曲して終息する。7世紀に属すとすれば最古段階で、古墳周溝も埋ま

り切らないで、痕跡を残している時期である。

08Ac区281SD 北西から南東に走る溝である。出土



図166 塔の越遷跡08Aa区B・Cライン土層セクション図

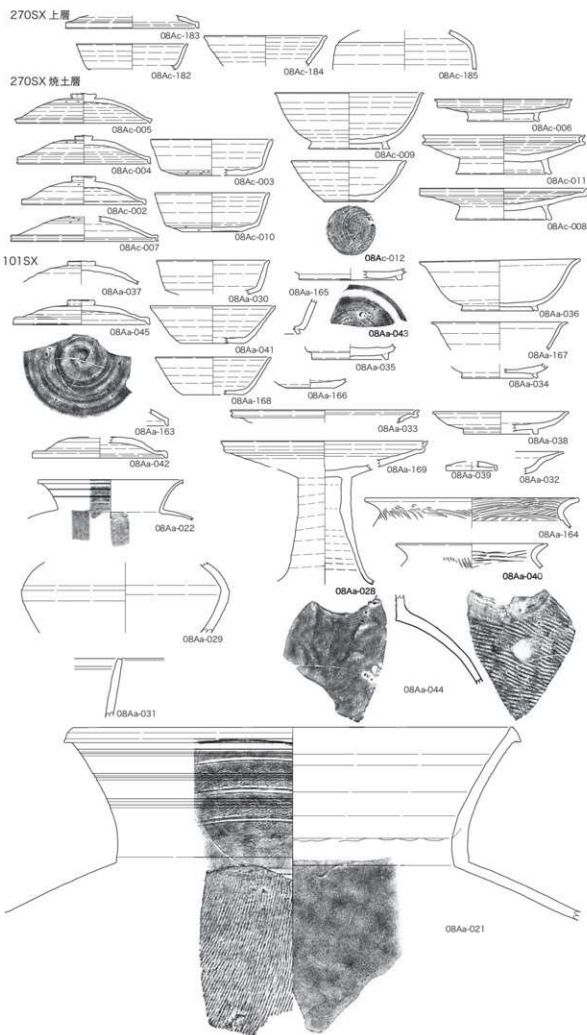


図 167 塔の越道跡 OBAc 区 270SX・OBAs 区 101SX 出土遺物実測図

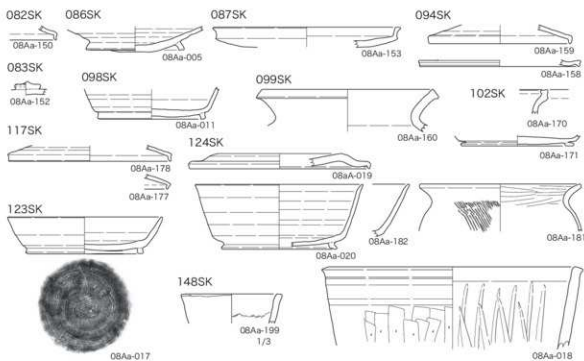


図 168 塔の越遺跡 O8Aa 区出土遺物実測図

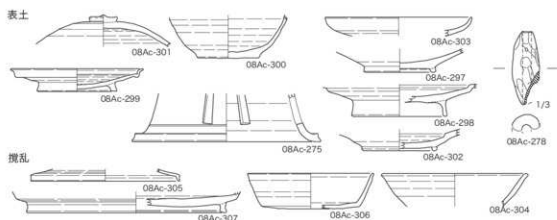


図 169 塔の越遺跡 O8Ac 区出土遺物実測図

遺物は7世紀中頃だが、266SDと並走する点が気になる。

O8Aa 区 101SX O8Aa 区の北部で、南辺が 075SD と重複するように検出された。東部のプランは方形を呈し、底面も平坦であり炭化物の薄層を伴い竪穴建物跡の堆積層に類似するが、南西隅は西に突出して、とても竪穴建物の輪郭にはならない。

須恵器や灰釉陶器の破片が炭化物や焼土塊とともに幾つかのまとまりに分かれて集積していた。上部の傾平を考慮すれば、廃棄土坑の底面付近を調査したことになるのかもしれない。

なお、大形甕は7世紀に属し、隣接する円墳の最終段階に伴うものであり、それが平安時代の造成に際して墳丘が傾平されて出土した際に片付けられた可能性がある。

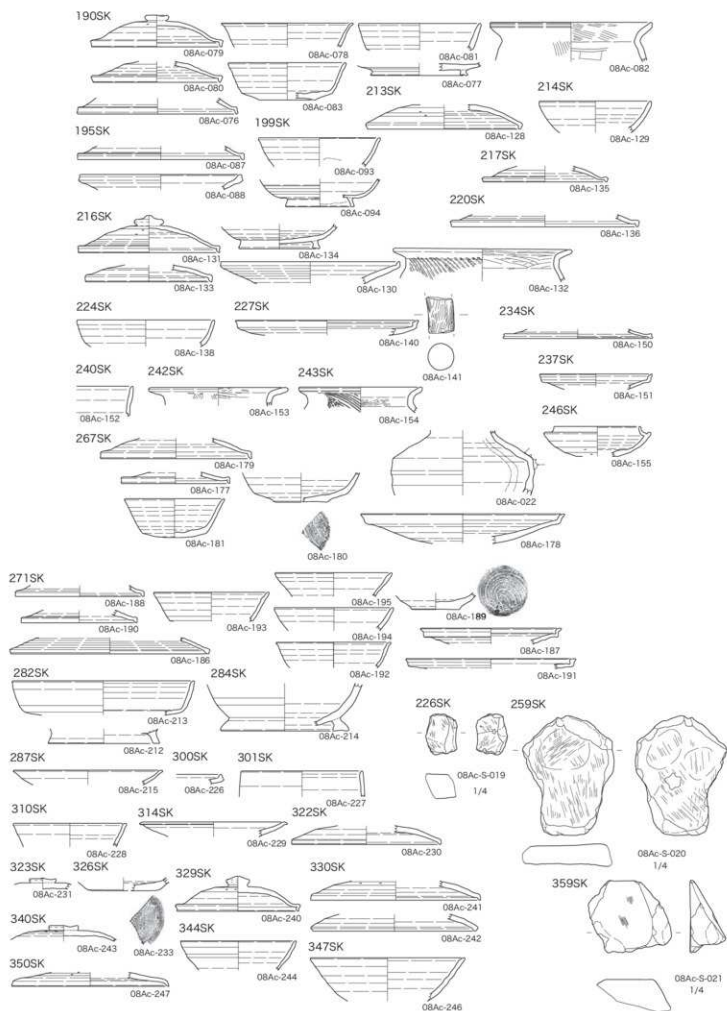


図 170 塔の越遺跡 OBAc 区出土遺物実測図

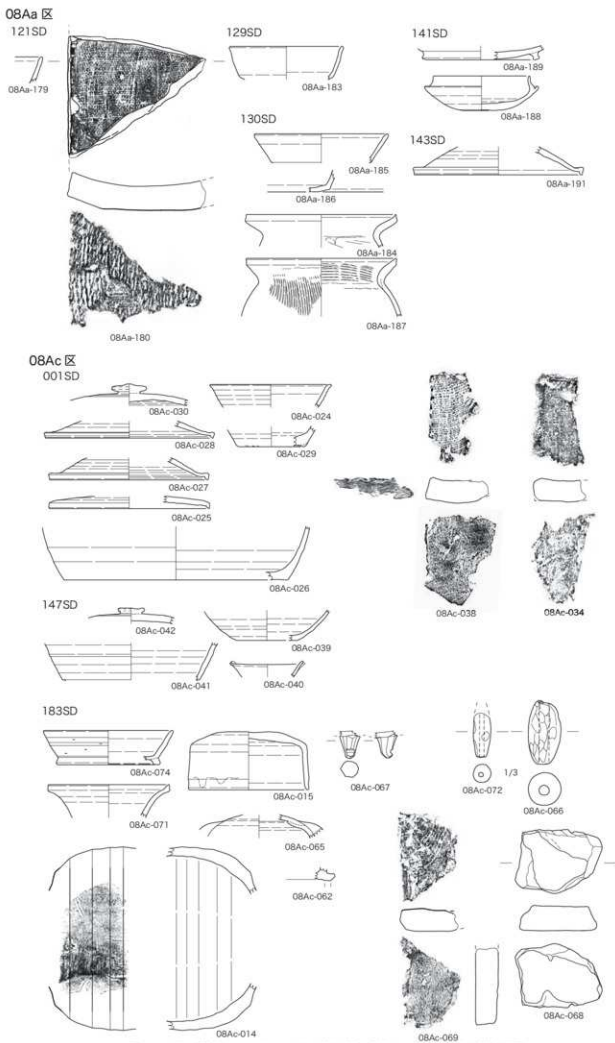


図171 塔の越遺跡 OBAa区・Ac区：近世以降の遺構から出土した古代遺物実測図

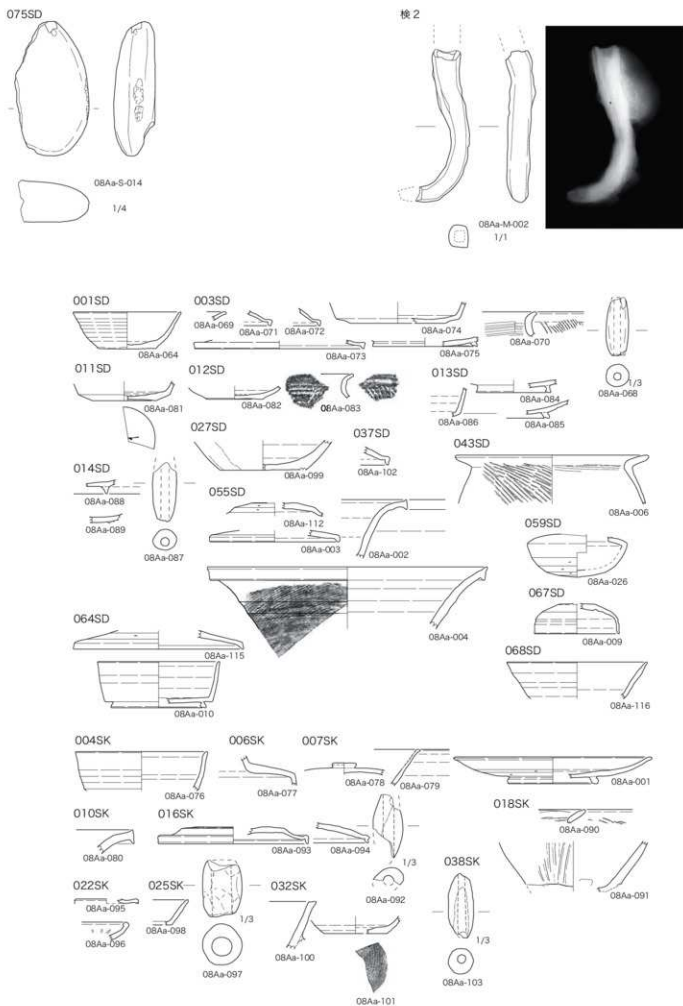


図 172 塔の越遺跡 OBAa 区：近世以降の遺構から出土した古代遺物実測図

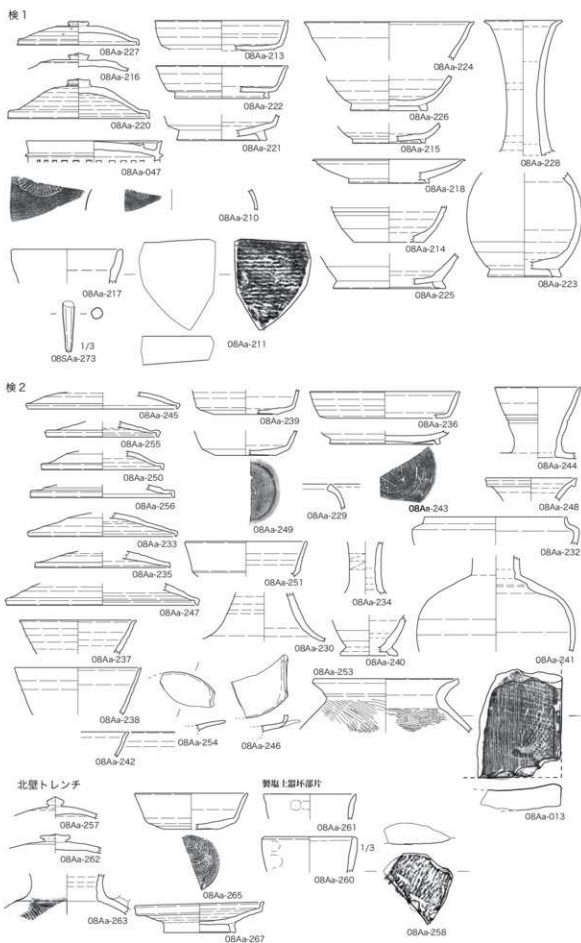


図 173 塔の越遺跡 OBAa 区遺構外出土遺物実測図

検 1

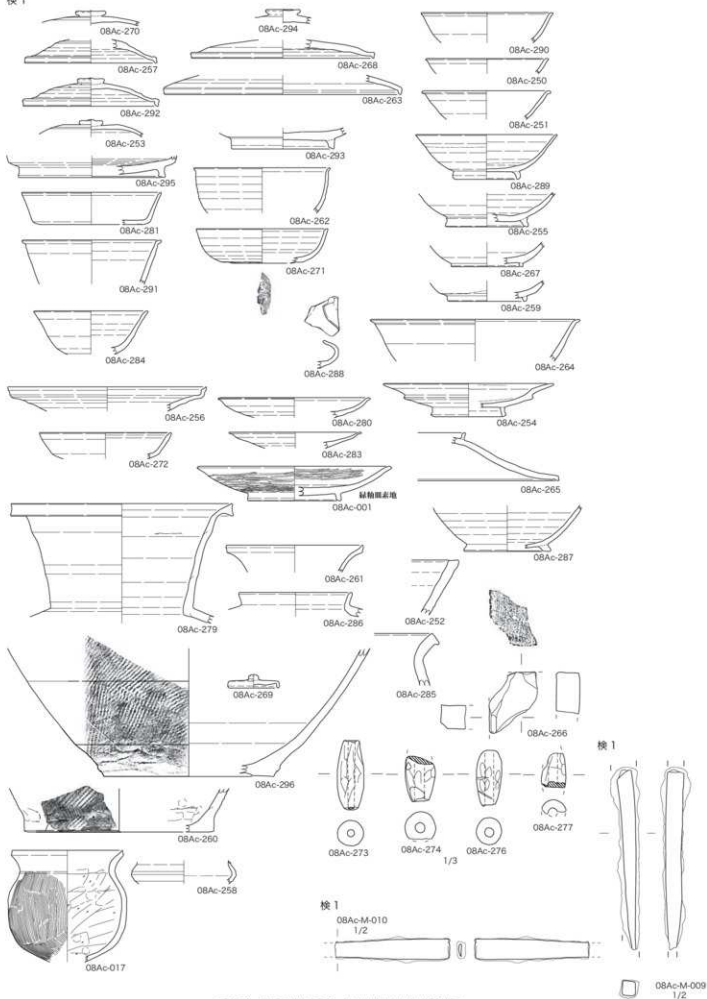


図 174 塔の越道跡 OBac 区遺構外出土遺物実測図

● 09B 区

遺構は近現代の開田と天地返しによる土坑群によって大きな破壊を蒙っている。

112SE 調査区南壁際で検出した。最下部は一段深く落ち込み、漏斗状断面に類似する。しかし、

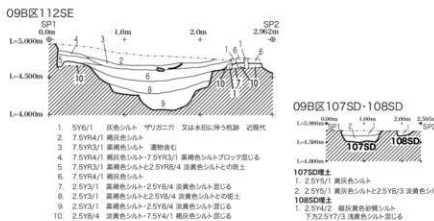


図 175 09B 区遺構土層セクション図



図 176 塔の越遷跡 09B 区出土遺物実測図

周囲の壁面は複雑に段をもち、東壁土段には壁溝のように浅い溝がめぐる。断ち割っていないのでわからないが、壁面崩落による地割れの可能性もある。

出土遺物には7世紀代が目立つが、最下部からは8世紀後半の遺物が出土しているので廃絶時期はそこに求められ、7世紀代の遺構群（古墳周溝を含む）が周辺に展開した可能性を示唆する。

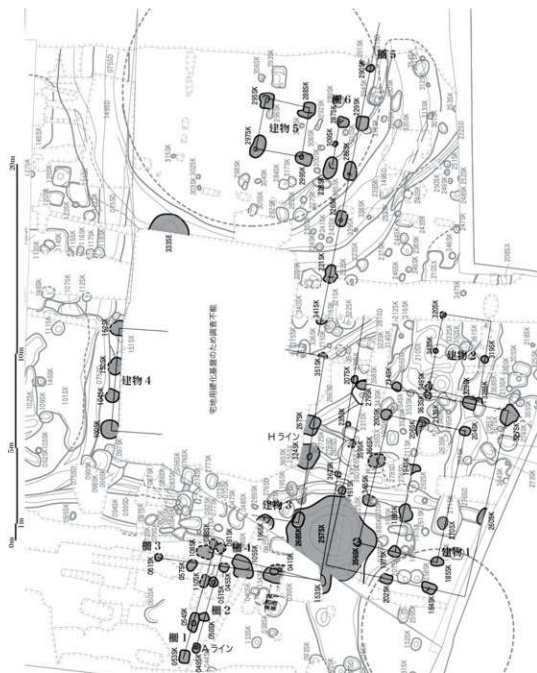


図 177 塔の越道跡 OBAa 区・Ac 区独立柱建物等配図

[OBA 区建物 1] OBA 区西端に位置する。257SX より新しく、270SX が柱穴に重複する。東西長軸の 2 間 × 3 間で、棟持柱はやや北にずれている。そのまわりにも東西辺で東西軸の柱通りを描え、南北両辺では微妙にずれる柱穴列があったが、四面相付独立柱建物に復元した。棟持柱を結ぶラインの柱穴は東柱と推測する。

欄 1・2・4、建物 2、建物 5、欄 5・6 と軸線を共有する。

270SX は後述するように焼上と須恵器類がまがまって出土した土坑であり、直接「柱穴」と認定できる要件は満たさないが、位置関係から柱を抜いた後の行為に関わるものと推測する。

[OBA 区建物 2] 建物 1 の東に接する東西長軸の 1 間 × 2 間の小規模な建物である。南東隅の柱穴は近現代溝と重複して不明である。

[OBA 区建物 3] 建物 1 の北側に位置する。OBA 区

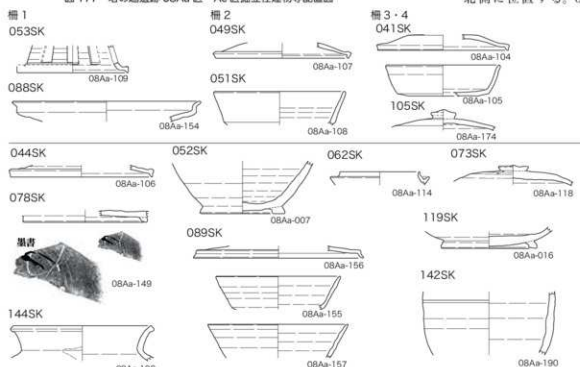


図 178 塔の越道跡 OBAa 区柱穴出土遺物及び遺構出土遺物実測図

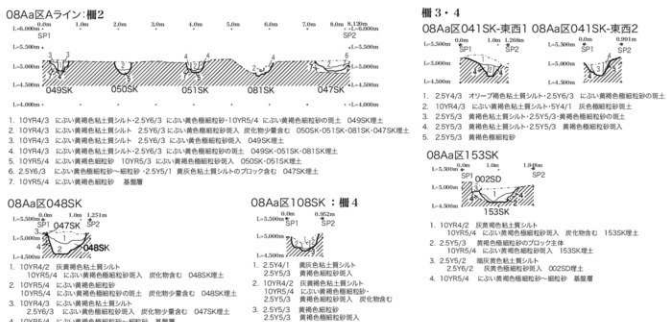


図 179 塔の越遺跡 O8Aa 区遺構土層セクション図

欄 5 O8Ac区226SK



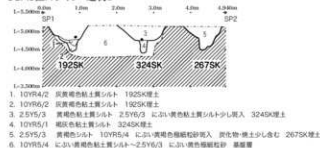
O8Ac区229SK



O8Ac区286SK



O8Ac区Hライン・建物3



建物5

O8Ac区295SK



O8Ac区297SK

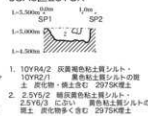


図 180 塔の越遺跡 O8Ac 区遺構土層セクション図

324SK・265SKは上部の大規模な掘形から一段下がって柱穴が設けられている。欄2と軸線を共有する。

[O8A区建物4]北辺の4本を確認したのみである。軸線を共有する建物5に追加は無い。

[O8A区建物5]4本柱の建物である。柱痕は明確だが、その底面は掘形から浮いており、根石も無いので、上屋に重量があった形跡はない。掘形の大きさから見て堅穴建物の主柱とも思えない。「祠堂」のような簡易な建物であったろう。

[O8A区欄1・2]東西軸で隣接する。柱穴には切り合いがあり、順序は欄1→欄2となる。

[O8A区欄3・4]O8Aa区153SKを共有し、軸線が振れ

る。欄3は建物3と軸線が共通する。105SK・041SK・153SKは掘形が大規模である。105SKは掘形に明らかな重複が認められ、041SKは2つの柱痕を確認したが先後は確認できなかった。

[O8A区欄5・6]東西軸の欄列で、軸線は建物5に一致する。欄6は建物5と欄5の間において、小径の309SKを中央に228SKと227SKが建物5の東西辺と欄5の286SKと229SKを結ぶ位置にあり、三者の関連性を示している。欄6の309SKに注目すれば、両開きの扉をもつ「門」を想定できるかもしれない。

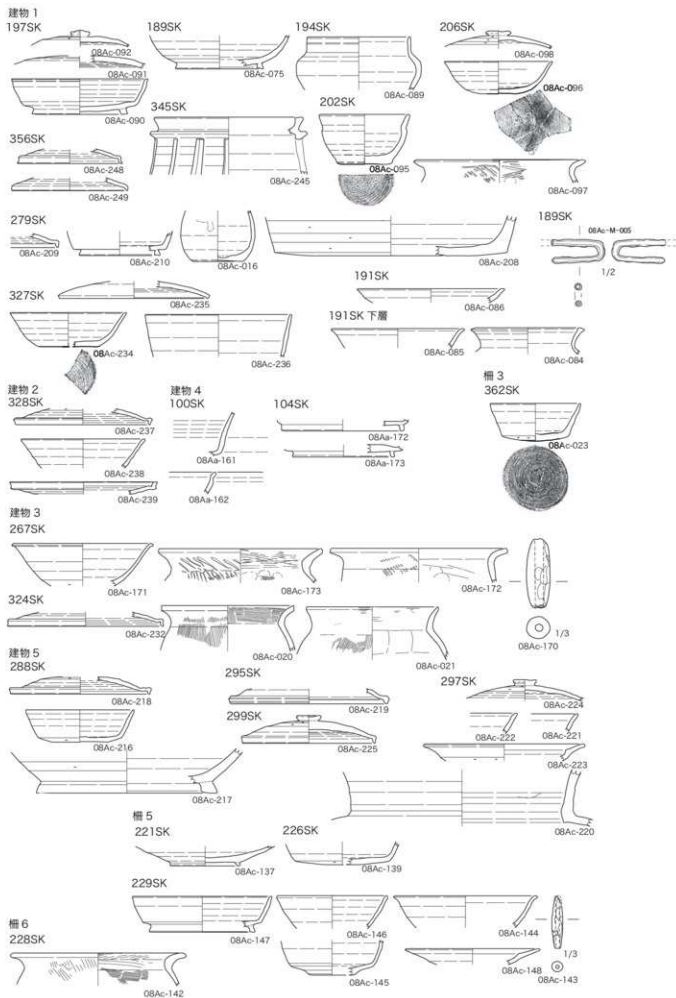


図 181 塔の越遺跡 OBAc 区建物・櫛等柱穴出土土遺物実測図

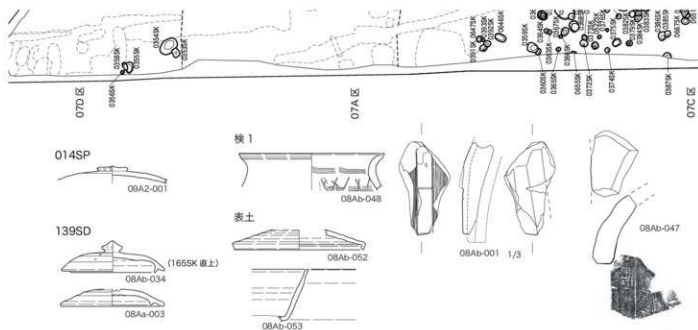


図 182 塔の越遺跡 O8Ab 区・O9A 区出土遺物実測図

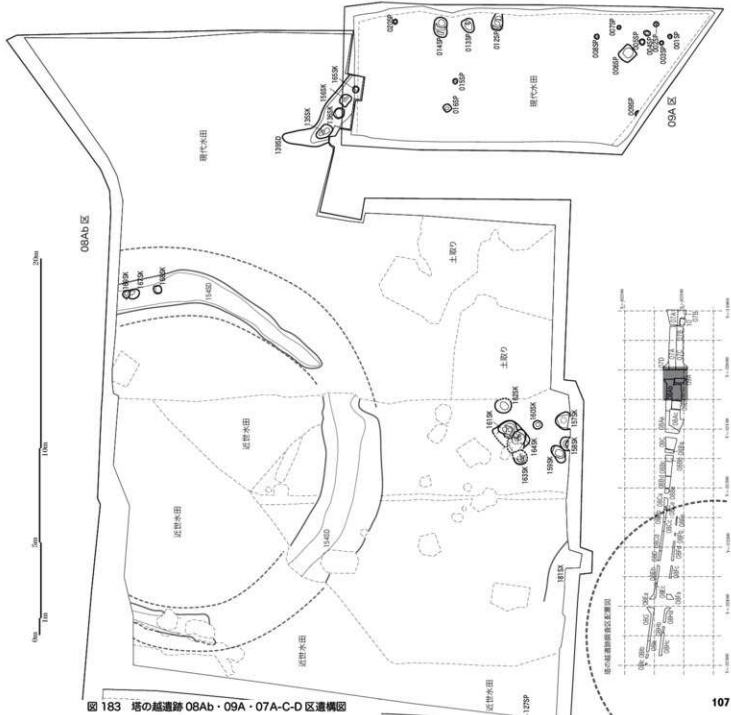


図 183 塔の越遺跡 O8Ab・O9A・O7A-C-D 区遺構図

09A区012SP-013SP-014SP



1. 5Y4/1 淡色シルトと2.5Y7/4黄褐色シルトとの混土
2. 5Y4/1 淡色シルト 2.5Y8/3 淡黄色シルト混る
3. 2.5Y7/4 淡黄色シルト 5Y4/1 淡色シルト混る



1. 2.5Y7/4 淡黄色シルトと2.5Y4/1 淡色シルトとの混土
2. 5Y4/1 淡色シルト 2.5Y8/3 淡黄色シルト混る
3. 2.5Y7/4 淡黄色シルト 5Y4/1 淡色シルト混る



1. 5Y4/1 淡色シルトと2.5Y7/4黄褐色シルトとの混土
2. 2.5Y7/4 淡黄色シルト

● 08Ab区・09A区

08Ab区から09C区は近世以降の開田によって、古墳時代と同様に古代の遺構も大幅に削平されて、整った遺構配置を把握することはできなかった。その中で注目されるのは、円墳の周溝154SDに重複する167SK～168SKで、このうち169SKは柱穴の輪郭が多角形であり、周溝上部と類似した堆積層で埋積していた。柱の抜き穴痕跡は認められなかったため、掘削時の掘形であった可能性が高い。

なお、放射性炭素年代測定では、08Ab区168SK出土炭化材：432-561 cal AD、139SD出土炭化材：579-648 cal ADの測定値を得た。

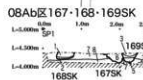
[08Ab区建物1・2]08Ab区南部で北東隅を検出した。柱穴の切り合いから建物1→建物2となる。

[08Ab区堀1] 上部は削平され、断面皿状の底部を検出した139SDの下部で検出された柱穴群からなる。7世紀後半に属す。

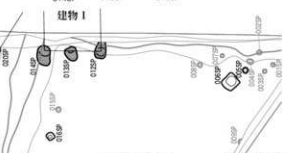
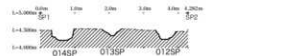
[09A区建物1] 東西軸の西辺(2間)を検出した。柱穴は東西軸に長軸をもつ楕円形の掘形で、中央が浅いのは近接棟持柱だからである。



1. 2.5Y4/2 黄褐色粘土質シルト 2.0Y8/3 黄褐色粘砂質砂混入 灰化シルトと混り 1.360g出土



1. 10YR3/1 黄褐色粘土質シルト-10YR2/1 黄褐色粘土質シルトの混土 168SK埋土
2. 10YR3/1 黄褐色粘土質シルト-10YR2/1 黄褐色粘土質シルト-2.5Y5/3 黄褐色粘砂質砂の混層 168SK埋土
3. 10YR3/1 黄褐色粘土質シルト-10YR2/1 黄褐色粘土質シルトの混土 168SK埋土
4. 10YR3/1 黄褐色粘土質シルト-10YR2/1 黄褐色粘土質シルト-2.5Y5/3 黄褐色粘砂質砂の混層 169SK埋土
5. 10YR3/2 黄褐色粘砂質砂-10YR3/1 黄褐色粘土質シルト-10YR2/1 黄褐色粘土質シルト混入 169SK埋土
6. 10YR3/2 黄褐色粘土質シルト-2.5Y5/3 黄褐色粘砂質砂混入 167SK埋土
7. 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト 凝結層
8. 2.5Y5/3 黄褐色粘砂質砂-粘砂砂 凝結層



1. 10YR4/3 土色黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 土色黄褐色粘砂質砂混入 整地層
- 10YR2/1 黄褐色粘土質シルト-10YR4/3 土色黄褐色粘土質シルト-10YR5/4 土色黄褐色粘砂質砂のブロック状減少し表土 164SK埋土
- 10YR4/3 土色黄褐色粘土質シルトのブロック 10YR5/4 土色黄褐色粘砂質砂 10YR3/1 黄褐色粘土質シルト混入炭化シルトと混り 161SK埋土
- 10YR5/4 土色黄褐色粘砂質砂のブロック 10YR4/3 土色黄褐色粘土質シルト 10YR3/1 黄褐色粘土質シルト混入 炭化物少し混り 161SK埋土

図184 塔の基遺跡 08Ab区・09A区経立柱建物等の配置および遺構土層セクション図

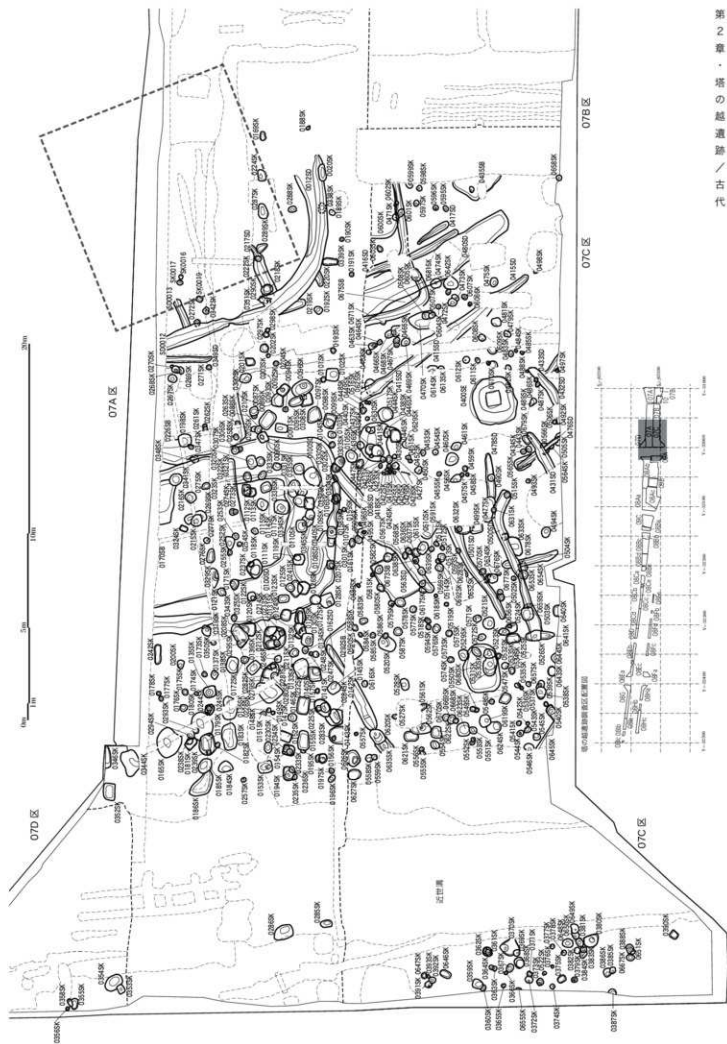


図 185 塔の越道跡 07A-B-C-D 区画構図

● 07 区

古代の遺構は中世以降の耕作土である北壁 30 層の下部で検出されたが、包含層は薄く、全体に大きく削平を受けており、柱穴や土坑以外の遺存状況はけっして良くなかったが、それでも多くの掘立柱建物群を検出できたことは大きな成果であった。なお、掘立柱建物群や堀は東西軸の a 群と北西北西-南南東軸の b 群に分かれる。

掘立柱建物群は、切り合い関係から a 群→b 群となり、b 群は 2 時期に分かれる。ほぼ 8 世紀後半代に収まるようである。

07A 区 170SB・226SB 両遺構ともに上部はほとんど

07A区 170SB・226SB

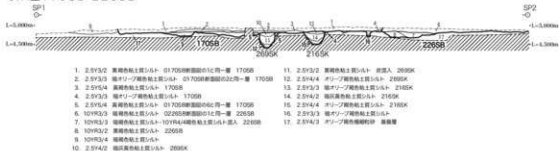
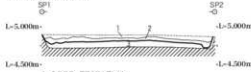


図 186 塔の越道跡 07 区 SB 土層セクション図

07C区 673SB



削平されて、掘形の形状を検出したものである。どちらもカマドの有無は不明である。

このうち 170SB は、出土遺物が 8~9 世紀と幅があり、出土量も豊富で、堆積層の一部には焼土や炭化物は含まれているが、竪穴建物跡である確証はない。

一方、SB226 は 7 世紀の環蓋以外ほとんど遺物が出土していないが、性格は同様である。

07A 区 292SB 07A 区と 07C 区にまたがる。北東隅を検出したが、07C 区では検出できなかった。カマドの有無は不明。

07C 区 435SB 西半分を検出した。北端で壁が曲がり始めているが、それでは幅 2m にも満たない規模となる。出土遺物は 8 世紀後半に属す。

07C 区 673SB 東西長約 2.3m のやや菱形を呈する。カマドの有無は不明である。

07C 区 675SB L 字に屈曲する溝を検出し、周溝と判断して SB 番号を付与した。

以上のように 07 諸区で検出された「SB」については、

削平を考慮してもカマド痕跡が皆無である点は、竪穴建物の展開について検討の余地があることを示している。

07C 区 400SE 4 本の丸太を黄灰色粘土層まで打ち込んで隅柱とし、その外側に東西南北一枚ずつ厚板を並べて四方の土留めとしている。東側は腐食が進み、一枚板かどうか不明。

底面は灰色細粒砂層まで掘り込まれ、側板の下部より深い位置に隅門長方形の曲物を置いている。

検出時には掘形と井戸材の間は灰土で充填され、廃絶時の抜き取りに伴う再掘削が底部に及んでいる様子が見えなかった。

調査時には掘形から中世陶器片が出土したことから年報では 12 世紀に属す井戸として報告している。今回の報告においては井戸の形状や出土遺物の様相を考慮して古代の可能性を強調しておくが、なお判断としない点があることを明記しておく。

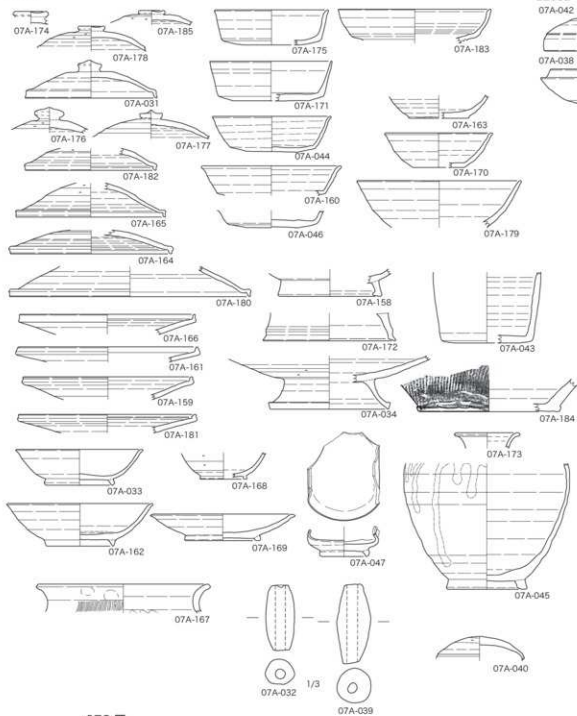
なお、南東及び南西の隅柱について放射性炭素年代測定を実施した結果、前者は 1 0 暦年代範囲において 670-695 calAD (56.4%) および 756-765 cal AD (11.8%)、2 0 範囲において 666-717 cal AD (74.4%) および 749-771 cal AD (21.0%)、後者は 1 0 暦年代範囲において 674-698 calAD (53.6%)、2 0 範囲において 669-718 cal AD (72.2%) および 750-771 cal AD (23.2%) であった。概ね遺構・遺物から想定される年代に沿うものである(年代測定:パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ)。

07A 区 012SD 方位は 07C 区 675SB に共通するが、南西隅は緩やかにカーブする。上部は削平のため、幅は一定しない。深さは約 20cm で、底面標高は 100SD に近い。この溝の北東側では古代の遺構がほとんど展開しないこと、また付近から須恵質埴輪片が出土していることから、削平された墳墓の裾を画する溝であった可能性がある。

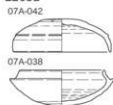
07A 区 100SD 北に開くやや歪んだコ字状の溝で、幅

07A区

170SB

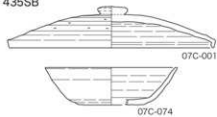


226SB



07C区

435SB



675SB

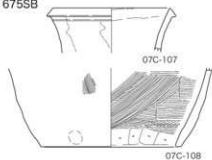


図 187 塔の越遺跡 07区 SB 出土遺物実測図

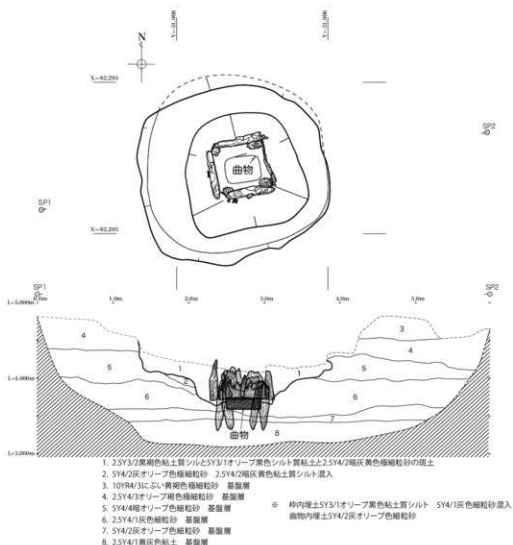


図 188 塔の越遺跡 07C区 400SE 平面図・側面図・土層セクション図

は2～2.5m、深さは20～30cmを測る。検出状況は、浅く平坦で、外周にそって部分的に深くなる部分がある。堆積層には炭化物や焼土を含む部分もある。

07A区北壁土層断面では、直上に炭化物や焼土を含む人為的な堆積層があり、上部に竪穴建物が重複した可能性がある。床面下部の掘形に周溝をめぐらす竪穴建物が古代にも少なくないことから言えば、深さはあるものの100SDは竪穴建物の掘形の可能性も残る。

170SBや226SBを含めて、ほとんどの遺構に切られるので、8世紀前半まで測るかもしれない。

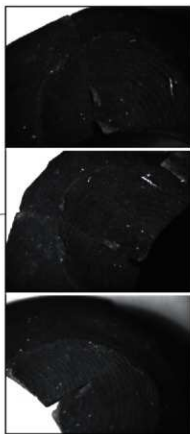
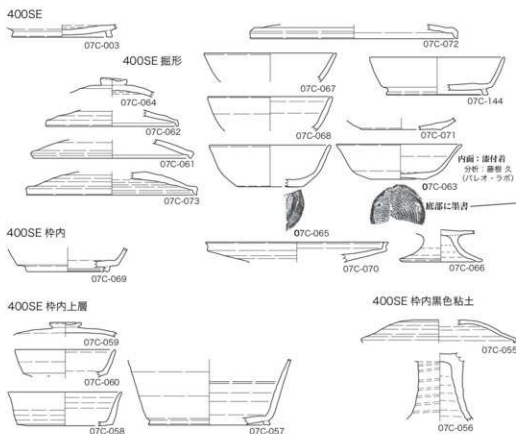
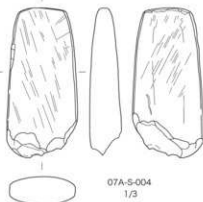


図 189 塔の越遺跡 07C区 400SE 出土遺物実測図

170SB

07A-S-004
1/3

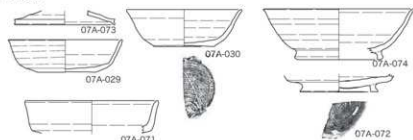
※縄文時代の定形式石罫がどのような経緯で塔の越遺跡にもたらされたのか興味深い。井戸の設置によるのであれば下層に包含層の存在を想定する必要もあるが、確認調査では黒色粘土質シルト層を抽出したのみで、遺物はともなっていない。ただ、同層上面が縄文晩期から弥生前期の目地表であった可能性が高いことは、周辺における遺跡の存在を鑑みるに十分である。



086SD

07A-M-001
1/2

012SD



07A-073

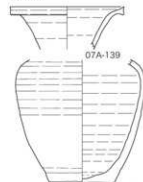
07A-029

07A-030

07A-074

07A-072

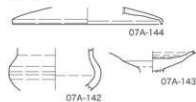
068SD



07A-139

07A-140

100SD



07A-144

07A-142

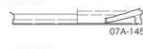
07A-143

060SK



07A-138

107SK



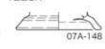
07A-145

110SK



07A-146

122SK



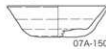
07A-148

123SK



07A-149

124SK



07A-150

127SK



07A-151

131SK



07A-152

138SK

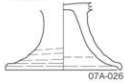


07A-155

07A-157

07A-156

147SK



07A-026

179SK



07A-187

07A-186

183SK



07A-190

07A-188

07A-189



07A-191

1/3

07A-192

185SK



07A-194

1/3

07A-193

208SK



07A-195

245SK



07A-199

236SK



07A-196

238SK



07A-198

07A-197

325SK



07A-204

252SK



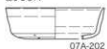
07A-200

278SK



07A-201

295SK



07A-202

301SK



07A-203

図190 塔の越遺跡 07A区遺構出土遺物実測図

07A区 441SK

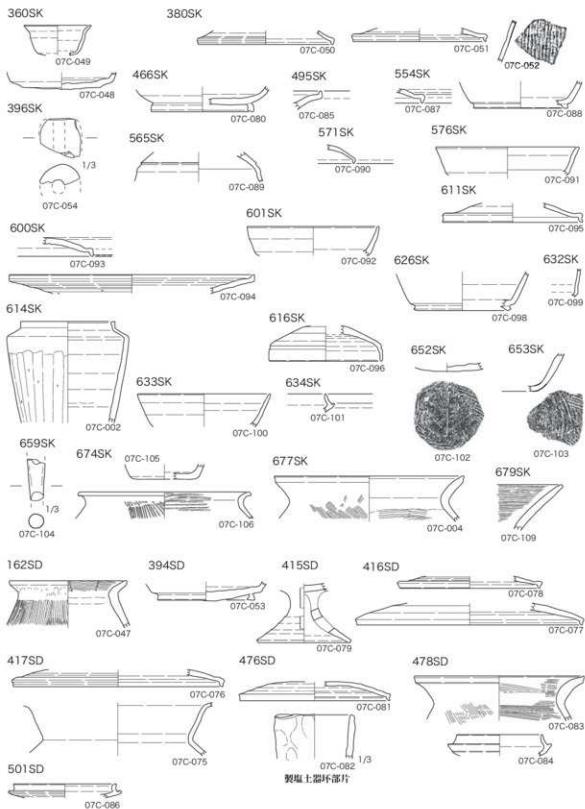
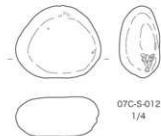


図 191 塔の越遺跡 07C区遺構出土遺物実測図

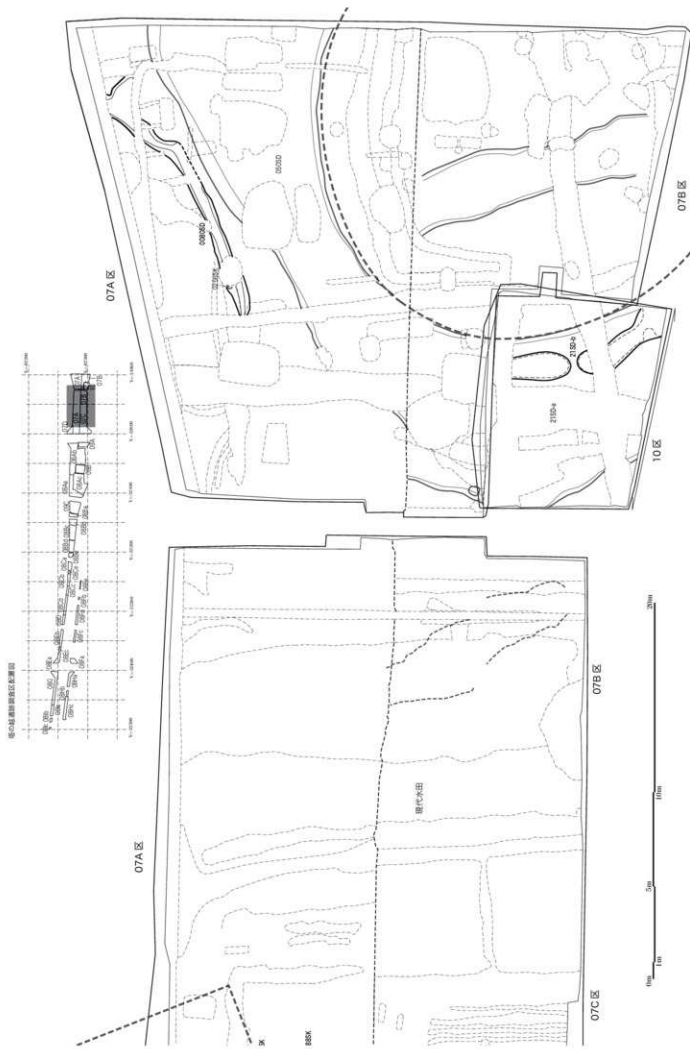


図 192 塔の越道跡 07A-B-C区遺構図

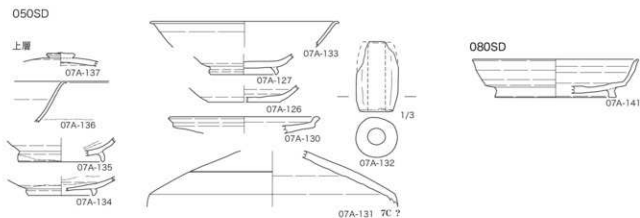


図 193 塔の越道跡 07A 区東部遺構出土土物実測図

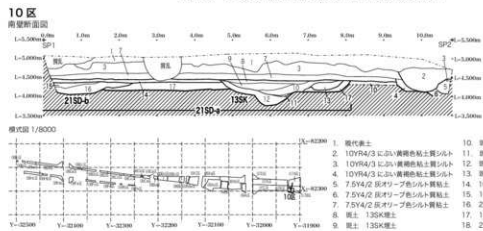


図 194 塔の越道跡 10 区南壁土層セクション図

07A・B 区 050SD、10 区 21SD-b 07A 区と 07B 区を南北に貫いて近現代に開田された水田があり、そのために多くの古代遺構を滅失した可能性もあるが、その東側には古墳前期の円墳周溝である 050SD の痕跡と、その北側に不定形な溝 080SD が存在するのみで、意外な程古代の遺構をみることが無いことから、むしろこのエリアでは古代の建物遺構が激減する境界域であった可能性の方が高い。

つまり、掘立柱建物群が展開する理由には旧地表面高度の低さ、つまりこのエリアが集水、もしくは湛水地区であり、古墳前期の墳墓の存在もそのことと無関係ではなく、土地利用の上からも主要な日常生活活動域外であった可能性を窺わせる。考えられるのは水田域であるが、平面的にも、土層観察からもそうした痕跡は確認

きていない。

07A・B 区 050SD および 10 区 21SD-b は、上部に黒褐色から暗褐色粘土質シルトが堆積しており、西方に展開する長野北浦遺跡でも同様の遺構・堆積層に 7～8 世紀の遺物を含むことから、これらも同様と考えられたが、10 区の調査では周溝の内側に再掘削痕 (21SD-b) を確認したので、自然の埋没過程で単純に古代の遺物が堆積するわけではないことが明らかになった。何より、050SD の上層からは灰陶器もまともに出土しており、08Aa 区・08Ac 区 149SD 同様に、整地が行われた可能性も推測される。

ただ、9 世紀以降には塔の越道跡から長野北浦遺跡にかけて墳丘が削平される事態に多くの墳墓がみまわれた中で、050SD で囲まれた「高まり」のみ削平を免れて近世末まで墳丘を維持したことは特筆されるが、現在その姿を見ることがないのは残念である。

07A 区 080SD 050SD 北縁に平行してのびるか直進性には欠ける。西側は途切れ、東側も拡張が分岐がわからないが終息するようなので、北東方向にのびることは確かなようだ。その先については、050SD も溝中央が一段深く掘られて東へ深くなる様相を示して

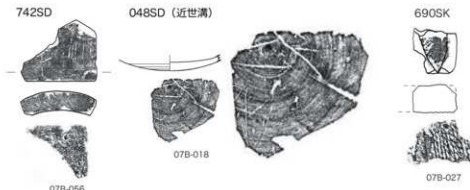


図 195 塔の越道跡 07B 区出土土物実測図

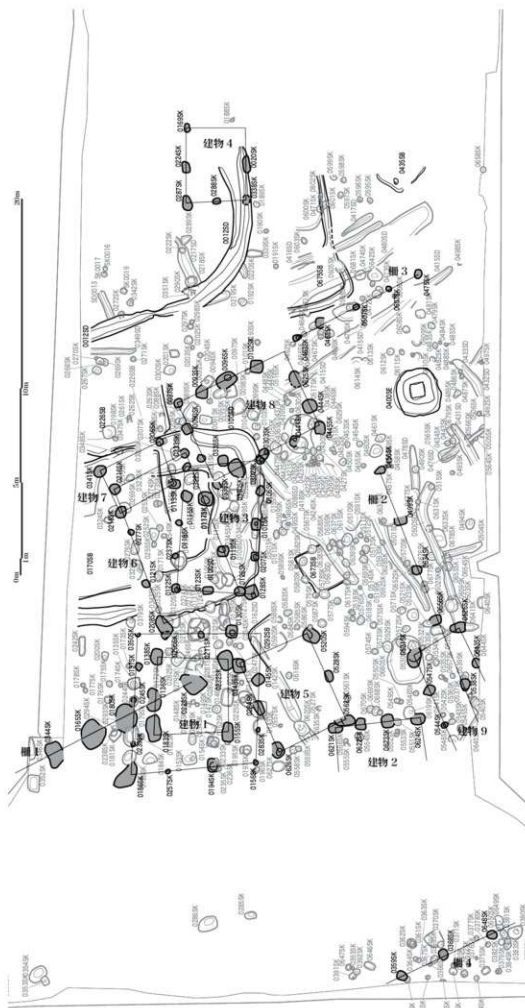


図 196 塔の越道跡 O7 区掘立柱建物等配置図

り、調査区外となる東側の市道に南北方向の凹地が存在した可能性があるとするれば、地表水を排水する機能を備えていたのかもしれない。

[O7区建物1] 掘形の大きな4本柱の不整形な配置で、そのまわりに掘形の一定しない柱穴がやはり台形状にめぐる。不整形なプランだが四面相付建物と考えられる。柱間1間の建物はO7Ac区でも検出しており、本例も同様に軽微な建物であろう。a群。

[O7区建物2] 東辺の4本柱を検出した。主軸線は不明である。柱痕派認められない。621SKのみやや浅い。a群。

[O7A区建物3] O7A区100SDに重複する。西辺の棟持柱の位置は北にずれ、南辺の柱の間隔は北辺より広く、平面は台形を呈する。a群。

[O7A区建物4] O7A区012SDに重複する。338SKは012SDに切れられ、020SKは012SDを切るが、調査上の誤認と考える。a群。

[O7A区建物5] 北東隅の柱穴と南西隅の柱穴はa群建物群を切る。1間×2間の建物だが、梁間は広いので棟持柱が検出できなかった可能性がある。b群。

[O7A区建物6] 1間×3間の、建物3と同様にやや台形のプランを呈する。梁間が広いので、棟持柱が未検出の可能性はある。b群。

[O7A区建物7] 1間×1間だが、やや長台形を呈する。竪穴建物の主柱穴である可

07A区大形柱六列：欄1



図 197 塔の越遺跡 07A 区欄 1 柱六土層セクション図

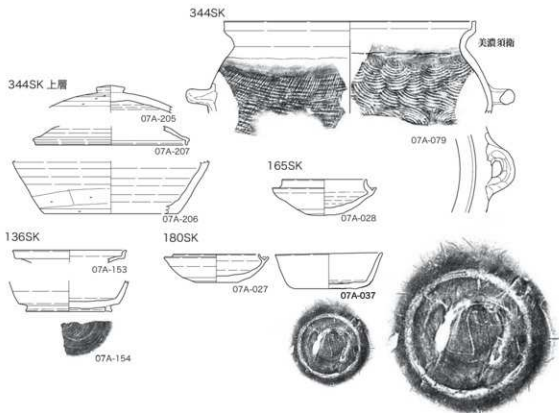


図 198 塔の越遺跡 07A 区欄 1 柱六出土物実測図

07C区444SK・445SK・625SK:建物8



07C区621SK・622SK・623SK・624SK:建物2



図 199 塔の越遺跡 07C 区掘立柱建物柱六土層セクション及び出土物実測図

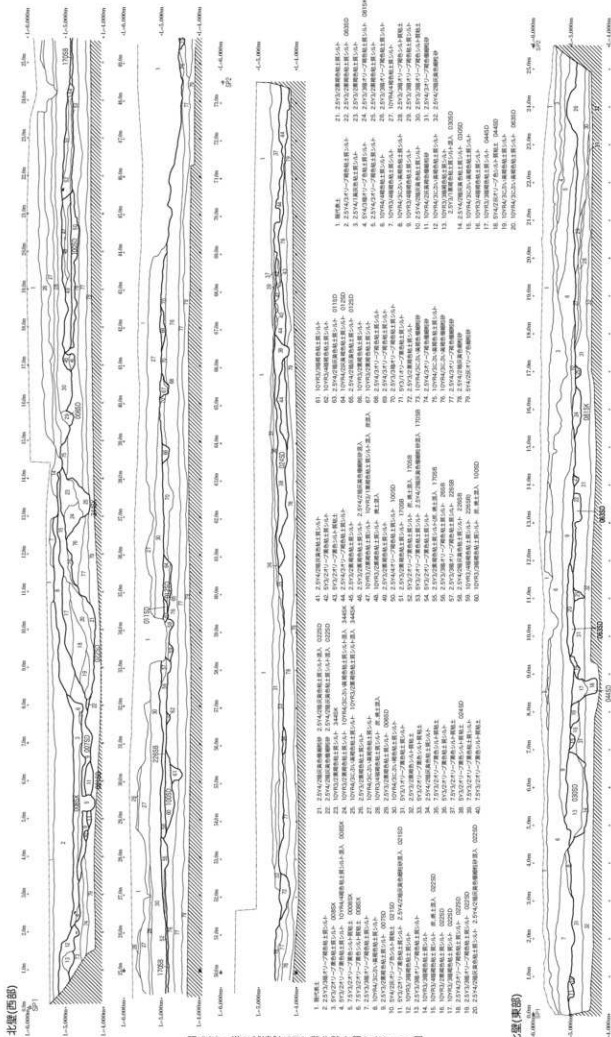
能性は否定できない。b 群。

[07A 区建物 8] 3 間×4 間の建物で、建物 3 に重複する。
[07A 区欄 1] 調査当初には「大形土坑列」と認識されたもので、大規模な掘形をもつ柱列である。1 列しか見つかっていないので掘立柱建物になる可能性は低い。180SK と 165SK は掘形が二段になり、前者は径約 40cm の、後者は径約 25cm の柱痕？を底面に残す。b 群。

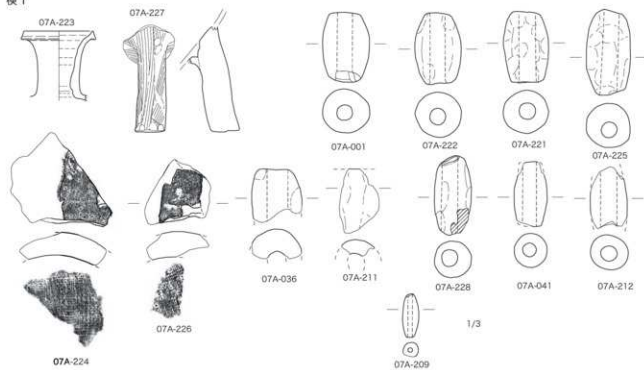
[07A 区欄 2] 建物 9 に重複するが、先後関係は不明である。建物 9 と軸線は合わないが建物 6 とは合うので、b 群内での時期差ということになる。

[07A 区欄 3] 建物 8 東辺と軸線を合わせている。

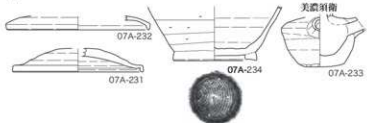
[07A 区欄 4] 調査区西端で検出した。軸線は b 群に含まれるが、欄 2 とは直交しない。



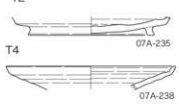
横1



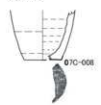
T1



T2



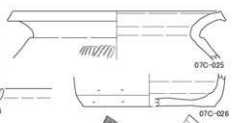
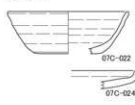
近世溝
004SD



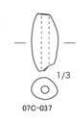
007SD



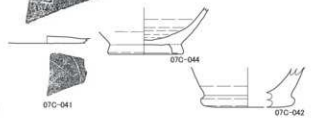
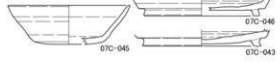
014SD



021SD



022SD



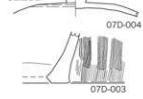
007SD



021SD



022SD



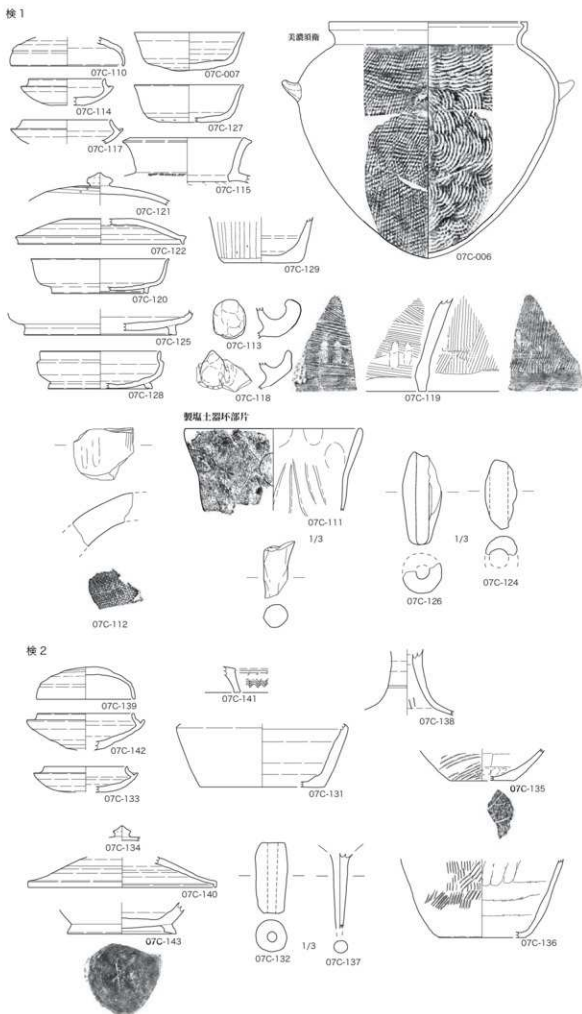


図 202 塔の越遷跡 07C 区遺構外出土遺物実測図

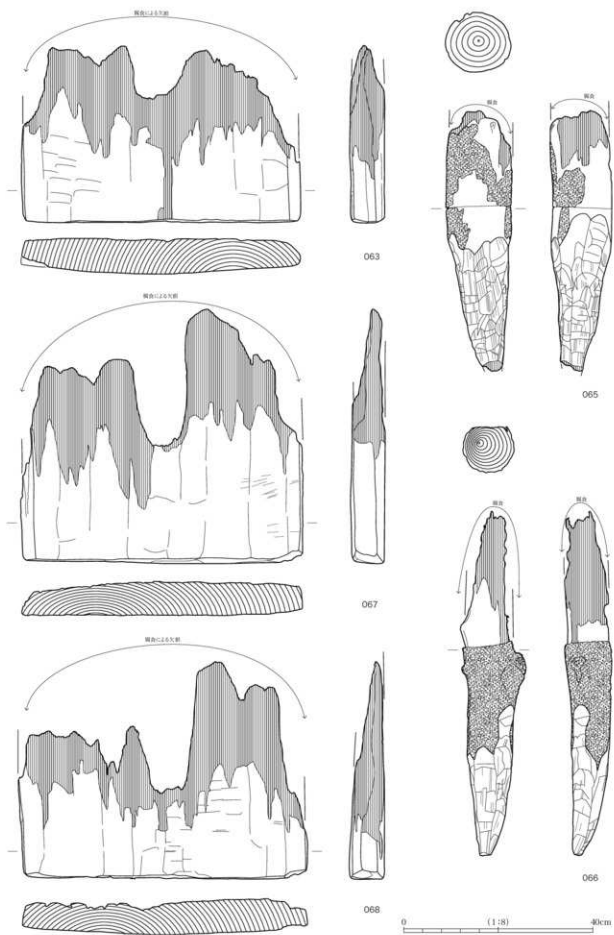


図 203 塔の越遺跡 07C 区 400SE 出土木製品実測図

●塔の越遺跡各区出土古代木製品

07C区 400SE

063～069は井戸400SEからの出土。うち、063が南、067が西、068が北の側板。065は南東、066は南西の隅柱。064は最下部の水溜か。

063・067・068は、幅約60cm、厚さ約7cmもある巨大な一枚板で、上端部が腐食している。いずれも板目

材を用いる。

065・066は樹皮付きの芯持ち丸木で、下端部を尖らせる。

064は隅丸方形の曲物側板で、榫皮綴じが二重にほどこされている。

069は板目に取った板に2カ所穿孔をほどこしており、榫皮が残る。北の側板の一部。

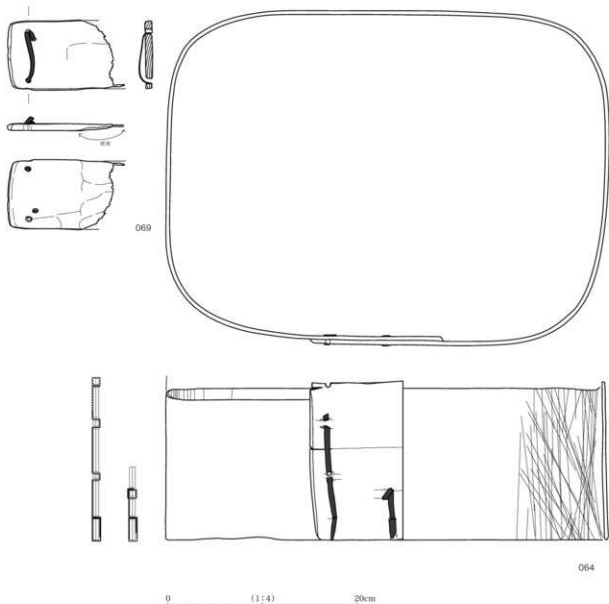


図204 塔の越遺跡07C区400SE出土木製品実測図

08Ba-046SE

070 は井戸 046SE の底板で、湧水を引くために2カ所の穿孔をほどこす。一边が約75cm、厚さ約5cmもある巨大な板目材で、両面に多数の対物傷をとどめることから、別の用途からの転用材である可能性が高い。

08Ca-032SK

072 は棒状品。途中で段を設けて、図面上の上半部を細くする。下半部は断面が六角形、上半部は四角形に面取りをほどこす。

(樋上 昇)

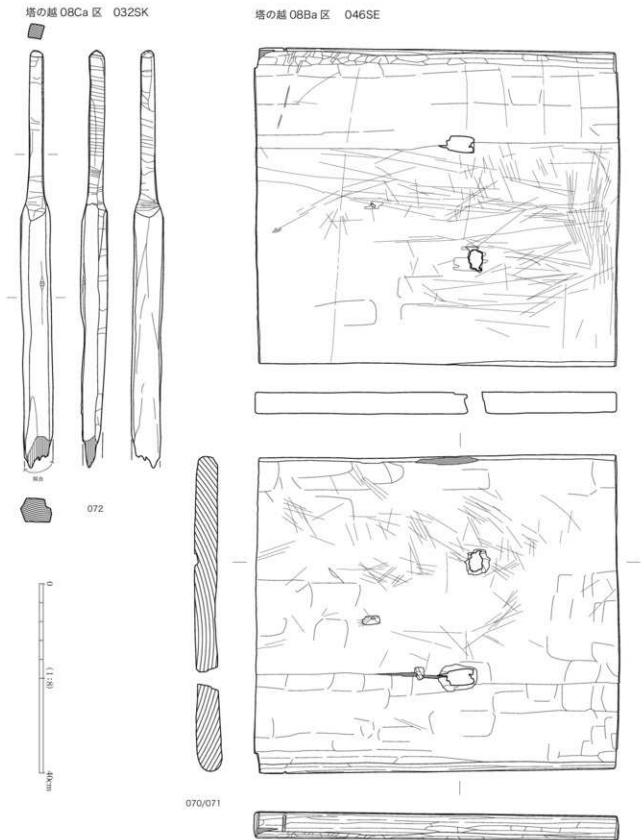


図 205 塔の越遺跡出土木製品実測図

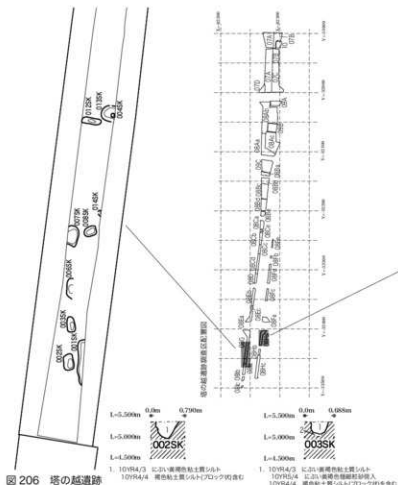


図 206 塔の越遺跡
OBG区遺構平面図

図 207 塔の越遺跡 OBG区土坑土層セクション図

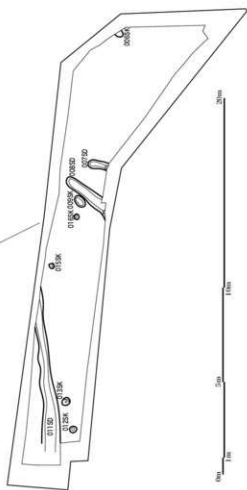


図 209 塔の越遺跡 Ha区遺構平面図



図 208 OBlc区
出土遺物実測図

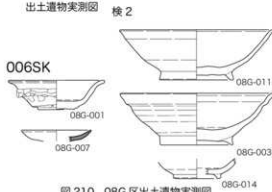


図 210 OBG区出土遺物実測図

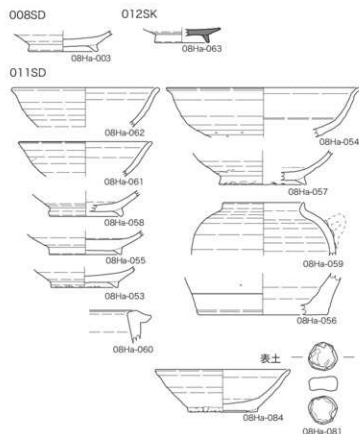


図 211 OBlHa区出土遺物実

(1) 中世

A. 概要

中世の遺構は 07区でまとまっている以外は散漫で、遺物の分布も同様である。以下では主要な遺構・遺物について述べる。

B. 遺構・遺物

● OBl・G区

081区では東端に土坑群があるが、時期は不明で、

08G区との関連でいえば、中世に属す可能性がある。

08G区西部では東西南北の長軸をもつ土坑群が展

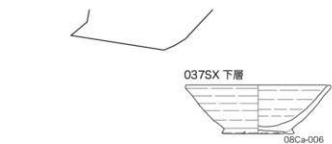


図 214 08Ca 区出土遺物実測図

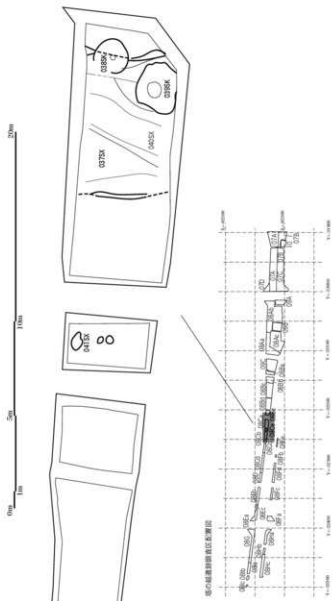
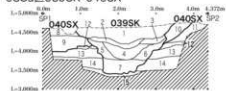


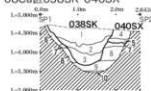
図 212 塔の越遺跡 08Ca 区遺構平面図

08Ca区039SK-040SX



- 10VR5/3 紅土・黄褐色粘土質シルト-10VR5/2 灰黄褐色粘土質シルトの混入 039SK埋土
- 10VR4/2 灰黄褐色粘土質シルト
- 7.5Y4/1 灰色シルト質土の混入 中側に植物遺体(草木)の遺留を伴った 039SK埋土
- 2.5Y4/1 黄褐色粘土質シルト-2.5Y5/2 黄褐色粘土質シルト
- 2.5Y3/1 黄褐色粘土質シルトの混入 039SK埋土
- 10V4/1 灰色シルト質土 中側に植物遺体(草木)の遺留を伴った 039SK埋土
- 10V4/1 灰色シルト質土-2.5Y4/1 粘り強い灰色粘土質シルトの混入 039SK埋土
- 2.5Y4/1 粘り強い灰色粘土質シルト-2.5Y5/1粘り強い 灰色粘土質シルトの混入
- 5Y2/1 黄褐色粘土質シルト 039SK埋土
- 2.5Y4/1 粘り強い灰色粘土質土-5Y2/1 粘り強い灰色粘土質シルトのフロック状 039SK埋土
- 10VR4/2 灰黄褐色粘土質シルト-2.5Y5/2 粘り強い黄褐色粘り砂の混入
- 10VR3/2 黄褐色粘土質シルトの混入土質 040SX埋土
- 5Y4/1 灰色シルト質土 植物遺体(草木)本多 加工の跡(多量) 040SX埋土
- 2.5Y5/2 黄褐色粘り砂-2.5Y2/1 黄褐色粘土質シルトの混入・フロック 040SX埋土
- 10VR5/4 紅土・黄褐色粘り砂-粘り砂 基礎層
- 2.5Y4/1 粘り強い灰色粘土質シルト 基礎層
- 5Y3/1 粘り強い灰色粘土質シルト 基礎層
- 2.5Y4/1 粘り強い灰色粘土質シルト 基礎層
- 10VR2/1 黄褐色粘土質土(混入) 基礎層

08Ca区038SK-040SX



- 10VR4/1 黄褐色粘土質シルト-2.5Y5/2 粘り強い黄褐色粘土質シルトの混入
- 10VR3/2 黄褐色粘土質シルトの混入 赤土質シルト含む 038SK埋土
- 2.5Y5/1 黄褐色粘土質シルト-2.5Y5/2 粘り強い黄褐色粘土質シルト
- 2.5Y6/2 灰黄褐色粘り砂の混入土層(10VR2/1 黄褐色粘土質シルト)の混入 038SK埋土
- 2.5Y6/2 灰黄褐色粘り砂-10V5/1 灰色粘り砂の混入 038SK埋土
- 10VR4/2 灰黄褐色粘土質シルト-2.5Y5/2 粘り強い黄褐色粘り砂の混入
- 10VR3/2 黄褐色粘土質シルトの混入土質含む 040SX埋土
- 2.5Y5/3 黄褐色粘り砂-2.5Y2/1 黄褐色粘土質土と混入・フロック 040SX埋土
- 10VR5/4 紅土・黄褐色粘り砂-粘り砂 基礎層
- 2.5Y4/1 粘り強い灰色粘土質シルト 基礎層
- 5Y3/1 粘り強い灰色粘土質シルト 基礎層
- 2.5Y4/1 粘り強い灰色粘土質シルト 基礎層
- 10VR2/1 黄褐色粘土質土(混入) 基礎層

図 213 08Ca 区遺構土層セクション図

閉し、06SK には古瀬戸灰軸小皿が伴ない、墓坑の可能性がある。

●08Ha 区

溝や小穴が検出されたが、性格は不明である。

011SD 010SE 廃絶後に設けられた上部の土坑に重複して掘削されており、明らかな時間差がある。

●08Ba・09C 区

近世の溝に並行する 08Ba 区 045SD と 09C 区 204SD は一連で、そこに 08Ba 区 041SX が重複している。

041SX

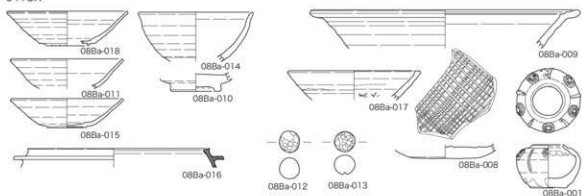


図 215 塔の越遺跡 08Ba 区出土遺物実測図

204SD 断面では北側が一段浅くなっているが、時期の異なる溝が重複した形跡は無い。これが屋敷地の区画溝かどうかについて、09C区250SPも近い時期であるが溝肩に接しており同時存在とはならないこと、また対応する柱穴は無いので建物が展開する可能性は低いと判断する。

これらの遺構は、いずれも山茶碗10型式から11型式(脇之島)が出土しており、15世紀前半に属す。

09C区204SD

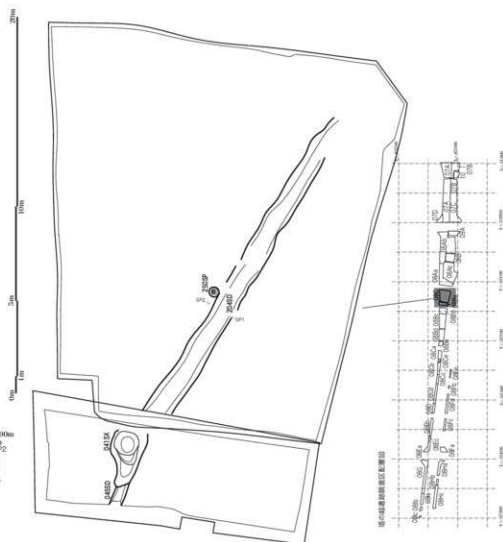
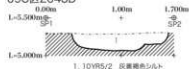


図216 塔の越遺跡09C区遺構平面図、204SD土層セクション図

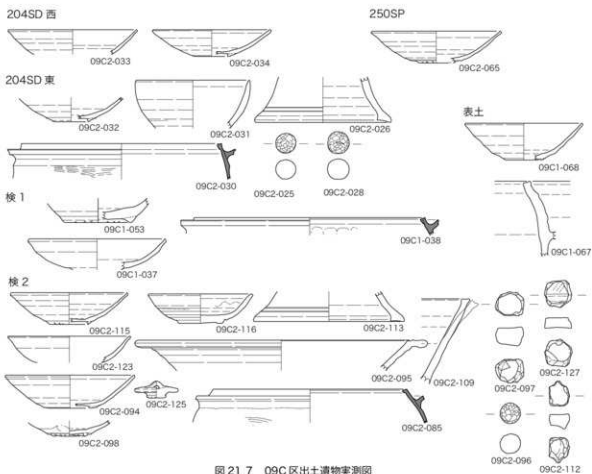


図217 09C区出土遺物実測図

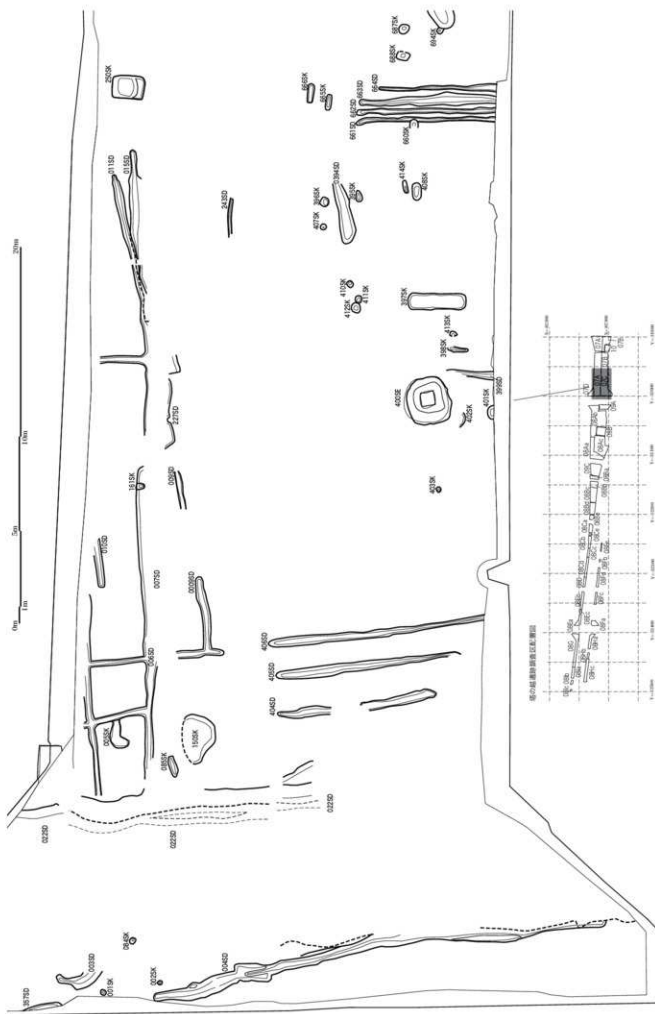


図 218 塔の越遺跡 07A・C 区遺構平面図

● 07 区

調査区西端の南北に走る 004SD は微妙に屈曲している。他は南北軸、東西軸ともに直線的、もしくは明らかに屈曲する。

近世溝と重複する 022SD 以東では、東西に走る 009SD 以北で方向に直交する溝群があり、島の区画の可能性もある。以南では、404～406SD、661～664SD のように南北軸を基調に溝が掘削されている。

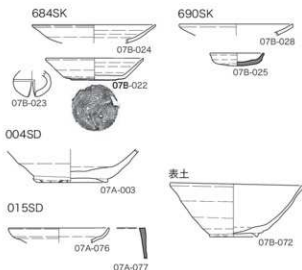


図 219 塔の越遺跡 07A・B・C 区出土遺物実測図

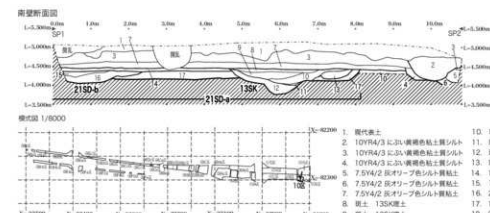


図 222 塔の越遺跡 10 区南壁土層セクション図

軟溝というには広がりもないので、それとは異なるのでろう。

その中で問題になるのが 400SE であるが、周辺に屋敷地を窺わせる遺構配置は認められない。むしろ、南北平行溝群を挟んで東に位置する 690SE 周辺で柱穴群や大小の土坑が展開していること、東の 030SD・10 区 05SD が幅 2～2.5m を測り、断面逆台形のしっかりした溝であることとの関連の方に注意が引かれる。

030SD や 10 区 05SD の西側にある 067SD・720SD・10 区 09SD はいずれも斑土が堆積し、掘削後にほどなくして埋め立てられたものと推測される。部分的には溝状の土坑が連続したものともいえるが、性格は不明である。

なお、07A 区北東端には南北軸の小溝が平行する様子が認められ、これらのほうが軟溝である可能性が高いと考える。

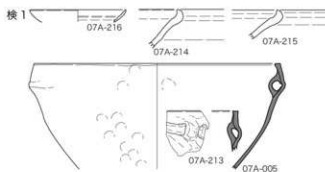


図 220 塔の越遺跡 07B 区遺構外出土遺物実測図

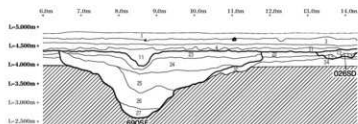


図 221 塔の越遺跡 07B 区 690SE 土層セクション図

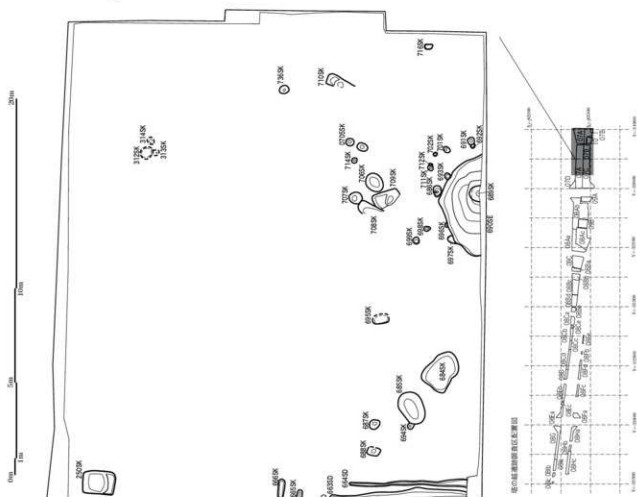
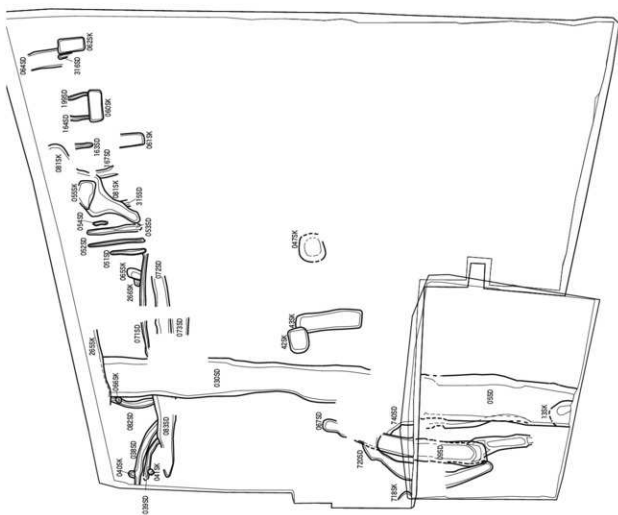


図 223 塔の越遺跡 07A・B区、10区遺構平面図

(4) 近世

A. 概要

調査区全体でも中世と同様に07区・10区を除いて遺物の分布は散漫で、遺構も耕作地？に関わるものがほとんどである。井戸は07B区で1基検出した以外は皆無であった。以下では主要な遺構・遺物について述べる。

B. 遺構・遺物

● 08Eb・Ec区

市道を挟んで調査したEb区西端、Ec区東端には033SDがあり、それに切られるかたちで08Ec区で034STが検出されている。前者の幅は3.5m、深さは約90cmである。土層断面では再掘削の痕跡が認められたが、堆積層に水流は窺えない。後者は033SDより30cm程浅い。底部付近に酸化鉄・酸化マンガン斑の沈着が認められたことから「ST」記号を付したが、島島地帯によく認められる水路兼用の帯状水田の可能性が高い。

● 08Fa区

調査区の南北端で東西方向の溝を検出した。畠の区画溝であろう。

● 08Ba・Bb・Bc区、09C区

08Bc区001ST 幅は2.7m前後の帯状の水田である。両縁に沿って一段深くなり、溝状の凹地が続く。底面には凹凸がある。

なお、001STと軸線が一致する004SDは001ST埋没後に掘削されたもので、途中で終わっている。掘削時期は近現代である。

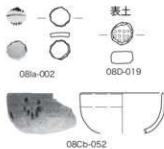
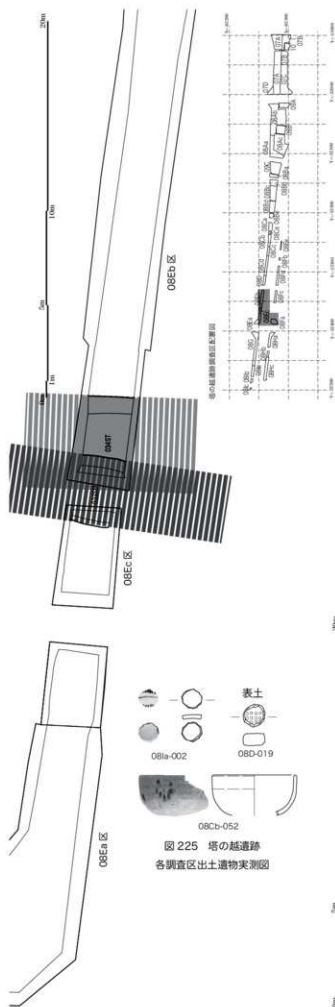


図225 塔の越道跡
各調査区出土遺物実測図

図224 塔の越道跡 08Ea・08Ec-Eb・08Fa区遺構図

08Bb区 040SD・08Ba040SD、09C区 201SD 直線的にのびる溝で、幅3～3.5m、深さは約50cmを測る、幅広い逆台形の断面形を呈する。底面標高は08Bc区から09C区にかけて5cmほど下降し、08Bb区では堆積層の最下部にラミナも認められたので水流のあったことが窺える。上部堆積層は斑土からなり、廃絶に伴ない埋め立てられたようである。

09C区 202SD 幅1～1.3m、深さ約60cmを測る。201SDとは底面が連続せず、10cmほど深くなっている。201SDとは異なって斑土の堆積層は認められないので、埋め立てられることなく溝として存続している。常時ではないにしても、排水機能があったものと推測する。

09C2156SD 幅30cm、深さ約40cmの溝で、南は切れて、北へ深くなる。08Bb区 076SDを含めて畝の区画溝であろう。

● 08Aa区

東西に小溝群があり、それを南北軸の溝や土坑が切れるが、中には小溝に切られている土坑もあるので、大きくは3時期に分かれる。小溝については畝の畝溝の可能性があり、南北軸の土坑も耕作に伴うものであろう。

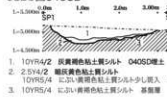
001SD 08Aa区から08Ac区を南北に貫く。幅2～2.5m、深さは約70cmを測る。西側が少し深くなり、底面は平ではない。最上層の西寄りに洪水砂の堆積が認められ、類似層は001SD以西にも及んでいるが、この溝が洪水で埋積したわけではない。近代に属するであろう。

002・003SD 両者には切り合い関係があり、後者が新しい。002SDは断面逆台形のしっかりした溝で、再掘削されている。最下層にはラミナが形成されて還元

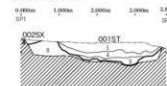
状態でもあるので、水流があったのであろう。147SD 001SDに先行する。121SDと平行しており、「道」の側溝かもしれない。

183SD 147SDを切るが、001・002SDには切られる。003SDにつながる可能性がある。

08Bb区040SD



08Bc区001ST



1. 10V9V/3 灰色黄褐色粘土質シルト・砂質シルト 基礎層上部シルト層 10V9V/4 灰色黄褐色粘土質シルト層 040SD埋土
2. 2.5V4/2 細灰黄色粘土質シルト 基礎層上部シルト層 10V9V/4 灰色黄褐色粘土質シルト層 10V9V/4 灰色黄褐色粘土質シルト層
3. 2.5V4/2 細灰黄色粘土質シルト 基礎層上部シルト層 10V9V/4 灰色黄褐色粘土質シルト層 10V9V/4 灰色黄褐色粘土質シルト層
4. 10V9V/3 灰色黄褐色粘土質シルト・砂質シルト 基礎層上部シルト層 001ST埋土
5. 2.5V4/2 細灰黄色粘土質シルト 10V9V/4 灰色黄褐色粘土質シルト層 001ST埋土
6. 2.5V4/1 細灰黄色粘土質シルト・砂質シルト 基礎層上部シルト層 10V9V/4 灰色黄褐色粘土質シルト層 001ST埋土
7. 2.5V4/2 細灰黄色粘土質シルト・砂質シルト 基礎層上部シルト層 10V9V/4 灰色黄褐色粘土質シルト層 001ST埋土
8. 10V9A/2 灰黄色粘土質シルト 002SD埋土
9. 10V9V/4 灰色黄褐色粘土質シルト 001ST埋土 10V9V/4 灰色黄褐色粘土質シルト層 001ST埋土
10. 10V9V/3 灰色黄褐色粘土質シルト・砂質シルト 基礎層上部シルト層 001ST埋土

132 図227 塔の越遺跡 08B区各遺構土層セクション図

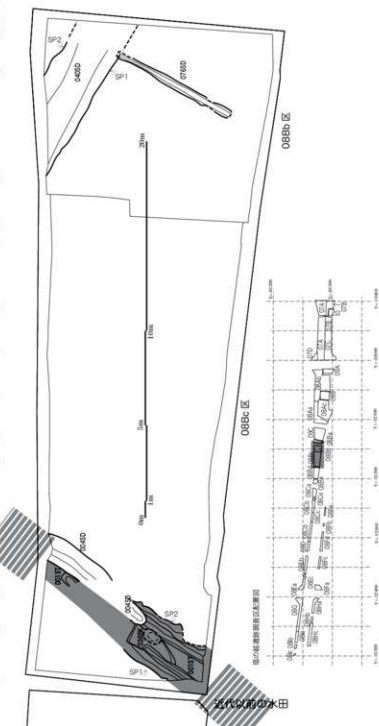
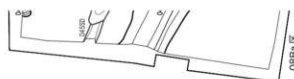


図226 塔の越遺跡 08Ba-b-c区遺構図

040SD

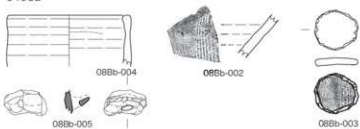


図227 塔の越遺跡 08Bb区 040SD出土遺物実測図



図 231 塔の越道跡 O8Aa 区 遺構出土遺物実測図



1. 2.5% 黄褐色粘土質シルト-2.5% 2. 黄褐色粘粒砂(団状・重層状含む) O02SD埋土
2. 2.5% 2. 粘状黄褐色土質シルト-2.5% 2. 黄褐色粘粒砂(団状) O02SD埋土
3. 10% 4/3 土に近い黄褐色粘土質シルト-2.5% 3. 黄褐色粘粒砂(団状) O02SD埋土
4. 10% 4/3 土に近い黄褐色粘土質シルト-2.5% 3. 黄褐色粘粒砂(団状) 3. 埋入土 O03SD埋土

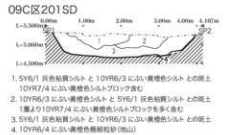
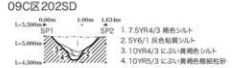


図 232 塔の越道跡 O9C 区遺構土層セクション図

1. 5% 1. 黄褐色粘土と 10% 4/3 土に近い黄褐色シルトとの硬土 10% 4/3 土に近い黄褐色シルトブロック多量
2. 10% 6/3 土に近い黄褐色シルトと 5% 1. 黄褐色粘土との硬土 1層以上の 10% 4/3 土に近い黄褐色シルトブロックを多く含む
3. 5% 1. 黄褐色粘土と 10% 6/3 土に近い黄褐色シルトとの硬土
4. 10% 4/3 土に近い黄褐色粘粒砂(団状)

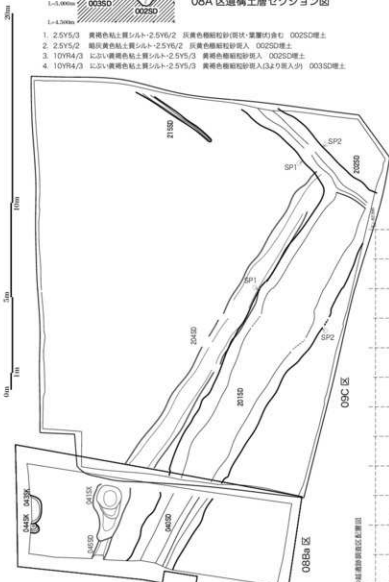


図 229 塔の越道跡 O8Ba・O9C・O8Aa-c 区遺構図

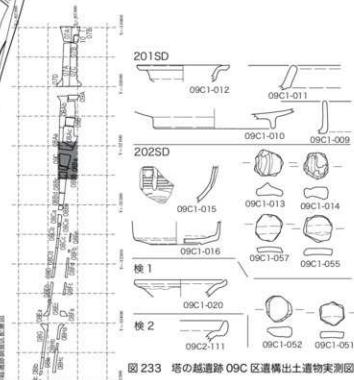


図 233 塔の越道跡 O9C 区遺構出土遺物実測図

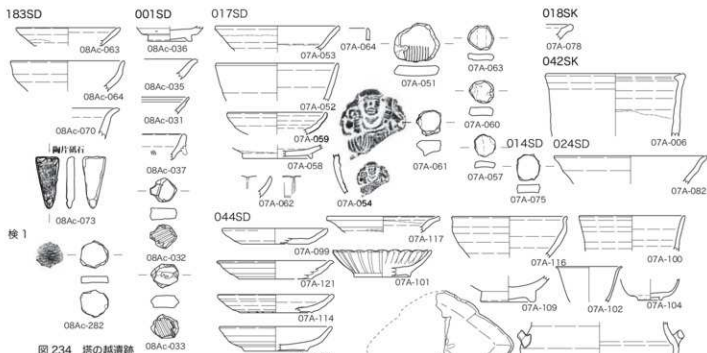


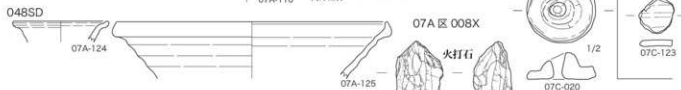
図 234 塔の越遺跡 08Ac区
出土遺物実測図

● 07区

07A区西部や07C区には耕作に伴う溝が展開する。

井戸（07B区700SE）は07B区東部に位置し、付近では溝が複雑に走って、耕作地の様相は窺えない。

それに対して、07A・B区を南北に走る044SDからは



各種生活財が出土し、甕や陶器片砥石も含まれている点で付近に居住空間が展開していたことが窺えるものの、建物は見つかっていない。高地に宅地が設けられたとすれば旧地表面もかなり高かったであろうから、礎石建物であれば検出が不可能であったかもしれない。

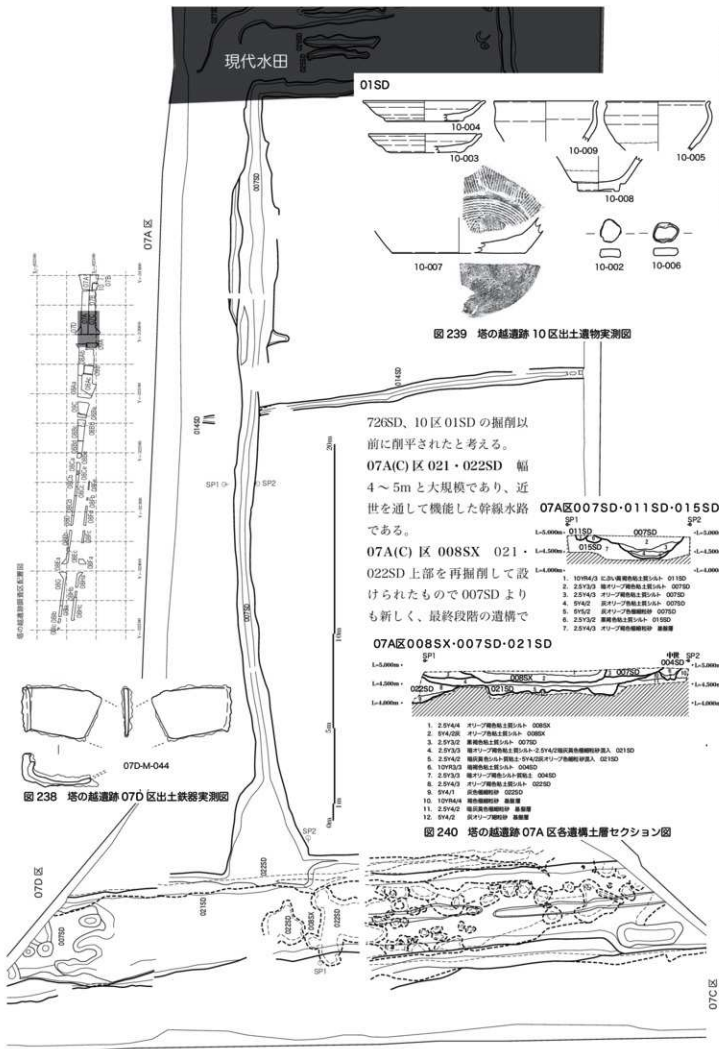
すでに「古墳」に関して述べたように、07A区東部と07B区で検出された特徴的な溝群は、近世まで遺存した「高まり」の裾を整えた跡や、それを利用した祠堂に伴う遺構群である。

最終的には07B区725SD・



図 235 塔の越遺跡 07A区出土遺物実測図

図 236 塔の越遺跡 07C区出土遺物実測図



01SD

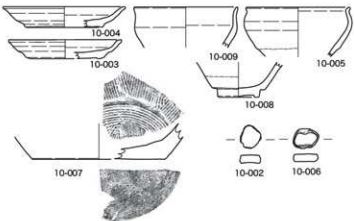
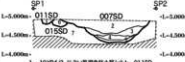


図239 塔の越道跡 10区出土遺物実測図

726SD、10区01SDの掘削以前に削平されたと考える。
 07A(C)区 021・022SD 幅4～5mと大規模であり、近世を通して機能した幹線水路である。
 07A(C)区 008SX 021・022SD上部を再掘削して設けられたもので007SDよりも新しく、最終段階の遺構で

07A区007SD-011SD-015SD



1. 1094/2 北3区(後遺構)土層(1)土 011SD
2. 2373/3 塔(オリーブ)遺構土層(1)土 007SD
3. 2374/3 オリーブ遺構土層(1)土 007SD
4. 014/2 北3区(後遺構)土層(1)土 007SD
5. 017/2 北3区(後遺構)土層(1)土 007SD
6. 2373/2 塔(オリーブ)遺構土層(1)土 015SD
7. 2374/2 塔(オリーブ)遺構土層(1)土 015SD
8. 2374/3 オリーブ遺構土層(1)土 015SD

07A区008SX-007SD-021SD



1. 2374/4 オリーブ遺構土層(1)土 008SX
2. 014/2 北3区(後遺構)土層(1)土 008SX
3. 2373/2 塔(オリーブ)遺構土層(1)土 007SD
4. 2374/3 塔(オリーブ)遺構土層(1)土 007SD
5. 2373/3 塔(オリーブ)遺構土層(1)土 007SD
6. 1094/2 北3区(後遺構)土層(1)土 004SD
7. 2373/3 塔(オリーブ)遺構土層(1)土 004SD
8. 2374/3 オリーブ遺構土層(1)土 004SD
9. 014/1 北3区(後遺構)土層(1)土 022SD
10. 1094/4 塔(オリーブ)遺構土層(1)土 022SD
11. 2374/2 塔(オリーブ)遺構土層(1)土 022SD
12. 014/2 北3区(後遺構)土層(1)土 022SD

図240 塔の越道跡 07A区各遺構土層セクション図

図238 塔の越道跡 07D区出土鉄器実測図

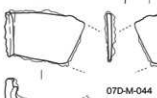


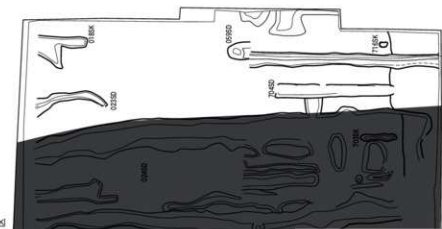
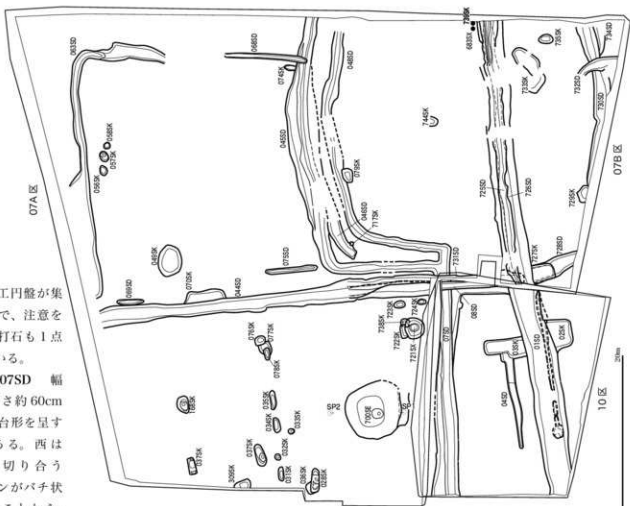
図237 塔の越道跡 07A-C-D区遺構図

ある。加工円盤が集中する点で、注意を引く。火打石も1点出土している。

07A区 007SD 幅2.5m、深さ約60cmの断面逆台形を呈する溝である。西は021SDと切り合うが、プランがバチ状に広がることから、021SDに後続する溝につながって、導水していた可能性がある。

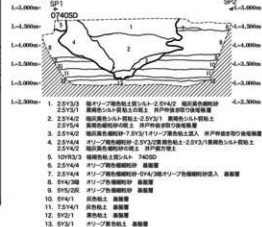


図 241 塔の越道跡 07A-B・10区遺構図



現代水田

0700SE



1. 2.01373 堀内溝・溝内土層(1)と2.01474 堀内溝内埋積層
2. 2.01462 堀内溝内土層(1)と2.01373 堀内溝内埋積層
3. 2.01462 堀内溝内土層(1)と2.01373 堀内溝内埋積層
4. 2.01464 堀内溝内埋積層(1)と2.01474 堀内溝内埋積層(1)と2.01373 堀内溝内埋積層(1)と2.01462 堀内溝内埋積層(1)の埋積層
5. 1.01923 堀内溝内埋積層(1)と2.01464 堀内溝内埋積層(1)の埋積層
6. 2.01464 堀内溝内埋積層(1)と2.01474 堀内溝内埋積層(1)の埋積層
7. 2.01464 堀内溝内埋積層(1)と2.01474 堀内溝内埋積層(1)の埋積層
8. 01474 堀内溝内埋積層(1)の埋積層
9. 01474 堀内溝内埋積層(1)の埋積層
10. 01474 堀内溝内埋積層(1)の埋積層
11. 01474 堀内溝内埋積層(1)の埋積層
12. 01474 堀内溝内埋積層(1)の埋積層
13. 01474 堀内溝内埋積層(1)の埋積層

図 242 塔の越道跡 07B区 700SE 土層セクション図

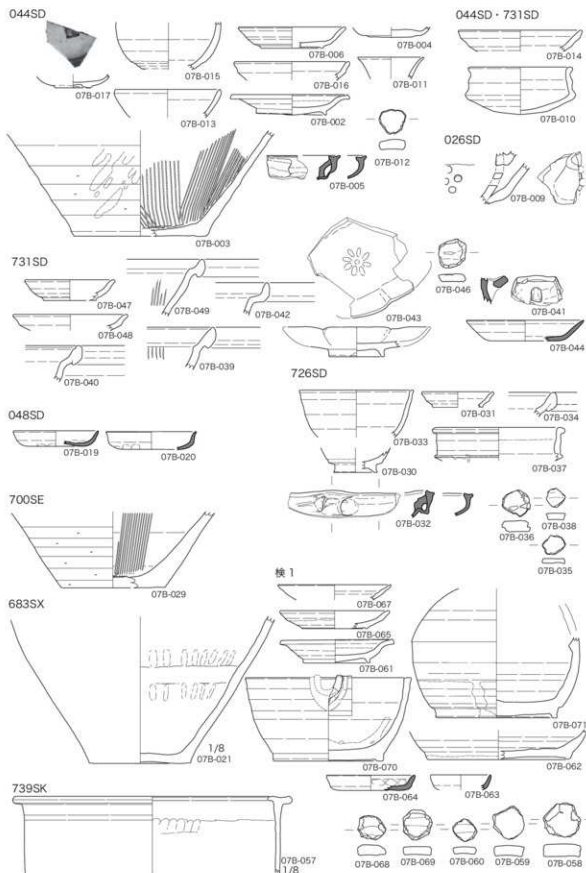


図 243 塔の越遺跡 07B 区出土遺物実測図

東部では南に折れ、その東に現代水田が南北に設けられていることは、その屈折が近世に先行する水田の存在を示すのであろう。

07A (C) 区 014SD 007SD に切られる規模の劣る溝である。畠の区画溝であろう。このあたりは出土遺物もわずかで、耕作地と推測する。

07A(B) 区 044SD・731SD・10 区 08SD いわゆる「古墳」の根を通っており、墳丘を避けていることは明らかである。「古墳」が未だ存続していた時期に掘削された溝である。

07A 区 044SD では不明であったが、南部の 07B 区 731SD と 10 区 08SD には切り合い関係があるので 2

時期存在する。その南へは貫通せず、途中で終わっている。柱穴とは限らないにしても、小穴群が井戸(700SE)周辺に集まって、044SD 以東には広がらないことは、044SD が宅地の東を画する溝であったことを示すものと考えられる。

07A 区 045SD・046SD・048SD、07B 区 730SD すでに述べたように、残存する「高まり(=古墳)」の裾をめぐる溝であり、北では3条が重方形に重なるが、南は不明である。3条の溝に直接の切り合い関係は無いが、名古屋高蔵遺跡の事例を参考にすれば外側から内側へという順序が想定される点で、「高まり」の裾がしだいに削られ縮小した様が見える。

さて、北側の3条は南へ折れて後、再び西へ折れる。東西方向も3条認められるので両者は整合している。この屈折が「高まり」へ至る斜路(階段)の存在を暗示しているとは、想像に過ぎるであろうか。

しかし、南北対称で南側も同形なのかわからないにしても、調査区内で「前方後方形」を匂わせるのはいかにもである。「前方部」と「後方部」の境を切断する044SD・731SDは「高まり」の存在を否定しないものの、以前の場所の性格が途切れたことは示しているのだろう。10区07SD 下部に認められる溝が東で南に折れて044SDの延長に一致しているのは、溝の配置が新たな段階にはいったことを示しているのだろう。

08B 区 725SD・726SD、10 区 01SD 前者では重複する2条の溝が確認されているが、10区では不明である。「高まり」中心からやや南に寄っているとはいえ、東西に貫通していることは、とうに「高まり」が失せたことを示している。

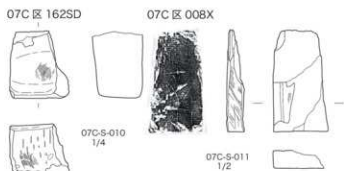


図 244 塔の越遺跡 07C 各区出土土製品実測図

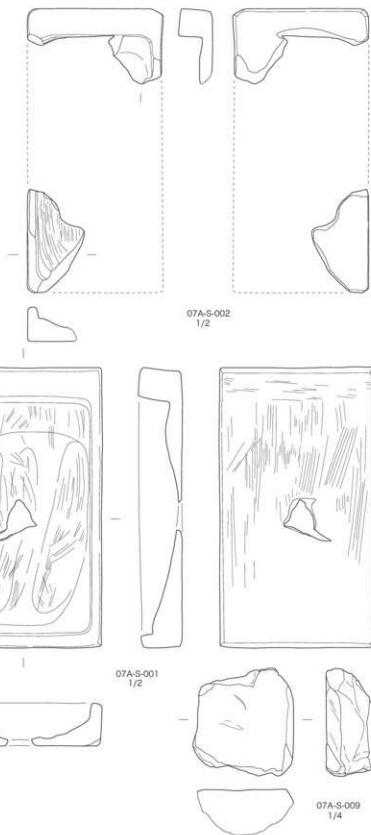


図 245 塔の越遺跡 07A 区 044SD 出土遺物実測図

第3章 長野北浦遺跡

1. 調査の概要

(1) 遺跡の状況

長野北浦遺跡は、東をJR東海道線に区切られ、西は市道を挟んで塔の越遺跡に接する。北には住宅地を挟んで稲沢東小学校がある。

調査直前には、用地買収も終わって住宅が立ち退いた跡の草地となっていた。南北には住宅地がひろがり、南方には屋根をこえて万徳寺の樹林が臨めた。そして、西部には水田が存在していたが、それが地表を大きく削って造成されたことは調査の結果明らかになった。

長野北浦遺跡の事前情報はほとんどなく、遺跡の内容についても不明であった。天保年間の村絵図によれば、東西に配された神社の位置関係から、万徳寺北側の家屋が散在するあたりに相当すると思われる。調査結果でも近世の建物群が検出され、ある程度は東付けられた。

そして、万徳寺が真言宗の古刹であり、鎌倉時代末期の文献にも登場することから中世以降の遺構・遺物が展開する可能性が高いとの調査前の予想はある意味で当たったが、先の水田の存在が遺跡の遺存状況に大きく影響を与えて、肝心な部分が欠落することになった。

むしろ、意外であったのは、中世に加えて古代も致命的な影響をこうむる中で、古墳前期後半の遺構・遺物がまとまって検出されたことである。もちろん、上部は大きく削平を受けており、遺構の深さも浅いものとなっていたが、それでも重要な成果を得ることができた。

このように、長野北浦遺跡の存続時間は塔の越遺跡にほぼ併行するとはいえ、古代はきわめて薄く、それに対して古墳・中世・近世が濃密であった。

以下の記述は上記の時期区分を中心に、調査区西部から進める。

(2) 作業工程

発掘調査は平成19年度と平成20年度の2ヶ年実施した。

当初は都市計画道路の跨線橋橋脚工事と道路敷設に関わる部分に限定されて、発掘調査は平成19年度で終了する予定であった。しかし、JR東海道線を横断する橋脚の建設工事に伴ないクレーン等の重機等を設置する工事ヤードの地盤を強化する必要が生じたため、平成20年度に該当する範囲の追加調査を実施することになった。つまり、平成19年度には対象外として空白になっていた6ヶ所のうち、東寄りの4ヶ所（調査区配置図のスクリーン部分）の調査が必要になったわけで、

結果的に東半部強は全面調査となった。

平成19年度は07A区から07D区、平成20年度は08A区から08D区の調査を行った。平成19年度は生活道路やガス管の埋設部分の存在から調査区の細分が必要となった。平成20年度は狭い調査区と工事の進捗に伴う制限のためにやむを得ず分割調査になった調査区があり、また基礎工事に際して打ち込まれた鉄矢板によって引き起こされた地層の沈下で地層に乱れを生じた箇所もあった。

なお、調査区配置図にある記号は、頭の数字が調査年度（西暦2000年以降の下二桁）、アルファベットが調査区の大(小)区名である。

表4 長野北浦遺跡調査工程表

	平成19年度												平成20年度											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
07A	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■												
07Ba																								
07Bb																								
07C																								
07D																								
08A																								
08B																								
08C																								
08D																								

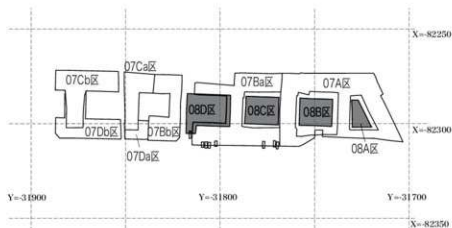


図246 長野北浦遺跡調査区配置図

2. 遺構・遺物の各説

(1) 古墳

A. 概要

古墳時代の遺構は、まず東半部を中心に竪穴建物群や土坑群が展開し、後に中央部に方形周溝が少なくとも1基造営される。そして、おそらく6世紀以降に東端の円形周溝が掘削されるという順序である。

北と東西辺を検出した方形周溝（07Ba区 024SD・08D区 048SD・08C区 167SD）の堆積層は、下部が基盤土の斑土で、掘削時の整地層と推測される。そして上部には黒褐色シルトが堆積していた。それに対して、円形周溝は下部まで黒褐色シルトで埋積しており、様相が異なる。

この黒褐色シルトには7世紀後半の須臾器が含まれており、堆積時期はかなり下る。黒褐色シルト層はカーボンの含有量の高い土層で塔の越遺跡とも共通して、周辺の草原化を窺わせるものである。

東半部を中心に展開する竪穴建物群は、床面直上に炭化物の薄層を伴う事例について「竪穴建物跡」の可能性が高いといえるが、跡は検出されず、地床が異なる「火処」を想定しなければ「住居跡」とは断定できない。検出が不十分な柱穴については、濃尾平野では弥生時代に限らず古墳時代以降も竪穴建物跡の柱穴はなかなか検出

できない状況があり、それほど大した問題ではないのだが、しかし、小規模、不定形な方形の掘り？のみが検出されたものについて、竪穴建物跡である確証はない。

一方で土坑群には遺物集積を伴うことは少なく、いわゆる廃棄土坑の様相を呈するものは僅かである。竪穴建物群が展開すれば即座に居住域をイメージさせるあり方は異なるものである。もちろん方形周溝と時期差はあるが、極めて短期で隣接する点を合わせて、古墳前期における遺跡の性格を考える上で注意が必要である。

その他、地盤の掘削に人為性は窺えるものの、不定形な落ち込みについては「SX」記号を付与した。竪穴建物跡としての確実性が乏しいにも関わらず「SI」記号を付与した遺構との相違については、輪郭が不整形であることや底面の凹凸が著しいこと、認識がまだ定まっていなかった調査初期の事例が該当する。

その他、「溝」とは堆積状況が異なってラミナが発達したものについては「NR」記号が付与された。しかし、基本的には自然堆積であるので、先行するものについては遺跡形成以前の基盤の堆積状況を個別に検出した可能性もあり、遺跡概念に含まれるものであるのかどうか検討の余地を残す。

以上のように、長野北浦遺跡における古墳時代遺構については多くの不確かな部分を含んでいる。本報告では個別遺構についての評価は最小限にとどめ記述を進める。

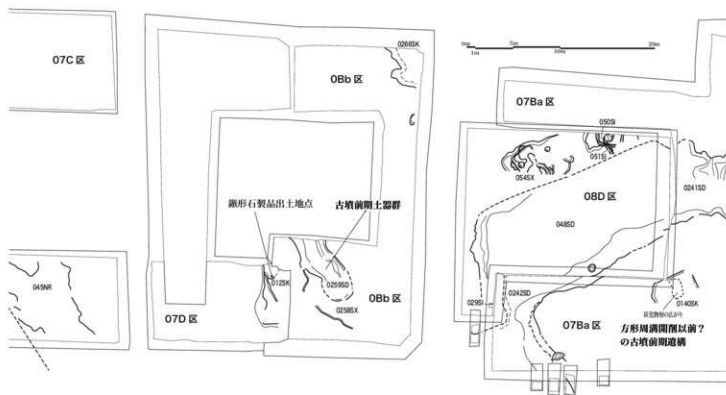


図 247 長野北浦遺跡古墳前期後葉遺構全体図



図248 長野北浦遺跡 07Ba区 0240SD 北から



図249 長野北浦遺跡 07A区北部竪穴建物跡群 北から

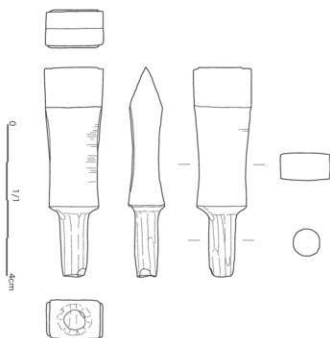
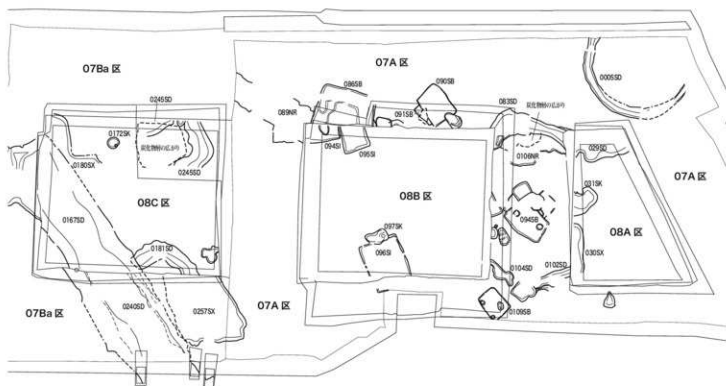


図250 長野北浦遺跡 07D区 012SK 出土隕形石製品実測図

※隕形石製品が出土した07D区012SKは、黒褐色シルトが堆積する土坑であり、古墳前期に属す遺構ではない。同層が堆積する遺構は基本的に古代以降であり、中世も含まれる。よって、出土遺構との関連はむしろ当初隕形石製品が属していた環境が大きく変化したことを示すものである。



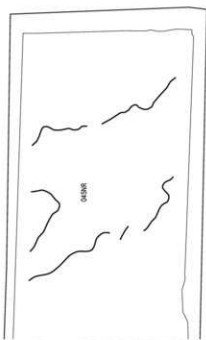
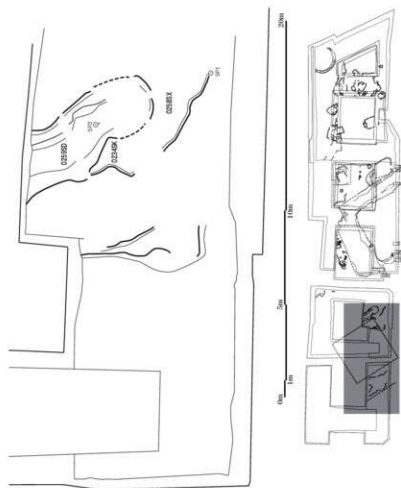


図 251 長野北浦遺跡西部古墳前期遺構図

B. 遺構・遺物

07Bb 区 0259SD 上部は近世以降の水田に大きく削られており、溝は南東で浅くなって切れているが、本来は続いていたものと考えられる。検出面での幅約 3m、深さは約 30cm を測る。堆積層は最上部に黒褐色粘土質シルトがわずかに残存しており、本来は上部に堆積していたであろう。

出土遺物は土器群が主であり、黒褐色粘土質シルト層の下部にあり、底面から約 25cm ほど浮いて出土した。器種は甕、高杯、器台を主に、壺が若干含まれている。下部から出土した 257～266 は残存状況が比較的良好であり、原位置に近いと推測される。浅鉢と器台がセットになるようだが、数量は器台が多く非対称である。

0259SD の延長部分で検出された 0234SK や 0258SX についてはほとんど遺物の出土がない。0234SK は黒褐色シルトが堆積しており、0259 最上部に残存していた層位につながると思われる、年代は 7 世紀末まで下る可能性がある。07D 区 045NR 基盤面で検出した北西から南東に向かう帯状の落ち込みであり、遺物からは

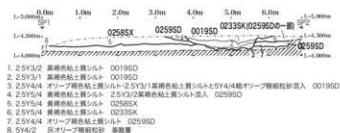


図 252 長野北浦遺跡 07Bb 区 0259SD 土層セクション図

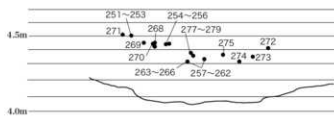


図 253 長野北浦遺跡 07Bb 区 0259SD 遺物出土分布図 - 短軸

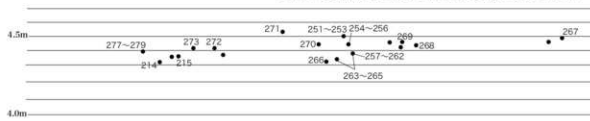


図 254 長野北浦遺跡 07Bb 区 0259SD 遺物出土分布図 - 長軸

していない。斑土の堆積が認められないことから「NR」と表記されているのであれば異なるが、0259SDに平行する点がかかる。

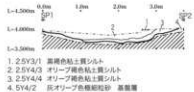


図 255 長野北浦遺跡 07Bb0259SD 土層セクション図



図 256 長野北浦遺跡 07Bb 区 0259SD 土器群出土状況 北西から

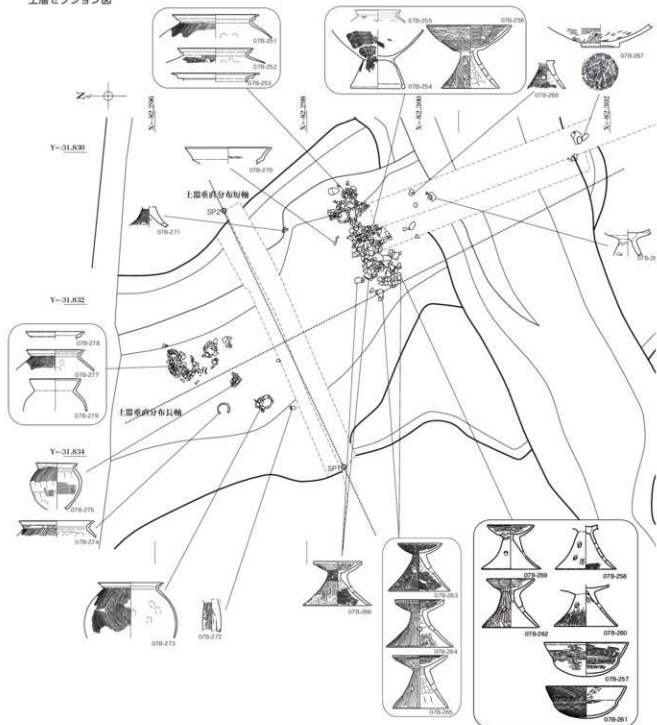


図 257 長野北浦遺跡 07Bb 区 0259SD 土器群出土状況図

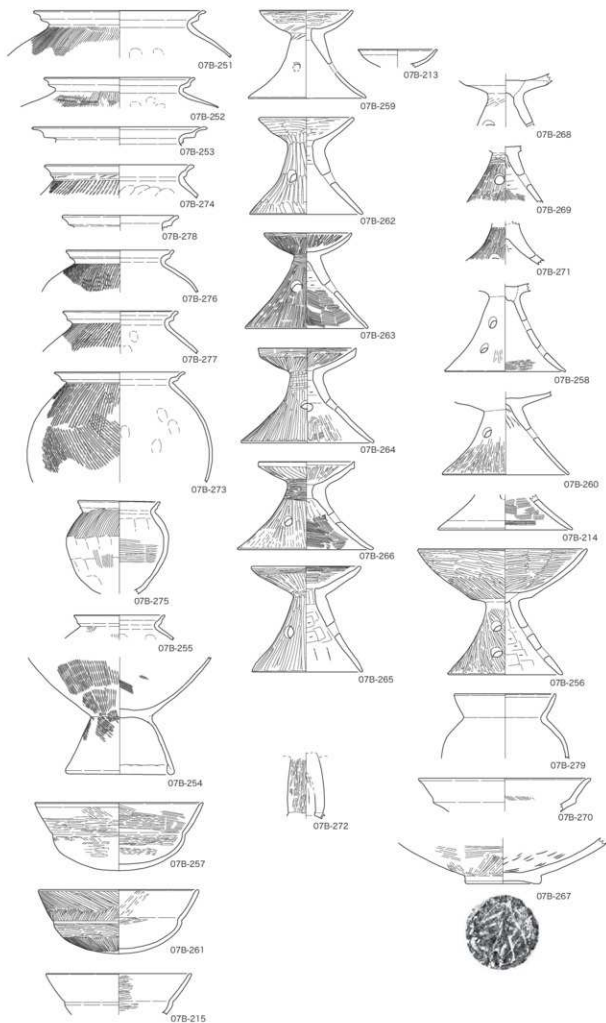


図 258 長野北浦遺跡 07Bb 区 0259SD 出土土器実測図

07Ba 区 0240SD・0241SD、08C 区 0167SD、08D 区 048SD 方形周溝の北・東・西部を検出し、周溝内側の上端間は約24mを測る。溝幅は北が10m、東が6mである。深さは検出面の上端から約90cmを測る。

周溝内縁は明確な方形を呈するのに対して、外縁は08C・D区で中世の溝に切られて不鮮明であり、また外北部と西部のコーナー部分で内側に突出して括れるとともに、底面も少し上昇するようであるが、陸橋部にはならずやや浅くなるといった程度である。

底面から溝の両上端へは、いずれも底面から緩やかに上昇し、はっきりした法面をもたない。ただ、内側下端付近は一部で少し深くなっている箇所もある。また上端付近では傾斜の変換が認められるところもあるが、上部の削平を考慮すれば傾斜が急になるともいえない状況である。

堆積層は、最下部が基盤土の斑土である。掘削時に浮いた土を均したと推測される層位で、いわゆる整地層である。その下面は加工面、上面が機能面である。その上部に黒褐色シルト質粘土が堆積するのを基本とするが、周溝全体を通して一様ではない。

08D 区 048SD では、最下部の整地層の上部に黒褐色シルト質粘土層が平均厚層25cmほどで堆積している。さらにその上には黄褐色極細粒砂ブロックが堆積し、内側に盛り上げられた土（基盤土）の再堆積と推測されるが、この堆積層は他では認められない。

南東部の07Ba 区 0240SD では、溝の最下部に整地層相当が認められるが、その上部には溝の内縁まで黒色粘土質シルトが堆積しており、外縁（東側）では下部にまで黒色粘土質シルト層が堆積していた。この点は08D 区 048SD とは明らかに異なるもので、この部分が再掘削された可能性を強く示している。溝の内縁寄り出土した7世紀後半の坏蓋はそれに伴うものだろう。

溝の外縁近くに集積して出土した古墳前期の土器

群は黒色粘土質シルト層の下部にあり、整地層の上面（機能面）に散布して出土したと判断される。08Bb 区 0259SD と異なり破片が主で、出土場所と遺物を関係づける人為的行為は窺えない。

07Ba 区 0242SD では、最下層まで黒色粘土質シルトが堆積しており、様相は07Ba 区 0240SD に類似している。問題となるのは0242SD に東側が二つあることで、土層セクションでは整地層を伴う0242SD 下層が西側で一段深く掘り込まれて黒色粘土質シルト層が堆積している。このことは、やはり再掘削が行われたことを示し

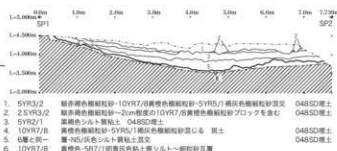


図259 長野北浦遺跡 08D 区 048SD 土層セクション図

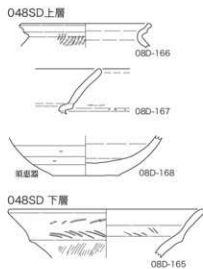


図260 長野北浦遺跡 08D 区 048SD 出土土器実測図



図261 長野北浦遺跡 08D 区 048SD 土層断面

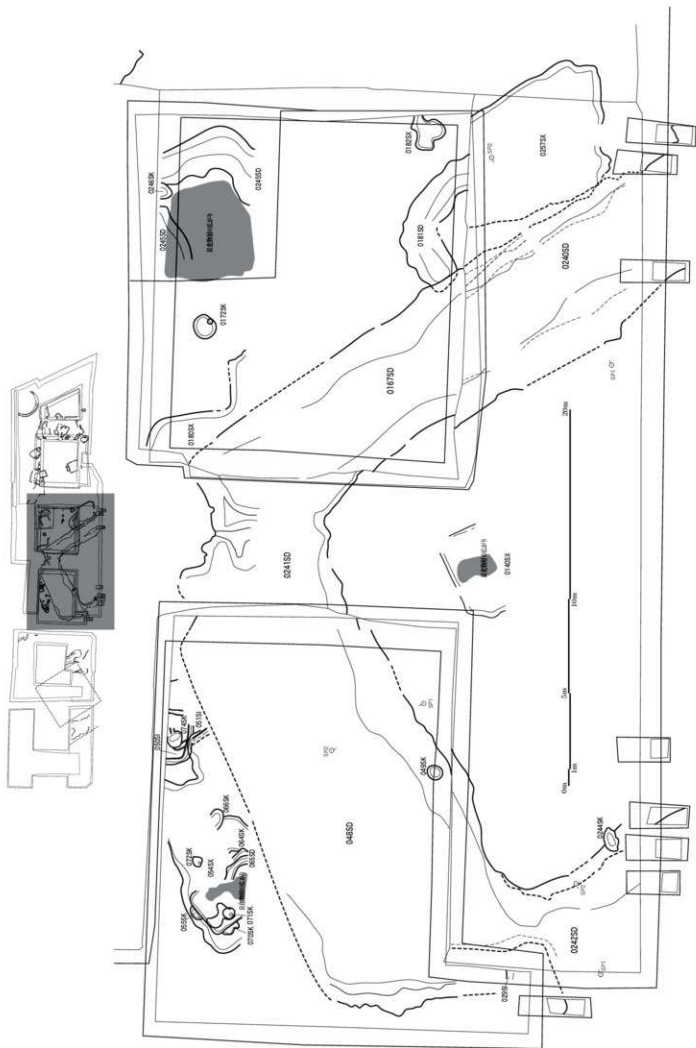


圖 262 長野北浦遺跡中央部古墳前期遺構圖

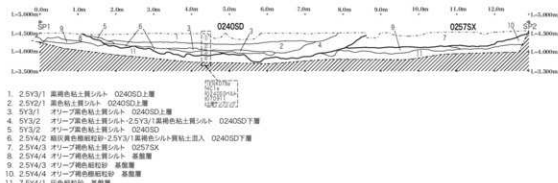


図 263 長野北浦遺跡 07Ba 区 O240SD 土層セクション図

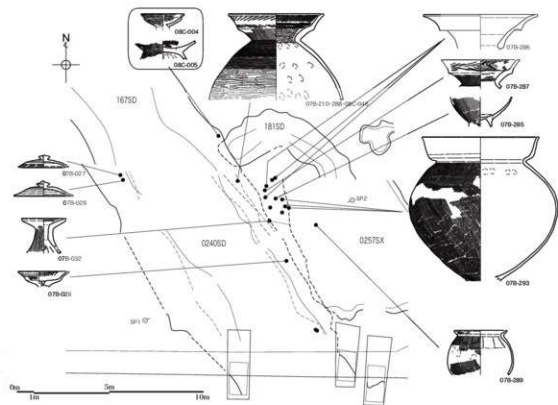


図 264 長野北浦遺跡 08C 区 O167SD・07Ba 区 O240SD 周辺遺物出土分布図

ている。その点は 08D 区 O48SD において不明確であったが、周溝の再掘削も方形両縁の内側を整えるばかりではなかったことは、むしろ再掘削の照準が周溝にはなかったことを示して興味深い。

08Ba 区 O241SD は上端が南に突出する延長に、08C 区 O167SD との間に浅いテラス状の高まりがあり、この部分で僅かだが土器が出土した。この東には O180SX があるが、性格は不明である。

以上のように、方形周溝は再掘削後に黒色粘土質シルト層が堆積し、その時期は 7 世紀後半以降の可能性が高いということになるのだが、そうするとコーナー部分で底面が浅くなるのも、むしろさら

黒色粘土質シルト層



図 265 長野北浦遺跡 07Ba 区 O240SD 土器群分布状況・土層断面 南西から

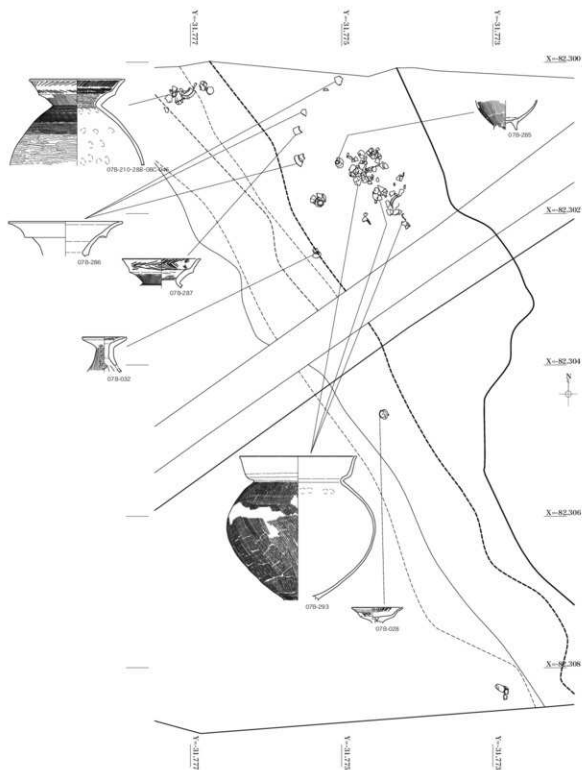


図 266 長野北浦遺跡 07Ba 区 0240SD 土器群出土状況図

に浅かったのが再掘削のために深くなった可能性を考慮する必要がある。コーナー部分で周溝が切れていたとはいわないまでも、同じ幅で整ったプランで周溝がめぐっていたわけではなかったことも想定しておかなければならない。

08D 区 029SI 西側のコーナー付近で東側に突出する部分で土器群が出土し、南へ一段落ちて平坦面を作って

いることから「SI」記号を与えた。部分的な調査で判断は難しいが、竪穴建物跡である可能性は低く、0242SDに伴う可能性も排除できない。

08C 区 181SD 屈曲する溝で、南側は 0257SX に重なるが、調査年度が異なり、未検出である。西側は 0167SD に切られており、先行する。

07Ba 区 0257SX 08Ba 区 0240SD の再掘削には切ら

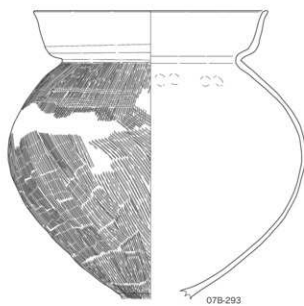
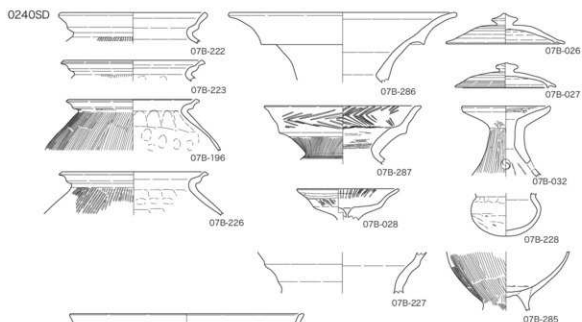


图 267 長野北浦遺跡 07Ba 区 0240SD 出土土器実測図

0240SD 下層

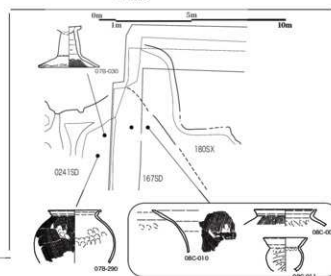


图 269 長野北浦遺跡 07Ba 区 0241SD・08C 区 167SD 土器分布図

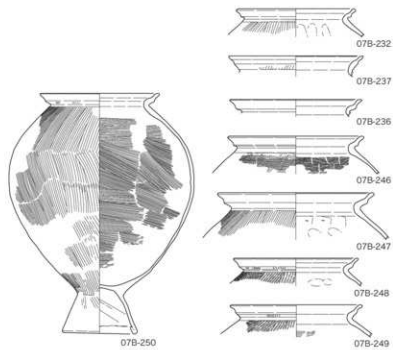
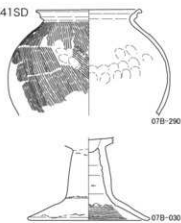


图 268 長野北浦遺跡 07Ba 区 0242SD 下層出土土器実測図

0241SD



0241SD 上層

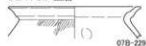
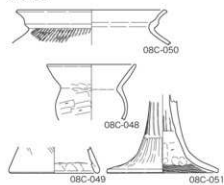
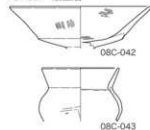


图 270 長野北浦遺跡 07Ba 区 0241SD 出土土器実測図

0167SD



167SD 最上層



0167SD 下層

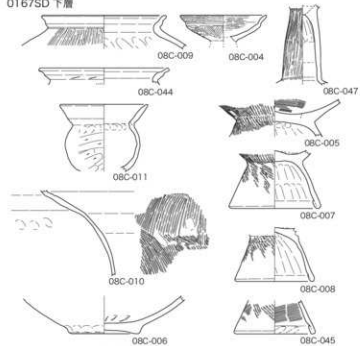


图 271 長野北浦遺跡 07Ba 区 0241SD 出土土器実測図

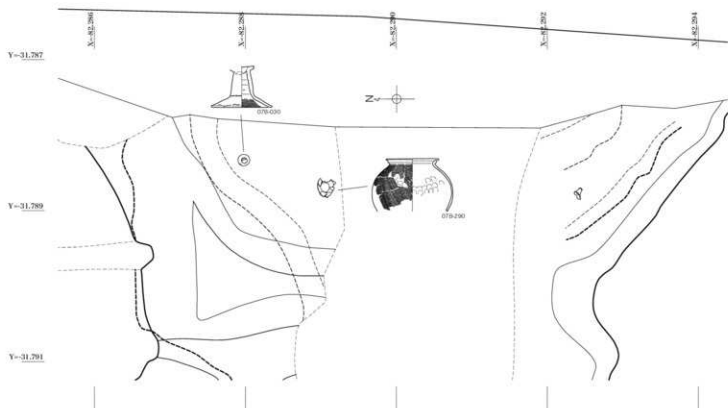


图 272 長野北浦遺跡 07Ba 区 0241SD 土器出土状況図

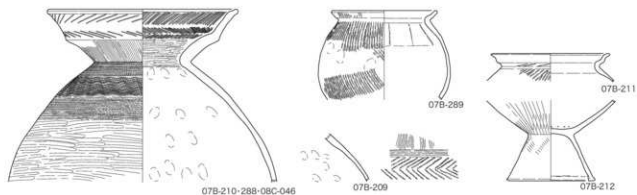


图 273 長野北浦遺跡 07Ba 区 0257SX 出土土器実測図

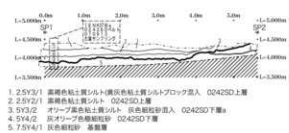


図 274 長野北浦遺跡 O7Ba 区 O242SD 土層セクション図

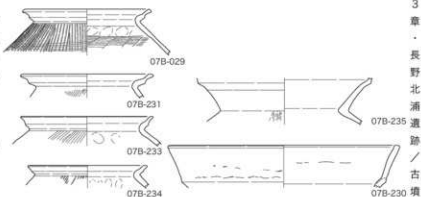


図 275 長野北浦遺跡 O7Ba 区 O242SD 出土土器実測図

O8D 区 O28SD (近世溝)

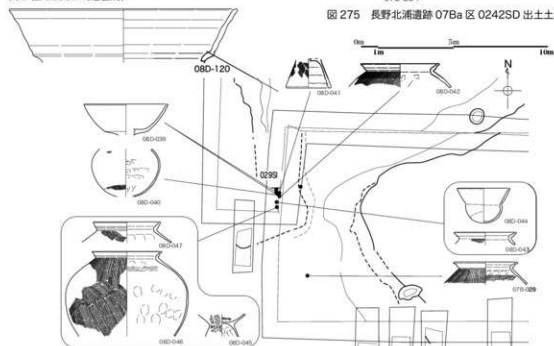


図 276 長野北浦遺跡 O8D 区 O29Si・O7Ba 区 O242SD 土層出土分布図

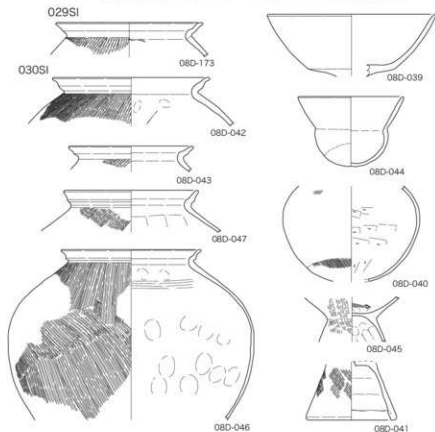


図 277 長野北浦遺跡 O8D 区 O29・O30Si 出土土物実測図

れるが確実に方形周溝に先行するという確証は無い。もともとは方形周溝の一部で、外縁が張り出す部分となるのかもしれない。この点は、08C区 180SX や 08D区 054SX など方形周溝外縁に沿う不定形な落ち込みであり、無関係ではないのかもしれない。

08D区 050SI・051SI 外縁に沿って溝がめぐる落ち込みを検出したので竪穴建物跡と判断した。どちらもコーナー付近の部分的な検出にとどまった。炭化物層や焼土面は検出されていない。

なお、調査区北壁土層断面では050SIの床面は東へ傾斜して水平を保っていない。

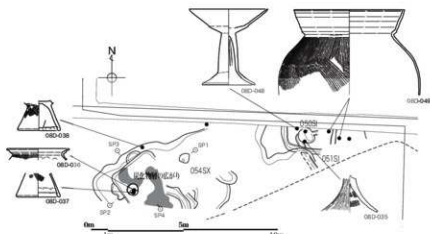


図 278 長野北浦遺跡 08D区 050SI 051SI 054SX 土器出土分布図

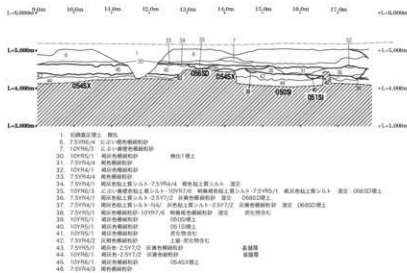


図 279 長野北浦遺跡 08D区北壁土層セクション図

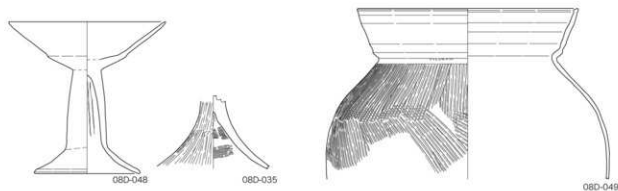


図 280 長野北浦遺跡 08D区 050SI 出土土器実測図

050SI には土器が遺存しており、床面遺物と判断した。西側は054SXに、南側は048SDに切られるが、初期の方形周溝との関係は微妙である。
08D区 054SX 炭化物層の広がりを追跡して、北辺に相当するL字状プランの輪郭を検出したが、調査区北壁断面でも見るように底面には高低差がある。内部は凹凸が著しく、土坑や溝も重複しており、重複する複数の遺構が的確に検出できなかったに過ぎないという印象が強い。

とはいえ、西部では安定した炭化物層が2層確認でき、確かに下層の炭化物層は水平に近い堆積で安定して竪穴建物の床面を思わせる。

それに対して上層の炭化物層は底面が一定せず、竪穴建物の床面といえる整然さはない。焼土面(炉跡)も見つかっていないことから言えば、上部構造をもつ構築物以外の遺構も考慮する必要があるかもしれない。

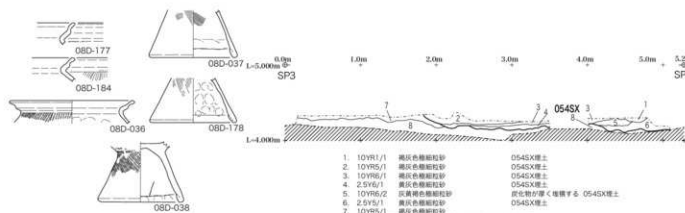


図 281 長野北浦遺跡 OBD 区 054SX 出土土実測図

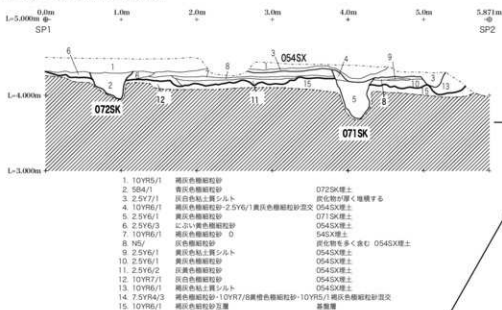


図 282 長野北浦遺跡 OBD 区 054SX 土層セクション図



図 283 長野北浦遺跡 OBD 区 054SX 土層断面 北西から

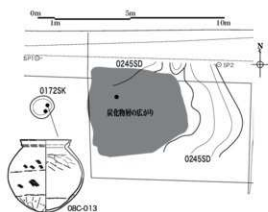


図 284 長野北浦遺跡 O8D 区 O245SD 周辺プラン



図 285 長野北浦遺跡 O8D 区 O245 出土土器実測図



図 286 長野北浦遺跡 O8D 区 O245SD 北から



図 287 長野北浦遺跡 O8D 区
O172SK 出土土器実測図

O8C 区 O245SD 西に開く十字に屈曲する溝であり、幅約2m、深さは約40cmである。溝の上端間では約3.5mを測る。溝で区切られた範囲に重なる炭化物層の広がり、溝内部にも及んでいる。炭化物を含む堆積層は一定期間の開口状態を示しているの、竪穴建物の床面下に設けられた掘形が溝状を呈したのではない。

プランでは北溝と東側のL字溝は分離しており、また土層断面でも部分的に切り合いがあるので、同一番号は付されているがそもそも同一の溝ではないようだ。堆積層の状況も北側は炭化物薄層が何層も重なっており、東のL字溝が単純な堆積を示しているとは大きく異なる。そして、炭化物層の直下に焼土があるので火を伴う

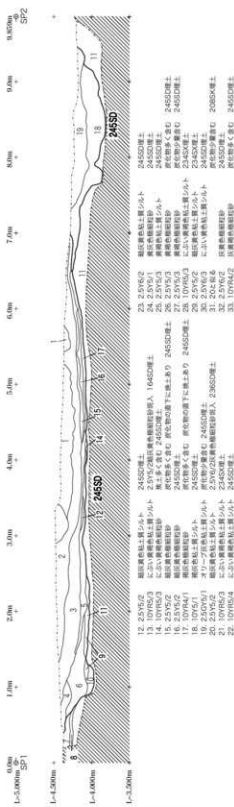


図 288 長野北浦遺跡 O8D 区
O245SD 土層セクション図

炭灰行為が行われたとすれば、堆積層が湾曲している点を含めて竪穴建物跡を想定する根拠は弱くなる。
O8D 区 O172SK O8D 区 O245SD の西側で検出された土坑で、内部からは丸底の受け口状口縁裏が出土した。煤等は付着せず、焼痕跡も認められない。

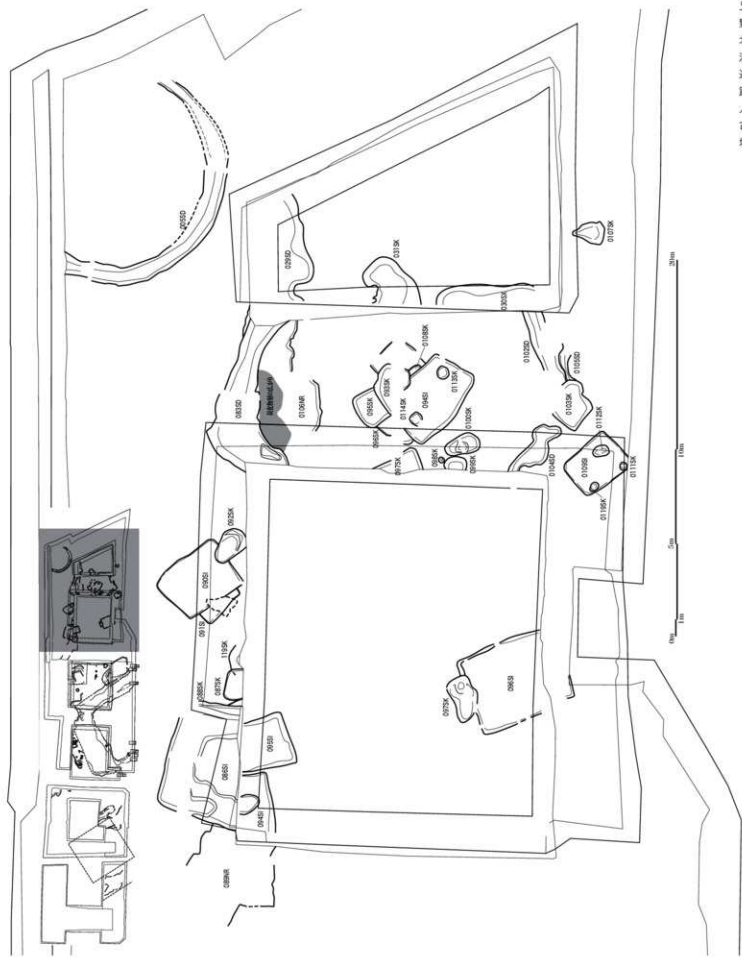


図 289 長野北浦遺跡東部古墳前期遺構図

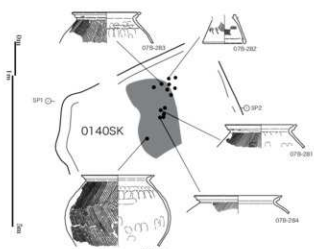


図 289 長野北浦遺跡 07Ba 区 140SK 土器出土分布図

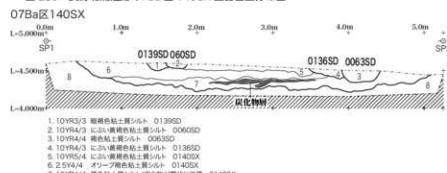


図 291 長野北浦遺跡 07Ba 区 SK140 土層セクション図

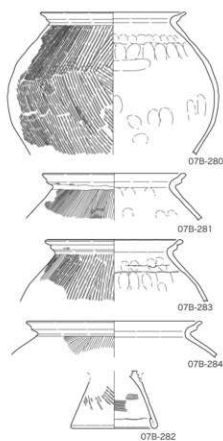


図 292 長野北浦遺跡 07B 区 0140SK 出土土器実測図

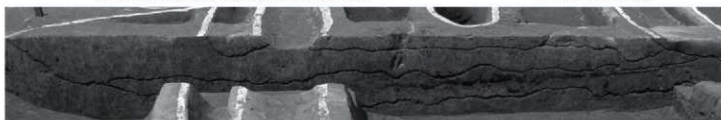


図 293 長野北浦遺跡 07Ba 区 140SK 土層断面

07Ba 区 140SK 中世以降の遺構検出面として調査された 1 面で検出された。不整形で、東西軸は 4.8m

を測る。断面は底面に小さな凹凸があり、下層堆積層の上部に炭化物層が形成されている。上下 2 層の堆積層界面はその上部にあり、炭化物層も層界に一致せず、竪穴建物跡の床面とは認識されていない。炭化物層は多少の厚みをもって堆積しており、また焼土面も見つかっていないので、竪穴建物跡の床面と判断することはむづかしい。

なお、本遺構は方形周溝に先行する可能性が高い。

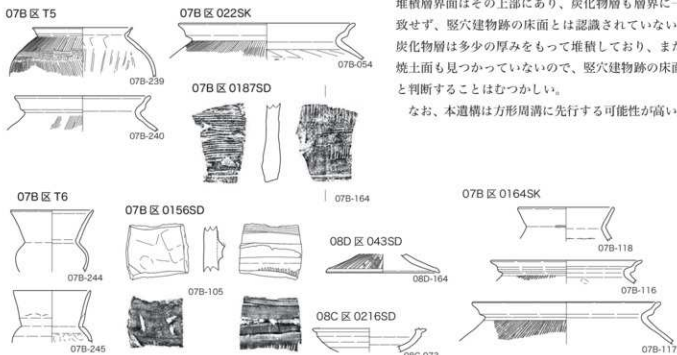


図 294 長野北浦遺跡各調査区出土土器実測図

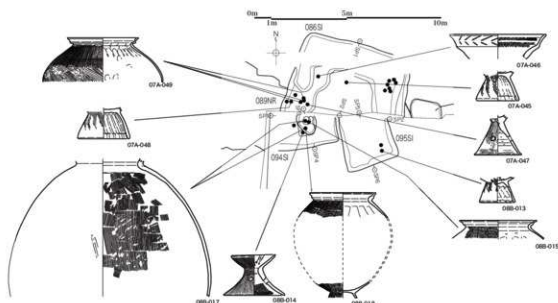
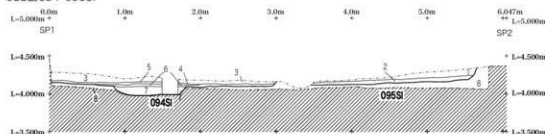


図 295 長野北浦遺跡 07A 区 086SI、08B 区 094SI・095SI 出土状況図

08B区 094・095SI



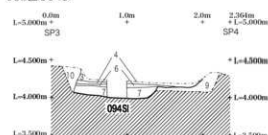
調査日	1979年
調査者	野村浩一
地号	古野町北
調査機関	国史館オアシス
調査種別	調査
調査方法	掘削
調査範囲	1
調査結果	10



1. センセツ科 *Mimod.*, 2. タケノコ科 *Mimod.*
分析：佐々木由香・バンダリ スグルシヤン
(バリオ・ラボ)

図 297 長野北浦遺跡 08B 区 094SI 出土種子

08B区 094SI



08B区 095SI

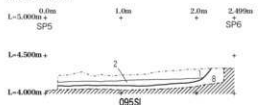


図 296 長野北浦遺跡 07A 区 086SI 土層セクション図

図 298 長野北浦遺跡 08B 区 094SI・095SI 土層セクション図

07A 区 086SI、08B 区 094SI・095SI

07A 区 086SI は東西軸で 6m を測る。周壁に沿う掘形は浅く溝状に窪むが、底面にも凹凸がある。炭化物層を伴う床面は無いけれども、出土した土器群が床面上に遺存していた可能性はある。

南の 08B 区では 2 つの竪穴建物跡が東西に並び、094SI は東西軸 3m 以上、095SI は約 2.6m である。094SI では明確な炭化物層があるのに対して 095SI には認められない。調査所見では両者に切り合いは無いので堆積状況が異なることに矛盾は無い。問題は南北「SI」の関係だが、検出面の違いであった可能性を残すが判然としない。

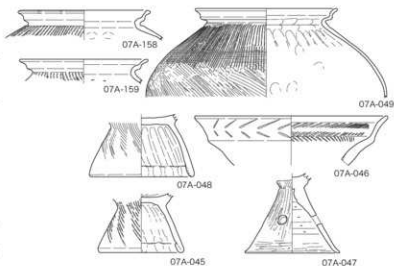


図 299 長野北浦遺跡 07A 区 086SI 出土土器実測図

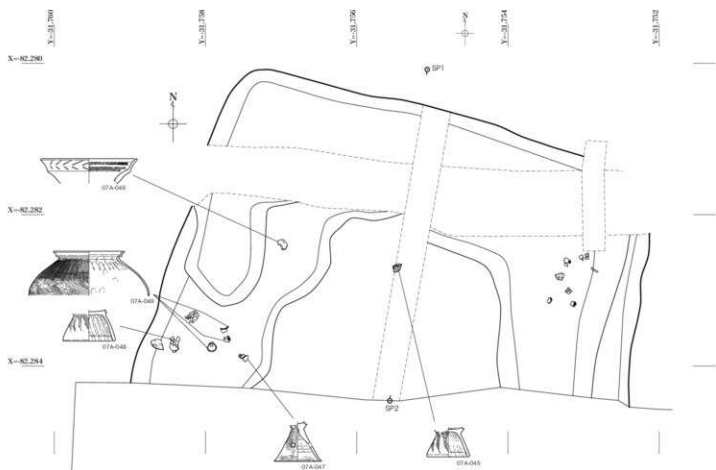


図 300 長野北浦遺跡 07AB 区 086SI 遺物分布状況図

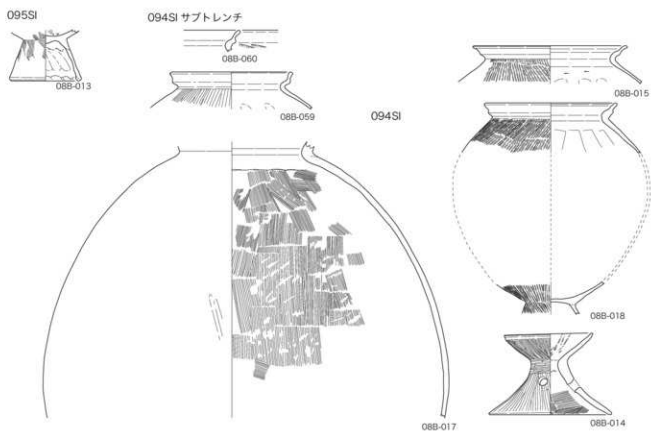


図 301 長野北浦遺跡 08B 区 094SI・095SI 出土土器実測図

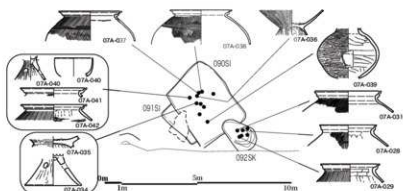


図 302 長野北浦遺跡 07A 区 090SI・091SI・092SK 土器群出土状況図



図 303 長野北浦遺跡 07A 区 090SI・091SI 土層セクション図

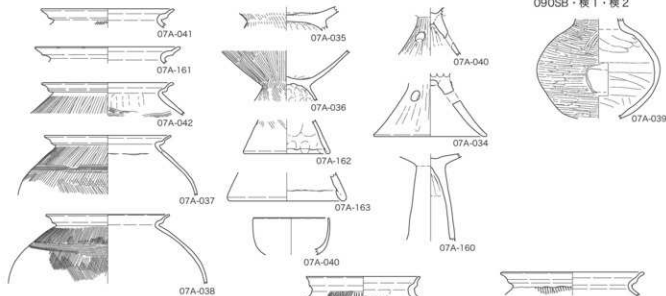


図 304 長野北浦遺跡 07A 区 090SI 出土土器実測図

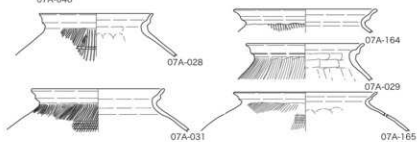


図 305 長野北浦遺跡 07A 区 092SK 出土土器実測図

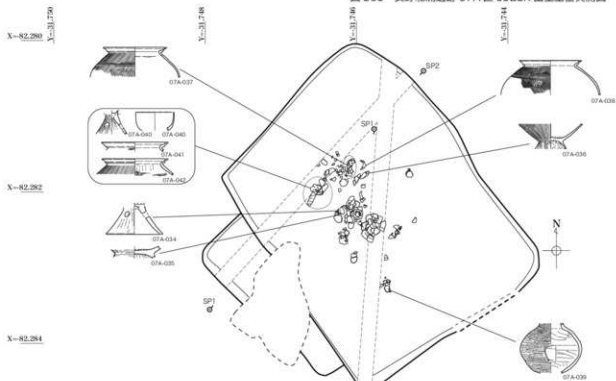


図 306 長野北浦遺跡 07A 区 090SI 土器群出土状況図

07A区 090SI 上部は削平されており、炭化物層は未確認だが、土器群が遺存していた。長軸3.7m、短軸3mを測る。091SIを切る。

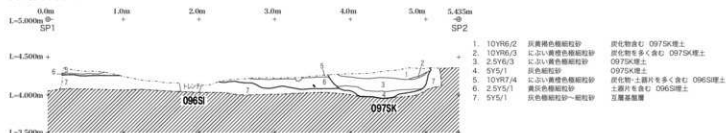
08B区 096SI 炭化物層を床面の指標として、輪郭を検出。南北約5m、東西約4.5mを測る。南北軸の床面高度はほぼ水平なのに対して、東西軸ではトレンチを挟んだ東側で7cmほど高くなっている。段差があればいわゆる「ベッド状遺構」との関連も生じるが、それは竪穴建物であることを前提にしていることであるが、焼土は未検出であり、生活痕は無い。プランには表現されていないが、土層断面東端では床下圓形の凹地が認められる。

08B区 097SK 096SIの北端に重複して設けられている。胴部に焼成後穿孔をもつほぼ完全な形のS字甕が横位で出土した。土層で見る限り単一の遺構ではないようで、東側の一段深くになっている部分や堆積状況からも複数回の再掘削が窺われる。上部には炭化物層が認められるので、最終的には廃棄土坑になったようだが、S字甕も本遺構の形成過程における一つの段階を示すものだろう。



図309 長野北浦遺跡 08B区 097SK 土層セクション図

08B区 096SI-A



08B区 096SI-B

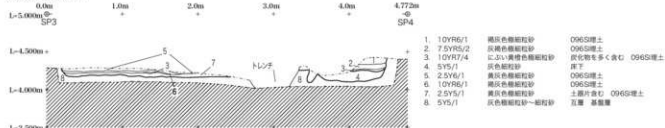


図311 長野北浦遺跡 08B区 096SI 土層セクション図

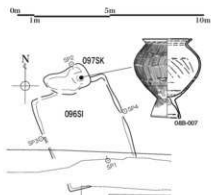


図307 長野北浦遺跡 08B区 096SI・097SK 出土土器分布図

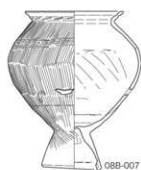


図308 長野北浦遺跡 08B区 097SK 出土土器実測図



図310 長野北浦遺跡 08B区 097SK 断面 南から

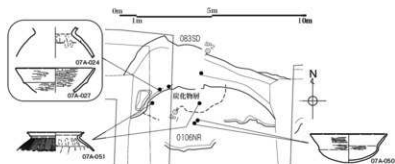


図 312 長野北浦遺跡 07A 区 083SD・0106NR 出土器出土分布図

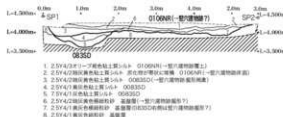


図 313 長野北浦遺跡 07A 区 083SD・0106NR 土層セクション図

07A 区 083SD・0106NR 083SD は幅 20～30cm の L 字に曲がる溝である。

一見したところ、溝の両側には炭化物薄層が水平に堆積しており、竪穴建物跡の床面と屈形周溝の組み合わせと推測される。ところが調査記録では当該層を「0106NR」としている。炭化物層の上には粘土質シルトが堆積しているが、ラミナの形成は認められない。にもかかわらず何故「NR」表記なのかは不明である。他の土層セクションでは「NR」遺構は 083SD の下部にあつて先行するので、誤記とすれば矛盾は無い。なお、083SD は、最上部の 3 層が下層と不整合面をもつので、竪穴建物堆積層の一部である可能性も残る。

と推測を重ねたところで再び調査記録に戻れば、炭化物層に関して右写真のキャプションでは「竪穴床面炭化物層」となっていた。その後、炭化物層の広がりを追索する中で、炭化物層が安定かつ整然とした水平堆積をなさないこと、落ち込みの輪郭が不明確なことから最終的に「NR」との表記に至ったらしい。これまで土器と炭



図 314 長野北浦遺跡 07A 区 083SD・0106NR 掘り下げ状況 西から

化物層の組み合わせからみれば「竪穴建物跡」と推測しがちであったが、本遺跡ではそのように単純には評価できないようだ。焼土面（火処）が伴わないことがそのように評価できない大きな要因でもあるのだが。

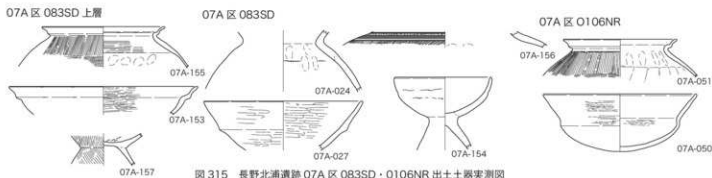


図 315 長野北浦遺跡 07A 区 083SD・0106NR 出土土器実測図

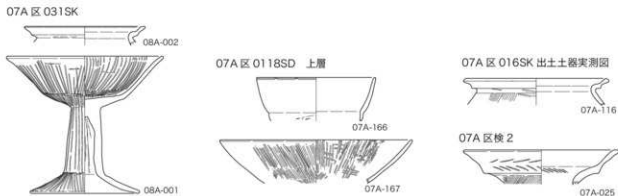
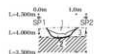


図 316 長野北浦遺跡 07A 区各遺構出土土器実測図



1. 2.5VZ/1 黒色粘土質シルト
2. 7.5VZ/2 灰ブルー粘土質シルト
3. 2.5VZ/1 黒色粘土質シルト混入
3. 2.5VZ/2 緑灰色粘粒砂 礫混入

図 317 長野北浦遺跡
07A区 005SD
土層セクション図

07A区 005SD 07A区北東隅で検出した径約10mの円形周溝である。溝の断面は逆台形の整った形状で、幅に比べて深い印象を受けた。

堆積層は下部まで黒色粘土質シルトであり、最下層はその影響を受けて暗色の堆積層となっていた。出土遺物は無いので年代推定の手掛かりに乏しいが、長野北浦遺跡や塔の越遺跡における類似層の堆積状況からみて、005SDの掘削時期は世紀後半以前で、6世紀前半まで遡ることは無いと推測される。

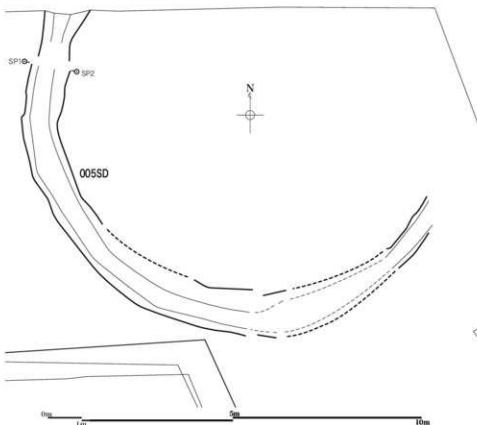


図 318 長野北浦遺跡 07A区 005SD プラン図



図 319 長野北浦遺跡 07A区 005SD 掘り下げ状況 北西から

(2) 古代

A. 概要

長野北浦遺跡における古代の様子はこのほか不鮮明で、塔の越遺跡とは極めて対照的である。古代の遺物は散漫で、遺構も古墳前期の方形周溝の北に平行する溝群を除けば古代に限定できるものは少ない。

おそらく、そこに近世から近現代に至る開田事業が大きく影響していると考えられ、そのために古代の遺跡が滅失したと思われる。

B. 遺構・遺物

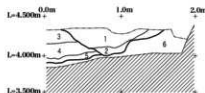
方形周溝の改変 古墳前期の方形周溝（07B区241SD・242SD、08C区167SD・08D区048SD）は中層以上に黒色粘土質シルト層が堆積し、その上部からは7世紀後半の須恵器も出土している。黒色粘土質シルト層について当初は自然堆積層と判断されたものの、土層断面等の観察から不整合面の存在が明らかとなり、周溝で区切られた内側の整備に関わる再掘削の後に堆積したものと推測された。明確な時期決定の材料には欠けるものの、7世紀前半代に（もしくは6世紀代まで遡って）再掘削されたものと考えられる。

平行する溝群
方形周溝の北西外縁
をかすめるように
08D区068SDが掘



図 322 長野北浦遺跡 07Ba区
0240SD 黒色粘土シルト層上部
返り掘出土状況

0m 5m 10m 20m



1. 7.5YR4/3 褐色細粒砂 068SD埋土
2. 7.0YR3/1 黄褐色細粒砂 068SD埋土
3. 7.5YR4/2 灰褐色細粒砂 048SD埋土
4. 2.5YR3/2 暗赤褐色細粒砂
~2cm程度010YR7/8黄褐色細粒砂ブロックを含む 048SD埋土
5. 5B7/1 暗黄褐色シルト 048SD埋土
6. 10YR/7 黄褐色粘土質シルト-凝結砂 互層 048SD埋土

図 321 長野北浦遺跡 08D区
068SD土層セクション図

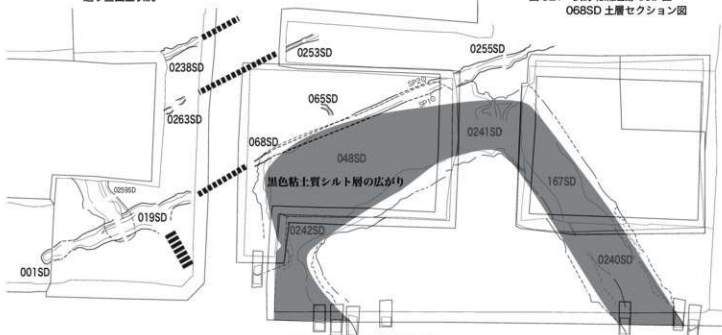


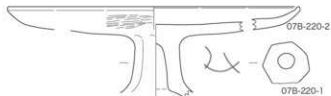
図 320 長野北浦遺跡古代遺構図

削され、南西の延長には07Bb区001SD・019SDがあり、続く可能性が高い。001SDは南西で切れているが、近世以降の開田による削平を考慮すれば、さらに続いていたものと考えられる。019SDからは南南東に溝が分岐する可能性もあり、これらは方形周溝の北と西を連する溝といえる。098SDラインの北側には、やはり平行して07Ba区0253SDと08Bb区0263SD、07Bb区238SDがあり、性格は不明だが、軸線を共有する地割りの存在が窺える。

08D区068SDは幅1.3m、深さ約35cmを測り、北側にテラスをもつ。最下層は黒褐色極細粒砂が堆積している。同層は南側の方形周溝上部を埋めている黒色土層に類似しており、周辺に黒色土層が形成されて後に溝が掘り込まれたとすれば、掘削年代は7世紀後半以降ということになる。

少ない遺物 長野北浦遺跡から出土した遺物の量は極めて少ないが、それでも瓦塔片、軒平瓦片、暗紋土師器が出土し注目される。前の二つは中世の区画溝、最後は近世の溝（廣東土坑）から出土したものの、瓦塔片は約100m西の地点から出土した塔の越07A区出土資料と接合関係にある。

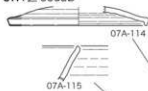
07B区 0187SD



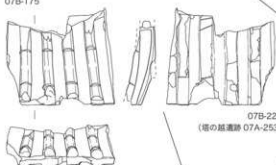
08C区 0164SD



07A区 006SD



07B区 007ST

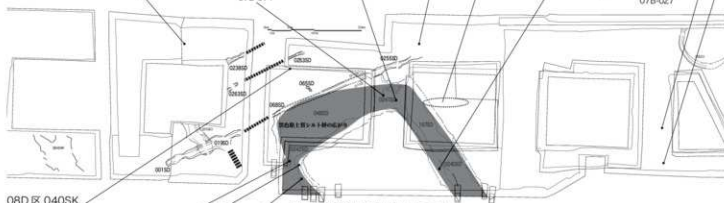
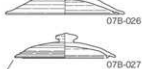


07B-221
(塔の結遺跡 07A-253)

07B区 0136SD

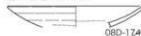
07B-071

07B区 0240SD

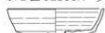


長野北浦遺跡古代遺物出土分布図

08D区 040SK



07B区 0235SX



07B区 0244SK



07B区 0108SK



07B区横 1

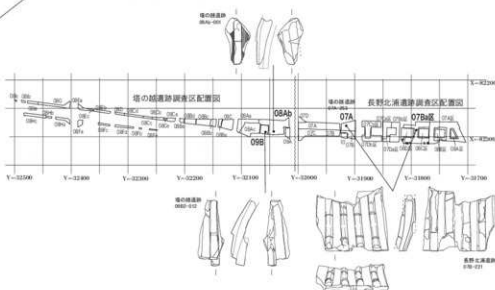


図 323 塔の結遺跡・長野北浦遺跡瓦塔片出土分布図

(3) 中世

A. 概要

長野北浦遺跡の中世は、東西長約80mの正方位をとる方形区画と東端の南北溝を基本的な地割りとして、それに先行する古代以来の軸線を共有する遺構群が展開するが、近世以降の開田や地表面の改変によって掘立柱建物等の検出には至らず、空間利用の詳細までは把握できなかった。また、調査時に想定された中世水田については、その存在を積極的に示す資料は認められなかった。

B. 遺構・遺物

方形区画1 方形区画の構成は、07C区010SDを西辺の南北溝、07Bb区0204SD(→0205SD:矢印は先後を示す、以下同じ)、08D区035SD(→036SD)、07Ba区0243SD(→0152SD)、08C区0164SD(→0191SD→103SD)、07A区077SDを北辺の東西溝、07A区082SDを東辺の南北溝として構成される。

溝は断面逆台形を呈し、概ね2.5～3.5mの幅で深さは1.3mを測る。旧地表面を標高5mとすれば深さ1.8m、幅は5mに及び、屋敷地の区画溝として十分な規模を備

える。

溝は少なくとも1回は改修されており、部分的には2回の掘削も認められるので、幾度かの改修を経たものと推測する。しかし、それが方形区画全体に及ぶものであったのかどうかについては定かではない。

例えば、08C区では調査区東壁の土層断面を見る限りでも163SD→191SD→103SDという順序があり、いずれも溝の埋没途中ではなく、埋没後に切り合っている。そして164SDも最下層にはラミナが形成されているが他には認められないという差異があり、一様ではない。

08C区164SDの断面形は底面が幅広い逆台形であり、

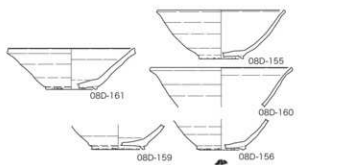


図326 長野北浦遺跡08D区036SD出土遺物実測図

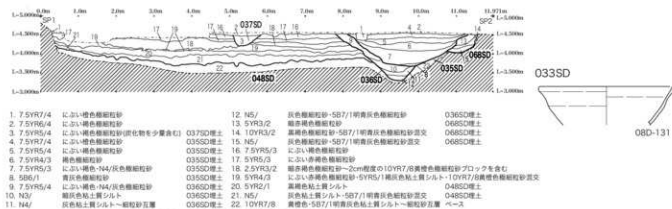


図324 長野北浦遺跡08D区南北土層セクション図1

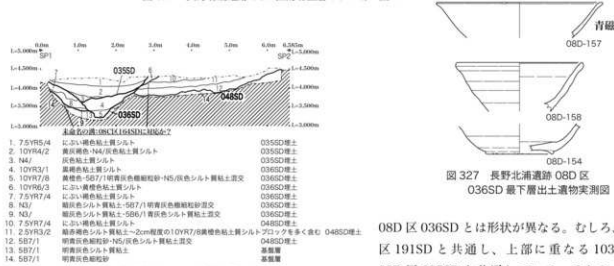


図325 長野北浦遺跡08D区南北土層セクション図2

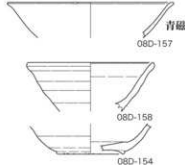


図327 長野北浦遺跡08D区036SD最下層出土遺物実測図

08D区036SDとは形状が異なる。むしろ、08C区191SDと共通し、上部に重なる103SDは08D区035SDと共通している。そして、08D

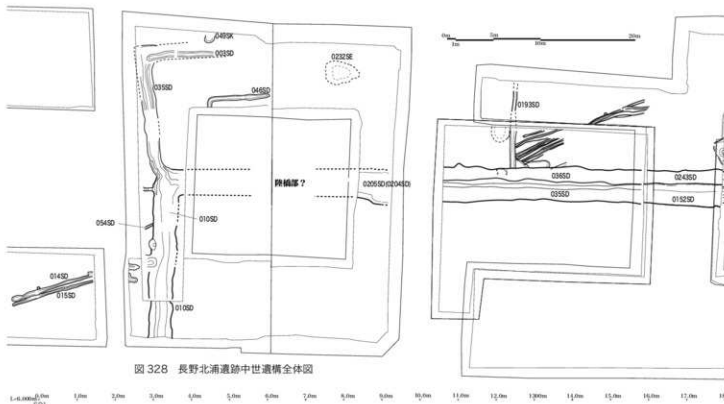


図 328 長野北浦遺跡中世遺構全体図

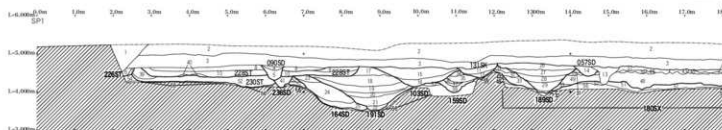


図 329 長野北浦遺跡 O8C 区東型土層セクション図

1. 排水渠土層の頂上
2. 10YR6/4 褐色砂礫層 上部に黄土
3. 7.5YR6/4 褐色砂礫層
4. 10YR6/4 土色(黄褐色)粘土質シルト 7.5Y4/2(2R)オリーブ色細粒砂層入
5. 7.5YR6/2 土色(黄褐色)粘土質シルト 7.5Y4/2(2R)オリーブ色細粒砂層入
6. 10YR6/4 土色(黄褐色)粘土質シルト 7.5Y4/2(2R)オリーブ色細粒砂層入
7. 7.5YR6/4 土色(黄褐色)粘土質シルト 7.5Y4/2(2R)オリーブ色細粒砂層入
8. 10YR6/2 土色(黄褐色)粘土質シルト 7.5Y4/2(2R)オリーブ色細粒砂層入
9. 10YR6/2 土色(黄褐色)粘土質シルト 7.5Y4/2(2R)オリーブ色細粒砂層入
10. 7.5YR6/4 褐色粘土質シルト 7.5Y4/2(2R)オリーブ色細粒砂層入
11. 7.5YR6/2 褐色粘土質シルト 7.5Y4/2(2R)オリーブ色細粒砂層入
12. 7.5YR6/2 褐色粘土質シルト 1.315D層上
13. 10YR6/2 土色(黄褐色)粘土質シルト 1.315D層上
14. 10YR6/2 土色(黄褐色)粘土質シルト 0.970D層上
15. 10YR6/2 褐色粘土質シルト 1.030D層上
16. 10YR6/2 褐色粘土質シルト 1.030D層上
17. 10YR6/2 土色(黄褐色)粘土質シルト 1.030D層上
18. 10YR6/2 土色(黄褐色)粘土質シルト 1.030D層上
19. 10YR6/2 土色(黄褐色)粘土質シルト 1.030D層上
20. 5S4/1 暗赤色砂礫層 1.015D層上
21. 5S4/1 暗赤色砂礫層 2.5 2.2 5S4/2, 1.015D層上
22. N1/3 褐色シルト質粘土 5.0D層上 1.030D層上
23. 10YR6/2 土色(黄褐色)粘土質シルト 1.040D層上
24. 10YR6/2 土色(黄褐色)粘土質シルト 7.5 Y4/2(2R) 1.640D層上
25. 5S4/1 暗赤色砂礫層 5.0/1 暗赤色砂礫層 5.0/1(2R) 1.640D層上

26. 10YR6/2 土色(黄褐色)砂礫層 1.000D層上
27. 10YR6/2 土色(黄褐色)砂礫層 1.000D層上
28. 7.5YR6/4 褐色粘土質シルト 1.000D層上
29. 10YR6/2 土色(黄褐色)粘土質シルト 1.000D層上
30. 7.5YR6/2 褐色粘土質シルト 1.000D層上
31. 7.5YR6/2 褐色粘土質シルト 1.000D層上
32. 7.5YR6/2 褐色粘土質シルト 1.000D層上
33. 10YR6/2 土色(黄褐色)粘土質シルト 1.000D層上
34. 10YR6/2 土色(黄褐色)粘土質シルト 1.000D層上
35. 7.5YR6/4 褐色粘土質シルト 1.000D層上
36. 10YR6/2 土色(黄褐色)粘土質シルト 1.000D層上
37. 7.5YR6/2 褐色粘土質シルト 1.000D層上
38. 10YR6/2 土色(黄褐色)粘土質シルト 2.300D層上
39. 5S4/4 暗赤色砂礫層 2.300D層上
40. 5S4/4 暗赤色砂礫層 2.300D層上
41. 7.5YR6/1 褐色粘土質シルト 1.000D層上
42. 7.5YR6/4 褐色粘土質シルト 1.000D層上
43. 7.5YR6/4 褐色粘土質シルト 1.000D層上
44. 10YR6/2 土色(黄褐色)粘土質シルト 1.000D層上
45. 10YR6/4 土色(黄褐色)粘土質シルト 1.000D層上
46. 10YR6/2 土色(黄褐色)粘土質シルト 1.000D層上
47. 10YR6/2 土色(黄褐色)粘土質シルト 1.000D層上
48. 10YR6/2 土色(黄褐色)粘土質シルト 1.000D層上
49. 7.5YR6/2 褐色粘土質シルト 1.000D層上
50. 10YR6/2 土色(黄褐色)粘土質シルト 2.300D層上
51. 7.5YR6/1 褐色粘土質シルト 2.300D層上
52. 10YR6/2 土色(黄褐色)粘土質シルト 2.300D層上
53. 7.5YR6/1 褐色粘土質シルト 2.300D層上
54. 2.5Y4/2(2R) オリーブ色細粒砂層 2.300D層上
55. 4.7.5D 暗赤色砂礫層
56. 2.5Y4/1 暗赤色砂礫層
57. 10YR6/2 土色(黄褐色)粘土質シルト 2.300D層上

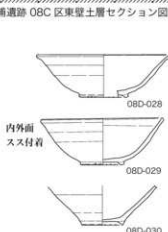


図 331 長野北浦遺跡 O8D 区 O69SK 出土土層実測図

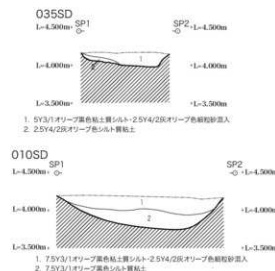
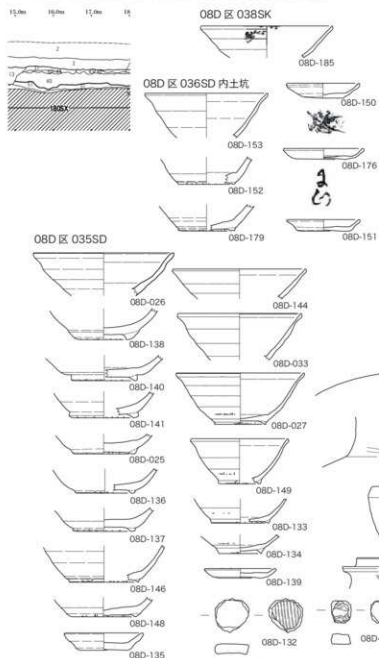
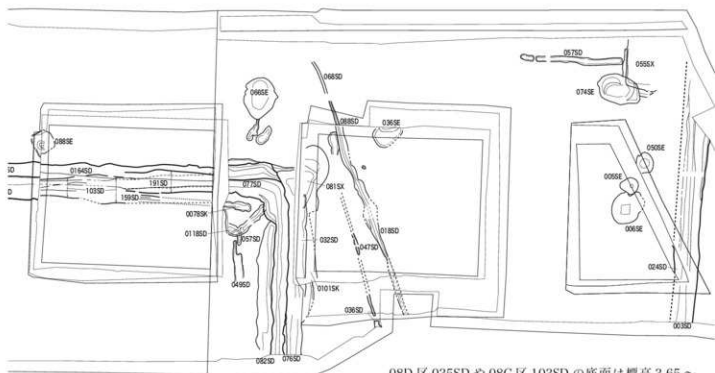


図 330 長野北浦遺跡 O7C 区南北土層セクション図

区では未命名の溝断面が O8C 区 164SD のように底面の幅が広い逆台形であることは、一応 O8C 区と O8D 区では溝の階層順の整合性が保たれていると言える。

つまり、① O8D 区未命名溝-O8C 区 164SD、② O8D 区 036SD-O8C 区 191SD、③ O8D 区 036SD-O8C 区 103SD という対応関係が想定でき、最後の③が底面標高 3.5m から 4.2m まで 70cm 上昇するもの「排水機能」を必要としなくなったからだとは即断できない。

ところで、方形区画西辺の O7C 区 010SD は断面が皿状であり、北辺溝の断面が明確な逆台形であったのは全く異なる。また、底面標高も 3.75m で北辺溝の O8D 区の 3.4m、O8C 区の 3.5m よりも高い。それに対して



O8D区 O35SDやO8C区 O103SDの底面は標高3.65～3.7mであり、O7C区 O10SDに近い。

つまり、断面形状や底面標高の近さ、そして再掘削が窺えない点から、O7C区 O10SDに対応するのは③であって、到底①②に相当するとは考えられない。よって、方形区画北辺の東西溝は①②の段階では西側の未調査部分で連続せず、陸橋部を有する可能性も否定できない。③に至っては果たして連続していたのかどうかさき疑問わしい。

方形区画の西辺溝は単純、北辺では複数の溝が重複、それに対して東辺では区画溝を挟んで両側に溝が並列しているというように、区画として一体であると思われる溝がこのように

に様でないことをどのように評価するのか、大きな課題である。

方形区画2 O7C区で検出された O35SDを南北溝、東に折れる O03SDを東西溝として構成される。方形区画を構成する O10SD に対して O35SDは角度を違え、また溝幅を半減している。東への

図332 長野北浦遺跡 O8D区各遺構出土遺物実測図

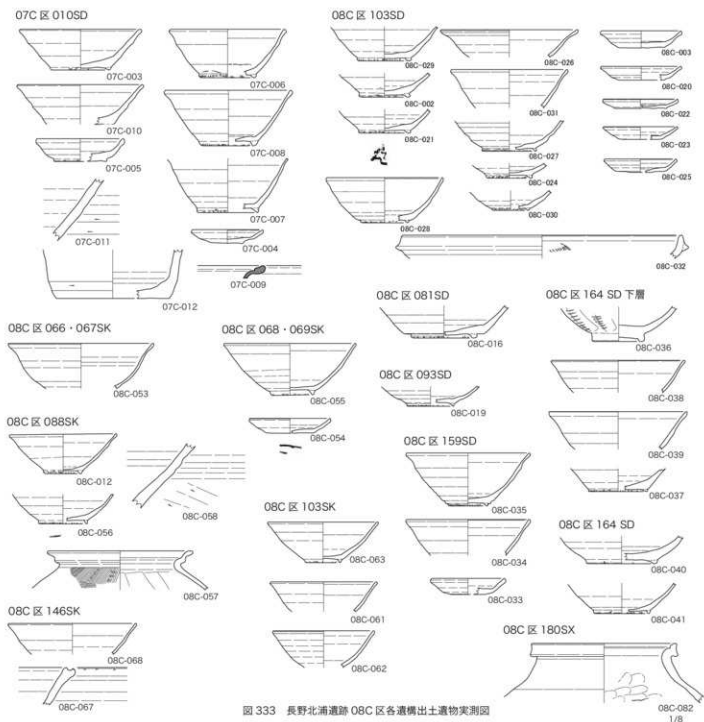


図 333 長野北浦遺跡 08C 区各遺構出土遺物実測図

延長で途切れていることは、上部の削平を考慮しても浅くなることは明らかで、010SD への流下が基本であったろう。

この区画内にはさらに 046SD が小区画を構成するようで、柱穴は未検出だが、井戸の存在から居住域である可能性は高い。

長野北浦 07B 0232SE

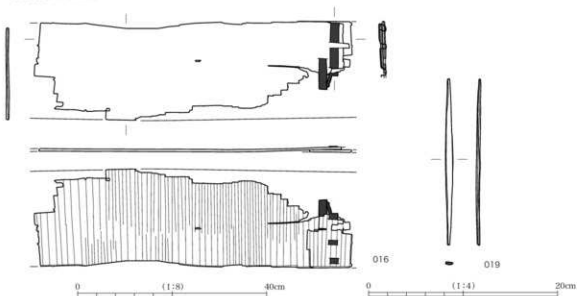


図 334 長野北浦遺跡 08C 区 0232SE 出土木製品実測図

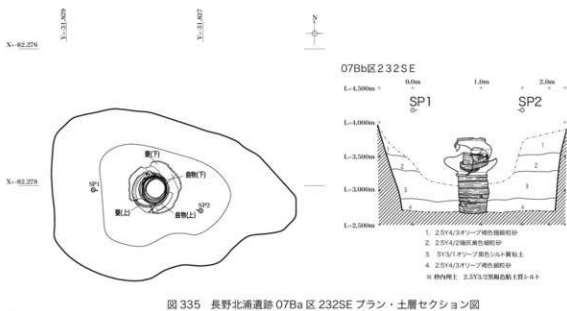


図 335 長野北浦遺跡 07Ba 区 232SE プラン・土層セクション図

X=62.278

07Bb 区 232SE 上部には廃棄土坑のように井戸材が投棄されていた。下写真の手前にみえるのは曲物の破材である。

井戸の掘形は、プランが長径 2.8m、短径 2.5m のやや不整形で、断面は壁面が急傾斜である。最下部は湧水のため確認できなかった。

井筒は下から曲物を 6 段積み上げ、その上に大甍の上半部を逆さに伏せて 1 段目としている。その上には再び曲物を積み上げて大甍の上半部を正位にして 2 段目としているが、曲物は崩れており、大甍も破損しているため、この部分で抜き取りが行われ、曲物の残骸もこの段階のものであろう。



図 336 長野北浦遺跡 07Ba 区 0232SE 南西から

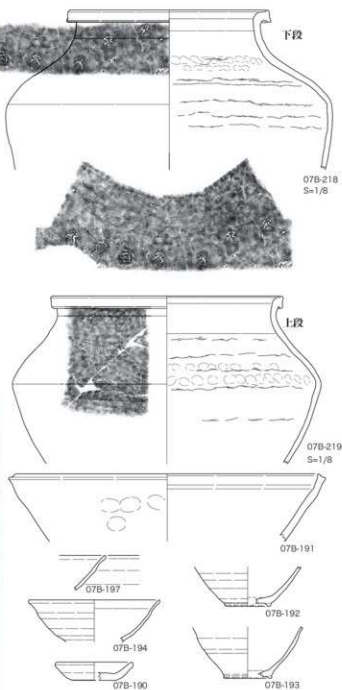
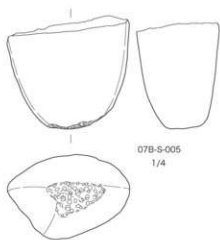
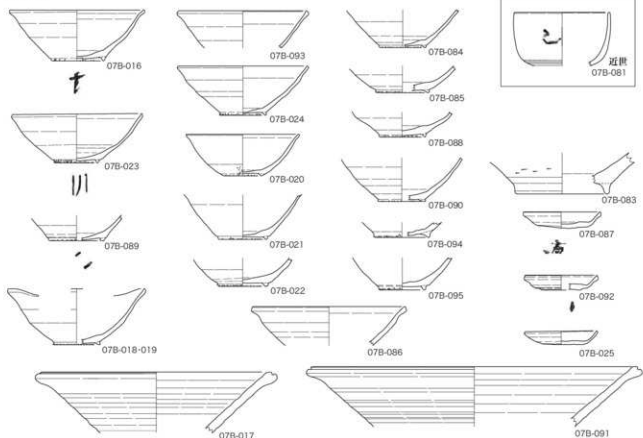
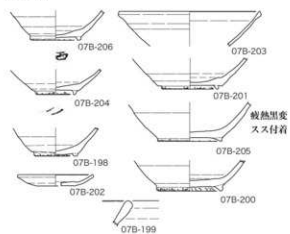


図 337 長野北浦遺跡 07Ba 区 0232SE 出土遺物実測図

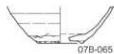
0152SD



0243SD



076SK



0134SK



0266SK



0197SK



図 338 長野北浦遺跡 07B 区各遺構出土遺物実測図

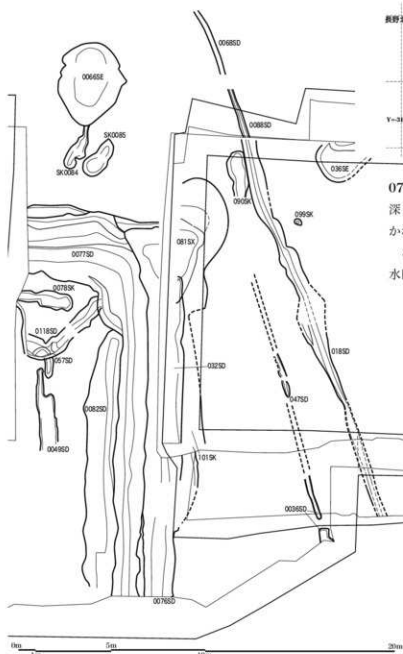
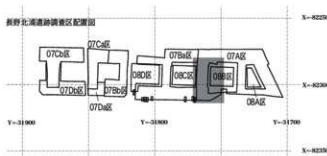


図 339 長野北浦遺跡区画溝東部遺構図



07A 区 077SD 方形区画東部の南北溝で、幅約2m、深さ約90cmを測る。断面は逆台形で、上下2層に分かれる点は西・北辺の方形区画溝に対応する。

なお、上部に広く重複する0345Xは近世の再掘削で、水田造成に伴う可能性が高い。

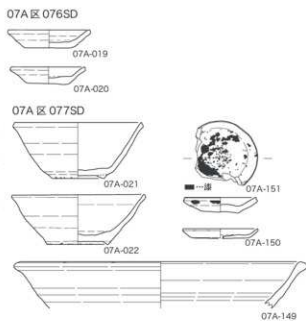


図 340 長野北浦遺跡 07A 区各遺構出土遺物実測図

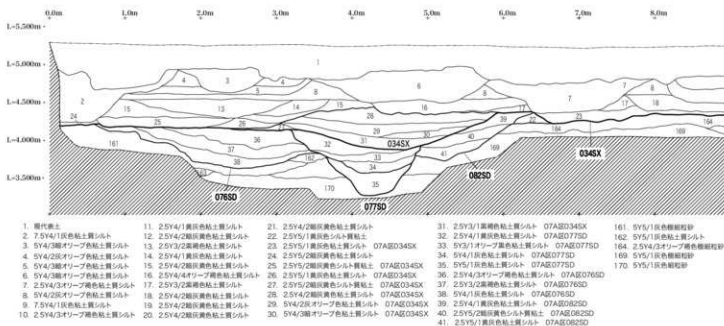


図 341 長野北浦遺跡 07A 区南壁土層セクション図

- | | | | | | |
|-------------------------|-------------------------|------------------------|-------------------------|------------|--------------------------|
| 1. 褐色土 | 11. 2.5Y4/1黄褐色粘土層シルト | 21. 2.5Y4/2緑泥黄褐色粘土層シルト | 31. 2.5Y3/1黄褐色粘土層シルト | 07A2D0345X | 161. 5Y5/1原色粘土層シルト |
| 2. 7.5Y4/1灰青色粘土層シルト | 12. 2.5Y4/2緑泥黄褐色粘土層シルト | 22. 2.5Y3/1黄褐色粘土層シルト | 32. 2.5Y4/1黄褐色粘土層シルト | 07A2D077SD | 162. 5Y5/1原色粘土層シルト |
| 3. 5Y4/3黄オレンジ色粘土層シルト | 13. 2.5Y3/2黄褐色粘土層シルト | 23. 2.5Y3/1黄褐色粘土層シルト | 33. 5Y3/1黄オレンジ色粘土層シルト | 07A2D077SD | 164. 2.5Y4/1黄オレンジ色粘土層シルト |
| 4. 5Y4/2黄オレンジ色粘土層シルト | 14. 2.5Y4/1黄褐色粘土層シルト | 24. 2.5Y3/2黄褐色粘土層シルト | 34. 5Y4/1黄褐色粘土層シルト | 07A2D077SD | 169. 5Y5/1原色粘土層シルト |
| 5. 5Y4/3黄オレンジ色粘土層シルト | 15. 2.5Y4/2黄褐色粘土層シルト | 25. 2.5Y3/2黄褐色粘土層シルト | 35. 5Y5/1原色粘土層シルト | 07A2D077SD | 170. 5Y5/1原色粘土層シルト |
| 6. 5Y4/3黄オレンジ色粘土層シルト | 16. 2.5Y4/4黄オレンジ色粘土層シルト | 26. 2.5Y3/1黄褐色粘土層シルト | 36. 2.5Y4/3黄オレンジ色粘土層シルト | 07A2D076SD | |
| 7. 2.5Y4/2黄オレンジ色粘土層シルト | 17. 2.5Y3/2黄褐色粘土層シルト | 27. 2.5Y3/2黄褐色粘土層シルト | 37. 2.5Y3/2黄褐色粘土層シルト | 07A2D076SD | |
| 8. 5Y4/2黄オレンジ色粘土層シルト | 18. 2.5Y4/2黄褐色粘土層シルト | 28. 2.5Y4/2黄褐色粘土層シルト | 38. 5Y4/1黄褐色粘土層シルト | 07A2D076SD | |
| 9. 7.5Y4/1灰青色粘土層シルト | 19. 2.5Y4/2黄褐色粘土層シルト | 29. 5Y4/2R黄オレンジ色粘土層シルト | 39. 2.5Y4/1黄褐色粘土層シルト | 07A2D082SD | |
| 10. 2.5Y4/3黄オレンジ色粘土層シルト | 20. 2.5Y4/2緑泥黄褐色粘土層シルト | 30. 5Y4/3R黄オレンジ色粘土層シルト | 40. 2.5Y3/2黄褐色粘土層シルト | 07A2D082SD | |
| | | | 41. 2.5Y5/1黄褐色粘土層シルト | 07A2D082SD | |

08B区081SX

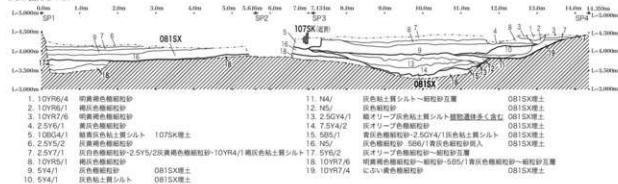


図 342 長野北浦遺跡 08B 区 081SX 土層セクション図

08B 区 081SX

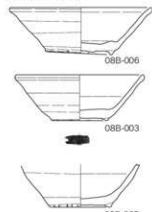


図 343 長野北浦遺跡 07B 区各遺構出土遺物実測図

08B 区 054SK



形成されており、止水環境であったことが窺える。遺物の出土はわずかで、人々の活動環境に近いとは思われない。

● 07A 区・08A 区

調査区東端には 07A 区 003SD が南北に走る他、001SD も中世に遡る可能性もあるが、不確かである。08A 区 005SE では下部に曲物が遺存し、その下に「砂止め」として編笠が敷かれていた。「砂止め」が出土すること自体が希有なのに、カゴではなく編笠が用いられていたことも珍しい。ただ、残念なのは調査時に半截されてしまったことである。

006SE は方形縦板組の井戸枠が出土した。07A 区ではほとんどが水田造成のために傾平されていたが、北東部でプランは 5×2m 以上、深さ約 30cm の方形土坑 055SK が検出された。性格は不明である。

07A 区 071SK



07A 区 074SK



図 344 長野北浦遺跡 07A 区各遺構出土遺物実測図

07A 区 076SD・08B 区 032SD 07A 区と 08B 区にまたがる幅約 3m、深さ約 1m の南北溝で、方形区画 077SD に先行する。西・北・東辺を連続する方形区画以前に、陸橋部をもって断続する区画溝が存在した可能性を示唆する資料である。

08B 区 081SX 07A 区 076SD・08B 区 032SD 北端に設けられた南北 6m、東西 5m を測る不整形で、池状に広がる遺構である。北部の堆積層下部には植物遺体層が

07A 区 002SD・003SD・004SD

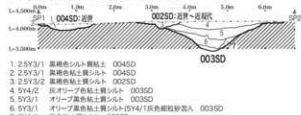


図 345 長野北浦遺跡 07A 区北西壁土層セクション図



図 346 長野北浦遺跡 08A 区 005SE 井戸枠出土状況 北西から



図 347 長野北浦遺跡 08A 区 005SE 井戸底編笠出土状況 北西から

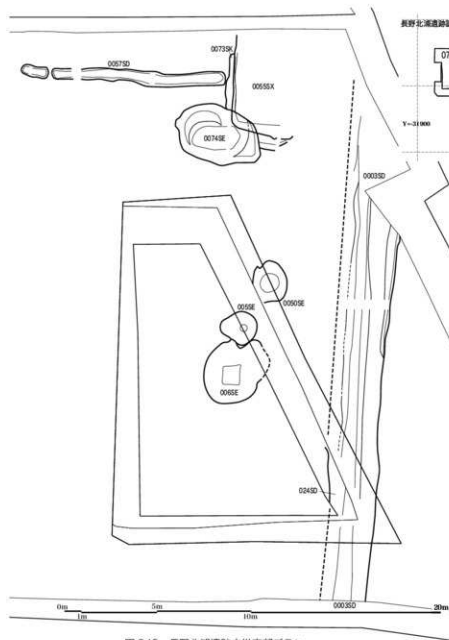
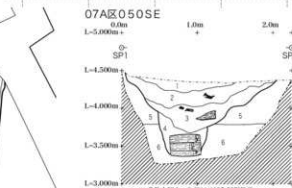
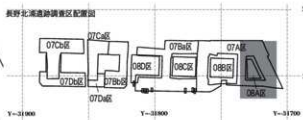
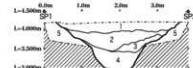


図 348 長野北浦遺跡中世東部プラン



- 2.5Y4/2褐色粘土質シルトと2.5Y3/1シルト質粘土の混土 丹戸松並取り後遺層
- 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルトと2.5Y3/1シルト質粘土の混土 丹戸松並取り後遺層
- 3.5Y4/1灰色シルト質粘土と2.5Y3/1シルト質粘土の混土 丹戸松並取り後遺層
- 5.Y2/1オリーブ褐色粘粒砂と2.5Y3/1シルト質粘土の混土
- 5.Y4/1 灰色粘粒土 基礎層
- 5.Y3/1 オリーブ褐色シルト質粘土 基礎層

07A区066SE



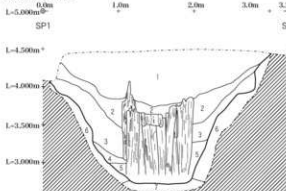
- 2.5Y4/2褐色粘土質シルトと5.Y4/1灰色シルト質粘土の混土
- 5.Y4/1灰色粘粒砂と2.5Y2/1黒色粘土の混土
- 2.5Y4/1 灰色粘粒砂
- 5.Y4/1 灰色粘粒砂
- 5.Y4/2 灰オリーブ粘粒砂 基礎層

08A区005SE



- 7.5Y5/6 暗褐色粘土質シルト - 1.0Y4/3に多い黄褐色粘土質シルト 2.5Y4/4浅黄色粘粒砂混層 近代以後の水田耕作土
- 1に似る 0.9Y5/4混土
- 7.5Y5/6に 少ない黄褐色粘土質シルト
- 3+2.5Y6/1 灰黄色粘粒砂混層
- 1.0Y4/2 灰黄褐色粘土質シルト+1.0Y4/3に多い黄褐色粘土質シルト 暗褐色粘土質シルトと2.5Y4/4浅黄色粘粒砂混層
- 2.5Y4/2 浅黄色粘粒砂
- 2.5Y7/4 浅黄色粘粒砂
- 2.5Y6/1 灰黄褐色粘粒砂~1.0Y4/3黄褐色シルト質粘土 灰黄色粘粒砂
- 5.Y5/1 灰黄色粘粒砂

08A区006SE



1. 1.0Y5/3 に多い黄褐色粘土質シルト 1.0Y4/3黄褐色粘土質シルト+0.9Y5/4混土 0.06SE埋土
2. 5.0Y4/1 1.0Y4/1灰色シルト質粘土と2.5Y7/4浅黄色粘粒砂混層 0.06SE埋土
3. 1.0Y4/1 灰色粘土質シルト+1.0Y4/1緑灰色粘粒砂混層 1.0B6E/1黄灰色粘粒砂混層 0.06SE埋土
4. 5.0Y7/1 暗黄褐色粘粒砂~中粒砂 0.06SE埋土
5. 1.025C/1 暗黄褐色粘粒砂+1.0Y4/1灰色粘土質シルト+7.5Y2/5オリーブ粘粒砂混層 0.06SE埋土
6. 2.5Y7/4 浅黄色粘粒砂~粘粒砂+1.0Y4/1灰色シルト質粘土 基礎層
7. 1.0Y4/3 黄褐色シルト質粘土 基礎層

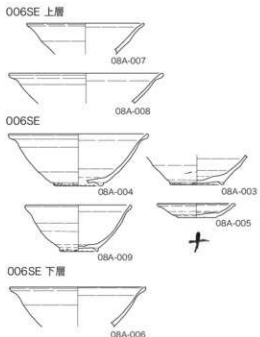


図 349 長野北浦遺跡 07A 区 006SE 出土遺物実測図

図 350 長野北浦遺跡 07A 区各井戸土層クセクション図

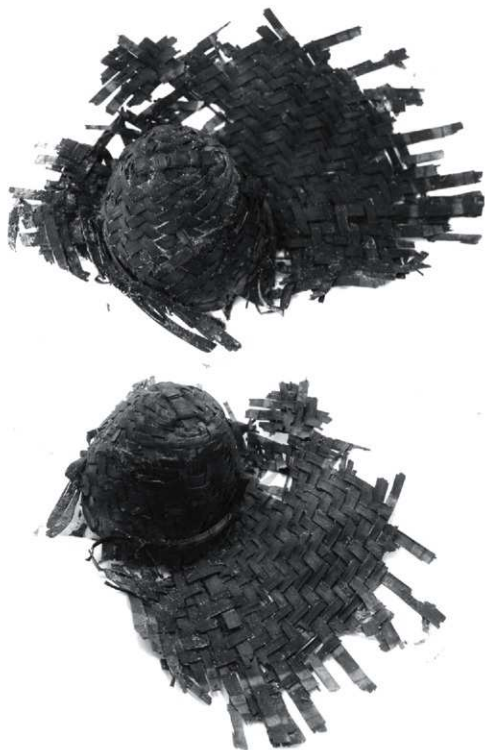


図 351 長野北浦遺跡 08A 区 005SE 井戸底編笠洗浄後の状況

08A-006SE 出土井戸材

031～053 は方形縦板組みの井戸枠材。

031・032・035・036 は隅柱で、各面に 3 ないし 4 本の横棧を挿入するためのホゾ孔があく。いずれも 2 分の 1 分割材を用いる。

033・034・037～044 は側板およびその補助材の一部。

045-1・045-2・045-3・046 と、048～053 は横棧。このうち、045-1～045-3 と、049～053 は、それぞれ同じ丸太材を分割して用いている。このことから、井戸枠材の製作は現場作業として行われていたことがわか

る。

047 は小型の曲物底板とおもわれる円形の板で、木取りは柁目材。
(樋上昇)

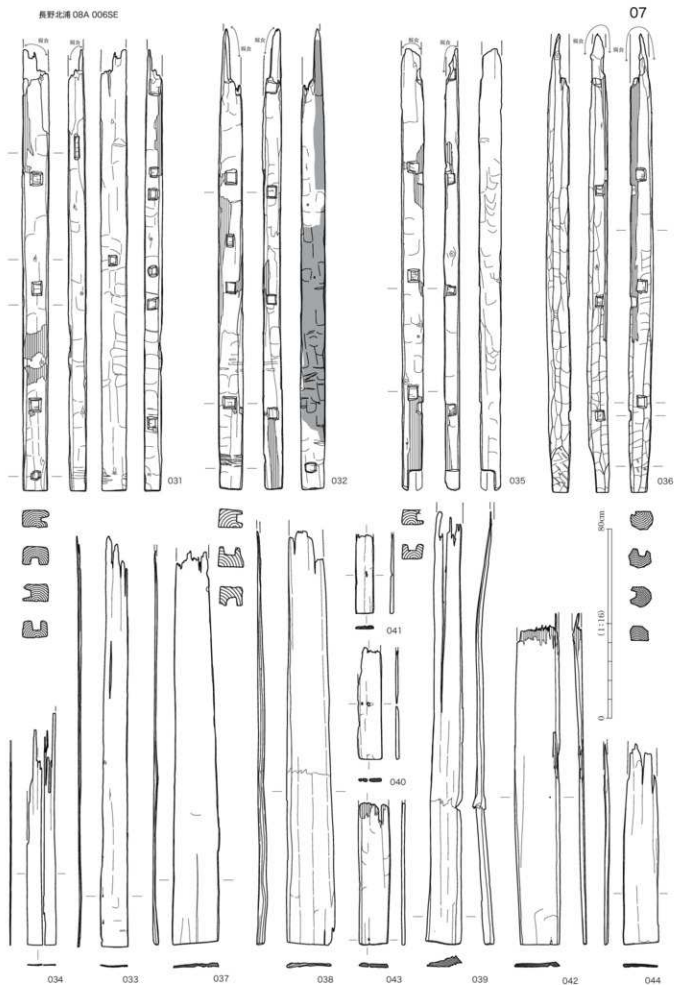
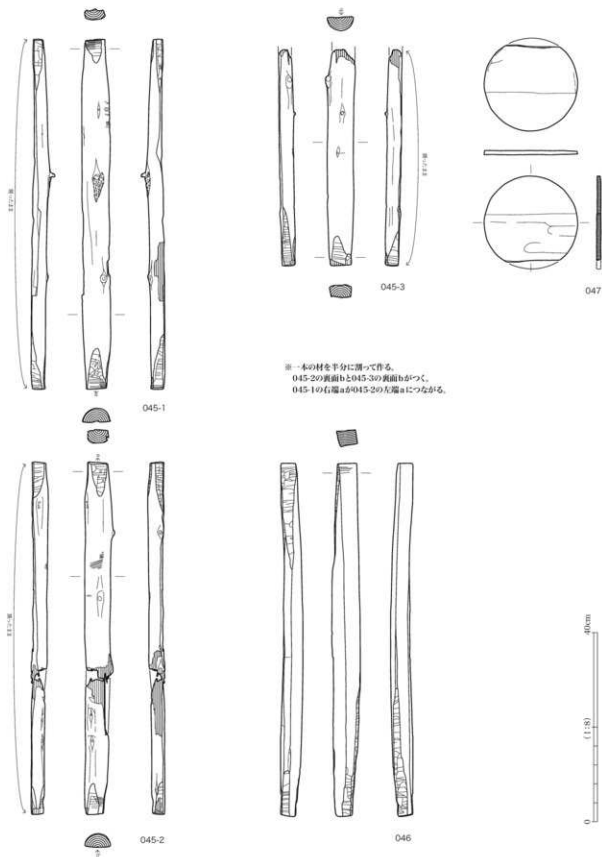


図 352 長野北浦遺跡 08A 区 006SE 井戸材実測図 (1)



※一本の材を平分に割って作る。
 045-2の表面は045-3の裏面と同じ。
 045-1の右端aが045-2の左端aにつながる。

図 353 長野北浦遺跡 08A 区 006SE 井戸村実測図 (2)

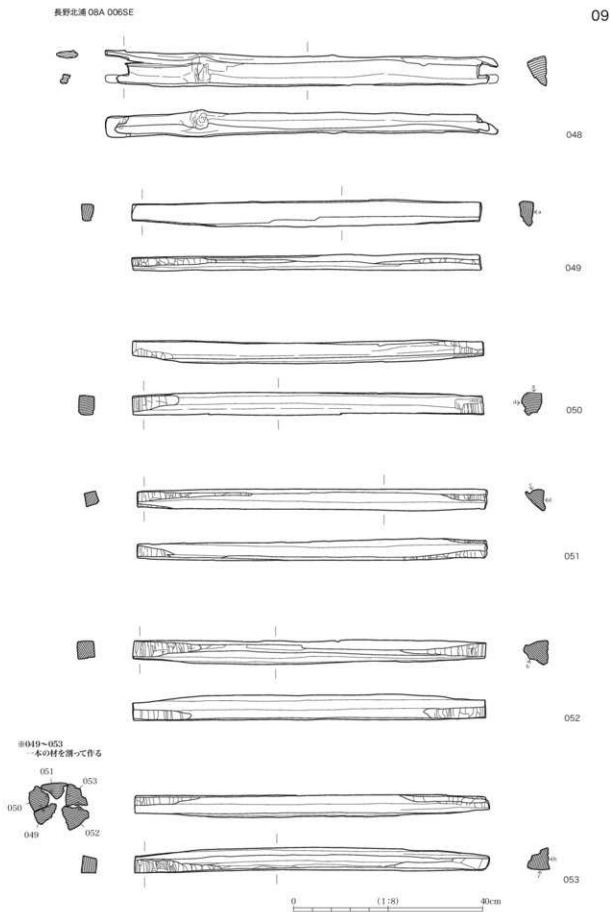
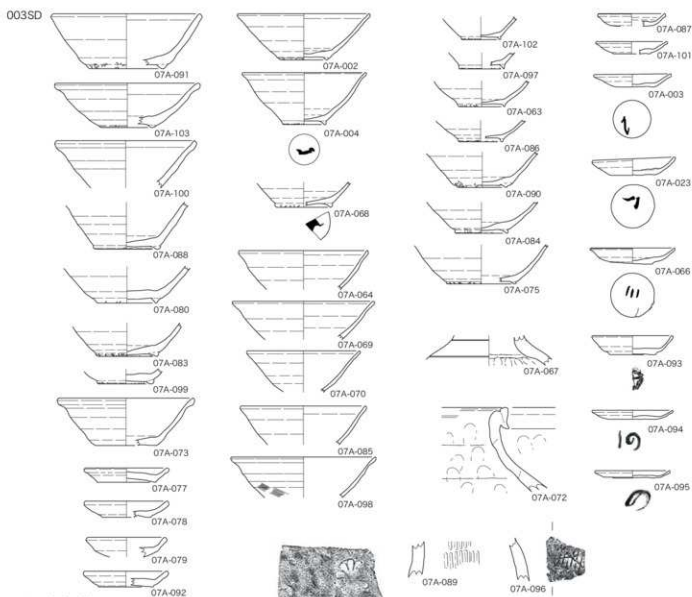
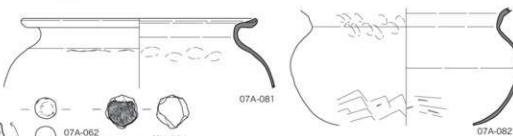
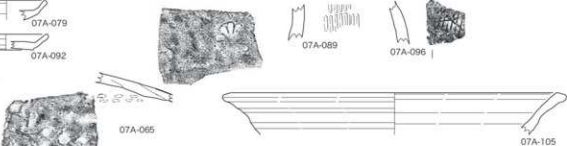


図 354 長野北浦遺跡 OBA 区 006SE 井戸材実測図 (3)



003SD 出上下駄

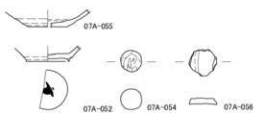
004は左足用の下駄。歯を押し込むためのホゾ孔と溝がないため、連歯式とおもわれるが、腐食のために歯は遺存していない。木取りは板目材。(樋上 昇)



長野北浦 07A 003SD



001SD



0 1:1 20cm

図 355 長野北浦遺跡 07A 区 001・003SD 出土遺物実測図

(4) 近世以降

A. 概要

長野北浦遺跡では近世になって水田が拡大する。中世の方形区画溝が水田開発に影響を与えたとすれば、方形区画北東部が高として残った点に、周辺よりは地表面高度が高かったらしいことが何がしかの作用をしたと言えることぐらいで、それ以外では遺構群の展開との相関は不明である。

水田化からはずれたエリアでは、特に08C区以東で礎板をもつ掘立柱建物群が展開しており、屋敷地の拡大（もしくは新設）が認められる。礎板の中には基礎層に貫入しているものもあり、もともと不安定な地盤であったところに、地震による基礎の液状化も加わって沈下を引き起こされた可能性も考える必要がある。

さて、長野北浦遺跡における近世以降の変遷過程については、最終段階は近・現代まで下るもの大きく見て、全城の水田造成：近世1期、掘立柱建物群の展開：近世2期、閑散期：近世3期（近世末～近代）に区分できる。

近世1期 14世紀前半をもって中世屋敷地は廃絶し、近世までは閑散とした状況であったと考えられる。17世紀になると畠地を削減する方向で水田造成が始まる。現状では水路は不明で用排水系も明確ではないが、現道下に埋もれている可能性は残る。

近世2期 17世紀末から18世紀前半には水田造成が及ばなかった畠地（要は高所）を核に周辺の埋め立ても行われて新たに屋敷地が造成される。土地環境を反映してか、礎板をもつ掘立柱建物群が展開する。礎石や根石は未確認であるが、石材入手の困難な濃尾平野であれば、木材利用が現実的ではある。ただ、礎石建物が無かったと断定できる状況にもないので、建物の基礎構造については不確定要素を含む。

建物群は、08C区を中心とする西部グループと08B区を中心とする東部グループがあり、両者は軸線をわずかに異にし、周囲を画する小溝もそれぞれの軸線に合わせていることから、これらが一体に変遷している可能性は高い。現状では、両者を区分する小溝があるのかどうかは不明であり、1単位なのか2単位に分かれるのか不確かである。西部グループには柱穴列が幾つも認められるので、屋敷地内が柵（板柵）で区画された可能性もある。

しかし、これらが一つの屋敷地を構成する建物群であると想定した場合に、調査区内に明確な中心建物は存在しない。

西部グループには10×8mほどの井戸を取り込んだ建物が復元できるが、井戸が中心を占めて小部屋が周囲に展開する状況なので、居住施設としては違和感がある。北西隅という位置関係やプランからみて特定作業に関わる建物の可能性がある。その東に12×7m以上で、緑網をもつ建物があり、棟持ち柱の通りも窺えるので、これが主屋、あるいはそれに次ぐ建物であった可能性がある。

東西グループの建物群には一例も礎石（根石）建物がなく、いずれも軽微な礎板である点をみれば、大形建物の建築環境として決して適切な場所ではなかったであろう。もし、大規模な主屋があるのであれば調査区の南に存在するか、そもそもこの屋敷地そのものが小規模建物群が展開する限定的なものであった可能性もある。

近世3期 19世紀以降が当てられるが、建物の配置は明確ではない。ただ、近世の建物が100～150年続いたのであれば、最終段階は20世紀に下ってもならぬ不思議は無い。東端では、07A区002SDの東層を削って平坦地が造成される。近代以降のことであろうと推測されるが、水田ではないようだ。



図356 長野北浦遺跡東端の南北溝群 北から

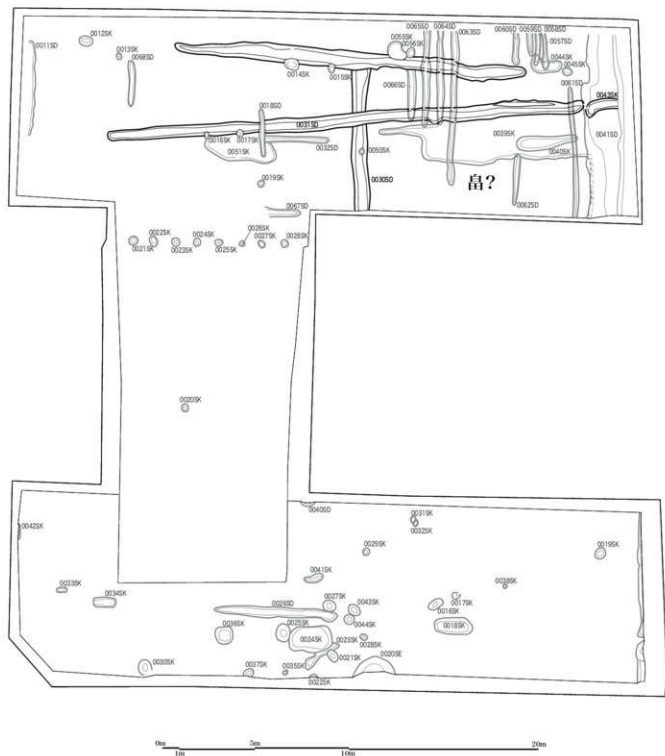
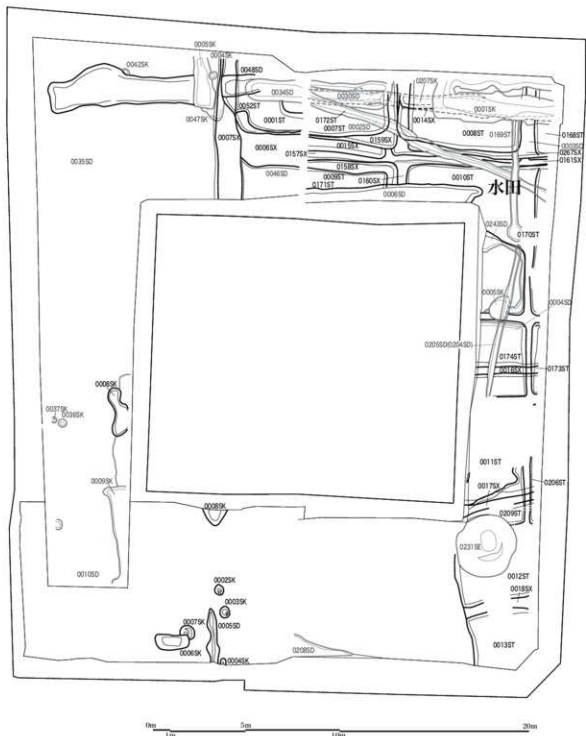
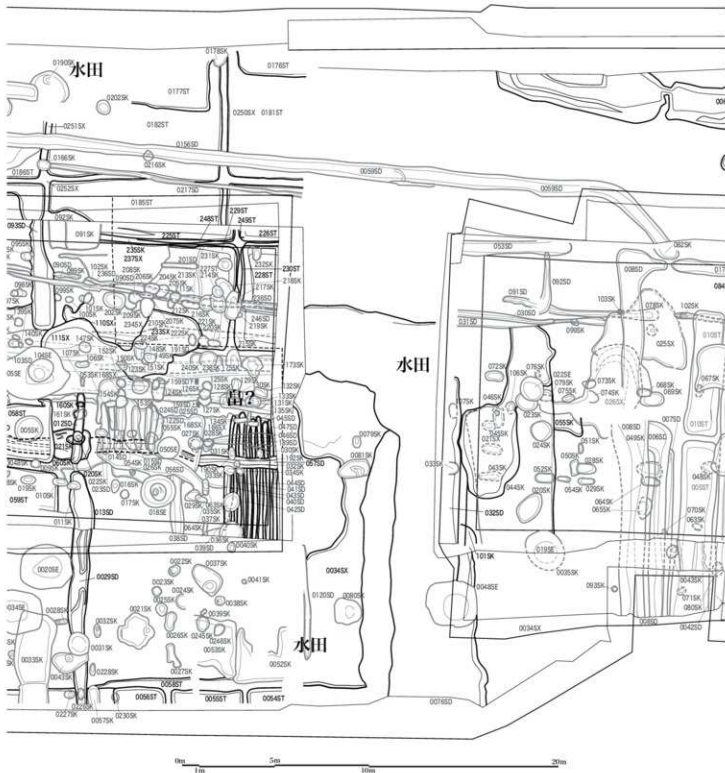


図 357 長野北浦遺跡近世1期遺構図

01





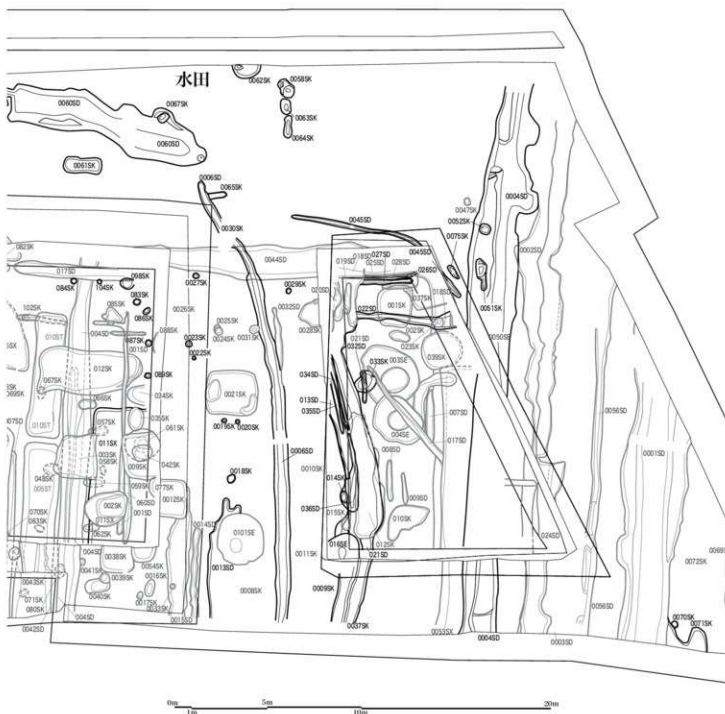


図 359 長野北浦遺跡近世 1 期遺構図

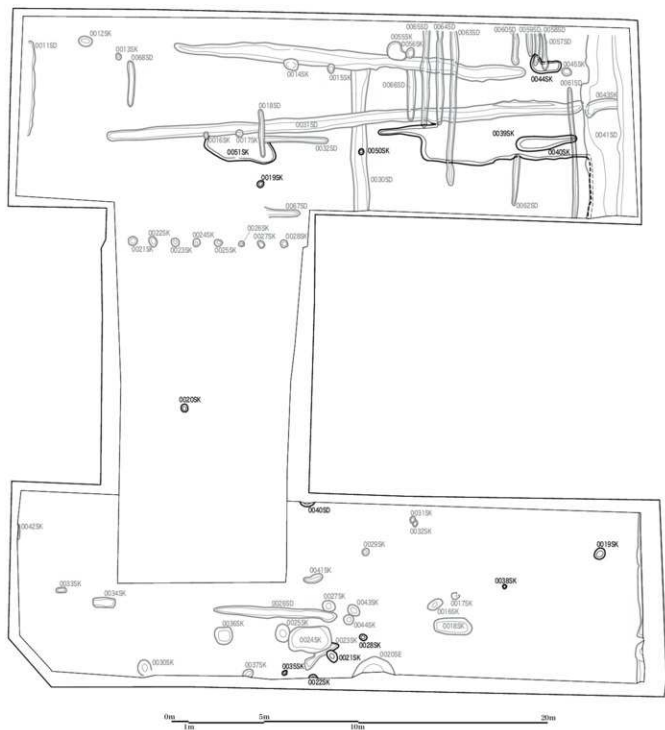


図 360 長野北浦遺跡近世 2 期遺構図

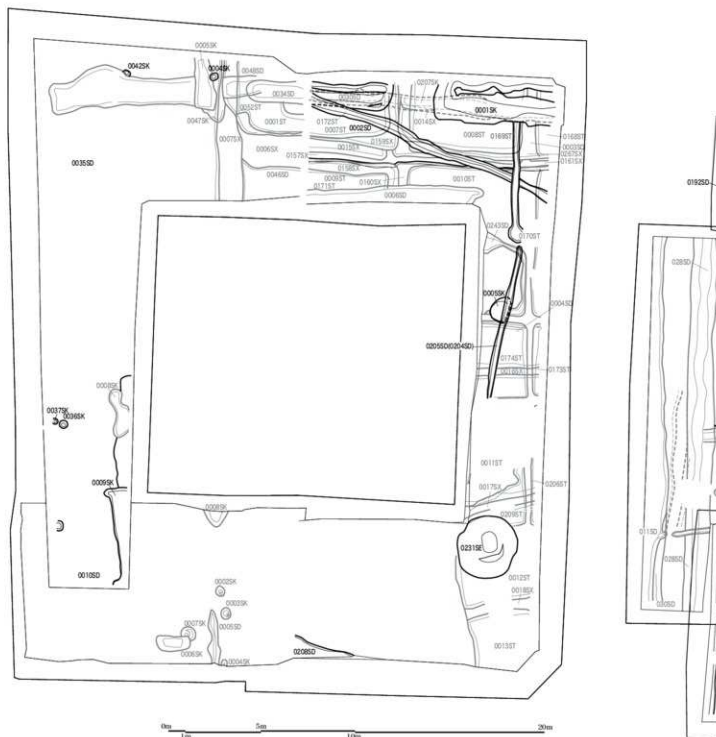
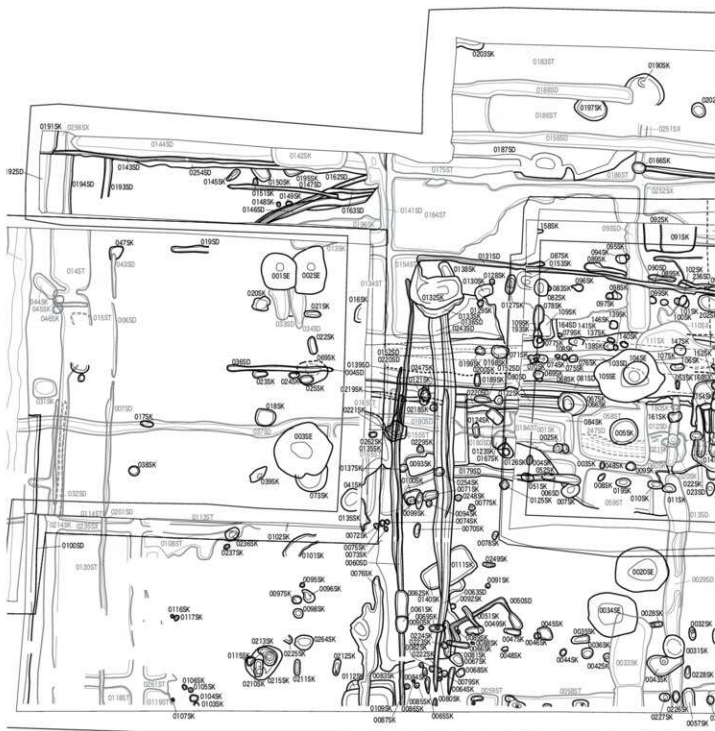


图 361 長野北浦遺跡近世 2 期遺構図



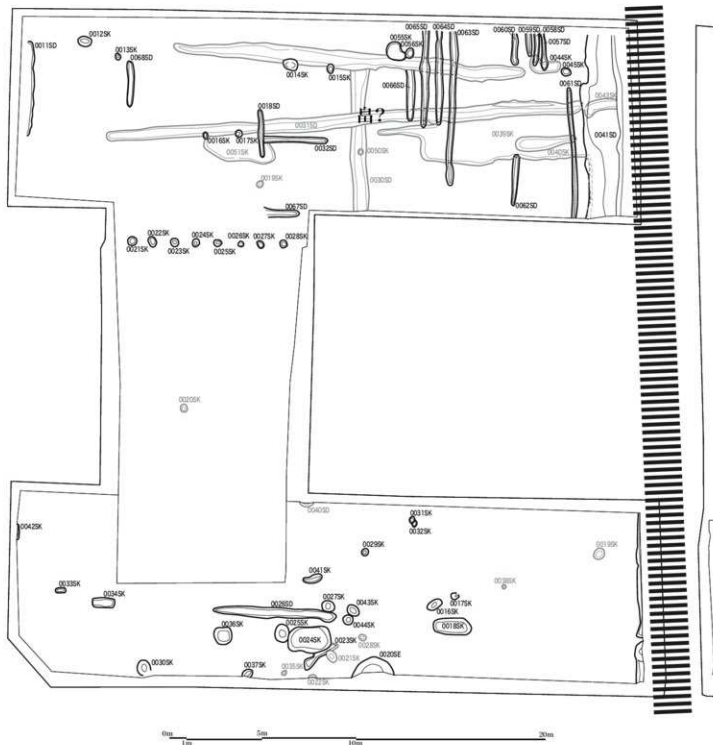
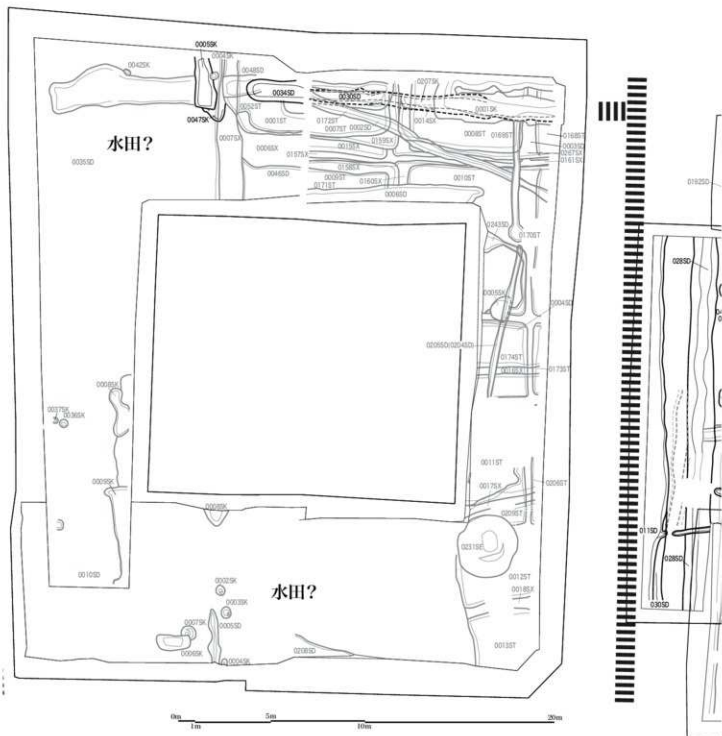


图 363 長野北浦遺跡近世 3 期遺構図



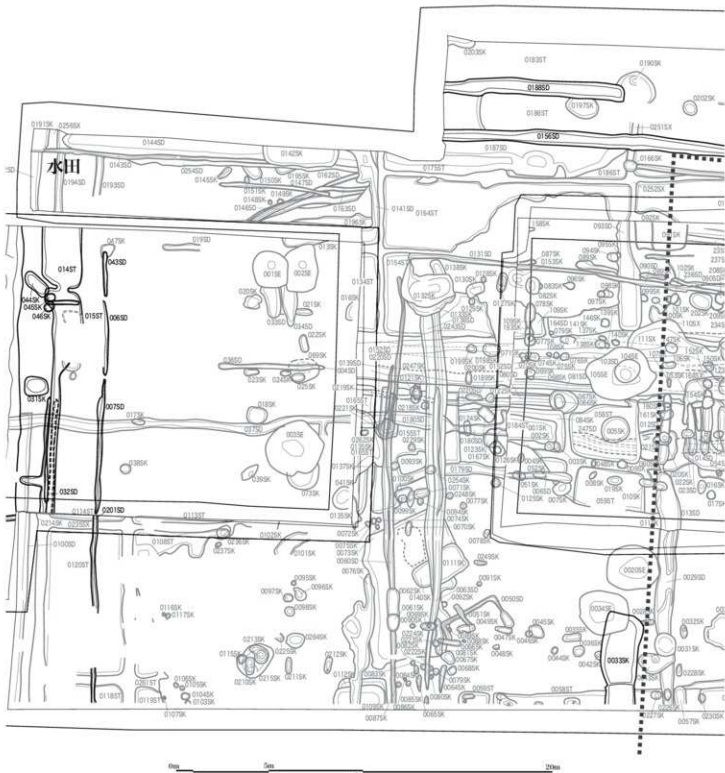


図 364 長野北浦遺跡近世 3 期遺構図

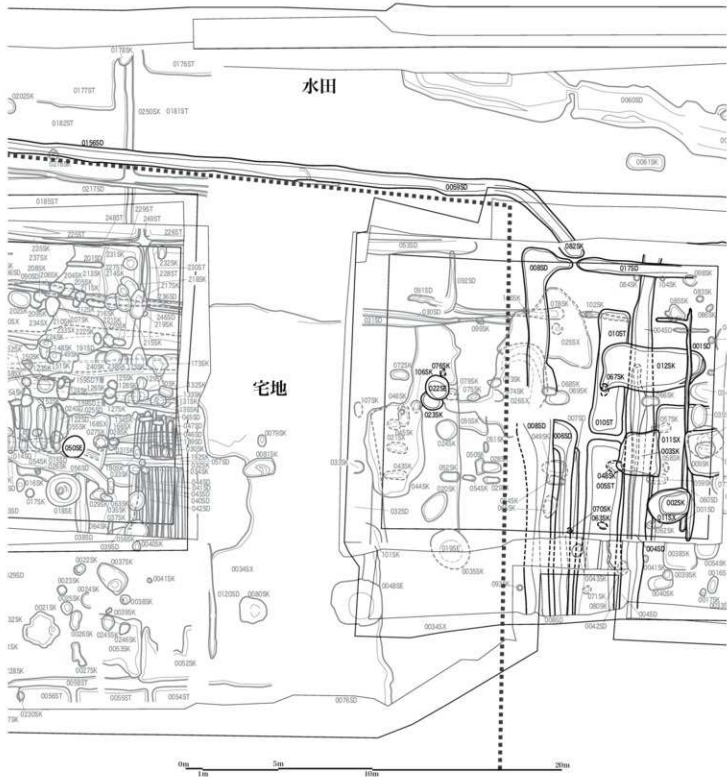




図 365 長野北浦遺跡近世3期遺構図

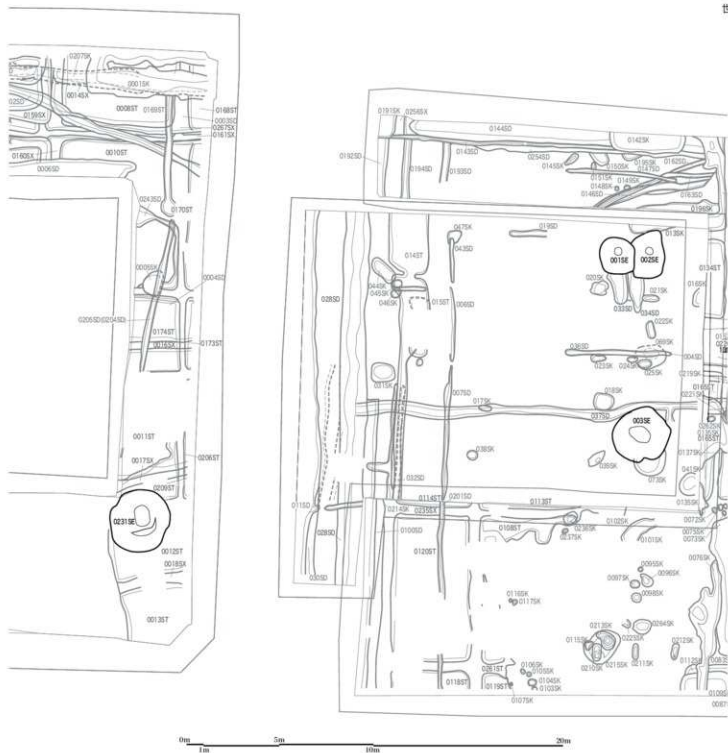


図 366 長野北浦遺跡近世建物・井戸分布図

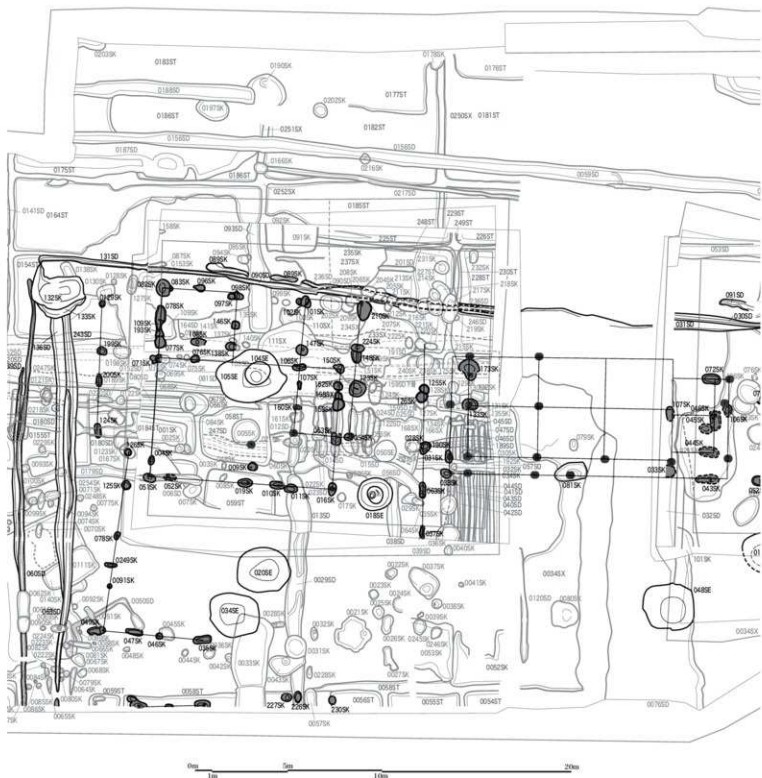
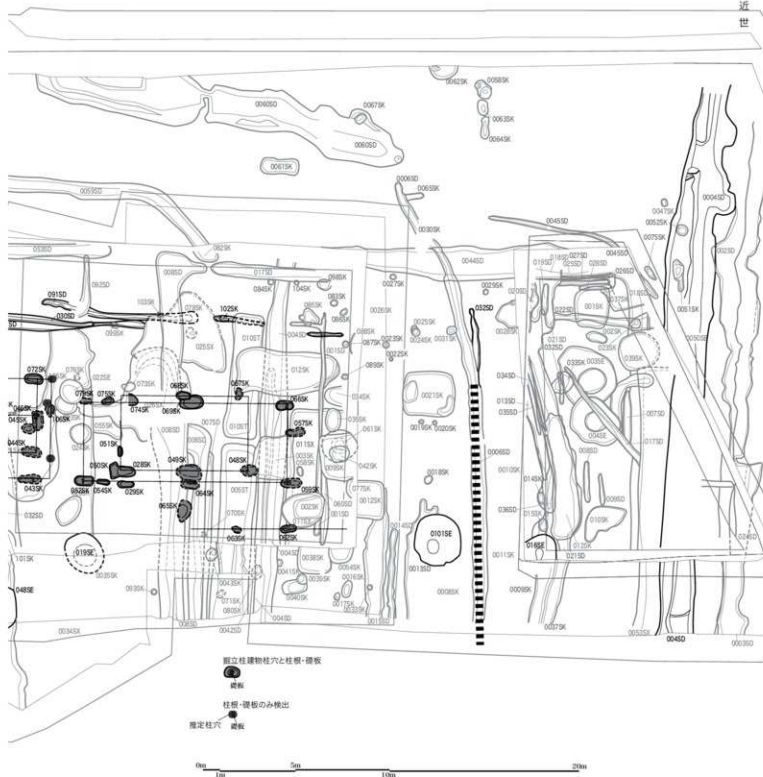
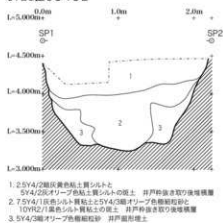


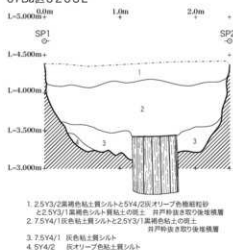
図 367 長野北溝遺跡近世建物・井戸分布図



07Ba区034SE

図 368 長野北浦遺跡 07Ba 区
034SE 土層セクション図

07Ba区020SE

図 369 長野北浦遺跡 07Ba 区
020SE 土層セクション図

B. 遺構・遺物

● 07区井戸

近世の井戸は、構造物が遺存していたもののほとんどが「桶組み」である。近世末から近・現代には陶製や素焼き製円筒が地上部に据え置かれるようだが、それ以前には木製棒が設置されていたのであろう。

07B区 020SE からは小刀が出土しており、廃絶にともない投棄されたものであろう。煙管や櫛も同様であろうか。

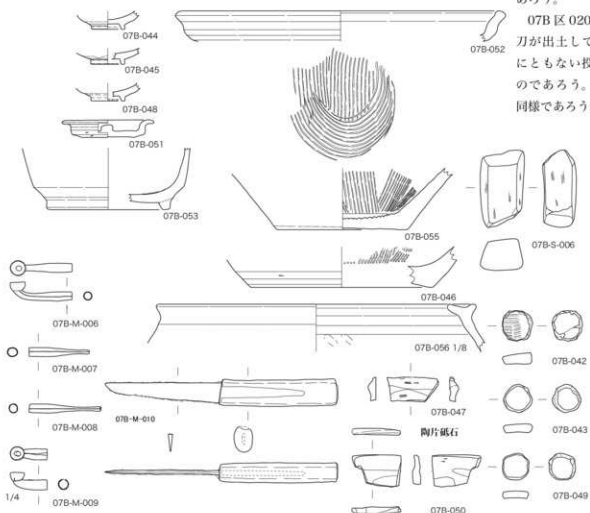


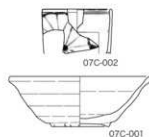
図 370 長野北浦遺跡 07Ba 区 020SE 出土遺物実測図

● 07区水田

水田からは、古代から近世までの幅広い時期の遺物が出土している。つまり、それ以前の包含層を掘削したということだ。調査時には中世水田の存在も想定されたが、近世遺物が含まれることから近世を遡ることはないであろう。

畦畔は、北部では東西長軸、南部では南北長軸のそれほど広くない区画が検出されている。地形の傾斜はほ

とんどないので、古代以降の長地型のようにもう少し大区画なら違和感も無いが、ともかく形状については比較資料が無いので判断を保留しておく。

図 371 長野北浦遺跡 07C 区
001ST 出土遺物実測図

長野北浦 07B 020SE

01

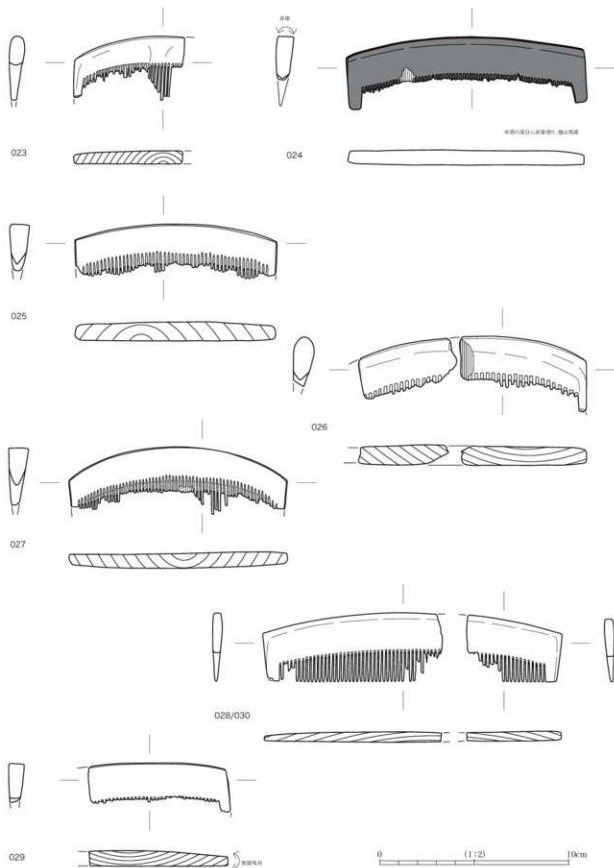


図 372 長野北浦遺跡 07Ba 区 020SE 出土木製品実測図

07B-020SE 木製品

横櫛が7点出土している(023～029)。うち024は背の部分に赤漆、それ以外の面には黒漆をほどこす。他

はすべて白木のままである。木取りはいずれも、樹芯に近い部分を用いた板目材。(榎上昇)

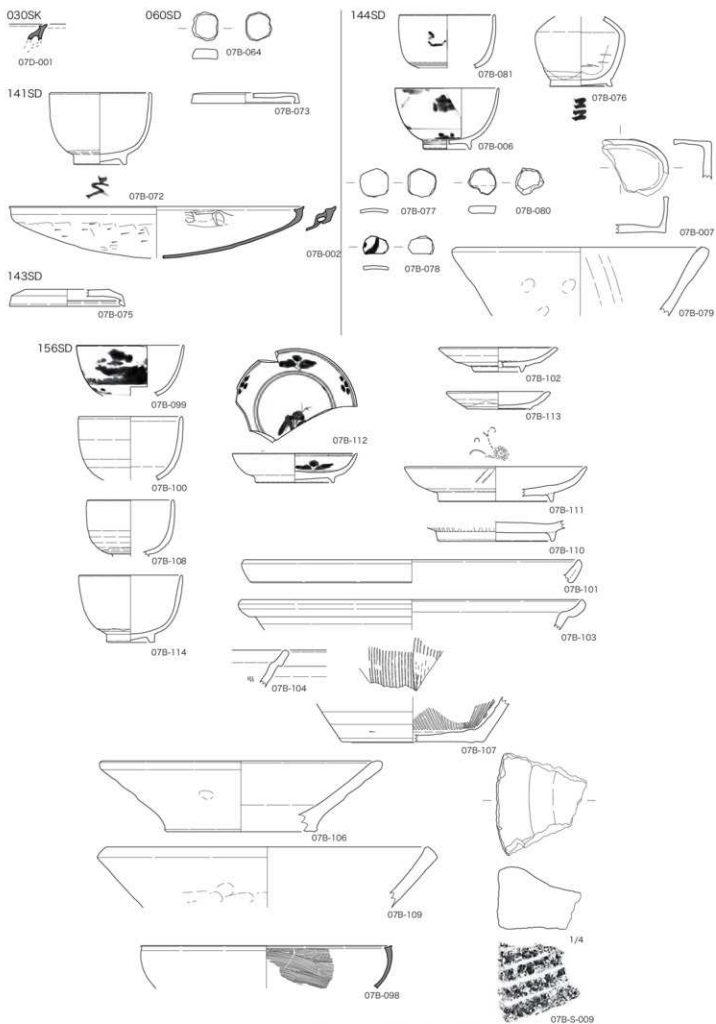


图 373 長野北浦遺跡 07B 区各遺構出土遺物実測図

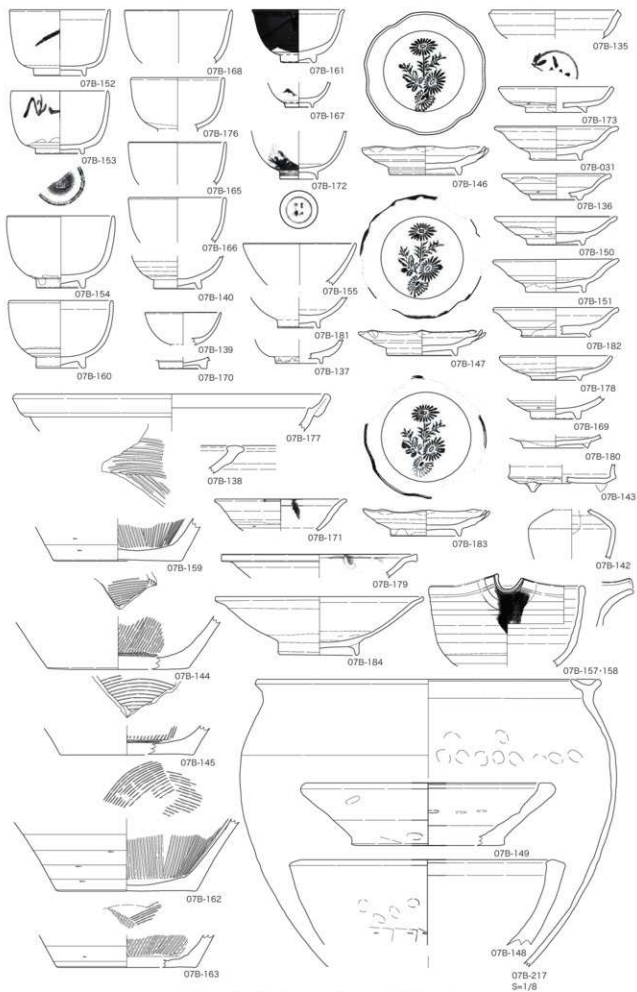
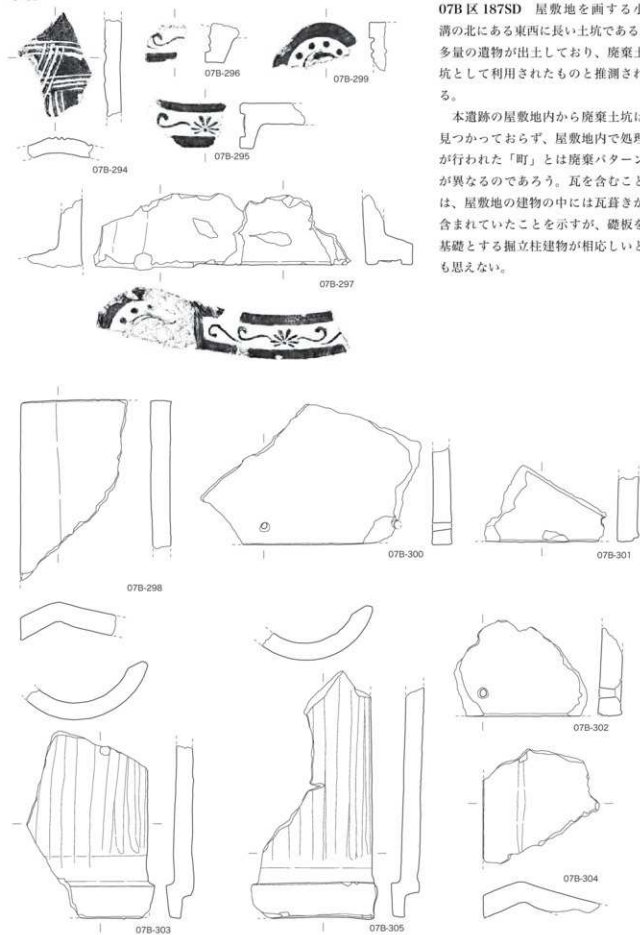


図374 長野北浦遺跡 07B区 187SD 出土物実測図 (1)

187SD



07B区 187SD 屋敷地を画する小溝の北にある東西に長い土坑である。多量の遺物が出土しており、廃棄土坑として利用されたものと推測される。

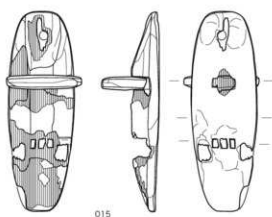
本遺跡の屋敷地内から廃棄土坑は見つかっておらず、屋敷地内で処理が行われた「町」とは廃棄パターンが異なるのであろう。瓦を含むことは、屋敷地の建物の中には瓦葺きが含まれていたことを示すが、礎板を基礎とする掘立柱建物が相応しいとも思えない。

图 375 長野北浦遺跡 07B区 187SD 出土遺物実測図 (2)

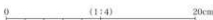
長野北浦 07B 187SD



長野北浦 07B 156SD



長野北浦 07B 187SD



022

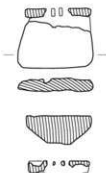


図 376 長野北浦遺跡 07B 区出土木製品実測図

07B-187SD 出土木製品

差し歯式の下駄が2点出土。021は台の平面形が長方形で、022は長楕円形。021は差し歯の柄孔が前後2カ所ずつで、022は1カ所ずつ。022は右足用で、023は不明。木取りは021・022のいずれもが、台・歯ともに柎目材。
(樋上昇)

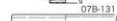
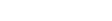
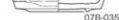
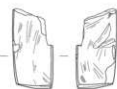
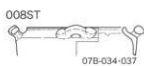


図 377 長野北浦遺跡 07B 区水田関係遺構出土遺物実測図

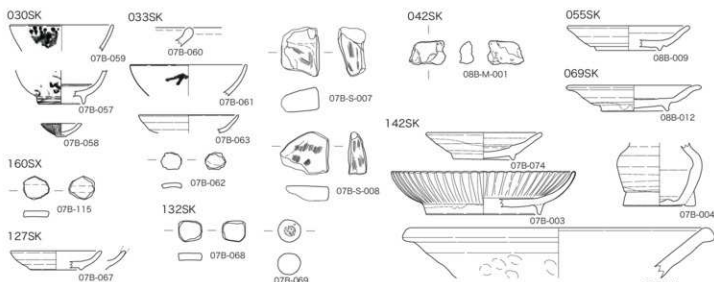


図 378 長野北浦遺跡 07B 区各遺構出土遺物実測図



図 379 長野北浦遺跡 08B 区井戸土層セクション図

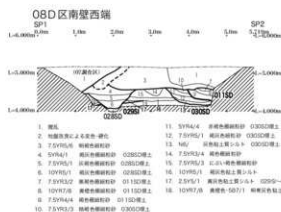


図 380 長野北浦遺跡 08D 区 011・028・030SD 土層セクション図

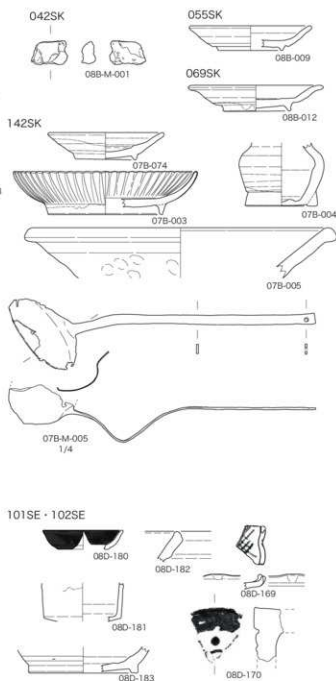


図 381 長野北浦遺跡 08D 区 001・002SE 出土遺物実測図

08D 区 011SD・030SD・028SD 08D 区西端で見つかった南北に走る溝。011SD は下部の 030SD と軸線は同じで、028SD は並走する。

030SD は、最下部 13層が還元層で、12層も細粒砂が堆積しており、水流のあったことが窺え、他の2条とは堆積環境が異なる。用排水システムを構成する溝である。

011SD は8層を挟んで上下に分かれる。8層は基盤土を含み、盛り上げられていた基盤土が流入したものである。上層の7層に遺物の廃棄が認められ、「011SD一括」として取り上げた一群がそれである。「011SD」はさらに下部を掘り下げた際に出土したものが、030SD 堆積層との区分は十分ではない。

028SD は断面逆台形で、堆積層は水平だが、常時水流があった形跡はない。東側は近世末以降の水田である。

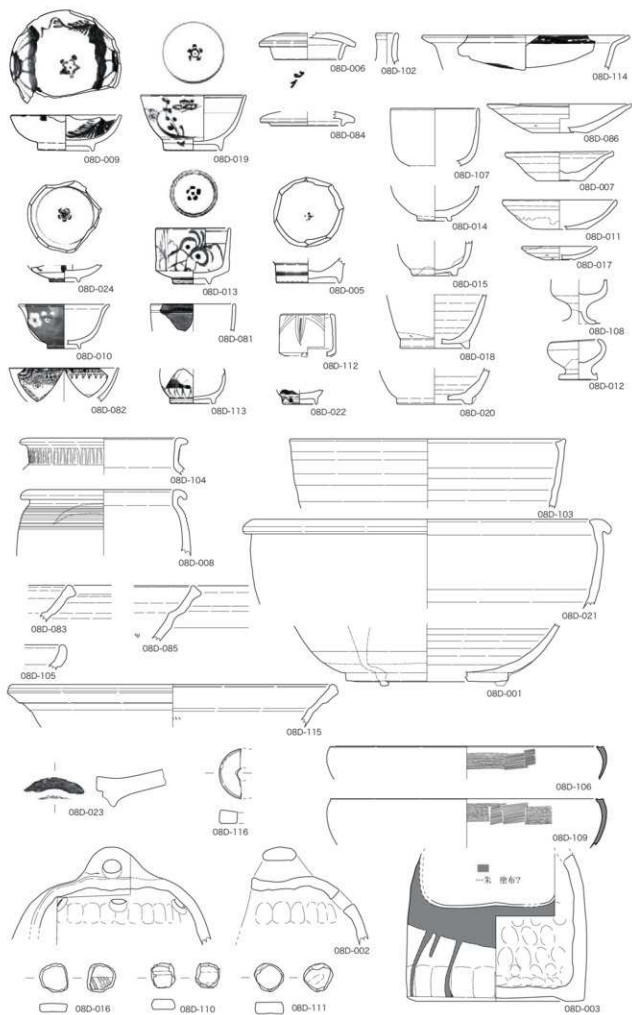


图 3B2 長野北浦遺跡 O8D 区 O11SD 出土遺物実測図

011SD一括

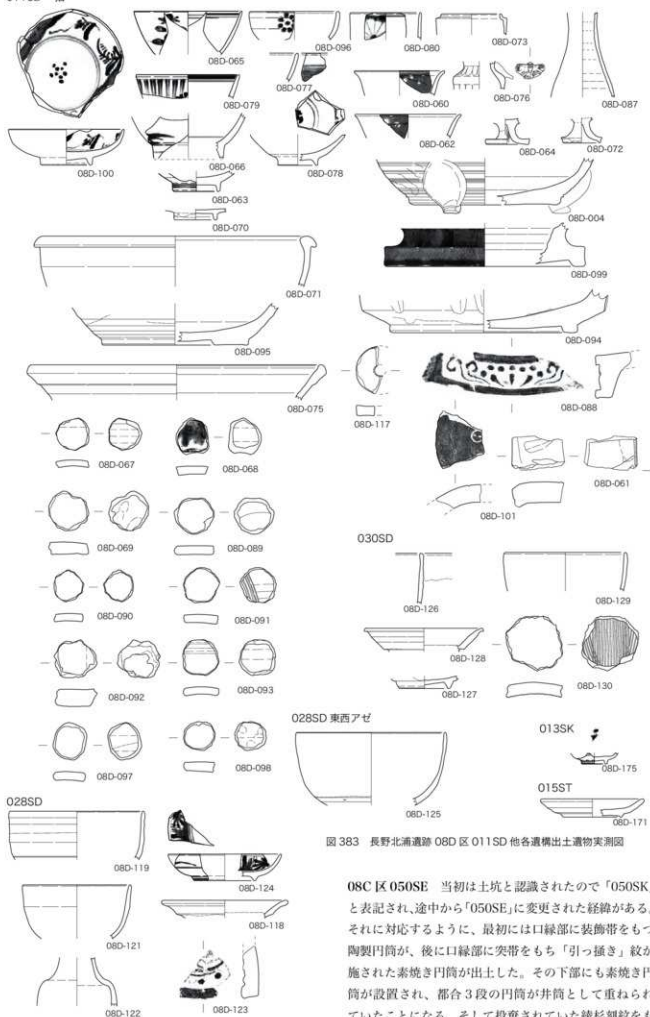
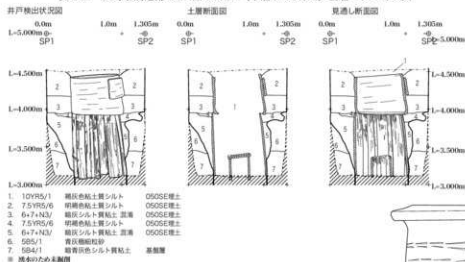


図 383 長野北浦遺跡 08D 区 011SD 他各遺構出土土遺物実測図

08C 区 050SE 当初は土坑と認識されたので「050SK」と表記され、途中から「050SE」に変更された経緯がある。それに対応するように、最初には口縁部に装飾帯をもつ陶製円筒が、後に口縁部に突帯をもち「引っ掻き」紋が施された素焼き円筒が出土した。その下部にも素焼き円筒が設置され、都合3段の円筒が井筒として重ねられていたことになる。そして投棄されていた綾杉刻紋をも

図384 長野北浦遺跡 OBC区 050SK (下層が050SE) 土層セクション図



つ井戸専用瓦も本来は擁壁に用いられたものであろう。

同類は清須市清須城下町遺跡からも出土している。愛知県埋蔵文化財センター1995「清須城下町遺跡V」のよれば、SE4021の上部は同類の

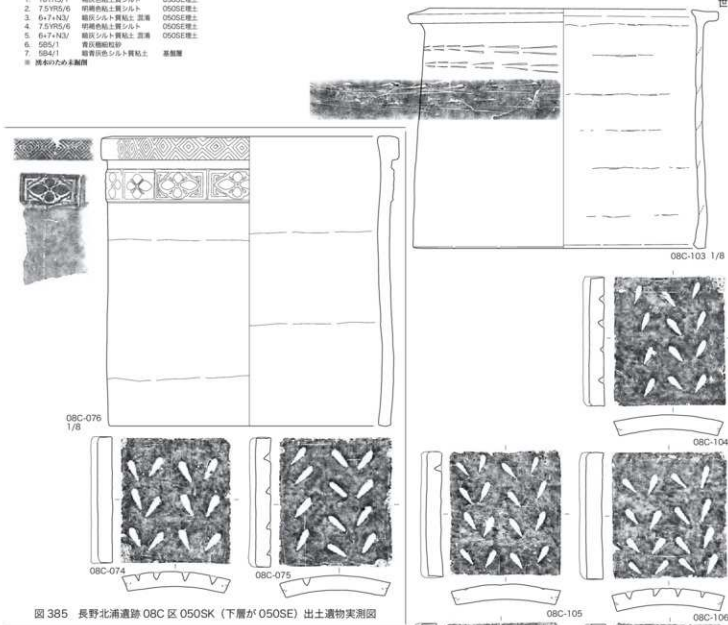


図385 長野北浦遺跡 OBC区 050SK (下層が050SE) 出土物実測図

専用瓦で井筒が構築されており、宿場町Ⅱ-2期(近世末)の年代が当てられている。下部構造は桶組の井筒であり、井筒内にはさらに小さな桶が入り子状になっていた。それ以下は湧水のために確認できなかった。

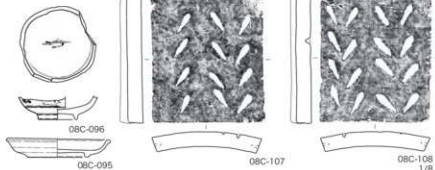


図386 長野北浦遺跡 OBC区 050SE (上層が050SK) 出土物実測図

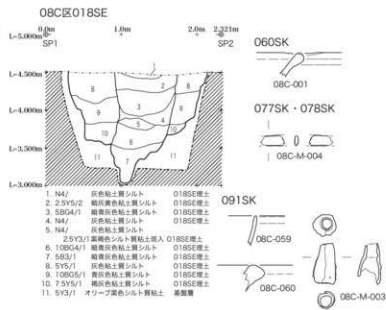
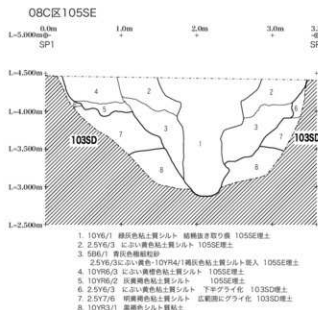


図 387 長野北浦遺跡 08C 区井戸土層セクション図



図 388 長野北浦遺跡 08C 区 104・105SE 出土遺物実測図

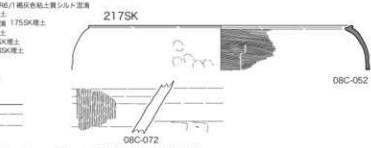
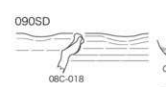
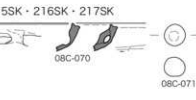


図 389 長野北浦遺跡 08C 区柱土層セクション図・その他遺構出土遺物実測図

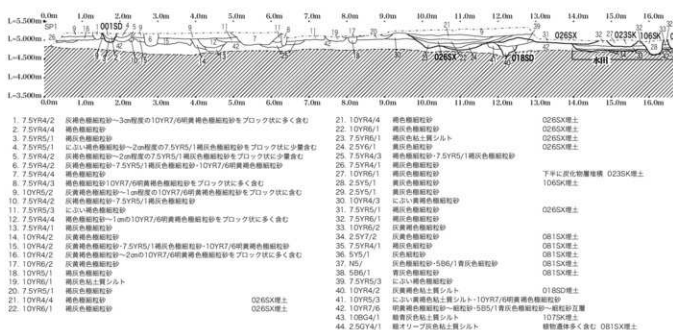
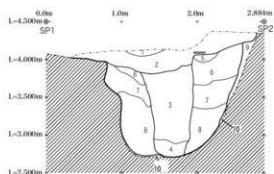


図 390 長野北浦遺跡 08B 区東西土層セクション図

● 08B 区

整地が繰り返されて土地利用形態はめまぐるしく変わる。調査区の西側は、水田が造成された後に整地されて建物群が展開し、026SXのよ

うな水溜溝構も設けられる。東側ではプランと土層セクションとの整合性も保てない程遺構の重複が激しく、検出面を下げる度に新たな遺構が姿を現す状況であった。最上面には島田地帯特有の幅広い水田が造成されて



1. 浮体遺構の埋戻し土
2. 2.5Y/3 黄褐色粘板砂 一部フコク化により2.50Y/4/1粘オリブ灰黄色粘板砂 10YR5/3Cにふい黄褐色粘板砂が混入 10Y4/1灰黄色粘板砂混入
3. 2.50Y/4/1 粘オリブ灰黄色粘板砂 10Y4/1灰黄色粘板砂混入
4. 2.50Y/1 オリーブ灰黄色粘板砂 層上部に少量の019SE埋土
5. 10Y3/1 オリーブ黄赤土質シルト 019SE埋土層上
6. 2.50Y/1 粘オリブ灰黄色粘板砂 7.5Y/5/1灰黄色粘板砂混入 019SE埋土層上
7. 10Y4/1 灰黄色粘板砂 2.50Y/1 オリーブ灰黄色粘板砂 混入 019SE埋土層上
8. 2.50Y/4/1 粘オリブ灰赤土質シルト 2.50Y/5/1オリーブ灰黄色粘板砂 混入 019SE埋土層上
9. 2.50Y/1 オリーブ灰黄色粘板砂 少量混入
10. ND 0

図 391 長野北浦遺跡 08B 区 019SE 土層セクション図

08B区048SK



1. 2.5Y/3 黄褐色粘板砂 10YR5/4Cにふい黄褐色粘板砂混入 048SK埋土
 2. 10Y5/1 灰黄色粘板砂 048SK埋土
 3. 2.5Y/3 Cにふい黄褐色粘板砂 基層
- 横溝溝? フタクにより10Y5/1 黄褐色粘板砂

08B区Bライン



1. 2.5Y/3 黄褐色粘板砂 10YR5/4Cにふい黄褐色粘板砂混入 一部フコク化 049SK埋土
2. 2.5Y/2 粘灰黄色粘板砂 2.5Y/4Cにふい黄褐色粘板砂混入 064SK埋土
3. 2.5Y/3 Cにふい黄褐色粘板砂 一部フコク化 基層

08B区051SK



1. 2.5Y/2 粘灰黄色粘板砂
- 2.5Y/2 灰黄色粘板砂混入 051SK埋土

08B区052SK



1. 10Y4/1 灰黄色粘板砂 混入 2.50Y/1オリーブ灰黄色粘板砂混入 052SK埋土
2. 2.50Y/1 オリーブ灰黄色粘板砂 少量混入 052SK埋土
3. 2.50Y/1 オリーブ灰黄色粘板砂 基層

052SK



1. 10Y4/1 灰黄色粘板砂 混入 2.50Y/1オリーブ灰黄色粘板砂混入 052SK埋土
2. 2.50Y/1 オリーブ灰黄色粘板砂 少量混入 052SK埋土
3. 2.50Y/1 オリーブ灰黄色粘板砂 基層

08B区059SK



1. 2.5Y/2 粘灰黄色粘板砂
- 2.5Y/3 Cにふい黄褐色粘板砂混入 059SK埋土

08B区064SK



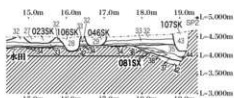
1. 2.5Y/2 粘灰黄色粘板砂
- 2.5Y/4 Cにふい黄褐色粘板砂混入 064SK埋土
2. 2.5Y/3 Cにふい黄褐色粘板砂 一部フコク化 基層

08B区066SK



1. 2.5Y/2 粘灰黄色粘板砂 10Y5/1 灰黄色粘板砂混入 066SK埋土
2. 2.5Y/2 灰黄色粘板砂 一部フコク化 基層

図 393 長野北浦遺跡 08B 区柱六土層セクション図



08B区O61SK

- L=5.000m
 GP1
 L=4.500m
 O60SD
 L=4.000m
 O61SK
 L=3.500m
 GP2
- 2.5V/3 黄褐色粘板砂
 - 2.5V/3に濃い褐色粘板砂混入 O60SD埋土
 - 2.5V/5/1 オリーブ灰色粘板砂 2.5V/3に濃い褐色粘板砂混入 2.5V/7(2)黄褐色粘板砂にシラス質粘板砂(本河川)混入 O61SK埋土
 - 2.5V/6/1 オリーブ灰色粘板砂 2.5V/5(2)黄褐色粘土質シルト(ブロック状)含む O61SK埋土
 - 2.5V/6/1 オリーブ灰色粘板砂 2.5V/1(黄褐色粘土質シルト(ブロック状)含む O61SK埋土
 - 2.5V/7/1 明オリーブ灰色粘板砂(粗粒砂) 表層部



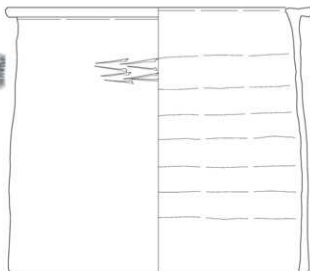
O8B-008



O8B-011

図 394 長野北浦遺跡 08B 区 O61SK
土層セクション図・出土物実測図

おり、周辺には畠が存在したと考えられる。なお、08B区 022SE からは 08C 区 050SE と同型の素焼き円筒が出土したが、井戸専用瓦の出土はない。



08B-054
1/8

図 395 長野北浦遺跡 08B 区 022SE 出土物実測図

0265X

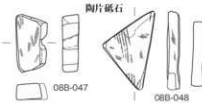


O8B-004



O8B-049

陶片破石



O8B-047

O8B-048



O8B-050



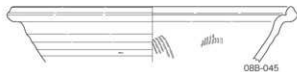
021SX



O8B-044



O8B-046



O8B-045

030SD



O8B-001

032SD



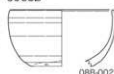
O8B-042

004SD



O8B-034

006SD



O8B-002

007SD



O8B-035

008SD



O8B-036

053SD



O8B-043

002SK



O8B-053

図 396 長野北浦遺跡 08B 区各遺構出土遺物実測図

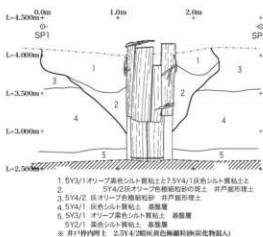


図 397 長野北浦遺跡 07A 区 101SE 土層セクション図



図 398 長野北浦遺跡 07A 区 101SE 検出状況 南から

● 08A 区・07A 区東端

南北溝が平行して掘削されている。002SD は 003SD (中世) 上部に設けられており、004SD とは切り合い関係がある。現代まで下る最も新しい遺物が出土しているのが 002SD だが、掘り返しの頻度から、初期は近世末から近代初期まで遡る可能性がある。001SD からは中世遺物が出土しており、中世に遡る可能性もある。よって、001SD → 004SD (= 056SD) → 002SD の順で掘削されたと判断する。

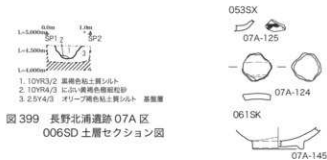


図 399 長野北浦遺跡 07A 区 006SD 土層セクション図

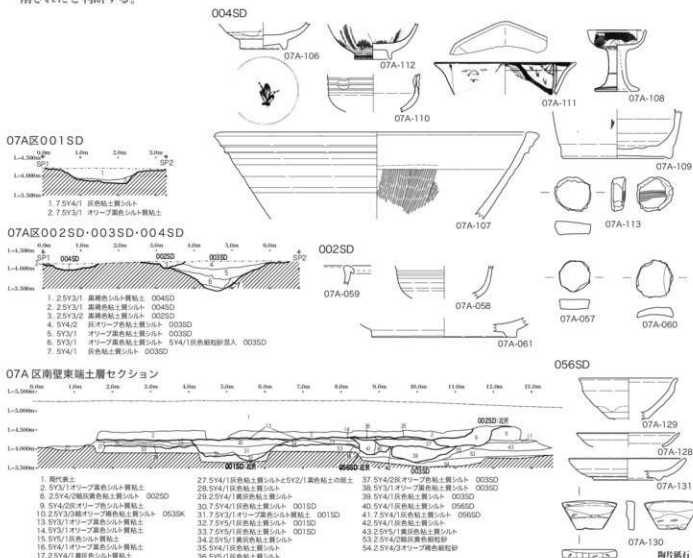


図 400 長野北浦遺跡 07A 区東端溝群土層セクション図・出土遺物実測図

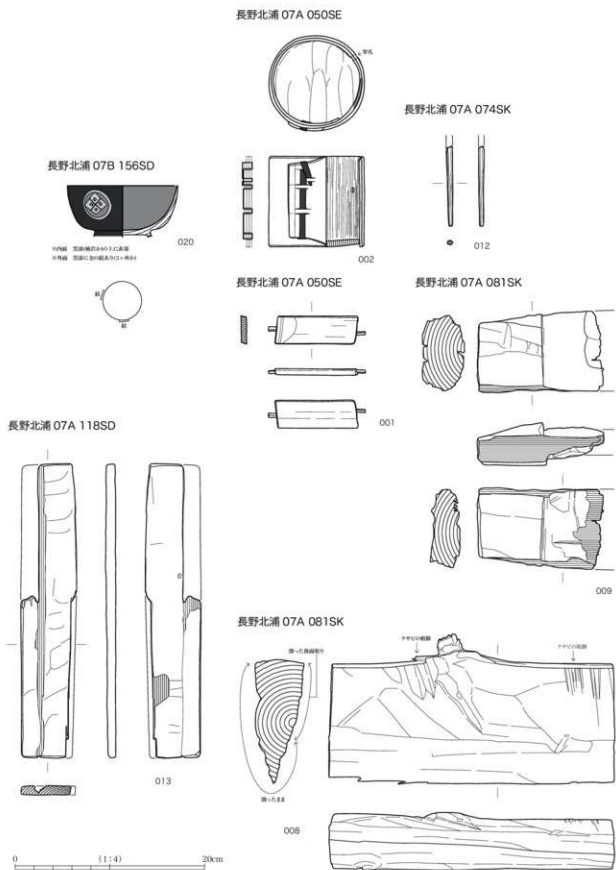
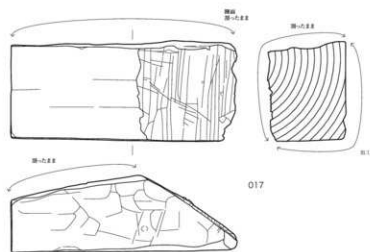
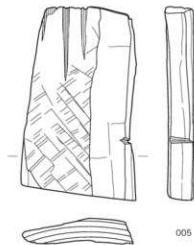


图 401 長野北浦遺跡 07A 区各遺構出土木製品実測図 (1)

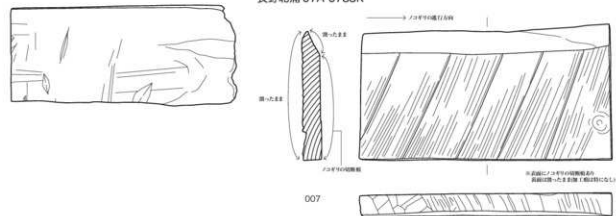
長野北浦 07B 226SK



長野北浦 07A 034SD



長野北浦 07A 078SK



長野北浦 07A 078SK

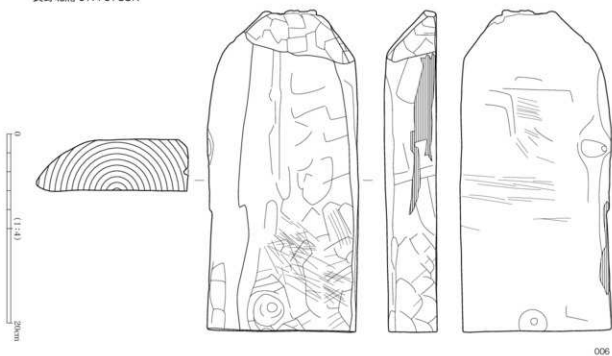
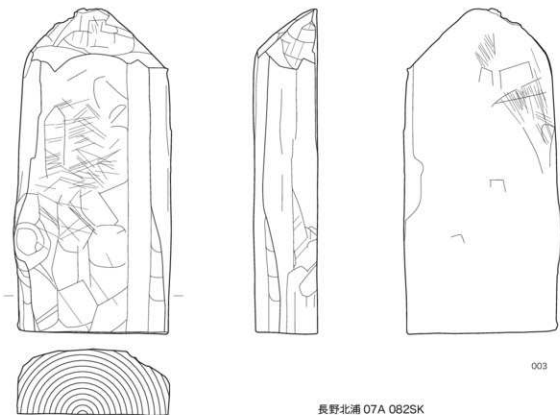


図402 長野北浦遺跡 07A区各遺構出土木製品実測図(2)

長野北浦 07A 060SD



長野北浦 07A 082SK

長野北浦 07A 082SK

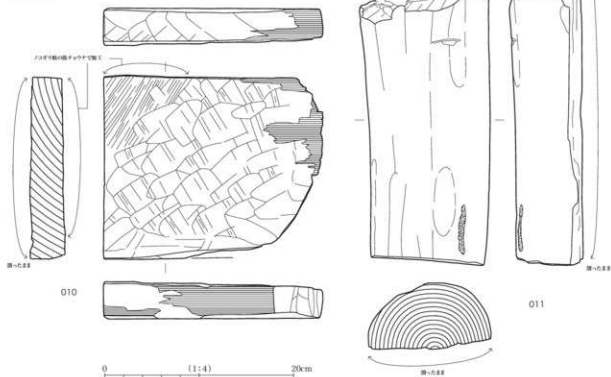


图 403 長野北浦遺跡 07A 区各遺構出土木製品実測図 (3)

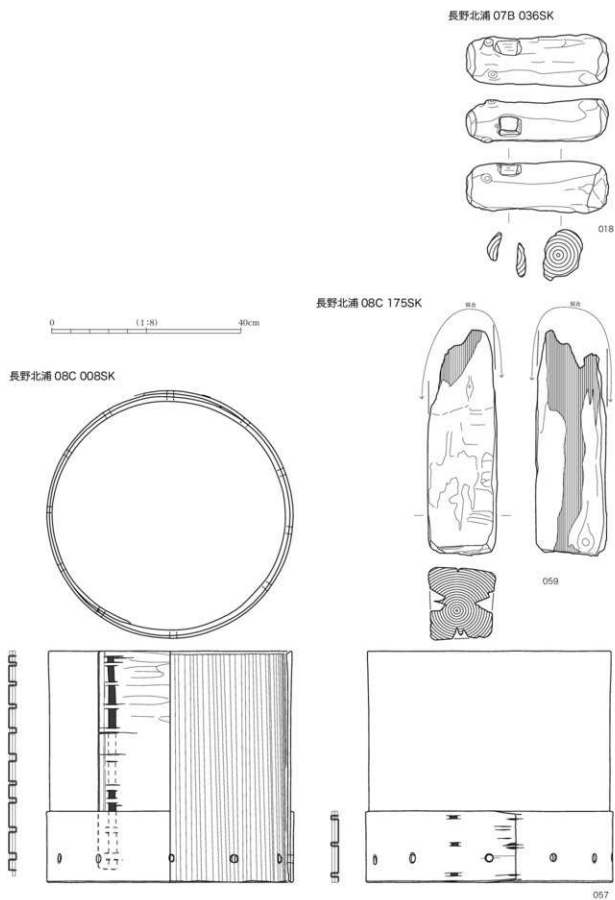


图 404 長野北浦遺跡各区出土木製品実測図 (1)

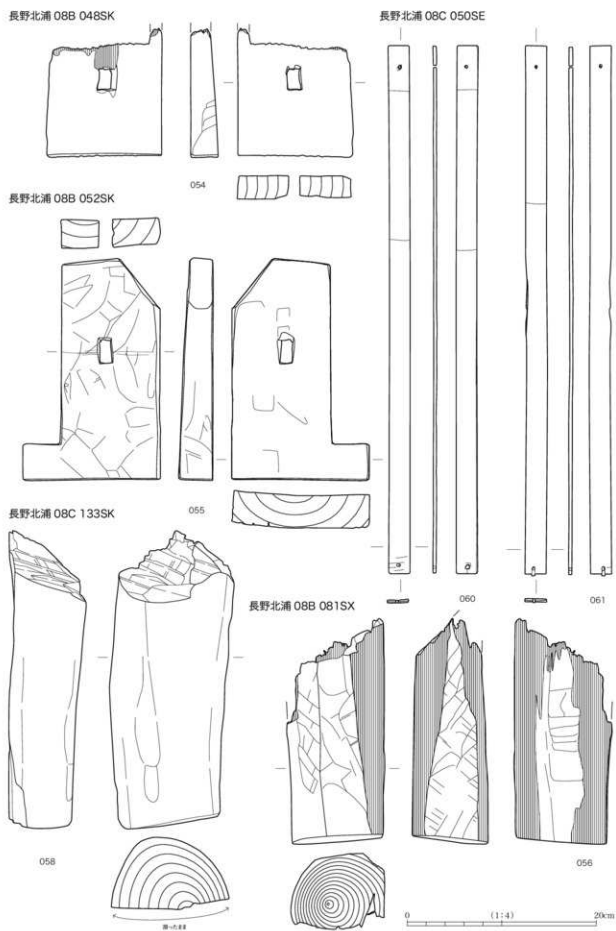


図 405 長野北浦遺跡各区分出土木製品実測図 (2)

第4章 自然科学分析

1. 昆虫化石を用いた長野北浦遺跡の古環境復元

(1) 試料および分析方法

A. 分析遺跡

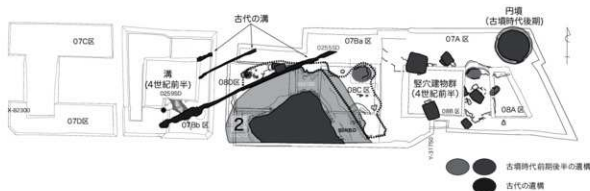
長野北浦遺跡は稲沢市東部に所在する古墳時代～近世の集落遺跡である。地形的には三宅川左岸の後背湿地上に位置しており、遺構検出面での標高は約4m程度である(桶上2008)。

長野北浦遺跡の発掘調査は、都市計画道路稲沢西春線の建設に伴って平成19年から20年にかけて愛知県埋蔵文化財センターによって行われた。遺跡からは古墳時代の竪穴建物群や溝、中世の区画溝・井戸・水田遺構、近世の屋敷地などが確認されており、当遺跡周辺が古墳時代から近世にかけて当地が人々の生活の場として利用さ

れていたことが明らかとなっている。

長野遺跡の西には、古墳時代・古代・中世～近世の複合遺跡である塔の越遺跡が隣接している。塔の越遺跡の調査区西半分からは古代、東半分からは中世～近世を主体とした遺構が見つかっている。遺跡の西半分を展開する古代の遺構に関してみると、7世紀から9世紀にかけて掘立式建物を中心に構成される建物群が展開していたと推定されており、塔の越遺跡が遺跡の西に隣接する尾張国府と密接な関係にあったことが指摘されている。遺跡の東半分を展開する中世～近世の遺構については井戸や区画溝が検出されており、これらは長野北浦遺跡から連続する遺構群であると推定されている。

古墳時代～古代



中世

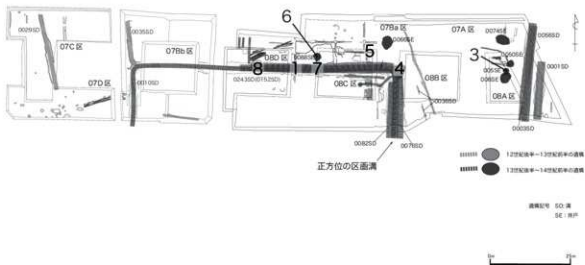


図406 試料採取位置平面図(奥野・藤山2009を改変)

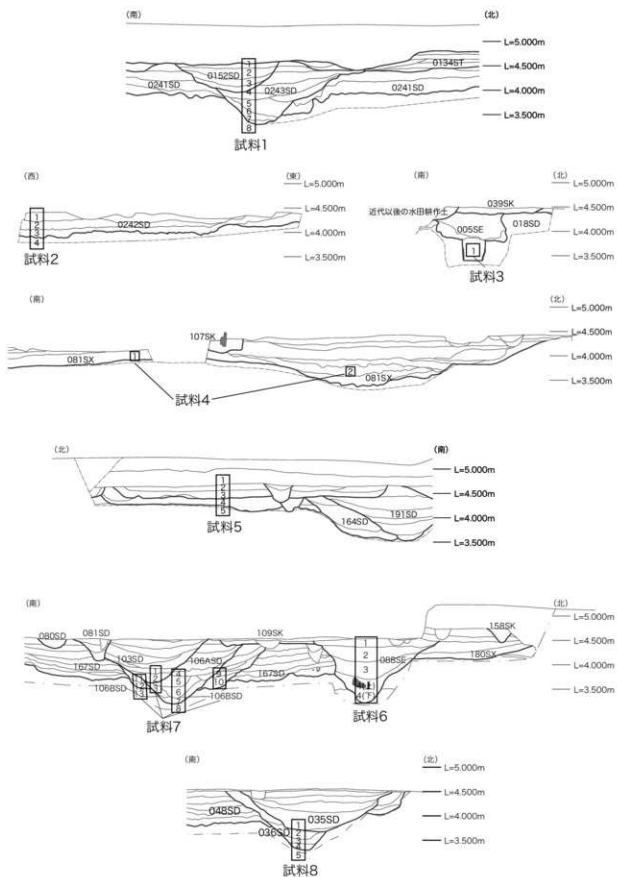


図 407 試料採取位置断面図 (奥野・藤山 2009 年を改変)

B. 分析試料 (図 406・図 407・表 5 参照)

昆虫化石分析に用いた試料は、平成 20 年 4 月から 10 月までに行われた発掘調査に際して主に藍山誠一氏 (愛知県埋蔵文化財センター) によって採取されたものである。

採取地点は合計 8 地点 43 か所で、試料は主にコラムサンプリング方法によって採取した。所属時期ごとに分析試料を見ると、4 世紀前半および 7 世紀後半のものが 1 試料 (試料 2)、12 世紀後半～14 世紀前半のものが 7 試料 (試料 1・3・4・5・6・7・8) であった。以下、所属時期と遺構の種類ごとに試料採取地点について述べる。

a. 4 世紀前半 (古墳時代前期後半) および 7 世紀後半 (古代)

・溝

(試料 2:07Ba 区 0242SD)

溝 0242SD で試料を採取した。1 および 2 番の層が 7 世紀後半 (古代)、3 および 4 番の層が 4 世紀前半 (古墳時代前期後半) に属するものである。試料は 08D 区の西セクションから採取した。

b. 12 世紀後半～14 世紀前半 (中世)

・正方位区画溝

(試料 1:07Ba 区 0152SD・0243SD(試料 7:08C 区 103SD・106ASD・106BSD)(試料 8:08D 区 035SD・036SD))

遺跡の中央を東西に横断する正方位区画溝から試料を採取した。採取地点は試料 1 の 1～4 番の層が 07Ba 区 0152SD・5～8 番の層が 07Ba 区 0243SD の下層部分、試料 7 の 1～3 番の層が 08C 区 103SD の下層部分・4～8 番の層が 08C 区 106SD の下層部分・11～13 番の層が 08C 区 106BS、試料 8 の 1 番の層が 08D 区 035SD の最下層・2～5 番の層が 08D 区 036SD である。

この区画溝は、本遺跡の南約 100m に所在する真言宗の古刹万徳寺が弘長 3(1263)年に再興された時期に掘削され、その後再掘削を繰り返されながら機能し続けたと推定されるものである (樋上 2008)。およそ 13 世紀前後に属する溝である。遺跡の西側から東にかけて試料 8、試料 1、試料 7 の順に位置している。

遺構の切り合い関係が非常に複雑であるため、溝が掘削された時期を詳細に明らかにするのは困難であるが、区画溝の時期は大きく分けて次の 2 つのグループに区分することができる。①つ目は、「各地点の溝の中

で切り合いが一番上位に位置しており、掘削時期が最も新しいグループ (試料 1:0152SD、試料 7:103SD、試料 8:035SD)」、②つ目は「①の溝を掘削する際に平面形が削られており、切り合い関係からみても①よりも古い時代に掘削されたことが明らかなるグループ (試料 1:0243SD、試料 7:106ASD・106BSD、試料 8:036SD)」である。グループ①の 0152SD・103SD・035SD については同じ一本の区画溝であることが明らかであるが、グループ②の各溝の対応関係は明らかではない。溝の中に含まれる遺物から、グループ①の時期は含まれる考古学遺物からおよそ 13 世紀後半頃と考えられる。グループ②の時期は、グループ①よりも古く、最大で 12 世紀後半まで遡る可能性もあるが個別の溝の詳細な時期は定かではない。

・井戸

(試料 3:08A 区 005SE/試料 6:08C 区 088SE)

正方位区画溝の北に近接する曲物井戸 008SE(試料 6)と、遺跡の東部に位置する井戸群のうち曲物井戸 005SE(試料 3)で試料を採取した。遺構の所属時期は 12 世紀後半から 13 世紀前半頃である。

・不明遺構

(試料 4:08B 区 081SX)

不明遺構 081SX では下層の 2 か所で試料を採取した (ともに試料 2)。区画溝のすぐ東に位置しているが、区画溝との新旧関係は不明である。遺構の所属時期は 14 世紀前後である。形状は幅約 4m の大型土坑状をとり、埋土には多量の植物質を含んでいる。人為的に掘削された遺構であると考えられている。

・北東部北壁中央セクション中～近世地層

(試料 5:08C 区北壁中央セクション)

08C 区の北東部に位置する北壁中央セクションで試料を採取した。1～3 番の層が近世の遺物を含む地層、4 番が中世の遺物を含む地層、5 番が基盤層である。中世の遺物を含む地層については、12 世紀頃に属すると思われる。

C. 分析方法

採取した試料はコンテナに密封して愛知県埋蔵文化財センターの水洗作業室に持ち帰り、昆虫化石の抽出作業を行った。分析の手順を以下に略述する。まず、ブロック削り法 (森 1994) を用いて肉眼で昆虫化石の検出をおこなった。さらにその後、ブロック削りが終わった試料の中からより細かい化石を検出するために、目の大きさが 0.25 μm の篩を用いて 1 試料につき 300g ずつ水洗浮遊選別法 (フローテーション法) にかけた。見つ

表5 長野北浦遺跡採取試料一覧

試料番号	調査区	遺構	層番号	土層注記	遺留重量(kg)	フローテーション量(kg)
1	07Ba	0152SD	1	10YR3/2黒褐色砂質シルト・腐植物ごく微量を含む	2.8	0.03
			2	10YR3/2黒褐色砂質シルト・炭化物ごく微量を含む	3.8	0.03
			3	10YR3/2黒褐色砂質シルト	5.4	0.03
			4	10YR3/2黒褐色シルト・炭化物微量を含む	5.8	0.03
			5	10YR3/2黒褐色砂質シルト・炭化物微量を含む	4.3	0.03
			6	10YR2/1黒色粘土・炭化物・腐植物含む	6.8	0.03
			7	10YR2/1黒色粘土・炭化物多量を含む	6.6	0.03
			8	10YR4/1黄灰色砂・シルトブロック含む	4.2	0.03
2	0242SD	1	2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト	4.4	0.03	
		2	2.5Y2/1黒色粘土質シルト	5.4	0.03	
		3	2.5Y6/2黄灰色粘土質シルト	5.2	0.03	
		4	2.5Y6/2黄灰色細粒砂混じり	4.5	0.03	
3	08A	005SE	1	2.5Y4/1黄灰色砂・シルトブロック含む	23.8	0.03
4	08B	081SX	1	2.5Y3/2黒褐色砂質シルト	13.8	0.03
			2	2.5Y3/2黒褐色砂質シルト	14.0	0.03
5	北東部 北壁中央 セクション		1	10YR4/3高い黄褐色シルト質砂	2.8	0.03
			2	10YR4/3高い黄褐色シルト質砂	3.2	0.03
			3	10YR4/3高い黄褐色砂質シルト・植物質・炭化物微量を含む	3.1	0.03
			4	10YR4/3高い黄褐色砂質シルト	3.3	0.03
			5	10YR4/3高い黄褐色砂	0.6	0.03
6	088SE		1	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質シルト	0.7	0.03
			2	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質シルト	0.7	0.03
			3	2.5Y3/1黒褐色粘土・植物質より炭化物少量含む	0.7	0.03
			4(上)	10YR3/1黒褐色粘土・植物質より炭化物少量含む	28.0	0.03
			4(下)	10YR3/1黒褐色砂まじりシルト	6.3	0.03
7	08C	103SD	1	2.5Y2/1黒色シルト・植物炭化物微量	3.2	0.03
			2	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト・炭化物微量含む	3.0	0.03
		106ASD	3	10YR3/1黒褐色砂まじり粘土・植物含む	2.8	0.03
			4	10YR3/1黒褐色粘土	3.0	0.03
	5		2.5Y2/1黒色粘土・植物含む	3.1	0.03	
	6		10YR3/1黒褐色シルト・黄粘土・植物含む	3.0	0.03	
	106BSD	7	10YR3/1黒褐色砂質シルト	1.8	0.03	
		8	10YR3/1黒褐色シルト	2.4	0.03	
9		10YR2/1黒色シルト・植物含む・炭化物ごく微量を含む	1.6	0.03		
10		10YR2/1黒色シルト・炭化物ごく微量を含む	3.3	0.03		
8	08D	035SD	1	2.5Y3/2黒褐色砂質シルト・炭化物ごく微量を含む	9.8	0.03
			2	2.5Y3/2黒褐色砂質シルト・炭化物ごく微量を含む	10.2	0.03
	036SD	3	5Y3/2オリーブ黒・シルト質砂	8.2	0.03	
		4	7.5Y5/2オリーブ黒・砂質シルト	7.2	0.03	
		5	7.5Y5/2オリーブ黒・粘土 砂含む・炭化物微量を含む	7.0	0.03	
			基盤層	5Y3/2オリーブ黒細粒砂	2.0	0.03

かった昆虫化石はクリーニングを行ったのち、顕微鏡下で現生標本と1点ずつ比較しながら同定作業を行った。得られた昆虫化石は昆虫の食性および生息環境別に分類し、リスト化した(表6)。分析後の昆虫化石はシャーレに密封し、愛知県埋蔵文化財センターに保管している。

(2) 分析結果

A. 昆虫化石検出状況

分析の結果、長野北浦遺跡の試料から合計443点の昆虫化石群集を得た。ただしこの昆虫化石の点数はいずれも片ないし破片数であり、生息していた昆虫の個体数を示したものではない。なお、古墳時代および古代の試料(試料2)から昆虫化石を得ることはできなかった。よって見つかった昆虫化石はすべて中世に所属するものである。

昆虫が認められた遺構は試料1の07Ba区0152SD(計

147点)が最も多く、続いて試料7の08C区103・106SD(計136点)、試料4の08B区081SX(計86点)、試料7の08D区103・106SD(計30点)、試料5の08C区北壁セクション古代地層(計4点)、試料8の08D区035・036SD(計1点)である。なお、試料2の07Ba区0242SDおよび試料3の08A区005SE、試料6の08C区088SEでは昆虫化石を得ることは出来なかった。

昆虫化石が見つかった試料の土質についてみると、黒色粘土層から見つかった昆虫の数が最も多く(6地点213点)、続いて砂質シルト層(6地点122点)、シルト層(4地点35点)、砂層(1地点4点)であった。全体的な傾向として昆虫化石が多産する試料ほど、種子等の植物遺体が多く含まれる傾向にあった(奥野・藤山2009参照)。

B. 昆虫化石群集

正方位区画溝で採取した3試料(試料1・試料7・試料8)と、不明遺構081SXで採取した1試料(試料4)から昆虫化石が認められた。以下、試料ごとに見つかった昆虫化石について述べる。

・区画溝

(試料1:07Ba区0152・0243SD)

正方位区画溝0152SD・0243SDの下層部分(番号6~7)で採取した試料から昆虫化石が合計147点認められた。この6~7番の層は溝0243SDの下層部分に該当しており、区画溝の中で掘削時期が古いグループ(グループ②)のものである。出土した昆虫化石の食性・生息環境別出現率をみると、出現率が最も高かったのは陸生の食植性昆虫82.0%(118点)であり、続いて地表性の食糞・食屍性昆虫が68.3%(11点)、地表性の食肉・雑食性昆虫が6.2%(9点)、水生の食肉性昆虫が0.6%(1点)、その他不明甲虫が2.8%(4点)であった。

主な出現種を見るとヒメコガネ *Anomala rufocupress*(104点)など、食植性のコガネ目科の昆虫の出土が最も多かった。ヒメコガネの成虫は、ダイズやアズキなどマメ科植物やクリ・ドウなど果樹の葉を食料としており(日本応用動物昆虫学会編1987)、サクラコガネ属 *Anomala* sp.(9点)と同様に人為的な干渉を受けた植生二次林下に生息する昆虫である。地表性歩行虫については、食肉・雑食性のオサムシ科 *Carabidae*(5点)・アオゴミムシ属 *Chaenius* sp.(2点)・ハネカクシ科 *Staphylinidae*(2点)の他、人糞や獣糞に集まるマグソコガネ属 *Aphodius* sp.(9点)・コブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis*(1点)・エンマコガネ属 *Onthophagus* sp.(1点)、腐敗動物質や糞便に飛来するエンマムシ科 *Histeridae*(1点)が認められた。これらの食糞・食屍性昆虫は人工的な生息環境を指標する汚物集積の指標昆虫(森1994)である。

(試料7:08C区103SD・106SD)

試料7には、103SD・106ASD・106BSDの3本の溝が切り合って存在している。掘削時期が古いものから並べると、(古)106BSD・(中)106ASD・(新)103SDの順になる。このうち、103SDの下層部分(番号1~2)・106ASDの下層部分(番号3~7)・106BSDの下層部分(番号9~12)から合計136点の昆虫化石が認められた。103SDが掘削時期が新しい区画溝(グループ①)、106A・106BSDが掘削時期が古い区画溝(グループ②)である。

出土した昆虫化石の食性・生息環境別出現率をみると、

陸生の食植性昆虫の出現率が72.8%(99点)と最も高く、続いて地表性の食糞・食屍性昆虫が5.1%(8点)、地表性の食肉・雑食性昆虫が19.1%(26点)、その他不明甲虫が6.8%(1点)、水生の食肉性昆虫が2.2%(3点)であった。

主な出現種を見ると、陸生の食植性昆虫については試料1と同様にヒメコガネ(84点)の出土が最も多く、植物の葉を食べるハムシ科 *Chrysomelidae*(7点)や花や果実などを食べるゾウムシ科 *Curculionidae*(1点)の昆虫も認められた。地表性歩行虫についてはオサムシ科 *Carabidae*(17点)をはじめ、トクリゴミムシ属 *Lachnocrepis* sp.(4点)、オオゴミムシ *Lesticus magnus*(1点)、ゴミムシ科 *Harpalidae*(1点)、ミズギワゴミムシ属 *Bembidion* sp.(2点)など、食肉および雑食性の種群が認められた。このうちトクリゴミムシ属やミズギワゴミムシ属は日本各地の遺跡の水田耕作土から頻りに発見される昆虫である(森1996)。

(試料8:08D区035SD・036SD)

正方位区画溝035SDの最下層(番号1)・036SDの下層(番号3~4)から合計30点の昆虫化石が認められた。035SDが掘削時期が新しい区画溝(グループ1)、036SDが掘削時期が古い区画溝(グループ2)である。

出土した昆虫化石の食性・生息環境別出現率についてみると、陸生の食植性昆虫70.0%(21点)の出現率が最も高く、続いて地表性の食糞・食屍性昆虫が6.7%(2点)、地表性の食肉・雑食性昆虫が13.3%(4点)、その他不明甲虫が6.7%(2点)、水生の食肉性昆虫が3.3%(1点)であった。

主な出現種を見ると、先に述べた試料1および7と同じくヒメコガネ(14点)の出土が多かったのははじめ、クワやコウゾの葉を食べるクワハムシ *Pleutiaxia armata*(3点)も含まれた。全体として人里周辺に生息する食植性昆虫の出土が多かったが、ミズナラやカエデ類の葉を食べる山地性のツノアオカメムシ *Pentatoma japonica*(2点)も出土した。

・不明遺構

(試料4:08B区081SX)

081SXの下層部分(番号1~2)からは、合計86点の昆虫化石が認められた。時期はいずれも14世紀前後のものである。出土した昆虫化石の食性・生息環境別出現率についてみると、陸生の食植性昆虫69.8%(60点)の出現率が最も高く、続いて水生昆虫が61.5%(9点)、地表性の食肉・雑食性昆虫が9.4%(8点)、食糞・食屍性昆虫が9.4%(8点)、その他不明甲虫が0.9%(2点)

であった。区画溝の試料と同様にヒメコガネ(51点)を中心として、サクラコガネ属(3点)やハマシ科(5点)など食植性昆虫の出土が多かった。地表性歩行虫についてはエンマコガネ属(1点)やマグソコガネ属(5点)・エンマムシ科(2点)など地表性の食糞・食屑性の昆虫、オサムシ科(2点)など食肉・雑食性昆虫の昆虫が認められた。水生昆虫についてはガムシ科 Hydrophilidae(9点)が認められた。

・北東部北壁中央セクション地層
(試料5:08C区ST)

東壁に古代(12世紀頃)の地層からは合計4点の昆虫化石が見つかったのみであった。見つかったのは、ヒメコガネ(1点)・オサムシ科(2点)・不明甲虫(1点)である。

まとめ

今回、長野北浦遺跡で行った分析の結果、合計443点の昆虫化石を得た。13世紀頃の正方位区画溝の3試料(試料1・7・8)と14世紀前後の不明遺構081SX(試料4)から多くの昆虫化石が認められた。正方位区画溝からは、ヒメコガネをはじめとする食植性の人里昆虫が

多く認められた。長野北浦遺跡の13世紀頃の方形区画溝周辺は、畑作物や果樹などの植物が植栽された人家の近くや村はずれの草地・林縁のような場所であったことが推定できる。一方、不明遺構081SXでは区画溝と同様に食植性の人里昆虫が多く認められたほか、水生・湿地性の昆虫も認められた。081SXとその周辺に浅い水域が存在していた可能性が指摘できる。

引用文献一覧

- 奥野絵美・藤山誠一 2010 「中世下津を考える(その2)-自然科学的古環境解析とその評価-」 『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』11, pp. 66-67.
 藤山誠一 2010 「(4)植物化石 中世下津を考える(その2)-自然科学的古環境解析とその評価-」 『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』11, pp. 61-72.
 日本応用動物昆虫学会編 1987 『農林有害動物・昆虫図鑑』日本植物防疫協会、379p.
 森 勇一 1994 「昆虫化石による先史～歴史時代における古環境変遷の復元」 『第四紀研究』33, pp.331-349.
 森 勇一 1996 「稲作農耕と昆虫」 『季刊考古学』56, pp.59-63.
 森 勇一 1998 「勝川遺跡及びその周辺地域から産した昆虫化石と

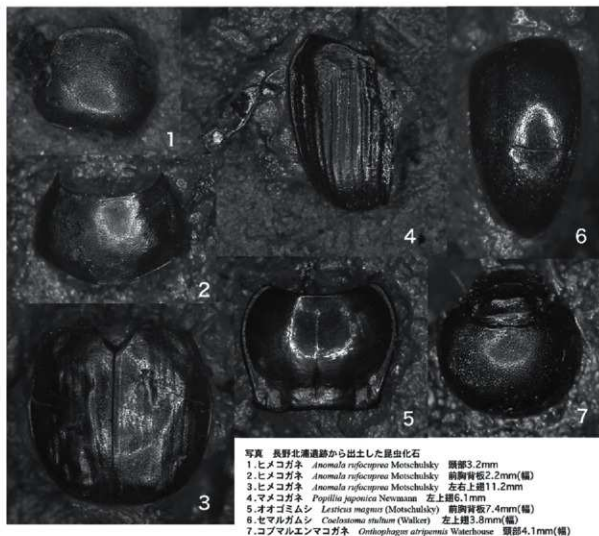


図 408 長野北浦遺跡から出土した昆虫化石

古環境』『財団法人愛知県埋蔵文化財センター年報』pp.118-137。

森 勇一 2010 「時代を彩った昆虫たち」『坪井清足先生卒寿記念論文集・埋文行政と研究のはざままで』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会、pp.365-371。

樋上 昇 2008 「長野北浦遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター平成19年度年報』pp.18-23。

謝辞

本遺跡の試料の採取・分析に際しましては、愛知県埋蔵文化財センターの藤山誠一氏に大変お世話になりました。なお、本稿は藤山氏との共同執筆である 奥野絵美・藤山誠一 2010 「中世下津を考える (その2)-自然科学的古環境解析とその評価-」『愛知県埋蔵文化財センター 研究紀要』11、pp. 61-72 を改訂したものです。平面図・断面図につきましては、藤山氏作成のものを使用させて頂きました。

また本稿を執筆するにあたりましては、愛知県埋蔵文化財センターの石黒立人氏に多くのご助言を頂きました。心より御礼申し上げます。

(奥野絵美 愛知県埋蔵文化財調査センター)

2. 長野北浦・塔の越遺跡の地下層序と表層地形解析

はじめに

長野北浦・塔の越遺跡の地形・地質環境を調べるため表層地形解析から現在の地形情報を、また各調査区にて実施した深掘および試錐調査によって地下層序を観察する機会を得た。それらの結果から新たな知見を得たので報告する。

(1) 試料および分析方法

調査地周辺における現在の表層地形解析のため等高線図を作成した。作成には愛知県稲沢市発行の「稲沢市都市計画基本図(1/2500)」にプロットされた標高値を用いた。都市計画基本図には平成7年(1995年)7月に撮影された空中写真により修正されたとの記載がある。

地下層序解析のため、各調査区において地表面や遺構検出面からバックホーにより掘削し地層断面を露出させ、層序断面図の作成と試料採取を行なった。層序断面図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。10地点の層序断面から放射性炭素年代測定用試料を採取した。

試錐調査は2008年(平成20年)に2地点で実施した。塔の越遺跡08Aa区では株式会社東海環境エンジニアに、塔の越遺跡08Hc区では応用地質株式会社に依頼し、ロータリー式オイルフィールド・ボーリングマシンを用いてオールコアで実施した。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析(AMS)法により測定を行なった。加速器質量分析法は125 μ mの篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨(グラファイト)に調整後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製1.5SDH)にて測定した。測定された¹⁴C濃度について同位体分効効果の補正を行なった後、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した。¹⁴C年代値の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。¹⁴C年代の暦年代への較正にはOxCal4.1(較正曲線データ:INTCAL04)を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して産出された放射性炭素年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。測定は株式会社パレオ・ラボ(Code No.; PLD)に依頼した。

(2) 分析結果

遺跡周辺の等高線図

東西約4.0km、南北約2.3kmの範囲全体では等高線間隔0.2mで標高3.2mから標高6.8mまでの等高線が描かれ、解析範囲全体では北東方向で標高が相対的に高く、南側で低い傾向がある(図409・410)。解析範囲の現在の状況は、中央部を大江川が北から南へ軽微な蛇行をしながら流れており、北東方向に青木川が南流する。図の西には名古屋鉄道名古屋本線が、東には東海道本線が通る。

標高がもっとも高いのは北の稲沢市下津洗町に標高7.0mが見られ、本地点も含めて北東の一宮市丹陽町九日市場にかけて標高6.0mを超えるところが認められる。いっぽう、標高のもっとも低いのは南の稲沢市高御堂町から長東町にかけて標高3.5m以下の低い地域が広がっている。

さらに詳しく地形要素をみてみる。図の中央部には北から南へ大江川が流れているが、この流路から西へ約150m隔たったところを、現在の大江川に並行し谷地形が認められる。谷地形を挟みその両側には尾根状に標高の高いところが並ぶ。大江川の西側(右岸側)では北の稲沢市稲島町から稲島東にかけて標高5.4~5.8mで南北方向に約800mの尾根地形がみられる。さらにその南には国府宮町から高御堂町までの標高4.4~6.0mに、南北の距離約1.5kmで標高の高いところがある。特に国府宮町において、標高5.4~6.0mまでの閉曲線で囲まれた周りから独立した孤立丘のように凸地形がみられる。

いっぽう、大江川の流路の東側(左岸側)にも尾根状地形がみられる。北の稲沢市治部丸高須町付近には標高5.2~6.2mで南北の距離約700mの尾根地形が認められる。さらに南の治部丸天神町から正明寺までの標高5.2~6.6mに距離約1kmの尾根状の地形がみられる。これら大江川の東に認められる尾根地形には幅約100mを超えない谷地形が刻まれている。治部丸天神町に隣接した治部丸柳町付近には標高4.6~5.0mの谷地形が北側に開口している。また、治部丸天神町の東から現在の東海道本線の通る長野町には幅約700m以上の大きな谷地形がみられる。調査区はこの大きな谷地形がはじ

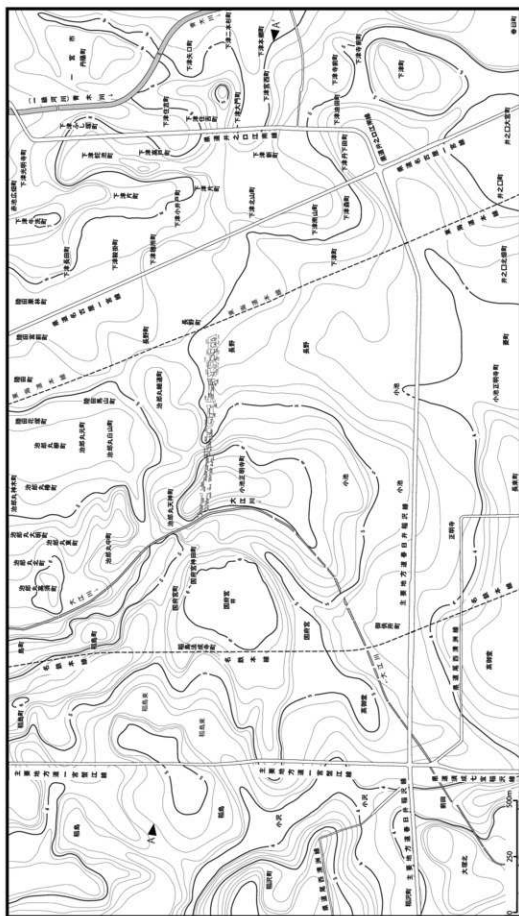


図 409 長野北浦・塔の越遺跡周辺の表層地形と等高線図
 図の中央に調査区も配置

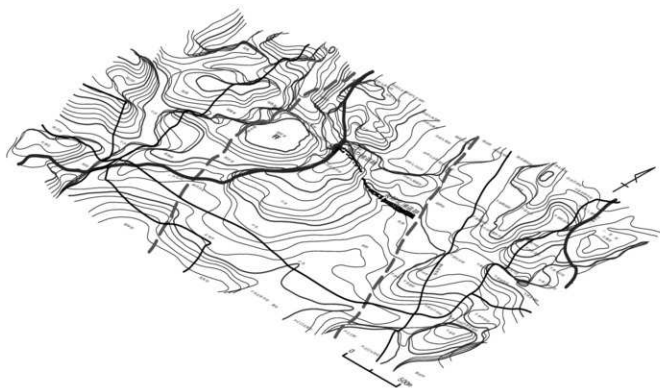


図 410 表層地形等高線図を基にした鳥瞰図
水平方向に対して垂直方向を 100 倍に強調して、図の中央に調査区を配置

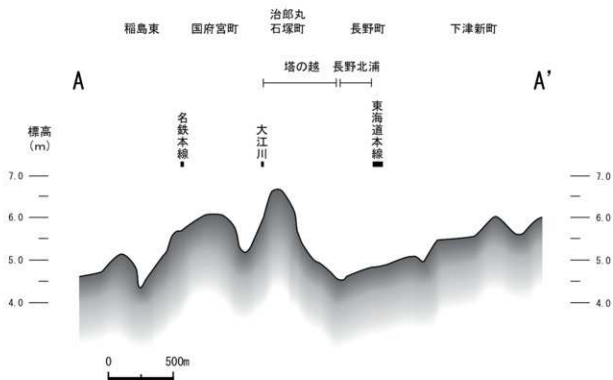


図 411 調査範囲を通る東西地形断面図
作成地点は図 409 を参照、水平距離に対して垂直方向を強調

まる谷頭と、大江川の東に認められた治部丸天神町から正明寺にかけてみられた尾根地形までの起伏の変化が大きな範囲にまたがっている。

深掘層序

東西の総延長約800mの各調査区でバックホーによる掘削(10地点)を実施しているが、それらのうち主要な5地点の深掘層序断面を示す(図412)。各地点の層序の特徴を西側から順にまとめて以下に述べる。

調査区西側の地点1(塔の越08E区)では深度約4mの深掘断面を得た。下位層より標高2.20～3.80mは細粒砂層からなる。褐色粘土層のブロックをレンズ状に採出。標高2.20mと標高2.50mから木材片を採出し放射性炭素年代測定用の試料とした。標高3.80～4.60mは極細粒砂の混じるシルト質粘土層である。標高4.60～5.15mは褐色のシルト質粘土層からなり、本層の標高約5.0m付近が検出面である。標高5.15～5.85mは褐色粘土層である。標高5.85～6.25mは灰褐色のシルト質粘土層で、本層の頂部が現在の地表面となる。

地点4(塔の越07A区)では深度約4.4mの深掘断面を得た。下位層より標高1.27～2.26mは淘汰良好な中粒砂層からなり、標高1.28mで放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高2.26～2.36mは青灰色粘土層で、本層下底の標高2.27mにて放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高2.36～2.46mは青灰色シルト層で、本層下底の標高2.37mにて放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高2.46～2.76mは黒褐色粘土層からなり、本層下底の標高2.47mと、上部の標高2.75mから放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高2.76～3.16mは緑灰色粘土層で、中央部の標高2.96mに層厚約1cmの炭化物質を含んだ黒褐色粘土層がレンズ状にみられ、放射性炭素年代測定用試料として採取した。標高3.16～3.66mは淘汰良好な中粒砂層である。標高3.66～4.67mは褐色粘土質シルト層で、本層の頂部が検出面である。標高4.67～5.16mは褐色の粘土質シルト層、標高5.16～5.66mは現代の乱層である。

地点6(塔の越07B区)では深度約4.8mの深掘断面を得た。下位層より標高0.06～1.66mは淘汰良好な粗粒砂層からなる。本層の最上部はシルト成分が混じり、ヨシ属などの草本植物の茎部分が層理に対して垂直に多くみられる。本層の下部標高0.06mで木材片を、本層最上部の標高1.58mで草本植物を年代測定用試料として採取した。標高1.66～1.86mは灰色粘土層で、本層下部の標高1.67mで草本植物を年代測定用試料と

して採取した。標高1.86～2.20mは黒褐色粘土層で、標高1.88mから種実を採取し、年代測定の試料とした。標高2.20～2.58mは灰色粘土層、標高2.58～2.71mは黒褐色粘土層からなり、黒褐色粘土層の下部、標高2.60mから種実を採取した。標高2.71～3.11mは灰色粘土層、標高3.11～3.37mは褐灰色粘土層で、褐灰色粘土層の下部、標高3.12mから種実を採取した。標高3.37～3.62mは褐色の砂質シルト層である。標高3.62～4.12mは中粒砂層からなり、全体に塊状で堆積構造はみられない。標高4.12～4.34mは褐色粘土層であり、本層の頂部が検出面となる。標高4.34～4.66mは褐色シルト層、標高4.66～4.88mは暗灰褐色シルト層で本層の頂部が地表面である。

地点9(長野北浦07D区)では深度約4.9mの深掘断面を得た。下位層より標高0.56～0.76mは淘汰良好な極細粒砂層からなる。なお、本層は標高-1.24mまで連続することを確認している。標高0.76～1.76mは褐色粘土層である。標高1.76～2.16mは淡褐色粘土層からなり、本層の下部、標高1.78mより草本植物を採取し年代測定用試料とした。標高2.16～2.26mは褐色粘土層である。標高2.26～2.43mは黒褐色粘土層で、本層の下部、標高2.28mより種実を採取した。標高2.43～2.78mは青灰色粘土層である。標高2.78～3.23mは黒褐色粘土層と灰色粘土層との互層からなり、本層最上部(標高3.22m)に含まれる炭化した木材片を年代測定用の試料とした。標高3.23～3.73mはシルト質極細粒砂層である。標高3.73～4.06mは褐色を呈するシルト質な中粒砂～粗粒砂層からなり、本層の頂部標高4.06mが古代の検出面である。標高4.06～4.60mは赤褐色粘土層、標高4.60～4.85mは暗灰色粘土質シルト層である。標高4.85～5.50mは現代の盛り土であった。

地点10(長野北浦07A区)では深度約3.9mの深掘断面を得た。下位層より標高1.90～2.40mは淘汰良好な粗粒砂層であった。標高2.40～2.50mは黒褐色粘土層で、本層の下部標高2.41mから草本植物を採取した。標高2.50～3.10mは灰色粘土層、標高3.10～3.30mはシルト質砂層からなる。標高3.30～4.20mはシルト質細粒砂層からなり、砂成分が優勢である。本層の頂部標高4.20mが検出面となる。標高4.20～5.30mはシルト質粘土層、標高5.30～5.80mは現代の盛り土であった。

試掘層序

調査範囲のもっとも西端にある塔の越08Hc区の西側

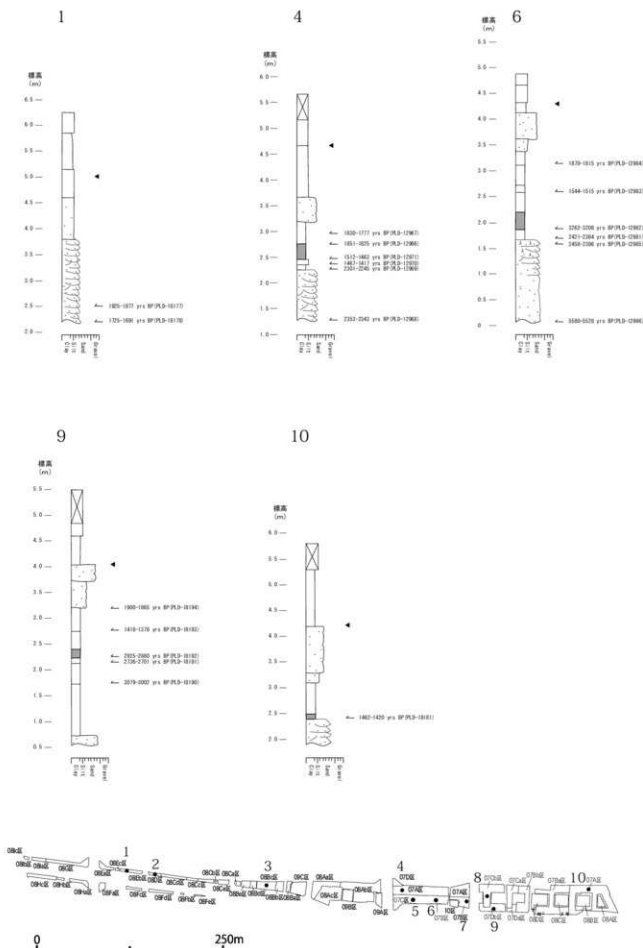


図 412 長野北浦・塔の越道跡における深掘層序断面図
各柱状図右横の黒色三角形は検出順序を示す

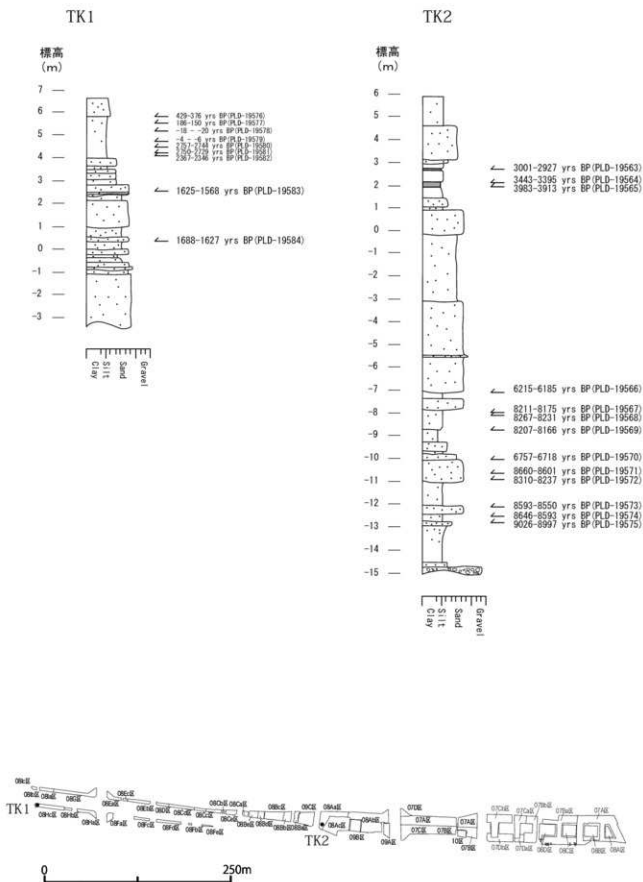


図 413 長野北浦・塔の越遺跡における試掘柱状図

にて、発掘調査終了後に地表（標高 6.64m）から深度約 8m の試錐資料（TK1）を得た（図 413）。地層は全体に砂勝ちで、標高 4m を境にして砂層が卓越する層相とシルト層が卓越する層相とに分けられる。下位層より記載する。標高 -3.36 ~ -1.06m は淘汰良好な極細粒砂層からなり、本砂層の上を層厚 5cm から 40cm ほどの中粒砂~極粗粒砂サイズの砂層が覆う。標高 -0.01 ~ 0.34m にみられる中粒砂層の標高 0.33m からは年代測定用の試料を採取した。また、標高 2.48 ~ 2.58m の淘汰良好な粗粒砂層の標高 2.50m からも年代測定用の試料を採取した。標高 4.00 ~ 5.04m は砂質シルト層からなり、本層からは 7 点の年代測定用の試料を得た。

塔の越 08A 区の南端において地表（標高 5.93m）から深度約 20m の試錐資料（TK2）を得た（図 3）。地層全体は層相から大きく 5 つのユニットに区分される。下位のユニットより、ユニット 1 は標高 -15.07 ~ -14.77m でみられる黄褐色の大礫層からなる。基質はシルトからなり、淘汰は悪い。角礫から円礫までの円礫度がみられ、礫種として濃飛流紋岩がほとんどを占める。ユニット 2 は標高 -14.77 ~ -7.07m の層厚約 1m の砂層と同じく層厚 1m 程度の砂質シルト層との互層からなる。明瞭な層理面をもっており、シルト層や粘土層より 10 点の年代測定用の試料を採取した。ユニット 3 は標高 -7.07 ~ 0.93m の極粗粒砂から中粒サイズの、層厚 0.5m から 2.5m までさまざまな層厚をもつ淘汰良好な砂層が堆積する。ユニット 4 は標高 0.93 ~ 2.98m にみられ、層厚約 0.5m の暗灰黄色シルト層と、層厚 5cm から 25cm ほどの黒褐色を呈する粘土層との互層からなる。黒褐色粘土層で年代測定用の試料を 3 試料採取した。ユニット 5 は標高 2.98 ~ 5.93m でみられる、層厚約 1.5m の中粒砂層と同じく層厚約 1.5m の砂質シルト層からなり、全体に砂勝ちの地層からなる。

放射性炭素年代測定

深掘に伴う各地点で合計 47 試料の放射性炭素年代測定値を得た（表 7・表 8）。年代測定値が負の値となる試料を除くと、古い値では地点 6（塔の越 07B 区）の標高 0.06m にて粗粒砂層中から採取した木材片から 5580-5528 cal yr BP (PLD-12986) の値を得た。また全体では概ね下位層より上位層にかけて約 3000 年前代、1800 年前代、1500 年前代の値がまとまってみられた。

2 地点のボーリングコア資料において各層準から合計 22 試料の放射性炭素年代測定値を得た（表 9・表 10）。古い値について、TK2 コアでは深度約 20m まで掘削をしているため古い値がみられ、標高 -12.90 ~ -12.73m の細粒砂層から採取した植物遺体（標高 -12.79m）が

9026-8997 cal yr BP(PLD-19575) と約 9000 年前代を示した。また、標高 -12 ~ -7m までで得られた試料はおよそ 8000 年前から 6000 年前代の値であった。いっぽう、新しい値では、TK2 コアの標高 2 ~ 3m に認められる黒褐色粘土層から採取した試料は 3000 年前代の値を示したが、TK1 コアではさらに新しく、標高 -0.01 ~ 0.34m の中粒砂層から採取した植物遺体（標高 0.33m）が 1688-1627 cal yr BP(PLD-19584)、標高 2.48 ~ 2.58m の粗粒砂層から採取した植物遺体（標高 2.56m）が 1625-1568 cal yr BP(PLD-19583) と約 1600 年前代の値であった。

(3) 長野北浦・塔の越遺跡の立地環境

表層地形解析により、解析範囲中央部を流れる現在の大江川の流路から、西に約 150m 隔たったところに、流路に並行に谷状地形が連続した。これはかつての流路跡であり、古大江川がかつては現在よりも西を流下していたことを示すものである。また、大江川の流路の両脇に認められた尾根地形は自然堤防地形である。現在の大江川は北から南へ流下する間に、解析範囲においてちょうど調査範囲付近で東方向へ凸状にふくらんで屈曲している。この屈曲の特徴から流路の西側（右岸側）にみられる、国府宮町付近に頂部のある閉曲線からなる標高の高い場所は滑走斜面ととらえられる。対して、流路の東（左岸側）は河川流路の攻撃斜面側にあたる。一般に、攻撃斜面側は大きな洪水の際に流路からあふれ出た水が砂層物を含みながら流下し、堆積物を累積させていく。治部丸天神町から正明寺にみられた尾根地形がまさにそれであり、典型的な自然堤防であると言える。なお、先に述べたように河川流路の攻撃斜面は砂層物の堆積の場であるとともに、洪水時には流路からあふれ出た水の通り道となりやすい場所でもある。治部丸高須町でみられた標高の高いところ、治部丸天神町から正明寺までの高まりとの間には、治部丸柳町へ通じる谷地形が認められたり、長野町に広がる大きな谷地形の谷頭が治部丸龍道町へ向かっており、これらの谷地形はかつてあふれ出した水の通り道であった可能性がある。ここで表層地形解析の結果と東西断面図（図 411）とを参考にして各調査区の地形的な特徴を記すと、塔の越遺跡は大江川の東側につくられた自然堤防の、頂部付近の標高の高い場所から次第に標高を減じつつ、谷地形へと移り変わっていく場所であり、塔の越 07A 区、塔の越 07B 区、塔の越 10 区、長野北浦 07Cb 区、長野北浦 07Db 区が谷の深部にあたっている。また、長野北浦 07Cb 区、長野北浦 07Db 区よりもさらに東に位置する調査区は、谷の深部から再び標高が高くなっていく場所にあたる。このように、表層地形解析の結果から長野北浦・塔の越遺

表 8 深掘層序の放射性炭素年代測定結果 (2)

地点	遺跡名	調査区 (区)	標高 (m)	堆積物	試料の種類	¹⁴ C年代 (yrs BP)	$\delta^{13}C$ PDB (‰)	暦年代校正値 (1 σ , cal yrs BP)	1 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probab(1 σ))	Lab code No. (method)
8	長野北遺	CIC	1.97	黒褐色粘土層	炭化材	3035±20	-17.33±0.13	3033±19	3265-3217(66.3%)	PLD-18182 (AMS)
					炭化材	2705±20	-26.87±0.12	2707±20	3320-3295(21.9%)	
					炭化材	2550±20	-23.23±0.17	2551±19	3300-3289(28.9%)	PLD-18182 (AMS)
9	長野北遺	CIC	3.03	黒褐色粘土層	炭化材	2350±20	-23.23±0.17	2351±19	2555-2348(68.2%)	PLD-18184 (AMS)
					炭化材	3025±20	-26.89±0.16	3025±20	3265-3210(52.5%)	PLD-18185 (AMS)
					生の草本	2920±20	-26.90±0.12	2918±20	3320-3295(15.7%)	PLD-18190 (AMS)
長野北遺	C10 P-2	2.17	緑褐色粘土層	生の草本	2530±20	-26.80±0.17	2532±20	2736-2701(34.1%)	PLD-18191 (AMS)	
							2635-2616(20.0%)			
							2561-2545(10.8%)			
長野北遺	C10 P-2	2.28	黒褐色粘土層	生の草本	2795±20	-26.12±0.11	2794±20	2981-2970(3.4%)	PLD-18192 (AMS)	
				生の草本	1530±20	-27.89±0.12	1532±21	3265-3098(68.2%)	PLD-18193 (AMS)	
				粘土層との互層	1935±20	-14.31±0.19	1934±20	1809-1817(14.8%)	PLD-18194 (AMS)	
10	長野北遺	C1A P-2	2.41	黒褐色粘土層	生の草本	1610±20	-28.03±0.16	1611±18	1822-1912(9.8%)	PLD-18181 (AMS)
								1509-1468(4.8%)		
								1509-1513(32.0%)		

表 9 深掘層序 (TK1) の放射性炭素年代測定結果

標高 (m)	堆積物	試料の種類	¹⁴ C年代 (yrs BP)	$\delta^{13}C$ PDB (‰)	暦年代校正値 (1 σ , cal yrs BP)	1 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probab(1 σ))	Lab code No. (method)
0.33	中粒砂層	生の植物遺体	1760±20	-25.87±0.13	1767±22	1668-1627(40.1%)	PLD-19584 (AMS)
						1714-1690(28.1%)	
2.56	粗粒砂層	生の植物遺体	1710±20	-24.45±0.14	1711±20	1625-1568(50.3%)	PLD-19583 (AMS)
						1689-1670(17.9%)	
4.02	粘土質シルト層	土壌	2375±20	-20.40±0.12	2377±20	2367-2346(39.7%)	PLD-19582 (AMS)
						2426-2410(21.6%)	
						2400-2389(7.0%)	
4.20	粘土質シルト層	土壌	2590±20	-17.84±0.14	2589±20	2790-2729(68.2%)	PLD-19581 (AMS)
4.44	粗粒砂層じり 粘土質シルト層	土壌	2620±20	-18.70±0.12	2622±20	2797-2744(68.2%)	PLD-19580 (AMS)
4.69	粗粒砂層	生の植物遺体	-170±20	-28.67±0.14	-168±19	Bomb04NO2	PLD-19579 (AMS)
						-4-6(88.2%)	
5.18	砂質シルト層	生材	-3555±15	-24.58±0.12	-3553±14	Bomb04NO2	PLD-19578 (AMS)
						-18-20(68.2%)	
5.54	砂質シルト層	生材	195±20	-24.09±0.12	194±18	186-150(33.5%)	PLD-19577 (AMS)
						11-3(17.8%)	
						287-271(16.9%)	
5.76	砂質シルト層	炭化植物遺体	315±20	-29.57±0.14	313±20	429-376(50.5%)	PLD-19576 (AMS)
						325-309(13.8%)	
						266-361(4.0%)	

表 10 深掘層序 (TK2) の放射性炭素年代測定結果

標高 (m)	堆積物	試料の種類	¹⁴ C年代 (yrs BP)	$\delta^{13}C$ PDB (‰)	暦年代校正値 (1 σ , cal yrs BP)	1 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probab(1 σ))	Lab code No. (method)
-12.79	細粒砂層	生の植物遺体	8085±25	-25.83±0.18	8084±27	8026-8087(68.2%)	PLD-19575 (AMS)
-12.52	砂層じり粘土質シルト層	生の植物遺体	7855±25	-27.76±0.14	7856±27	8646-8583(68.2%)	PLD-19574 (AMS)
-12.17	粗粒砂層	土壌	7790±25	-27.06±0.14	7790±27	8590-8550(68.2%)	PLD-19573 (AMS)
-10.93	粗粒砂層	土壌	7420±25	-25.37±0.18	7429±26	8310-8227(53.3%)	PLD-19572 (AMS)
						8220-8199(14.9%)	
-10.64	粗粒砂層	土壌	7880±25	-26.96±0.14	7879±27	8660-8601(45.3%)	PLD-19571 (AMS)
						8702-8668(22.9%)	
-10.06	粗粒砂層じり粘土質シルト層	土壌	5920±25	-22.83±0.13	5920±24	6757-6718(40.0%)	PLD-19570 (AMS)
						6780-6762(18.4%)	
						6702-6693(7.4%)	
						6682-6679(2.4%)	
-8.75	粗粒砂層じりシルト質粘土層	土壌	7375±25	-24.72±0.14	7373±26	8207-8166(50.4%)	PLD-19569 (AMS)
						8290-8263(17.8%)	
-8.10	粗粒砂層じり粘土質シルト層	土壌	7435±25	-26.05±0.13	7434±26	8267-8231(26.8%)	PLD-19568 (AMS)
						8315-8279(26.5%)	
						8224-8203(15.0%)	
-8.07	砂層じりシルト層	土壌	7290±25	-26.54±0.14	7289±27	8211-8175(38.1%)	PLD-19567 (AMS)
						8296-8261(30.1%)	
-7.10	粘土質シルト層	土壌	5385±25	-23.73±0.13	5385±24	6215-6185(34.7%)	PLD-19566 (AMS)
						6271-6240(33.5%)	
1.95	粘土層	土壌	3645±20	-17.94±0.14	3644±21	3993-3913(68.2%)	PLD-19565 (AMS)
2.13	粘土層	土壌	3200±20	-19.53±0.14	3198±21	3443-3395(68.2%)	PLD-19564 (AMS)
2.67	シルト質粘土層	土壌	2855±20	-24.40±0.14	2855±20	3001-2927(68.2%)	PLD-19563 (AMS)

跡の調査範囲は、大江川の流路東側に広がる自然堤防頂部（西の塔の越08I区・08Hc区から塔の越08Cb区・08Ce区にかけて）→谷へと変わる地形傾斜変換域（塔の越08Ca区から塔の越07A区西・07B区西・07C区にかけて）→谷の底（塔の越07A区東・07B区東・10区から長野北浦07Cb区・07Db区にかけて）→谷から標高が再び高くなっていく地形傾斜変換域（長野北浦07Cb区・07Db区から長野北浦07A区・08A区にかけて）といった地形の凹凸が存在することがわかる。

(4) 古環境の形成とその年代

長野北浦・塔之越遺跡の調査範囲が、現在の大江川流路の東（左岸側）に広がる自然堤防頂部→谷へと変わる地形傾斜変換域→谷の底→谷から標高が再び高くなっていく地形傾斜変換域にあたることからわかった。次に、これらの地形が生じた形成年代について述べる。

各調査区で行なった深掘と2地点のボーリングコア資料の観察結果から、調査範囲の地下の地層は全体に砂勝ちであることがわかる。これは調査地点が上流から粗粒な堆積物が供給され、かつそれらがたまるような堆積の場であったことを示す。標高0mよりも高い層準をみると、標高0～2mまでには極粗粒砂～中粒砂が卓越しており、活動的な流路であったことがわかる。その後、砂層を覆って標高1～3mにはシルト層や粘土層といった細粒堆積物がたまる環境へと変わる。植物遺体を含む黒褐色粘土層もみられるようになり、当地が後背湿地となったことがわかる。後背湿地となった年代について、地点4（塔の越07A区）の標高2.36～2.46mの青灰色シルト層から採取した草本植物（標高2.37m）が2301-2245 cal yrs BP(PLD-12969)、地点6（塔の越07B区）の標高1.66～1.86mの灰色粘土層から採取した草本植物（標高1.67m）が2421-2364 cal yrs BP(PLD-12981)、地点9（長野北浦07D区）の標高1.76～2.16mの淡褐色粘土層の草本植物（標高1.78m）が3079-3002 cal yrs BP(PLD-18190) などと、3000年前代から2300年前代を示す値を示した。また、これらの細粒堆積物は東西総延長に約800mにおよぶ各調査区の深掘でも確認されることから、3000年前代から2300年前代には後背湿地的な環境であったと推定される。

その後、標高3mから標高5～6m（現在の地表面の標高）付近まではシルト層や中粒砂～粗粒砂層が卓越するようになる。ここで、もっとも西端にある調査区、地点1（塔の越08E区）において標高2.20～3.80mの粗粒砂層から採取した木材片（標高2.20m）は1725-

1691 cal yrs BP(PLD-18178) と、約1700年前代の値であった。いっぽう、地点6（塔の越07B区）の標高2.58～2.71mの黒褐色粘土層から採取した種実（標高2.60m）が1544-1515 cal yrs BP(PLD-12983)、地点10（長野北浦07A区）の標高2.40～2.50mの黒褐色粘土層の草本植物（標高2.41m）が1462-1420 cal yrs BP(PLD-18181) を示すなど、約1500年前代から1400年前代であった。標高3mから現在の地表面の標高5～6mに至るまでは、各調査区の地層にはシルト層が卓越するようになるものの、その層序関係は横方向（側方）に不連続となる。これは東西方向で、地表に形成された地形環境が異なることに起因し、調査区の西端では約1700年前代には流路であったところが自然堤防へと移り変わり、高燥な環境が生じていたのに対して、調査区の東では粘土層の卓越する細粒な堆積物がたまる環境になったことがわかる。約1500～1400年前代頃には、当地には自然堤防と後背湿地という明瞭な地形の差異が出現していたことを示す。

謝辞

本論を作成するにあたり、試錐調査では応用地質株式会社と株式会社東海環境エンジニアに、鳥瞰図の作成では国際文化財株式会社、放射計炭素年代測定では株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループの小林敏一氏・丹生越子氏・伊藤 茂氏・山形秀樹氏・瀬谷 薫氏・Zaur Lomatatidze 氏・Ineza Jorjoliani 氏にお世話になった。試料の整理・保管と図面作成では整理補助員の鈴木好美氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

第5章 考察

1. 長野北浦遺跡・塔の越遺跡における古墳時代の遺構・遺物について

(1) 古墳時代前期の土器群について

A. 廻間Ⅲ式後半前後における編年上の問題

赤塚次郎による廻間Ⅲ式土器編年(赤塚1990)は廻間遺跡出土土器を基軸として構成された古墳時代前期までの土器編年であるが、廻間遺跡自体は廻間Ⅲ式前半までと絶絶する。後続する廻間Ⅲ式後半については、廻間Ⅲ式3段階の基準資料として塔の越遺跡(市教委第1次調査、以下省略)SX01、岩倉城遺跡SX01、廻間Ⅲ式4段階の基準資料として宮之脇遺跡第2号住居、若葉遺跡SB02の土器群が提示されている。加納俊介による編年(加納1991)においても、塔の越遺跡SX01を標識として「塔の越期」が設定されていることから、廻間Ⅲ式後半を中心とした編年上の理解において、塔の越遺跡(・長野北浦遺跡)の土器群の重要性は容易に理解されよう。

廻間Ⅲ式2段階の基準資料としては、廻間遺跡SB12、同SB56の土器群が提示され、同SZ01東溝屈曲部(E地点)の土器群も同段階の資料として扱われることが多い。同段階の特色としては、「小型器台の多様化」と「量の増大」が指摘され、同段階に受部が有段状となる器台、X字形の布留系小型器台、小型丸底土器といった特徴的な小型土器群が出現すると理解されている。しかし、同段階に相当する資料は決して豊富ではなく、小型器台(とそれと組み合わせ器)の構成変化が適格に把握されるには至っていない。また、X字形の布留系小型器台、小型丸底土器についても、断片的な資料が知られるのみで、これら新出の小型器種の存在形態や普遍性(形式の有無だけでなく、組成上の一器種として定着しているのか、搬入品や模倣品として存在する程度なのか、模倣品とすればどの程度の位相か)、その定着過程については議論の余地が多い。また、塔の越遺跡SX01、宮之脇遺跡第2号住居等の土器群についても、高杯や各種の小型器種には欠落する形式も多く、器種構成の推移を踏まえた上で様式の画期を論じるには不都合な側面が多い。加納俊介も前後する時期における画期認識の問題を指摘している(加納1997)。

B. 長野北浦遺跡・塔の越遺跡出土土器の編年の位置

●長野北浦遺跡 07Bb 区 259SD

長野北浦遺跡07Bb区259SD出土土器群中から、出土状況に依拠して抽出した(古相の)一群である(図414)。

土器群の内容として、S字甕は頸部調整を施したC類古段階によって占められる。有段高杯は全体の形状が塔の越遺跡SX01の高杯と近似し、透孔を上下二段三方向に穿つ、口径が体部径を大きく凌駕する小型丸底土器(鉢)が組成する。小型器台が安定して組成し、貫通孔を有する「東海系器台」の系譜上にあるものを主体とする、等が列記される。ここに示した内容は、器台と鉢が一定量組成しながら、X字形の布留系小型器台、受部を有段状とする小型器台、有段口縁鉢が組成しない点から、塔の越遺跡SX01や岩倉城遺跡SX01の土器群が示す内容に先行する。一方で、有段高杯は形状が塔の越遺跡SX01のものと同様であることから、07Bb区259SD出土土器は塔の越遺跡SX01の直前、つまり、廻間Ⅲ式2段階に相当すると理解される。(複数個体に認められる)高杯の上下二段の穿孔が同段階の廻間遺跡SB12の高杯に共通する点(前者は三方向、後者は四方向)、S字甕の型式的な新古、二重口縁化した柳ヶ坪型壺が安定して組成しない点等からもこの理解は首肯されよう。

●長野北浦遺跡方形周溝(方墳)と周辺遺構

塔の越遺跡円形周溝(円墳)と関連遺構 07B区 737SX 塔の越遺跡 09C 区

長野北浦遺跡方形周溝(方墳)は、周辺遺構と墳丘部分に重複する07Ba区140SKを含め、出土土器群はほぼ同様の内容を示す(図415、方形周溝最上層を除く)。

その内容として、S字甕はC類新段階をわずかに含むつつも、D類古段階が主体となる。「山陰系口縁」S字甕が一定量含まれる、二重口縁化した柳ヶ坪型壺、無文化した二重口縁壺が組成する。無透孔屈折脚高杯が組成し、高杯にはタテミガキを施したものが含まれる。受部を有段状とする小型器台、口径が体部径を大きく凌駕する小型丸底壺等の小型器種が組成し、小型器種には粗雑化の傾向も表出する、等が列記される。

塔の越遺跡 07B区 737SX は円形周溝(円墳)の加工

面と機能面間に集積された土器群で、良好な一括資料である(図415)。土器群は同形同大のS字甕2個体と小型丸底壺3個体、中型の直口壺1個体で構成される。S字甕はD類古段階、小型丸底壺は口縁部径が体部径を大きく凌駕する形態で、中型の直口壺を含めて精製品の範疇に含まれる。なお、周溝からは口径が体部径を凌駕する丸底鉢が出土している。鉢は上下にやや圧縮された形状で、器壁は薄い。

塔の越遺跡09C区に包含された土器群(図415)は、09C区305SXとその内外から出土する土器を含めて、前二者の土器群が示す内容に近似する。土器群には布留式甕が伴う。

以上の土器群は、S字甕の型式的位置、無透孔屈折脚高杯の組成、小型器台の数量の減少と形式の淘汰、等から長野北浦遺跡07Bb区259SD、塔の越遺跡SX01に後出するもので、松戸戸1式1段階に相当すると理解される(赤塚1994)。他に同段階に相当する土器群として、07Bb区259SDの廻間Ⅲ式2段階に相当する一群を除いた土器群等がある。08D区172SKから単独で出土した近江系の丸底壺も同段階に相当しよう。

●塔の越遺跡08Ab区182SX下層

長野北浦遺跡07A・08A・08B区

廻間Ⅲ式2段階に相当するとした長野北浦遺跡07Bb区259SDと松戸戸1式1段階に相当するとした長野北浦遺跡の方墳と周辺遺構、塔の越遺跡円墳(07B区737SX)の両者の中間、つまり、廻間Ⅲ式後半(3・4段階)、塔の越遺跡SX01(第1・2次調査区に包含される土器群を含む、図414)に対応する良好な資料は少ないが、長野北浦遺跡東半部(07A・08A・08B区)に包含される土器群(図415、07A区031SKを除く07A区090SI、08B区097SK、07A区083SD、07A区106NG等)、塔の越遺跡08Ab区182SXの土器群(図414)がそれに対応すると考えられる。

塔の越遺跡08Ab区182SXの土器群は、S字甕C類新段階を主体として、有段口縁部を含む。X字形の布留系小型器台、受部有段状とする小型器台を含まないが、小型器台にはいずれも貫通孔がない。長野北浦遺跡07A・08A・08B区に包含される土器群も上記の内容に類しない。

C. 小結

以上の編年の考察を踏まえて、長野北浦遺跡07Bb区259SDを塔の越1期、塔の越遺跡SX01等を塔の越2期、長野北浦遺跡方墳と周辺遺構、塔の越遺跡円墳、塔の越遺跡09C区を塔の越3期の基準資料として指標化する。

なお、各時期はそれぞれ廻間Ⅲ式2段階、廻間Ⅲ式3・4段階、松戸戸1式1段階に対応する。以下、その内容をS字甕の型式区分、小型器台(土器群)の構成を主眼として改めて整理する。編年の構成に際しては、既往の資料に加えて、塔の越2期(廻間Ⅲ式3・4段階)を下限とする御山寺遺跡07D区SU310等の資料から補足した(図416・417)。

●塔の越1期

S字甕C類古段階を主体とすること、小型器台が盛行することを指標とする(参考となる周辺地域の資料として、恒武西宮遺跡SX01、毘沙門遺跡SK01等がある)。ただし、小型器台が盛行する現象は1期以前にすでに表出する(宮之脇遺跡SB44等)。小型器台は1期以前と同様、「東海系器台」の系譜上にある受部が直線的なものと内彎するものが主体である。また、貫通孔があるものが多い。受部有段状とする小型器台は同期の廻間遺跡SB12に認められるが、焼成後に貫通孔を穿孔したものであることをも勘案すると、同形式は客体的な存在であった可能性が高い(製作者、製作時の意図と使用者、使用時の意図が不一致で、個体そのものが周辺地域から供給された可能性がある)。X字形の布留系小型器台も安定して組成しない。小型器台には口径が体部径を凌駕する丸底鉢などが組み合う事例が認められ、典型的な有段鉢や小型丸底鉢(壺)はごく少ない。

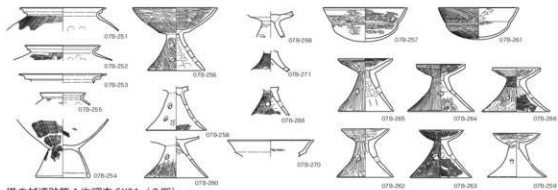
その他、柳ヶ坪型壺は口縁部が二重口縁化し、定式化したものが主体となる。口縁部上段は幅が狭い受口状を呈する。なお、バレス壺や瓢形壺は両遺跡を通じて出土しないことから、塔の越1期(廻間Ⅲ式2段階)以前には消失しているとみてよい。有段高杯は1期と2期を通じて、法量の縮小がより顕著となる。杯部はわずかに内彎する程度となる。

●塔の越2期

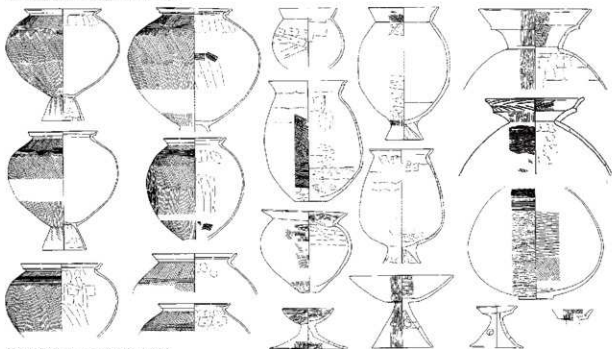
S字甕C類新段階を主体とすること、布留系小型器台が顕在化し、小型器台の形式が多様化することを指標とする(岩倉城遺跡SX01など)。小型器台は受部が直線的なものがほとんど消失する一方で、受部有段状とする器台、口縁部先端が直立する器台、X字形の布留系小型器台等の多様な形式が顕在化する。また、貫通孔があるものといものが混在する。以前の丸底鉢に加えて、有段鉢、小型丸底鉢・壺が組成し、小型精製土器群による組成が明確化する。

その他、「山陰系口縁」S字甕、柳ヶ坪型壺が安定して組成する。柳ヶ坪型壺の口縁部上段は伸長・外反化し、口縁部下段は肥大化する傾向にある。有段高杯の杯部は直線的または外反する形状に変化する。なお、塔の越遺

長野北浦遺跡 07Bb 区 2595D (1期)



塔の越遺跡第1次調査 SX01 (2期)



塔の越遺跡第1・2次調査 (2期)



塔の越遺跡 08AB 区 1825X (2期)

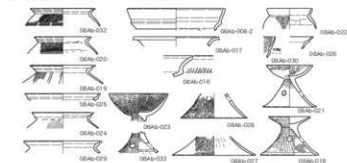
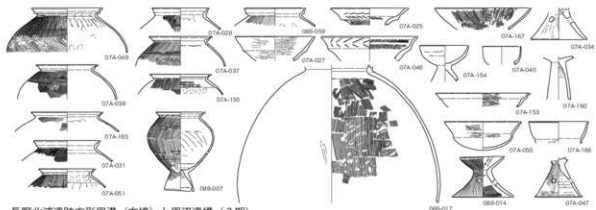
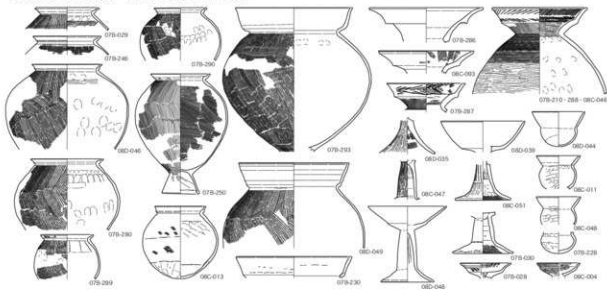


図 414 古墳時代前期の土器群 (1)

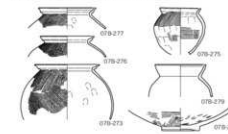
長野北浦遺跡 07A・08A・08B 区 (2期)



長野北浦遺跡 方形周溝 (方墳) と周辺遺構 (3期)



長野北浦遺跡 07bb 区 2595D (3期)



塔の越遺跡 円形周溝 (円墳) と関連遺構 07B 区 7375X (3期)



塔の越遺跡 09C 区 (3期)

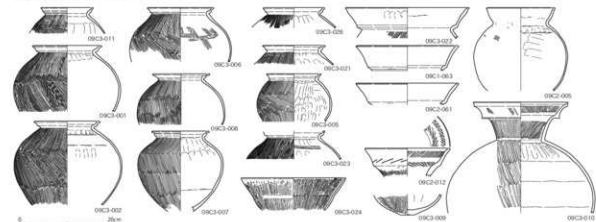


図 415 古墳時代前期の土器群 (2)

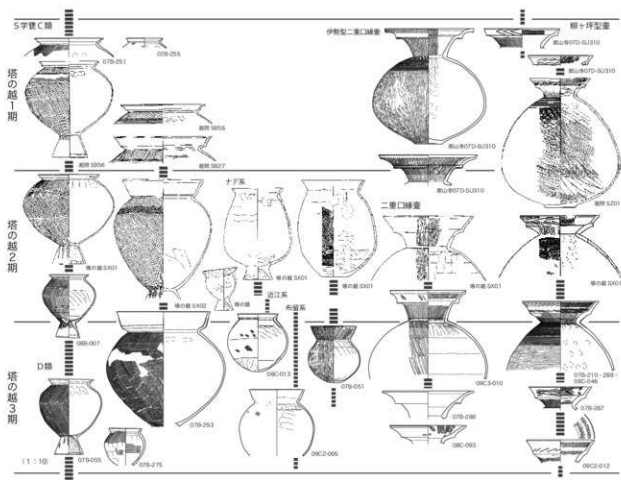


図416 土器群の変遷(1)

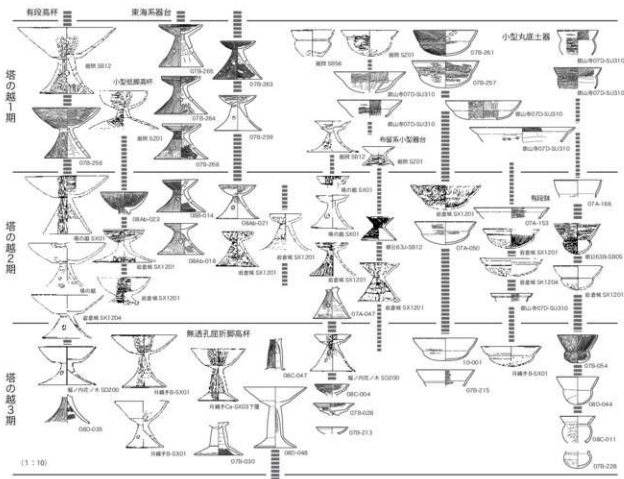


図417 土器群の変遷(2)

跡 SX01 に一定量組成するナデ・ケズリ調整を基調とする台付甕と平底甕は、今回の調査においてほとんど確認されなかった。同形式の甕は3期以降、中之郷北遺跡など周辺の遺跡にも散見されるが、塔の越遺跡 SX01 は局所的な組成を反映している可能性がある。

●塔の越3期

S字甕D類古段階を主体とすること、無透孔屈折脚高杯が組成することを指標とする。小型器台は減少し、受部を有段状とする器台、X字形の布留系小型器台に形式が淘汰される（「東海系器台」の系譜上にある小型器台はほぼ消滅する）。有段口縁鉢、小型丸底甕は継続して組成するが、粗雑化の傾向が看取されるようになる。ただし、塔の越遺跡 07B 区 737SX のように、精製の小型丸底甕が伴うことがある。無透孔屈折脚高杯は杯部容量、杯部下端の径径が小さい。また、形状や調整技法は多様で、形式としての安定性を欠く。

その他、「山陰系口縁」S字甕、柳ヶ坪型壺は継続して組成する。また、布留式甕や近江系の丸底甕が伴うことがある。

なお、近隣の遺跡における同時期の資料として堀之内花ノ木遺跡 SD200、下津新町遺跡、それに後続する資料として下津城下層遺跡 SD29 の土器群がある。なお、中之郷北遺跡においても塔の越3期とそれに後続する良好な層位資料が提示されている。

●まとめ

以上の編年の考察から、塔の越1期に小型器群の構成が変化する兆候、塔の越2期に布留系小型器群の顕在化、塔の越3期に小型器群の淘汰と粗雑化を読み取った。小型器群の対比から、塔の越1期、2期、3期はそれぞれ畿内地域における布留式中段階の古相、中相、新相（西村 2011）にほぼ対応するものと思われる。

ただ、この間における小型器群の趨勢としては、口径が体部径を凌駕する丸底鉢が各時期に組成し、「東海系器台」から受部を有段状とする器台へ交替する状況を確認することが可能である。一方、X字形の布留系小型器台や有段口縁鉢は（塔の越2期を中心として）それらを補充する器種であったと捉えられる。3期に多様性を内包しつつ顕在化する無透孔屈折脚高杯を含めて、畿内からの影響を過大視する姿勢は改められるべきであろう。

なお、結果として、廻間Ⅲ式3・4段階の区分は留保した。器種組成の把握には不安定な側面も多く、小型器群の系譜上の理解には不分明な部分も多い。また、局所的な組成にも留意する必要がある。今後の課題である。

(2) 前期古墳について

A. 方墳と円墳

長野北浦遺跡・塔の越遺跡において、方形周溝・円形周溝各1基を検出した。以下、長野北浦遺跡において検出された方形周溝（08D 区 048SD 等）を（長野北浦遺跡の）方墳、塔の越遺跡において検出された円形周溝（07 区 050SD 等）を（塔の越遺跡の）円墳として考察の対象とする。

●墳丘・規模

長野北浦遺跡の方墳は墳丘側が明確な方形を呈し、墳丘の一边は25mを計測する。塔の越遺跡の円墳は墳丘側が比較的整った弧状を呈し、墳丘径は24mに復原される。

長野北浦遺跡の方墳、塔の越遺跡の円墳は、墳丘が完全に失われていた。しかし、古代まで周溝が深掘されていることから、少なくともその段階までは墳丘が維持されていたと推測される。長野北浦遺跡 08D 区 048SD では、古代の遺物を含む堆積層（黒褐色シルト質粘土）の上位に墳丘盛土に由来する珉土が墳丘側から流入していることが確認されている。墳丘に相当する部分に古代以降の遺構がほとんど検出されないことも墳丘が長期間残存していたことを示す。

塔の越遺跡の円墳については、円墳の墳丘裾付近（円形周溝の内側）に近世以降の溝が掘削され、残存する墳丘上に社殿（ヤシロ）が設置されたことも想定されているように、墳丘の裾付近が改変を受けながらも、周囲からの視認が可能であった程度に（少なくとも近世まで）墳丘が残存していたと推察される。後述の古墳時代中期後半・後期の小古墳（群）が平安時代には墳丘が完全に削滅されていたことからすると、古墳の墳丘は中期後半・後期の小古墳と比較して相対的に高かったと考えられる。

●築造時期

古代における周溝の深掘もあって、周溝に伴う遺物は少ない。長野北浦遺跡の方形周溝の周囲には、埋没過程に不明瞭な部分を残すもの、比較的豊富に土器群が検出された。それらは先に考察したように総じて松戸Ⅰ式1段階の編年の位置を示す。古墳の築造時期も同時期として理解する。なお、方墳の墳丘部分に重複する遺構 07Ba 区 140SK に包含された土器群も同様の編年の位置を示す。翻って 07Ba 区 140SK は方墳築造に関連する施設であった可能性も考慮される。ただし、遺構や出土遺物に特徴的な点は見出不い。

塔の越遺跡の円墳の周溝外縁においては、土器集積

07B区 737SX が検出された。土器群は周溝の加工面と機能面間に埋置されたもので、古墳の築造時期を示す良好な資料と考えられる。周溝出土の土器（丸底鉢）も含めて土器群の編年の位置は松河戸1式1段階である。

●埋葬施設・副葬品

いずれの古墳も埋葬施設、副葬品は遺存していなかったが、長野北浦遺跡の方墳から約20m隔てた07D区012SKより緑色凝灰岩製の鐵形石製品1点が出土した。鐵形石製品が出土したのは須恵器等を含む古代の堆積層中で、本来は方墳に伴っていた可能性がある。

鐵形石製品は鐵身下半が断面方形を呈する盤頭形で、同形式の鐵形石製品はメスリ山古墳（20点）、東大寺山古墳（3点）、石山古墳（41点）、尼塚3号墳（2点）、大成洞13号墳（4点）において出土している（図418）。おおよそ、メスリ山古墳が廻間田式3・4段階（塔の越2期）、東大寺山古墳が松河戸1式1段階（塔の越3期）、石山古墳が松河戸1式2・3段階に併行する（早野2011）。

長野北浦遺跡の鐵形石製品は鐵身と茎との間に段差を設けるもので、この特徴から「古式」とも捉えられる（北山2008）。しかし、「古式」とされたメスリ山古墳の鐵形石製品は鐵身側面が直線的な形状である一方、長野北浦遺跡は鐵身下半側面が彎曲する。鐵身下半側面が彎曲する形状は石山古墳の鐵形石製品に多く認められ、石山古墳にのみ認められる篋被付の鐵形石製品の鐵身下半側面はいずれも彎曲する。鐵身下半側面の彎曲が石製品としての形式化を示すと理解すれば、長野北浦遺跡の鐵形

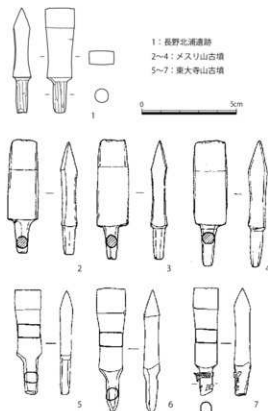


図418 鐵形石製品の諸例

石製品はむしろ新しく位置付けられる。詳細な対比は拙稿として、ここでは長野北浦遺跡の鐵形石製品が松河戸1式1段階とした方墳の築造時期と大きく齟齬しないことを確認するのみとする。

●その他

長野北浦遺跡の方墳は検出した部分の北（北東）隅、西（北西）隅部分の掘り込みが浅く曖昧であったようで、周辺には土器群が散在する。同様な状況は周溝墓（墳丘



図419 周辺における前期後半の古墳の分布

墓)に認められる。例えば、権現山遺跡 SZ02 は西(南西)両部分の掘り込みが浅く、築造後に掘削を伴う何らかの造作が行われたようである。権現山遺跡 SZ02 は弥生時代後期における築造が想定されるが、廻間Ⅲ式後半(塔の越2期)まで断続的に墳丘を対象とした供献行為が継続する。廻間Ⅲ式2段階(塔の越1期)まで同様の行為が継続する廻間遺跡 SZ01 の例も含めて、長野北浦遺跡の方がこれら伝統的な墳墓における営為と接点を有する可能性を示唆しておきたい。

なお、これらの墳墓における供献行為に際して、使用する土器を仮器化した痕跡は認められない。すでに前方後方墳の西上免遺跡 SZ01 において、仮器化の意識が発露していることからすると、土器を仮器化する行為が当地域においては必ずしも段階的に発展しなかったと認識される。一方、塔の越遺跡の円墳においては、同形同大(同工)の土器を複数個体供献する行為が確認された。同様の事例として、恒武西宮遺跡方形周溝 SZ01 に付属する SX01、曾根八千町遺跡 SX02 等がある。今後、供献行為の位相を把握する作業も必要であろう。

B. 小結—尾張における前期の方墳と円墳について

長野北浦遺跡・塔の越遺跡においては、ほぼ同時期に20m以上の方墳と円墳が築造されていたことが明らかとなった。古墳は一定規模の墳丘が構築されていたと思われ、大型古墳に副葬されることが多い獣形石製品が伴っていた可能性もある。以下、尾張地域における同時

期の古墳と比較しつつ、古墳の相対的な位置を確認する。

尾張地域各地域においては、長野北浦遺跡・塔の越遺跡の前期古墳と前後して、東谷山山頂付近(旧山田郡)に尾張戸神社古墳(円墳・径27.5m)、南社古墳(円墳・径30m)、庄内川流域(旧春部郡)に天王山古墳(円墳・径28m)、篠木2号墳(円墳・径40m)・同9号墳(円墳・径40m)、出川大塚古墳(円墳・径45m)、五条川流域(旧丹羽郡)の三ツ山1号墳(方墳・一辺22m)・同2号墳(方墳・一辺18m)・同3号墳(方墳・一辺21m)、甲屋敷古墳(円墳?・径約30m)、日光川流域(旧中島郡)のでんやま古墳(円墳・径23m)、野見神社古墳(円墳・径20m)、知多半島基部(旧愛智郡)の兜山古墳(円墳・径45m前後)、番山古墳(円墳・径約30m)、鳥栖八剣社古墳(円墳・径60m)等の中小規模の円墳、方墳が築造される(図419)。

これらの古墳は方墳で構成される三ツ山古墳群を除いて、いずれも円墳で、同時期の方墳と円墳が隣接して築造される長野北浦遺跡、塔の越遺跡の状況はやや特異である。また、庄内川水系の円墳は葦石が普遍的に認められ、段階的に壘形墳輪、円筒墳輪を採用し、前方後円(方)墳との一定の関係を示す(瀬川2011)。一方で、古木曾川水系(五条川・日光川水系)の円(方)墳は葦石、墳輪を採用せず、例えば葦石と壘形墳輪、円筒墳輪を採用する前方後円墳、青塚古墳との関係性は希薄である(前方後円墳との関係は希薄であるが、知多半島基部の円墳は前者の様相に類似する)。長野北浦遺跡・塔の

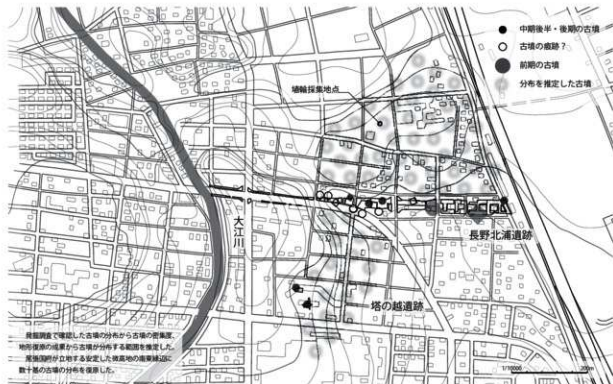


図420 地形の復原と古墳の分布

越遺跡を含む古木曾川水系の前期古墳には、先にも確認したように伝統的な造墓意識がなお色濃く反映されていたのであろう。

(3) 中期後半・後期の小古墳（群）について

A. 長野北浦遺跡・塔の越遺跡の小古墳（群）

●分布

長野北浦遺跡・塔の越遺跡においては、中期後半・後期に属する古墳（とその痕跡）を確認した。古墳は、塔の越遺跡 OSB 区以東の氾濫原に面した微高地上に群在する。古墳が立地する微高地は塔の越3期（松河戸1式）以降の堆積作用によって氾濫原が微高地化したもので、地形復原の成果をも参考にすると、長野北浦遺跡、市教委調査区、埴輪が採集されている稲沢東小学校付近までを含めて南・東向きの緩傾斜面上、500m以上の範囲に同時期の古墳が分布していたことが推測される。濃尾平野低地部において中小の古墳が発掘調査によって確認される事例は少なくないが、微高地上の広範囲に中期後半・後期の小古墳が分布することが判明したことは特筆される。

今回の発掘調査で確認された古墳は、現実のもので4基、可能性があるものを含めると10数基で、市教委調査分を含めると少なくとも6基、最大で10基から20基の古墳の分布が判明したことになる。遺跡全体では数十基程度の古墳の分布を推測することも可能であろう（図420）。

●墳形・規模・外部施設

長野北浦遺跡・塔の越遺跡において確認された古墳は、径10～20mの円墳が主体であるが、確実に方墳が含まれることも今回の発掘調査で判明した。出土遺物の内容から築造時期が判明する古墳は、市教委の調査分も含めていずれも東山11号室式期で、その範囲を大きく逸脱するものは認められない。これらの古墳は近接した時期に築造されたと把握されながらも、埴輪を伴うものと伴わないものの両者が混在する。なお、埴輪は定型化した尾張型埴輪（赤塚1991）が主体である。今回の発掘調査では埴輪が古墳によって出土した状況は認められなかったが、塔の越遺跡 OSBd (OSBc) 区、同 O7A 区、長野北浦遺跡 O7B 区で若干の埴輪が出土した。なお、過去にも（O7区の北に相当する）稲沢東小学校の西で埴輪が採集されている。ただ、実際には埴輪を伴

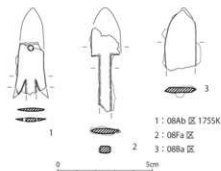


図421 塔の越遺跡出土鉄製品

わない古墳が多い。市教委による第2次調査で確認された古墳（SD07）においても埴輪が「人為的に周溝内に投棄された状況」であったことからすると、実際には古墳に埴輪が樹立されていなかった可能性もある。

●埋葬施設・副葬品

検出された古墳はいずれも後世の削削によって埋葬施設は遺存していなかった。周溝内や周辺から出土した緑色凝灰岩製管玉や鉄鏃（図421）が副葬品の一部であったとすれば、これら小古墳の副葬品は若干の装身具と武器によって構成されていたと推測される。

注意されるのは径15mの円墳（08Ab区154SD）の周囲で検出された土坑175SKである。土坑は長軸3m、短軸1.3mの長楕円形を呈し、土坑からは須臾器有蓋高杯と有頸脇挾三角形の鉄鏃（図421-1）が出土した（目釘、刀子片が付着?）。周溝との位置関係から、円墳の周溝外に設置された周辺埋葬施設（土坑墓）の可能性も想起されるが（清家1999）、須臾器や鉄鏃の出土から、小規模な円墳に従属する埋葬施設としての単純化は難しい。また、円墳との時期差もほとんど認められない。

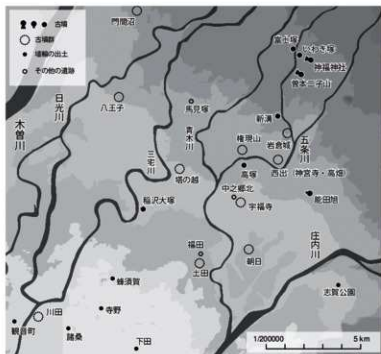


図422 周辺における中・後期古墳の分布

遺跡	遺跡番号	遺積	規模 (m)	時期	形状	土器	その他遺物	墓室
大毛池遺跡	94AMFSD01	円墳	13	H-50		須恵系高杯		用原石積み穴式石室?
大毛池遺跡	94GJSD15	円墳	7					
門間沼遺跡	94CFSD01	円墳	外周18 内周12	H-11~H-61		須恵系高杯・有蓋高杯・甕・土師器土師器壺・甕(織)・高杯		二重の墳溝
門間沼遺跡	94CFSD02	円墳	外周18 内周12	H-11~H-44		須恵系高杯・高杯・甕・甕・韓式系土師器 輪郭口、木製漆棺・板付		二重の墳溝 円墳内土坑土師器伊勢壺等
門間沼遺跡	94MFSZ01	円墳	13	H-50		須恵系高杯・フラスコ形須恵系		
門間沼遺跡	94MFSZ02	円墳	6.0~6.2					
岩倉城遺跡	SZ1301・立合	方墳	H-11	朝顔・円筒・形輪?		須恵系高杯	金剛?	
岩倉城遺跡	SZ1302	方墳	H-61			須恵系高杯・高杯・土師器高杯・小形壺		
岩倉城遺跡	SZ1303	方墳	H-61			須恵系高杯・土師器伊勢壺		
岩倉城遺跡	SZ1304	方墳	H-111	円筒		須恵系高杯・甕		
鹿嶋山遺跡	1号墳	円墳	14	H-44		須恵系高杯(石室内)	鉄刀子(石室内)	用原石積み穴式石室
鹿嶋山遺跡	2号墳	円墳	7					
鹿嶋山遺跡	3号墳	円墳	12					用原石積み穴式石室?
鹿嶋山遺跡	4号墳	円墳	25.5	6世紀後半		須恵系壺		
西出古墳	方墳	14	城山2	朝顔・円筒		須恵系高杯・有蓋・無蓋高杯・甕・壺・甕		
藤田郷古墳	横江 全長43 1区 横江27	朝顔・円筒・形輪				須恵系高杯 (蓋・家・人物・馬)	木筒器付文字形、貨幣、刺棒、組合付、柱杖、板付	
八王子遺跡	SZ01	円墳	10	H61~H50		須恵系高杯・高杯 土師器壺(織)		穴式石室?
八王子遺跡	SZ02	円墳	20~30	1-17		須恵系高杯・高杯・甕・短須輪・平飯・鉢 土師器伊勢壺・甕・織		穴式石室?
八王子遺跡	SZ03	円墳	24	1-17		須恵系高杯		
八王子遺跡	SZ04	円墳	21	H-61		須恵系高杯・短須輪		
八王子遺跡	SZ05	円墳	8	7世紀後半		須恵系高杯 土師器伊勢壺		
山ノ内遺跡	SZ04	円墳	14	6世紀				金剛?
碓の越遺跡	第1北園在SD04	円墳	17	H-11		須恵系高杯・有蓋高杯・甕・壺		
碓の越遺跡	第2北園在SD07	円墳	17	H-11	朝顔・円筒	須恵系高杯・有蓋高杯		
碓の越遺跡	08Ac(207SD)	方墳	7	H-11		須恵系高杯	緑色瓦製瓦葺玉1	
碓の越遺跡	08Aa・Ac1c 149SD	円墳	14	H-11		須恵系高杯・有蓋高杯等 土師器壺		墳溝に8世紀までの遺物
碓の越遺跡	08AB(134SD)	円墳	15	H-11		須恵系高杯・有蓋高杯 土師器土師器壺	土坑1758Kに須恵系・有蓋高杯	
長野北浦遺跡	07AM000SD	円墳	10	6世紀?				
朝日遺跡	SZ1002 (塚山型)	円墳	外周48 内周32	城山2	円筒			二重の墳溝
朝日遺跡	SZ1001	円墳	10	城山2		須恵系壺		
土田遺跡	SZ10	円墳	18.5	H-61~H-44		須恵系高杯・短須輪・甕 土師器壺		磨石製銀文鉄鉢等1
土田遺跡	SZ11	円墳	18	H-61~H-44		須恵系高杯		
川田遺跡	SZ01	円墳	外周15 内周1.5	5世紀後半 西側1.5	朝顔・円筒・形輪 (家・人物・馬)	須恵系高杯他	鉄鍬他、馬骨?	二重の墳溝 8世紀まで墳溝を再掘削

表 11 尾張平野における中小古墳一覧表(発掘調査によって検出された古墳)

B. 尾張平野低地部の小古墳(群)

発掘調査において検出される小古墳は、調査の主たる対象ではなく、調査の副次的な(偶然の)産物であることから、分布、墳形・規模、埋葬施設・副葬品等を通じて多くを論じることは難しい。このような現状を理解しつつ、尾張平野低地部において検出された小古墳(群)について類型化し、若干の考察を加えることとする(図422・表11)。

長野北浦遺跡・塔の越遺跡の古墳群は東山11号窯式期を中心として築造され、古墳が長期間継続して築造された状況は認められない。川田遺跡と朝日遺跡で検出された古墳や能田旭古墳は、5世紀中葉から5世紀後半(城山2号窯式期の前後)、長野北浦遺跡・塔の越遺跡に先行して築造されるが、同様に古墳の築造は継続しない。門間沼遺跡の古墳群も築造は東山11号窯式期で、古墳の築造は6世紀に断絶し、大毛池遺跡を含めて7世紀に古墳の築造が再開する。これらの古墳は築造後も周溝が再掘削され、周溝内には6世紀以降の遺物が含まれることが多い。

また、川田遺跡、朝日遺跡、門間沼遺跡の古墳のよう

に規模の大小に関係なく周溝を二重に掘削する古墳が特徴的に認められる。能田旭古墳の墳形が帆立貝形であること、長野北浦遺跡・塔の越遺跡の古墳に円筒と方墳が確実に混在することを含めて、墳形・規模には多様性を内包する。

川田遺跡の二重に周溝を掘削する古墳SZ01は小規模ながらも家・人物・馬を含む形象埴輪を採用し、馬骨を伴っていた可能性がある。これに類する古墳として、周溝から家形埴輪を含む形象埴輪、須恵系筒形器台を含む土器群、馬骨などが出土した東古波町遺跡SZ02が想起される。東古波町遺跡は正木町遺跡や伊勢山中学校を中心とする古波遺跡群に含まれる遺跡で、方墳群(円墳1基を含む)が検出されている。SZ02は東山11号窯式期に帰属する一辺19.5mの方墳である。同様に二重の周溝をもつ門間沼遺跡の円墳94C区SZ02の周溝やその周囲から、鍛冶関連遺物や韓式系土器等が出土していることは注目される。つまり、尾張平野低地部において検出される小古墳の特徴的な墳形に、形象埴輪を採用、あるいは馬匹生産や鉄器製作等に関係するような新興の集団との関係が反映されている可能性が考えられる。帆

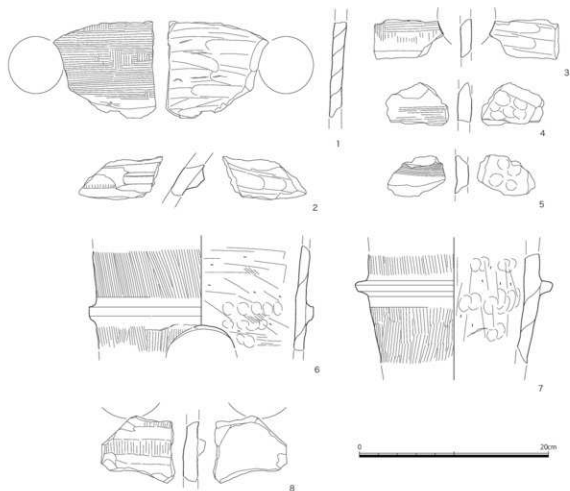


図423 朝日遺跡SZ1001(検見塚)出土埴輪

立貝形前方後円墳である能田旭古墳もこの例に漏れない。

朝日遺跡SZ1001(検見塚)は二重の周溝を掘削する中規模の円墳で、周溝からは城山窯やその周辺の小古墳から出土することが多いタテハケ系埴輪と尾張型埴輪が混在して出土する(図423)。能田旭古墳の埴輪がナデ系、B種ヨコハケ系、尾張型(C種ヨコハケ系)によって構成され、川田遺跡SZ01に伴う埴輪がナデ系の円筒埴輪が主体で尾張型埴輪を含まないことから、これらの古墳における尾張型埴輪の使用は限定的であったようである。尾張型埴輪が定型化し、広く拡散する東山11号窯式期に至っても長野北浦遺跡・塔の越遺跡の小古墳群において(尾張型)埴輪の使用が一般化しなかった点も

こうした状況と無関係ではないように思われる。

なお、塔の越遺跡においては円墳の周溝(08Ab区154SD)外に周辺埋葬施設(土坑墓)の可能性のある土坑SK175が検出された。円墳周溝の周溝内においても埋葬施設の可能性のある明確な土坑状の掘り込みが確認されている。これらの遺構を周辺埋葬施設とするには不確定な要素を多く含むものの、多様な墳形に反映されるような不均質な集団との関係を考慮しておきたい。この点については良好な検出事例を待って再論する必要がある。

岩倉城遺跡において検出された古墳はいずれも方墳で、東山111号窯式期に築造が開始され、古墳時代中期後半から後期を通じて築造が継続する点が特徴的であ



図424 岩倉城遺跡の古墳

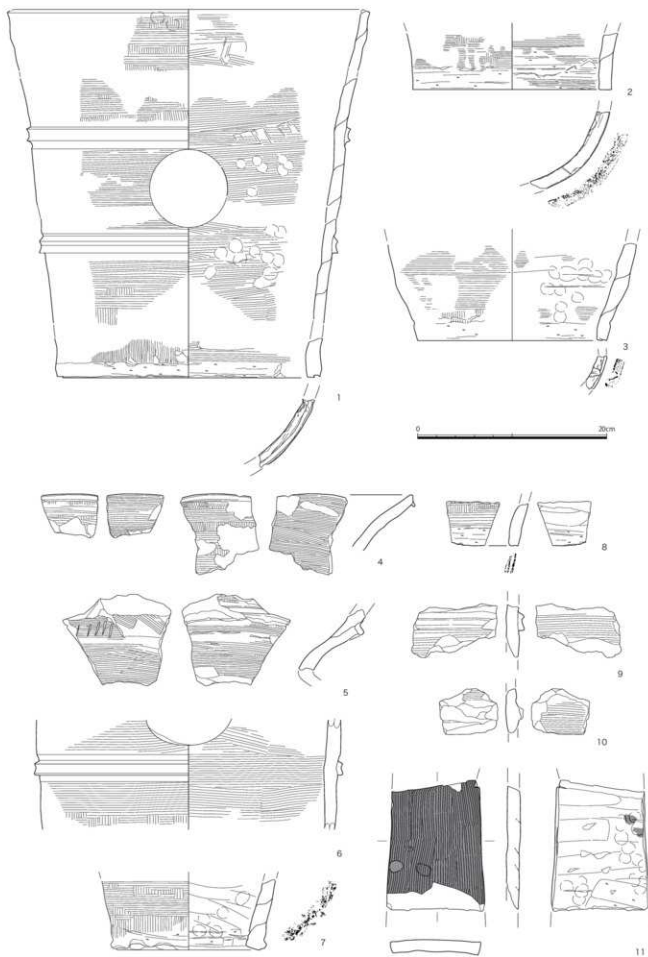


图 425 岩倉城遺跡 2003 年度立会調査出土陶輪

る(図424)。近隣の西出古墳も城山2号壙式期に築造された方墳である。西出古墳を含めて東山111号壙式期から東山11号壙式期を通じて埴輪を伴う古墳がほとんどで、埴輪はB種ヨコハケ系の埴輪をわずかに含むつつ、尾張型埴輪を主体とする。図示した埴輪は事務所建設に伴う2003年度の立会調査時(調査担当上野登・原田幹)に出土したもので(図425)、出土した地点から既報告のSZ1301に伴う可能性が高いと思われる。埴輪は二突帯三段(第一段推定12cm、第二段推定10cm、第三段推定12cm)に復原される円筒埴輪(1)を典型として、いずれも回転ヨコハケを施した尾張型埴輪である。底部調整も明確なもの(2、3など)が多い。なお、埴輪が採集されている神宮寺古墳(滅失)、高畑古墳(滅失)もこれらに類する古墳であろう。

一方、権現山遺跡、八王子遺跡、土田遺跡の古墳群は6世紀後半以降に築造が開始される。山中遺跡、大毛池田遺跡、古墳の築造が再開する門間沼遺跡も同様の状況と推測される。古墳はいずれも円墳で、規模は10m前後から30m近くまでのものが認められる。権現山遺跡(1号墳)では川原石積みの横穴式石室が検出され、八王子遺跡や大毛池田遺跡でも埋葬施設が横穴式石室であった可能性が指摘されていることからすると、これらの古墳は埋葬施設に横穴式石室を採用したものが多かったと推定される。

C. 小結

上記の整理から、これらの小古墳(群)を、5世紀後半から後葉までに多様な墳形の古墳が築造されるも築造は継続せず、尾張型埴輪の使用が限定的な古墳群、大山扇状地の末端、五条川中流域に継続的に築造された方墳群で5世紀後半から後葉を通じて尾張型埴輪を積極的に採用する古墳群、6世紀後半以降に継続して築造され、横穴式石室を埋葬施設とする円墳によって構成される古墳群に大別した。ここではそれぞれを第一類型、第二類型、第三類型として呼称する。

第一類型の古墳群は、それぞれに特徴的な様相が看取されながらも、古墳の分布や古墳を構成する要素は孤立分散的で、空間的・時間的な脈絡に乏しい。能田旭古墳の本製品群(柳沢2009)、これに先行する時期、東山111号壙式期以前(TG232型式期からTK73型式期)の高塚古墳の形象埴輪群(竹内2011)、さらには見尾塚遺跡の土器集積祭祀遺構と鉄製品・石製模造品の遺物群、松河戸Ⅱ式期における福田遺跡や中之郷北遺跡の鍛冶関連遺物等、古墳時代中期に特徴的に表出する様相についても同様な評価が可能であろう。このような評価は

古墳時代中期における尾張平野低地部の必ずしも安定していなかった状況を示すもので、古墳の築造は継続せず、第三類型の古墳群とも明らかな断絶が認められる状況とも深く関係する。これとは対照的に、第二類型とした古墳群は空間的なまとまり、系譜の連続性を示す。

以上、古墳時代中期から後期における小古墳(群)の形成過程から、同時期の尾張平野低地部の社会状況の一端を示した。さらに豊かな社会像を素描する上で、小古墳(群)が分布する微高地が形成される履歴、古墳築造の基盤としての集落や生産域との関係を改めて考察する必要がある。長野北浦遺跡・塔の越遺跡の発掘調査を通じて周辺の景観を復元する意義は決して小さくない。

(早野浩二)

参考文献

- 赤塚次郎 1990「廻間式土器」「廻間遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集、財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1991「尾張型埴輪について」「池下古墳」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第24集、財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1994「松河戸様式の設定」「松河戸遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集、財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 加納俊介 1991「東海」「古墳時代の研究 6 土師器と須恵器」権山閣
- 加納俊介 1997「廻間式か元屋敷式か—東国から見た弥生土器と土師器の境界—」「西相模考古学」第6号、西相模考古学会
- 北山峰生 2008「メスリ山古墳出土石製品の検討」「メスリ山古墳の研究」大阪市立大学考古学研究所報告第3冊、大阪市立大学日本史研究室
- 清家章 1999「古墳時代周辺埋葬墓一畿内への埴輪棺を中心に—」「『国家形成期の考古学』大塚大学考古学研究室
- 瀬川貴文 2011「古墳時代前期の円墳」『名古屋市文化財調査報告書 62 志段味古墳群』名古屋市文化財調査報告書79、名古屋市教育委員会
- 竹内里紗 2011「高塚古墳出土形象埴輪の再検討—高塚古墳出土埴輪再整理作業報告—」「北名古屋市歴史民俗資料館研究紀要」5、北名古屋市歴史民俗資料館
- 西村歩 2011「近畿」「古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み」同成社
- 早野浩二 2011「東海」「古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み」同成社
- 柳沢一男 2009「熊本県北原1号墳の「盾形石製品」と横穴式石室石棺の再検討」「地域史の考古学 佐田茂先生依賀大学退職記念論文集」佐田茂先生論文集刊行会

遺跡文献

- 愛知県 2005「愛知県史 資料編3 考古3 古墳」
- 愛知県教育委員会・財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター 2005「愛知県埋蔵文化財情報 20」

財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1987『土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第2集

財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1991『朝日遺跡Ⅰ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集

財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1994『朝日遺跡Ⅴ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集

財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1992『岩倉城遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第38集

財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1993『山中遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第45集

財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1994『堀之内花ノ木遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第52集

財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1997『大毛池田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第72集

財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1997『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第73集

財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター 2002『川田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第103集

財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター 2003『権現山遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第110集

財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 2006『島崎遺跡・伝法寺本郷遺跡・中之郷北遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第139集

財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 2009『下津新町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第159集

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 2011『御山寺遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第167集

塔の越遺跡発掘調査団 1988『塔の越遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)』

稲沢市遺跡発掘調査委員会 2003『下津公民館用地埋蔵文化財発掘調査報告書—下津伏跡・下津城下崩遺跡』

犬山市教育委員会 2001『史跡青塚古墳調査報告書』犬山市埋蔵文化財調査報告書第1集

大垣市教育委員会 1997『曾根八千町遺跡』大垣市埋蔵文化財調査報告書第6集

春日井市教育委員会 2006『平成17年度市内遺跡調査概要報告書—大留東島遺跡・神領鉢田遺跡・堀ノ内市道遺跡・天王山古墳・松河戸遺跡・南気鳴向田遺跡・神領屋敷田遺跡』

春日井市教育委員会 2010『平成21年度市内遺跡調査概要報告書—下大留城跡・東野町西1丁目・神領屋敷田遺跡・松河戸遺跡・堀ノ内表遺跡・天王山古墳』

可見市教育委員会 1994『川合遺跡群』

北名古屋市教育委員会 2010『高塚古墳確認調査報告』北名古屋市埋蔵文化財発掘調査報告

京都大学文学部博物館 1993『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館図録第6冊

京都府教育委員会 1969『埋蔵文化財発掘調査概要』

慶星大学校博物館 2000『金海大成洞古墳群Ⅱ』慶星大学校博物

館研究叢書第7輯

東大寺山古墳研究会・天理大学・天理大学附属天理参考館 2010『東大寺山古墳の研究』真陽社

名古屋市教育委員会 1989『東古渡町遺跡—第一次発掘調査概要報告書—』

名古屋市教育委員会 1991『東古渡町遺跡—第3次発掘調査概要報告書—』

名古屋市教育委員会 2011『名古屋文化財調査報告書 62 志段味古墳群』名古屋文化財調査報告書 79

奈良県教育委員会 1977『メスリ山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第35冊

大阪市立大学日本史研究室 2008『メスリ山古墳の研究』大阪市立大学考古学研究报告第3冊

西尾市教育委員会 1994『毘沙門遺跡』

財団法人浜松市文化協会 2002『恒武西宮遺跡』浜松市恒武町恒武西宮遺跡3・6・7次発掘調査報告書

三重県埋蔵文化財センター 2005『第24回三重県埋蔵文化財展 石山古墳』

2. 古代の塔の越遺跡

(1) はじめに

本節では、前章までに提示された稲沢市・塔の越遺跡と長野北浦遺跡の発掘調査成果をもとに、一般に日本史上で古代として区分される西暦7世紀から12世紀における塔の越遺跡の特色を探っていくことで当該遺跡の評価に繋げたい。

これまでの愛知県埋蔵文化財センター並びに稲沢市教育委員会による長野北浦遺跡・塔の越遺跡の発掘調査成果は、古代にとどまらず、古墳時代前期中期を中心とする古墳群や中世以降の盛んな土地利用の痕跡も明らかにしてきた。しかしその中でとりわけ古代の特色を見出すとするのは、塔の越遺跡が尾張国府跡推定地に東接する位置関係にあるのが最大の理由であるのはいうまでもない。

ただしそれは単に「国府あるいは国衙の続き」という意味ではない。未だ尾張国府跡については、古代から中世を通じて、その中核である国庁の位置は不明であり、その範囲についても漠然としたものがあるにすぎない。歴史地理学的な考察は重ねられ、考古学的な検証作業もかつては進められたが(Ⅱ1)、東海地域の他国府で判明した内容と比較すると圧倒的にわからないことの方が多いのが現状である。

つまり、古代の塔の越遺跡を考察することは、場合によっては国府跡あるいは国衙跡の一部を切り取って検討していることになるのかもしれないのである。それだけ重要な命題なのである。

したがって遺跡内容の吟味にあたっては、各国府跡の調査研究での視点を援用することとなる。ひとつは、遺構変遷の分析で建物の方位に注目することと、そこから地区区分と時期区分をおこなうことである。二つ目は、遺物にも注目しながら地区ごとの機能を検討することである。

(2) 塔の越遺跡における

古代から中世の地形的変遷

塔の越遺跡が存在する尾張平野は、特に現在の稲沢市域ではほぼ平坦で高低差をあまり感じさせない。しかしながらこの景観は古代以降にも起きた幾重もの河川の氾濫や開発の結果であり、古代の地形そのものではない。

古代の塔の越遺跡を考察するにあたってはまずこの地形環境の復元をおこなう必要がある。

稲沢市域はほぼ全域が自然堤防地帯である。青木川や三宅川とその支流が屈曲して流れ、その両岸に自然堤防とその背後に後背湿地が形成される。単純化すると帯状の微高地が畑の畝のように並列する地形がその主体である。とりわけ塔の越遺跡に関わり深いのは三宅川旧河道であるが、本書巻頭でその復元がなされているように、旧河道は現在の大江用水に頼るその名残をとどめ、地籍図や空中写真によって比較的明瞭な痕跡をみることが出来る。その河道は大きく蛇行し新たな直線河道を形成する直前の状況を示している。つまりそれぞれ長期間にわたって自然堤防を発達させてきたといえる。塔の越遺跡は三宅川旧河道左岸に位置し、その遺構面の標高は川に最も近い08G区で5.5m、最も離れた07A区で4.9mである。これはちょうど自然堤防から後背湿地(長野北浦遺跡)へ至る地形断面を表している。また08G区の遺構面では砂層が露出しており、自然堤防の頂部に相当する。大局的には旧河道によって形成された幅450～500mの微高地を見積もることができ、この地形は塔の越遺跡から北に位置する天神前遺跡・治部丸元屋敷遺跡までが該当すると考えられる。

この自然堤防頂部での土地利用は、塔の越遺跡・天神前遺跡で古墳時代までさかのぼることができるが、その北側の治部丸元屋敷遺跡・治部丸土井遺跡は現状で古代から中世の遺跡とされている。付近一帯では弥生時代の遺跡も確認されていないことから、長野北浦遺跡・塔の越遺跡とその周辺が自然堤防形成後最も早くから土地利用がなされた地域として理解されよう(Ⅱ2)。

このように極めて発達した自然堤防のある旧河道左岸に対して、大國魂神社(国府宮)の所在する右岸では、神社西側の発掘調査地点(稲沢市教育委員会尾張国府跡R地点)ですでに遺構検出面積が標高5.0mとなっていて、自然堤防の幅が左岸の半分程度であったことがわかる。旧河道は神社の東・南辺を画するように大きく屈曲しており、神社がこの地形をあえて選択していることが想定されよう(図426)。当該地点はさらに西方も含めて尾張国府跡の推定地(政常地区・松下地区他)として発掘調査が実施されているが、明確な遺物の増加がみられるのは9世紀後半以降である。その性格については今後解明されねばならないが、集落形成が塔の越遺跡より遅れるのは確実であろう。

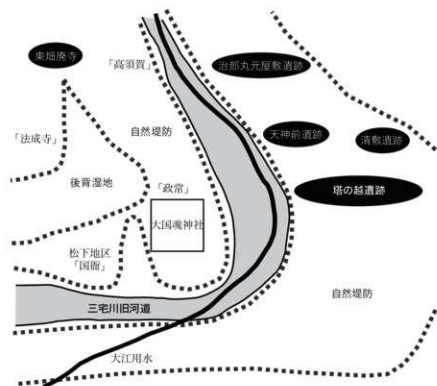


図 426 三宅川旧河道周辺の地形概略と遺跡分布

当然、高位地点は人為的な削平の対象となりやすく、特に東側の長野北浦遺跡は格段に落ち込む場所でもあったことから、中世以降に万徳寺の周辺で耕作地化を進めるにあたって削った土砂で長野北浦遺跡側を埋める整地が行われており、表層の土が東方へ移動している。このことは長野北浦遺跡 07D・E 区や塔の越遺跡 07A 区で斑状をした堆積がみられ、それに中世以前の遺物が含まれることから確認できる。中でも土砂移動の指標とするのが両遺跡で出土した瓦塔の出土分布である（図 427）。瓦塔は地表に造立する複数の部品で構成される仏教信仰の遺物で、そのため残存状況は表層土の移動に大きく左右されやすい。塔の越遺跡では 08Ab 区・09B 区・稲沢市教育委員会昭和 54 年度調査 B 地点で出土し、

これらは同一個体の破片と考えられるので、後述するように遺跡の中核的な場所に造立されていた可能性が高い。また、そこから東方の低地である塔の越遺跡 07A 区と長野北浦遺跡 07Ba 区で出土した屋蓋部片が互いに接合関係にあり、形状は造立推定地出土の破片と同一である。このことから少なくとも東へ約 250m の土砂移動があったことが考えられる。このように当該遺跡においては、中世以降の土地改変も視野に入れて遺跡の地形環境を考えなければならないのである。

(3) 塔の越遺跡における古代遺構群の開始

まず、古代の塔の越遺跡を検討するにあたって、それがいつから始まっているのか、という点について確認し

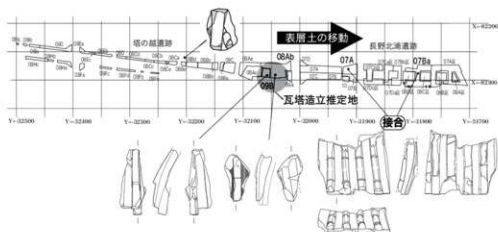


図 427 瓦塔出土地点からみた造立推定地と表層土の移動

ておきたい。その指標となるのが須恵器と土師器であり特に集落に関わる器種として煮炊具が挙げられるが、今次発掘調査の範囲においては、08G区009SXで出土した須恵器甕や土師器長胴甕が最も顕著な資料である。これら是一部(08G-020・021)を除くとして概ね1-17号窯期に相当すると考えられる。他の各調査区で出土している土師器甕も、つまみ上げられた口縁が特徴の伊勢型長胴甕と呼ばれるもので、1-17号窯期から若干さかのぼってH-50号窯期に相当するものと考えられる。このことから当該遺跡における古代の開始が7世紀半ばであり、7世紀前葉を遡るような先行集落の存在については否定的であるといえる。つまり古墳時代中期の古墳群が形成された場所に、推定7世紀半ばになって集落施設の建設が微高地で始まったといえるのである。

しかしながら7世紀後半の遺物が微高地上で広範囲に出土するのは、先に瓦塔出土分布で例示したように後代の開発や流路変化による微高地の削平などによる拡散も考えられるので注意が必要である。特に表土・上位遺物包含層から出土した遺物については著しく原位置から移動している可能性が高く、中・後期古墳やそれに近い7世紀代の遺物の平面的分布状況には年代が古い分注意しなければならない。したがって遺構内出土遺物に限って検討を進めていくことになる。そのようにみたとき、今次発掘調査範囲の西部で検出された性格不詳の土坑08D区018SKでは1-17号窯期の須恵器杯蓋・杯身がまわって出土していることから、当該期に付近で土地利用があったことの確実な証となる(註3)。それ以外で7世紀後半の可能性が考えられる遺構は、08Cd区010SD、08Bb・Bc区・09C区・07区の掘立柱建物がある。その密度は濃いとは必ずしもいえないが、微高地上の各所で開発が始まったと考えられる。

(4) 遺構の時期と変遷

A. 建物

まずは主要な建物遺構の時期を検討する。調査区ごとに西から進めていく。

竪穴建物群(1)

08Cc区014S1～016S1

後述する溝(1)と溝(2)に挟まれた空間に位置し、互いに一部重複するような位置関係にある。西接する08Cd区007SDも浅い掘り方から竪穴建物の可能性が考えられる。各遺構からはK-90号窯期(9世紀後半)出土している。これより新しい遺物もみられないことから当該期に構築・廃棄されたものと考えられる。

掘立柱建物群(1)

08Bb区掘立柱建物1～3と09C区掘立柱建物1

いずれも国土座標北から西ないしは東へ振れる。ほとんどの建物が西へ59°～65°(09C区建物1は東へ25°ということになる)振れるが、08Bb区建物2のみが西へ43°と方位軸を異にする。同建物の柱穴掘り方からは6世紀代までさかのぼる須恵器長脚高杯と土師製把手が確認されたのみで、建物群の中で最古段階のものと想定される。次いで09C区建物1(布掘り掘立柱建物)の抜き取り穴からは1-17号窯期の須恵器杯蓋が出土している。7世紀後半中に解体され、その後09C区建物2が重複する位置に建てられている。それと同じ方位軸である08Bb区建物1・3では柱穴から7世紀末の遺物が出土していることから、建物群の構築が概ね8世紀前葉以前に収まるものと考えられ、しかも08Bb区建物2に関しては7世紀半ばを若干遡る可能性もある。古代の塔の越遺跡における初現的な施設であり、その評価が重要になってくる。

掘立柱建物群(2)

08Ac区

08Ac区ではほぼ南北に方位軸をとる東西棟の掘立柱建物および櫓構が検出されている。建物群に先行する井戸とみられる大形土坑(257SX)を埋めた範囲に建物1北西隅側柱(356SK)と建物3南西隅側柱(286SK)が重複している。257SXは灰土が多い堆積状況と出土遺物からO-10号窯期以降に埋め戻されたものと考えられる。また、建物1に関しては報告中で四面廂建物の可能性が指摘されており、廂部分が重複する208SX・201SXの遺物や廂部分北東隅柱351SK出土の灰陶器手付瓶(K-14号窯期)から、建物構築時期が9世紀前葉とする見解も生じてくる。なお、当該建物群は少しずつ方位が異なり重複もみられるので複数時期にわたると想定されるが、057SDと建物4の関係(後述)にもあるように8世紀中葉の建物の可能性もあることから、全体として8世紀中葉～9世紀前半にかけての建物群であると考えられる。

掘立柱建物群(3)

07区・09A区

07A・C区では複数の方位軸からなる建物群(建物1～9、櫓1～4)が分布している。まず方位軸で区分してみると、(a)南東～北西グループ、(b)南北グループに分けられる。(a)には大形の柱穴の櫓1の他櫓2～4と建物5～8が該当する。一方(b)には建物1～4が該当する。(a)のうち建物5・6・8は(b)の建物1・3と重複しそれより新しく、反対に(b)の建物1は(a)の櫓

1に重複しそれより新しい。したがって(a)は2時期に区分されかつその間に(b)のグループが存在していることになる。

各遺構の年代は、柵1の柱穴のうち165SK・180SKの柱掘り方からは1-17号室期の須恵器杯身が出土しており、180SKの抜き取り穴からはC-2号室期の須恵器杯(完形)が出土している。また344SKからは8世紀前半の須恵器が出土しそれには美濃須恵器産葉が含まれている。これらを統合すると柵1の構築年代は1-17号室期で、解体されたのがC-2号室期と解釈することができる。さらに建物1に関しては、柵1の柱穴と重複する136SK上位層の出土遺物が該当し、それがO-10号室期古段階の須恵器であることから建物1が8世紀後半に構築されたものと考えられる。これら時期の特定可能な建物以外についてはグループごとに考え、建物1と並列する建物3で括り、建物3に重複する建物6・8と並列する建物5で括ることができる。建物5は建物1に重複していることから先後関係は明らかとなる。以上から1時期目に(a)グループ柵1・2と方位の揃う柵3で7世紀後半、2時期目に(b)グループ建物1・3で8世紀後半、3時期目に(a)グループ建物5・6・8と区分される。3時期目の年代は特定しがたいが、07区内では灰陶器が170SBのみみられる程度で少数となることから、8世紀末～9世紀前半に限定されるのではないだろうか。

ところで07区西方の09A区では、掘立柱建物方位軸が南北の建物1がある。この北西隅側柱014SPからは8世紀代の遺物が出土しており、07区と同方位である(b)グループすなわち8世紀後半の建物群に括ることができるであろう。

B. 溝

次に溝遺構について時期を検討する。建物遺構同様に調査区ごとに西から進めていく。

溝(1)

08Cd区 004SD・010SDと08Fd区 042SX

今次発掘調査地域の中央からやや西寄りに位置する。

北北西から南南東方向へ延びる溝で、国土座標北から西へ約15°振れる。いずれも底面の標高が4.0mで上層が掘り返して拡幅されており同一遺構であるといえる。004SDは010SDの掘り返しによる上層部分で、8世紀後葉の長頸瓶や高盤がある。一方010SDからは8世紀前葉～中葉の須恵器が出土している。一方042SXも上・下層で区分されている。ただし、土層断面図にみる分層線の形状から20層は上層に含まれると判断されるが、遺物は下層として採集されている。報告中でも上・下層で接合関係にあることが記されているのはこのためと考えられる。遺物で多数を占めるのはO-10号室期古段階の須恵器で、004SDに対応しているといえる。当該溝の機能下限はO-53号室期の灰陶器(08Fd-041)や9世紀代の土師器(08Fd-033)で示される。

ところで、08Fd区 042SXの西側ではほぼ南北方向に延びる小溝(031SD)が検出されており、出土遺物がO-53号室期の灰陶器で10世紀前半とみられる。またさらに西側には、東北東から西南西方向に延びる小溝(035SD)もある。こちらはO-10号室期～K-14号室期(8世紀後葉～9世紀前半)であり、031SDと時期が合わず、むしろ溝(1)の掘り返しの時期に対応するのではないかと考えられる。

溝(2)

08Cd区 028SDと08Fe区 057SD

北東から南西へ延びる溝で、国土座標北から東へ26°振れる。028SDは逆台形の断面が明瞭であるが057SDはやや不明瞭でしかも028SD底が標高3.5mに対し057SD底は4.3mと高い点にやや問題があるが(註4)、遺物は概ね上・下層に区分され、057SD上層でK-14号室期(9世紀前半)がみられ、これがほぼ埋没した時期の一端を示す。そして057SD下層と028SD中層からは1-41号室期～C-2号室期の須恵器でほぼまわっており、7世紀末～8世紀前葉に機能していたと考えられる。このことから溝(1)が溝(2)に先行することが確認されるが、先述のように溝(1)は掘り返して機能維持が図られており、両者が8世紀後葉～9世紀前半には共存していたと考えられる。

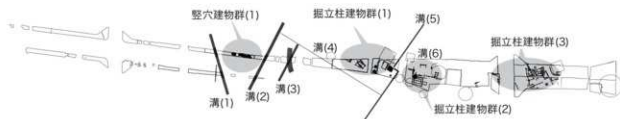


図 428 塔の越道跡における古代の主要な遺構

溝 (3)

08Ca区 040SX

溝 (2) の東側に位置する。08Ca区 037SX (中世の堆積層) 直下での平面形状は不安定であったとされ、その堆積も流水痕跡が観察されている。しかし底では溝 (2) とほぼ同一方向に延びる開削の痕跡が認められ、元来人工物であったものが水流で自然流路のような遺構に変化したとみられる。溝 (2) と近い標高でありながらこちらには水流があったことに注目すれば、意図的に水源へ直結して運河として機能させていた可能性も考えられよう。出土遺物は中層でK-90号窯期の灰軸陶器がままとまっており、それにC-2号窯期 (1点 08Ca-026 高杯がH-50号窯期) の須恵器が混入していることから、開削時期を8世紀前葉とし、一時機能停止後に掘り返しを経て9世紀代も機能していたと考えておきたい。

溝 (4)

08Bd区 059SD

検出規模は小溝であるが、削平が激しいため不明な点が多い。それでも08Bd区と08Bc区にまたがって北西～南東に延び08Bc区内で北東へ直角に屈曲しているようである。周囲に堀を伴った痕跡は認められないが、大区画内に対する小区画になるものと考えられる。しかも、掘った内側にこれも周溝のみが残存する円墳の存在が想定される点は興味深い。ともあれ時期は出土遺物からO-10号窯期の8世紀後葉に機能していたと考えられる。

溝 (5)

09C区 203SD・206SD・220SD

平安時代前葉の井戸205SEの東側に位置する溝群である。203SDと206SDは同じ方向に延びており国土産標北から東へ33°振れる。並列関係にはなく、220SDを介して1本であった可能性も考えられる。したがって206SDは顕著な出土遺物がなため時期特定が難しいが、203SDと深い関わりで近接時期に開削されたものと考えておきたい。203SDからは8世紀中葉の須恵器が出土しており、それ以前の開削であることがわかる。

溝 (6)

08Aa区 075SD

08A区建物4北側柱列に接して平行しその西側で北へ屈曲する溝である。8世紀前葉～中葉の須恵器・土師器が出土しているので、ほぼその時期に機能していたと考えられる。また堆積状況から水流があったことが想定される。建物4もほぼ同時期の須恵器 (C-2号窯期～NN-32号窯期) が出土しており、近接時期であると考えられる。

C. 井戸

古代塔の越遺跡が他の集落遺跡と著しく異なる点として、各時期にわたって井戸が存在していることが指摘できる。井戸についても同様に時期と変遷を考察してみよう。

井戸 (1)

08Ha区 010SE

出土遺物は灰軸陶器末期のもので11世紀前半である。後述する他の井戸の時期とは時期的空白があることや、その立地が遺跡西端の外れであることから、分けて把握すべきであろう。むしろ三宅川右岸の遺構群の年代に相当している点に注目しておきたい。

08Ba区・09C区・08Ac区の井戸群 (2)～(5)

掘立柱建物群の近辺に5基の井戸があるが、最古のものは09C区 208SEで、出土遺物は少ないが7世紀後半～8世紀前葉、(3)同区 047SEで8世紀中葉 (NN-32号窯期) の須恵器一拵、(4)08Ac区 257SXで埋め戻し土に8世紀後葉 (O-10号窯期古段階) の須恵器、(5)09C区 205SEは枠内からK-14号窯期の手付瓶と水瓶の一拵、の順に展開している。この変遷から、7世紀後半～9世紀前半の時期に常に1基の井戸が設けられていたことが想定されるのである。

07区 400SE (6)

井戸掘り方からは8世紀中葉の須恵器が多数出土し、枠板内からはO-10号窯期古段階の須恵器が出土していることから、8世紀後半に機能していたと考えられる。これは07区建物群2時期目と対応するであろう。

D. 遺構変遷の総括

以上の項 (A～C) で整理した各遺構の変遷を総括してみよう (図 429)。

7世紀半ば～7世紀後半

塔の越遺跡では7世紀半ばから後半にかけて、それまで展開していた古墳群に替わって溝と建物群が登場する。最古の掘立柱建物08Bb区建物2である。その後掘立柱建物群(1)を中心に7世紀後半は推移し、井戸も併存している。一方、07区欄1～3 (掘立柱建物群(3)) もこの時期に相当するが、欄ばかりで井戸もみられないことから施設の外縁のような位置づけであり、大局的には前者を中核移設としつつ広大な空地という見方ができよう。ただしその中には前代の古墳群の大半が墳丘形状をとどめて残存するという奇妙な景観が展開していたと思われる。

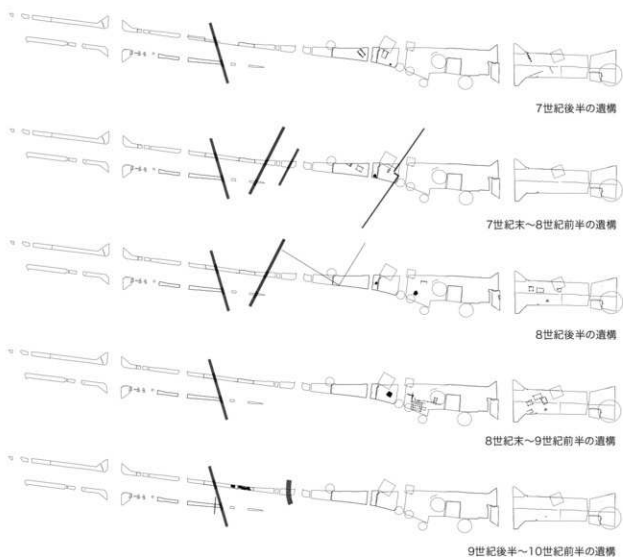


図 429 塔の越遺跡における古代の遺構変遷

溝は、溝(1)が該当する。この溝の方位軸は自然堤防のそれに近く、自然堤防の頂部とその東側の平らな空間を区分する目的があったと推察される。つまり当初は地形に対応して古地範囲を設定しているのである。現状ではこの区画溝の東・南・北辺はその有無も含めて想定できないが、類似する方位軸の07区柵1～3がほぼ遺跡の東端に展開することから微高地の東半部はほぼ全域を古地していたと思われ、その場合区画の東西長は約292mとなる。

7世紀末～8世紀前葉

掘立柱建物群(1)の08Bb区建物1・3と09C区建物2は7世紀末に構築され井戸は08ba区046SEが作る。建物規模は小さくなったものの井戸が併存していることから、施設の機能は変化していなかったと考えられ、配置変更により中核施設が調査区外になっているものと思われる。

この時期で注目されるのは新たな溝の開削である。溝(2)・(3)・(5)は北東～南西方位軸で、上記建物群と同一

である。溝間の距離は120mである。ただし、溝(2)は明瞭な掘り方で幾度も掘り返して維持を図っていたとみられるのみ対して、溝(5)は規模が小さく東西で対になる関係とは言いがたい。より大きな区画内の小区画を目的としたとも考えられるが、ここより東方で同一方位軸の建物群が見当たらないことを考慮するとやや難しいかもしれない。これに関し溝(2)東側約25mには溝(3)が併行し、当初両者を側溝とする道路が通じていたとすると、当該期の微高地上開発の基軸となる主要道路の可能性を指摘することもできよう。ところで、溝(5)の203SD北東方向延長線上には方墳が存在しており、これを避ける為に屈曲させて206SDへとつないだとも考えられる。そうすると、当該期は面的な開発を進めながらも前代の古墳丘陵にも配慮がなされていたことを示しているようで興味深い。

8世紀後半

塔の越遺跡において8世紀中葉という時期区分で遺構を抽出するのはやや難しい。具体的にはNN-32号窟

期の須恵器を含む遺構であるが、大半は8世紀前葉の遺物と共存しており、この時期に大きく進展した開発の延長にあるものと思われる。掘立柱建物群(2)の建物4は当該期の可能性もあるが、むしろO-10号室期古段階の遺物が出土する遺構に着目すると、建物群方位軸の大幅変更がなされていることがうかがえるのである。

南北方位軸を採用する掘立柱建物は、掘立柱建物群(2)から東方に展開する。規模は8世紀前葉のものとはならず2間×3間を主体としており格段に大きなものはない。07区では新たに井戸400SEが構築され、遺跡東端が中心になった印象もあるが、掘立柱建物群(1)のエリアでは08Ba区047SEが機能しており、ここも何らかの施設が設置されていたものと考えられる。加えてその南側に位置する溝(5)の方位軸は8世紀前葉のそれに符合しており、この区画はリセットされずにそのまま引き継がれた可能性が高い。また溝(1)は7世紀後半に開削されて以来の大規模な掘り返しがなされているが、向きが大きく変更になった形跡はない(註5)。つまり新たな方位軸線が採用されても、統一された方格地割で一面に整地し直すことはせずに、従前の区画に追加して開発エリアを拡大していったのである。

注目すべきなのは古墳群が密集する09C区他のエリアに建物が進出していることで、古墳を削平しながらの開発がこの時期に始まったことを示している。

8世紀末～9世紀前半

前の時期に始まった古墳の削平が進んでいく。それによって掘立柱建物群(2)が形成されていく。当該調査区では調査不能範囲もあって建物配置と全体像の復元ができていない点が惜まれる。特に建物3や柵の想定が報告されたもので良いかどうかは、今後検討すべき課題である。また建物1の身舎については妥当であるとして断片については検討が充分であるとは言えない。仮に四面廻廊建物であるとするならば、これを中心とした施設の展開が想定されよう。

溝(2)は08Fe区057SD上層でK-14号室期の灰軸陶器が出土しており、下層の8世紀前葉の須恵器群との間に空白期間がある。したがって当該期に掘り返されたと考えられるが、掘立柱建物群(2)はこれと方位軸を揃えるようなことをしていない。また、井戸09C区205SEも従前の区画に合わせたのか建物との向きに違いがある。ただし、両者間の溝(5)は既に埋没しており、一連の空間として利用されていた可能性も考えられる。

9世紀後半

これまで掘立柱建物が圧倒的な展開をみせていた塔の越遺跡であるが、この時期には堅穴建物が中心の景観へ

と変化する。最も明瞭な検出状況にあるのは堅穴建物群(1)であるが、それ以外の調査区で堅穴建物が確認できる遺構はほとんどみられない(註6)。なお、建物自体は一般的な大きさであるが、遺物はここぞ三足皿が出土し07A区170SDでは耳皿が出土するなど、流通した製品は通常の集落にはあまりないものが含まれている。

溝(2)はほぼ埋没し、溝(3)は水流によって形状が変化し、堅穴建物群の東方で運河のような使われ方をしていたとみられる。この頃には溝(1)は埋没が進み、08FD区031SDのような小溝が溝(3)と対するような関係となり、両者間が集落域となっていたと考えられる。また掘立柱建物群(2)もほぼ廃絶し、かつて7世紀半ばに中核な施設を設けた空間の中心は壊れ、その周辺部分で集落が継続するようになっていたのである。

10世紀～11世紀前半

10世紀以降は、遺跡西端の井戸(08Ha区010SE)が機能していた程度で、そこから東方の集落はほぼ廃絶していたとみられる。なお当該遺跡では、山茶碗の出土が極めて少ないので、この後中世を通じて集落としての利用はなかったと推察される。井戸の立地についても旧三宅川右岸で新たに展開し始めた集落との関係で考えるべきで、川を挟んだその縁辺にあるといえる。また、当該期には交通路である川へ直接アクセスできる環境が重視されたものと考えられる。ともあれ塔の越遺跡の古代はここに終末となる。

(5) 出土文字資料の特徴

ここで出土遺物について、特徴的な点を抽出して検討してみる。塔の越遺跡では、須恵器・灰軸陶器の供膳具が多数を占め、須恵器壺・甕類などの貯蔵具や土師器甕などの炊煮具は少ないように見受けられる。この指摘は、定量的な集計を行っていないので、また多少で印象はしかない。しかしながら通常の古代集落の場合、須恵器と土師器の重量比較でほぼ同量であることは豊田市・水入遺跡での遺物整理結果から明らかで(註7)、おそらく塔の越遺跡では圧倒的に須恵器・灰軸陶器の重量が大きいと予想される。

さらにその内容では、緑釉陶器皿の素地が流通しているなど、通常の集落ではみられない特殊な製品の存在を挙げることができる。また09C区205SEではまさに祭祀具であり、井戸が祭祀場の一面を占めていたことを裏付けるものである。これら特殊な遺物によって塔の越遺跡を際立たせることはもちろん可能であるが、個別の事例紹介に終始してしまうおそれもあり、尾張国府跡推定地

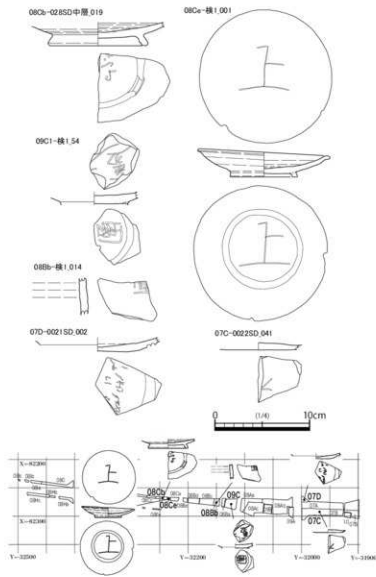


図 430 塔の越遺跡の刻書土器実測図とその分布状況

の発掘調査成果との比較の中で考究しておきたいと考えている。

そこで現状で通常集落と内容的に比較可能な遺物として出土文字資料に注目してみたい(図5)。しかしながら報告で明らかのように、当該遺跡における墨書土器の出土は極めて少ない。これは墨書土器が増加する9世紀以前に遺跡の中心時期があることも関係するが、9世紀後半以降の遺物が多い尾張国府跡推定地の調査成果や、周辺遺跡での出土状況も加えてもそれほど多くない印象がある。

そのような状況ではあるが、塔の越遺跡では刻書のある須臾器が6点以上出土しており、それらが家記号のようなものではなく文字が刻まれている点で、通常集落との相違点であるといえる。まずは出土状況を確認すると、「□守」は溝(2)(08Cb区028SD中層)で出土し7世紀末～8世紀前半とみられる。07区では「御カ」の習書が07D区0021SDで出土し、「□」は07C区0022SDで出土している。内外面に「上」刻書のある皿、やはり

内外面に「國」「蓋」とある器、「寛」のようにもみえる「□」は検出出土であるがいずれも8世紀～9世紀前半に建物群のあるエリアに分布している。

須臾器や灰陶器の刻書は生産地(窯)でなされ、生産管理の目的以外ではおそらく供給先を意識したものと考えられるが、その中に「守」や「國」がある点は、供給先の性格をある程度示しているといえる。すなわち「守」は国司の長官であり、「國」は国守などの国府施設である。したがってこれらの文字資料が塔の越遺跡で集中的に出土している点は、当該遺跡が国府施設の一部である可能性を想起させるのである。

一方、墨書土器は07C区400SEの枠内で出土した内面に漆付着の須臾器無台碗の底部外面に「□□」とあるのが数少ない事例である。全国的にみると、墨書土器の存在から国府などの官衙施設を想定することが多いのであるが、塔の越遺跡を含めて尾張国府跡とその周辺では、墨書土器からのアプローチは難しいと考えられる。しかし視点を変えてみると、国府が優先的に使用できる窯があるとすれば、供給先や使用者を予め特定した製品を作らせて、そのことを刻書によって銘記させることが可能であるから、器に墨書する必要があるとなくなると考えられないだろうか。小牧市を中心に分布する尾北窯の経営には、これまでの研究で官の関わりが強調されているが、このような窯業地が背後にある国府の土器供給体制については、供給先の状況も詳細に検討し、他国との比較も必要になってくると思われる。

(6) 国司館の可能性と

尾張国府城としての塔の越遺跡

前項までで示した遺構変遷と出土文字資料に関する成果をまとめて、ここでは古代における塔の越遺跡の評価について考察する。

まず問題になるのが、7世紀半ばに始まって同後半にかけて成立した、大形の掘立柱建物と井戸を中心とする広大な空地である。その立地からすると国府に関わる施設の初現を推測させるのであるが、現状の国府研究では、国府の整備は8世紀第2四半期を想定するのが通説的であり、近年になって7世紀末から8世紀初頭と

する意見も提出されている(註8)。しかしながら当該遺跡ではそれよりも遡って何らかの施設が構築されており、位置づけについては慎重に進める必要がある。特に、前代までの古墳群中にあることから、葬・墓制との関連も視野に入れておかなければならない。

その点で7世紀末～8世紀前半葉に相当する掘立柱建物群(1)と溝(2)・(5)は、同一方位軸がより多数の遺構で認められ、一定の区画を設定しその内側をより充実させる方向で構築されていることが重要である。その性格としては「□守」刻書須恵器が示すように国守の存在が想定され、かつ政務には直接関わらない井戸を併存していることから、国守の日常的な空間である国司館を考慮しておきたい。また、9世紀前半に機能した井戸205SEの枠内からは、シカなどの動物遺体各部位が各層で出土しており、肉食にかかわる痕跡と考えられる。その一方で、水瓶や銅鉾は祭祀の痕跡であることから、井戸を利用したのは肉食と祭祀の両方を行う立場にあったと考えられ、ここからも上位階層である国司の居住施設という性格が導かれる。したがってこの性格は、掘立柱建物群(1)から同(2)へと移行しながら9世紀前半まで引き継がれていたと思われるが、上記で問題にしたように7世紀後半まで遡らせて評価できるかどうか今後の検討課題である。

そして、近年の国府研究でも明らかにされていることであるが、尾張国府においても統一された方格地割で街区が形成された痕跡は認め難い。当初は河川とそれが形成した自然堤防などの微地形に合わせた方位軸による直線道路を構築し、その後新たな方位軸の区画が生じてもそれまでの軸線は容易に破棄していない。問題はこの直線道路網が及んだ範囲であるが、塔の越遺跡東方低地の長野北浦遺跡において、7世紀後半以降に開削されたと思われる併行する溝群が検出されている。溝群は3条からなり西南西から東北東へ延びている。最も外側どうしの間隔は約14mで中の1条は北から約4m、南から約10mの位置にある。これらが直線道路の溝溝であるとする、国土座標北から約70°東へ振れる軸線を採用していることになる。これは07区欄2(7世紀後半)のそれと同一であり、7世紀後半の方位軸が微高地を外れて東方の低地にまで及んでいたことが示されるのである。ただし長野北浦遺跡では古代の建物も検出されていないので、建物群景観の有無を国府城の定義に該当させれば、ここは国府城外となろう。尤も低地帯をさらに抜けた東方約500m先には別の微高地があり下津遺跡群という古代から中世の重要な遺跡群が展開する。先述したように稲沢市域は、微高地が畑の畝あるいは湿地に浮

かぶ島状に展開する地形が基本であり、なおさら連続する方格地割による街区形成は困難であり、今後の研究の進展によっては下津遺跡群も国府城の「飛び地」として機能していた可能性が示されるかもしれない(註9)。

加えて、塔の越遺跡に国司館の1つを想定するならば、そこから北のさらに標高が高くなる天神前遺跡・清歌遺跡・治郎丸遺跡あたりに、8世紀を中心とする国庁の存在を予想することも可能になってくるであろう。今後の塔の越遺跡を含めた一帯の考古学情報の蓄積と整理がより一層重要になると思われる。(永井邦仁)

註

- 1) 尾張国府の所在地に関する調査研究史は北條1996にまとめられている。歴史地理学的では水野時二の研究(水野1959)が最も参照され、考古学的な検証作業は1977年から1988年まで稲沢市教育委員会によって実施された尾張国府推定地での発掘調査(北條ほか1979～1989)が基礎とすべき成果である。
- 2) しかし一方で旧河道が塔の越遺跡西端で大きく屈曲していることから、洪水にうける影響は大きく、08C区・同1区での不明瞭な堆積・遺物出土状況はそれに関わっているのかもしれない。
- 3) 08D区018SKは竪穴建物と推定される遺構009SKに掘り込まれた推定長軸約2mの細長い土坑である。不明瞭な掘り方などの形状から古墳時代終末期の土坑墓である可能性も考えておきたい。
- 4) 08Fe区057SDは極端に狭い調査区内で検出されており、その底まで完備できているか疑問がないわけではない。しかしながらそうであったとしても出土遺物が示す時期相は08Cb区028SDとほぼ共通しており同一遺跡を完全否定するだけの根拠はない。
- 5) 報告では、08Fd区042SX上層はその検出状況からはほぼ南北のラインが想定されているが、延長である08Cd区004SDでは変化がみられないので、全体的には変更がなかったとみている。
- 6) 07A区170SBは浅く平らな遺構を竪穴建物跡と認識しており、確かに9世紀後半以降の遺物も出土している点は重要である。しかしながら竪穴建物群(1)に比較して単独で存在するなど建物群の一角とするには証拠が少なすぎるという。
- 7) 豊田市・水入遺跡では古代の須恵器と土師器に限って総重量を計測した結果、須恵器が42%、土師器が58%であることが示された(永井2005)。
- 8) 大橋泰夫氏は国府跡の下層遺構や年代観の見直しにより、国府成立を7世紀末まで遡らせる見解を示している(大橋2011)。
- 9) 稲沢市教育委員会による尾張国府跡Z地点の発掘調査は、三宅川旧河道右岸におけるO-10号溝(8世紀後半葉)の竪穴建物群の存在を明らかにした。このことから、右岸微高地にも8世紀代の集落が展開していることが示される。これも塔の越遺跡から見れば「飛び地」のような立地にあたるが、大國魂神社からみると北側の若干標高が高くなる地点であることも重要である。

参考文献

- 大橋泰夫 2011 「古代国府の成立をめぐる研究」『古代文化』第 63 巻第 3 号、財団法人古代学協会
- 田中広明 2006 『国司の館』学生社
- 永井邦仁ほか 2005 『水入道跡』愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 108 集
- 北條敏示 1996 「尾張国」『シンポジウム 2 国府一畿内・七道の 様相—』日本考古学協会 1996 年度三重大会資料集
- 北條敏示・岩野見司・日野幸治ほか 1979～1989 『尾張国府跡発掘調査報告書(1)～(XI)』稲沢市教育委員会
- 水野時二 1950 『尾張の歴史地理』名古屋鉄道

第6章 総括

長野北浦遺跡・塔の越遺跡全体の変遷過程と要点について整理すれば以下ようになる。

①期：古墳前期前半以前

長野北浦・塔の越遺跡から出土した該期の遺構・遺物は縄文晩期に属する定式石斧1点のみであり、弥生時代や古墳前期前半期の資料は出土していない。当の磨製石斧にしたところで由来は全く不明であり、遺跡周辺では長期にわたって人間活動の痕跡は認められない。

縄文晩期から弥生前期にかけての堆積層と推測される黒色粘土層は標高約6mを測る現地表はるか下の標高2.7m付近にあり、古墳前期後半の推定旧地表面高度とは3m程の差がある。2000～3000年の間に約3m堆積したということだが、おそらく弥生中期後葉から弥生後期前半にかけて河川活動のピークがあり、青木川・三宅川、日光川等古木曾川水系の溢流によって地表面の大規模かつ断続的な更新が進行したのであろう。

②期：古墳前期後葉

鬼頭 剛氏による表層地形の復元によれば塔の越遺跡は三宅川左岸の自然堤防高地上に、長野北浦遺跡はそれから少し低い谷筋に位置している。地形的に高所は前者だが、まず長野北浦遺跡を中心に居住地や墳墓等が設けられた。しかし期間は短期で、遺構の分布も極めて散漫であり、長期定住は窺えない。安定していたはずの微高地頂部において遺構・遺物の分布は無く、破壊を受けた痕跡も認められないので、居住地・墓地・生産地のトリニティがどこで、どのように確保されていたのか問題になる。

なお、塔の越遺跡08Ab区・09C区等で認められた不安定な遺構の検出状況や遺物群の出土状況からの時期にも大規模な洪水が窺えるので、①期に続く自然堤防形成の最終段階であったと考えられる。堅穴建物や円墳・方墳はその最中に営まれたものであり、それ故に前後の脈絡を欠くことになったと考えられる。

③期：古墳中期～後期

長野北浦遺跡・塔の越遺跡ともに墓域となる。先行する円・方墳とは距離を置いて新たに円墳や方墳が築かれる。一部に埴輪を伴うが、樹立して圍繞されることはなかったらしい。早野浩二氏は稲沢市教育委員会の調査成果や採集品の分布から多数の埴輪が展開する景観を復元している。

④期：7～8世紀前半

塔の越遺跡の東部では井戸を伴う掘立柱建物群が形成され始める。建物の周辺には前代の墳墓の高まりが遺存しており、両者からなる景観が広がっていた。墳墓の周

清からは継続して遺物が出土しており、それが喪葬儀礼の継続を示すのかどうか不明だが、周溝が埋まり切っていなかったことは確かである。長野北浦遺跡の古墳前期の方墳の北では輪軸を合わせるように溝が平行して数条掘削されており、埴輪自体にもその高まりを使用した施設が存在が疑われる。なお、全域に分布する黒色化層は、樹木の伐採による草地化（とその焼却による草地の維持と炭化物の集積）を示しており、長野北浦・塔の越遺跡における人口上昇だけでなく周辺エリアにおける遺跡増加も合わせて中核形成への方向性が明らかになる。

⑤期：8世紀後半～9世紀

塔の越遺跡のピークとなる時期で、区画溝（水路）や柵による地割りが施行されて、井戸を伴わない堅穴建物群と井戸を付属させる掘立柱建物群とが分離して併存する。特に、塔の越遺跡09C区周辺で認められた重厚なつくりの井戸と掘立柱建物群の変遷は、国府に関連する施設の存在とその継続を示すものとして注目される。永井邦仁氏はこれを「国司館」の一つに想定しており、北條敏示氏が課題とする「前期国府」の所在地解明の手掛かりともなる。

⑥期：10～11世紀

塔の越遺跡の東部から長野北浦遺跡にかけて遺構は激減し、全域でも緑釉陶器が極めて少ないことから遺跡のピークが過ぎ去ったことが窺え、周辺は閑散とした景観であったろう。08Ha区で検出された井戸は塔の越遺跡の西部に重心が移ったことを示しており、三宅川西岸に「国府」（北條敏示：「後期国府」）がようやく浮上する。

⑦期：12世紀後半～14世紀前半

自然堤防の頂部付近での人間活動はほとんど認められず、東へ下った長野北浦遺跡で区画溝を伴う屋敷地の一角が姿を現す。「万徳寺」を核とする集落成員の階層分化を示すものであろう。奥野絵美氏は出土昆虫から周辺に富が広がる開地環境を想定している。

⑧期：15世紀後半～16世紀

塔の越遺跡では09C区で区画溝や柱穴が見つかったので例外的に屋敷地が存在した可能性を除けば、長野北浦遺跡を含めて全域で遺跡形成は低調となる。当該期の遺物が近世の溝から出土してもわずかで、遺跡周辺の土地利用のあり方に変化が無いことを示す。⑦期の万徳寺を核とする集落の拡大とは対照的にこの時期に取東に転じたのであれば、15世紀に顕在化する集村化に相当する可能性がある。

⑨期：17～18世紀

17～18世紀にかけて長野北浦遺跡周辺の水田化が

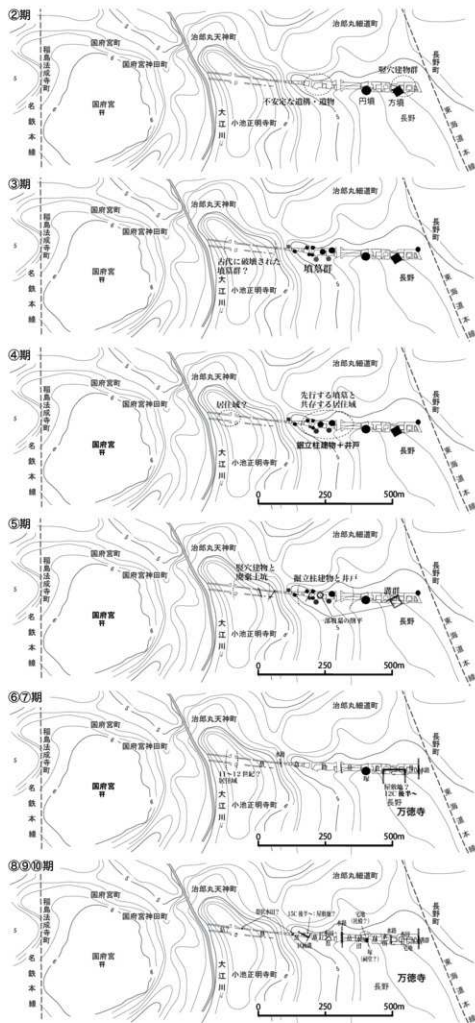


図 431 長野北浦・塔の越遺跡の変遷図（等高線図は鬼頭論文に拠る）

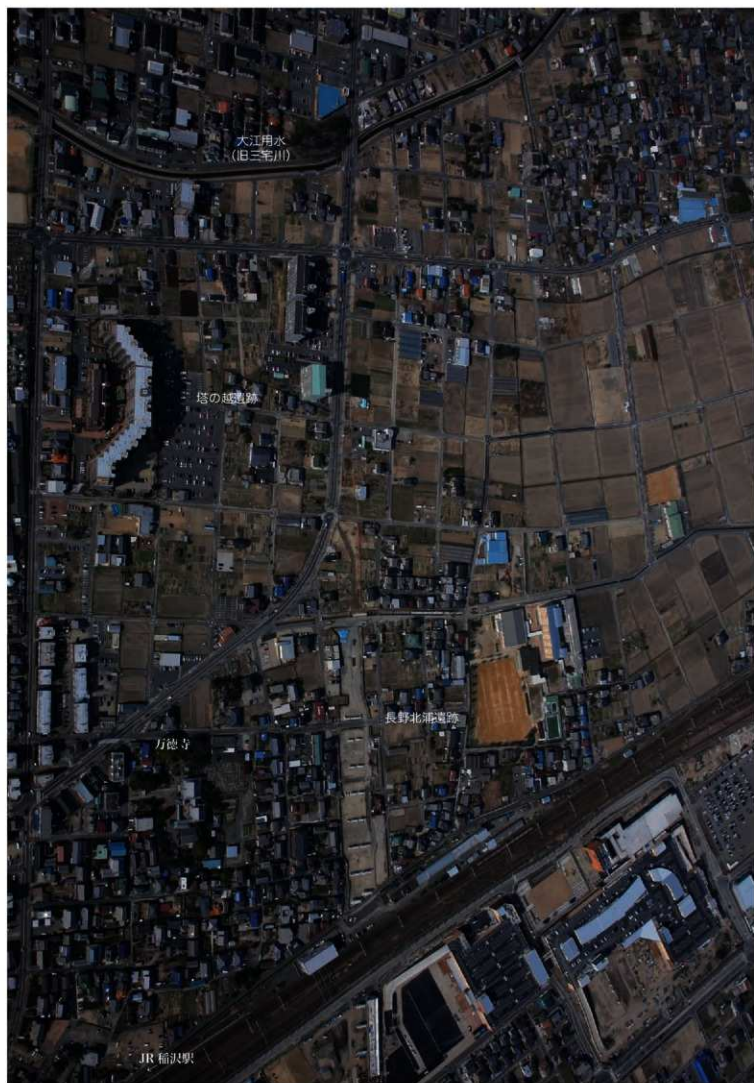
進行する。そして、一部に水田化を免れた畠を中心に盛土が行われて宅地が形成される。おそらく、この時期に長野北浦遺跡において古代から中世にかけての遺構群の大規模な破壊が進行したと思われる。

④期：18世紀後半以降

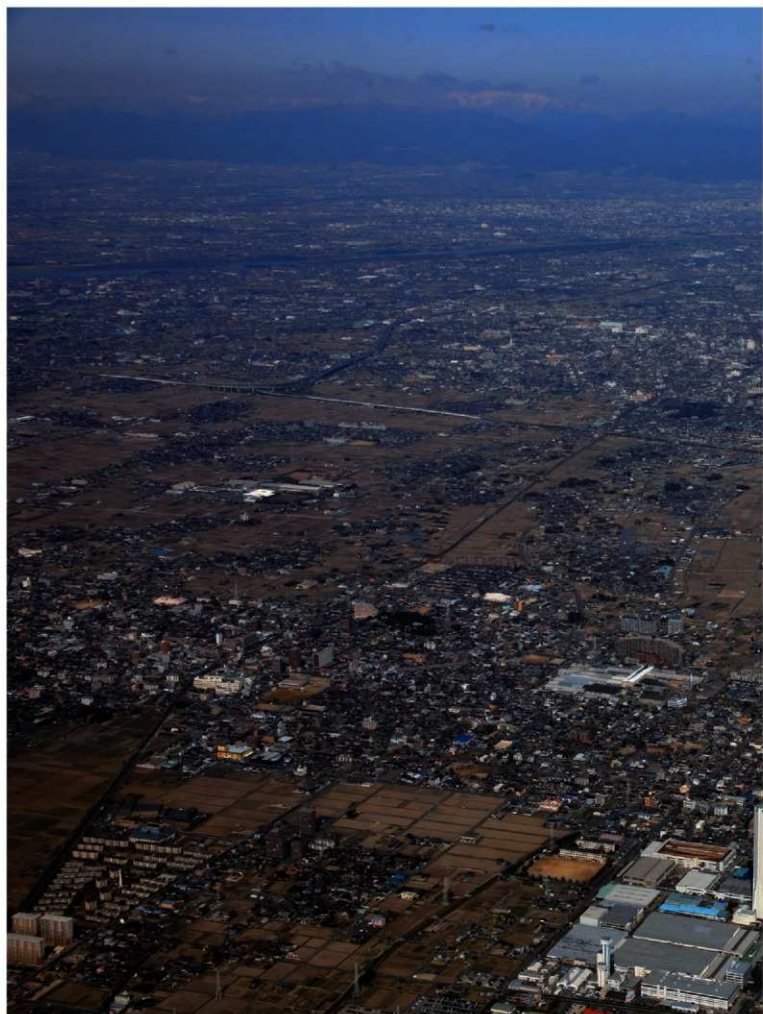
長野北浦遺跡では柱穴の底に板材（もしくは角材）を据えて基礎とする掘立柱建物群が展開する。垣根の植込み跡のような溝が東西両辺と北辺に認められるので、万徳寺周辺の集落が再度拡大して新たな宅地を形成したと考えられる。欄列や複数の井戸群が検出されているので単一の宅地ではないのだが、近世農村の一端を示していることは確かだろう。

塔の越遺跡東端で見つかった古墳前期の円墳もこの時期までは外観が変貌しながらも残存として存続していたが、最終的には19世紀になって削平された。円墳の北側には井戸や柱穴群が分布しており、いわゆる宅地の一角を構成している。仮に残丘の上に「祠堂」があり、その関連施設ということであれば「長野」村の天保村絵図にある西側の「社」に相当しそうだが、詳細はわからない。いずれにしても⑩期は、最終的には現代にまでつながる「長野」集落の近い歴史を物語る。

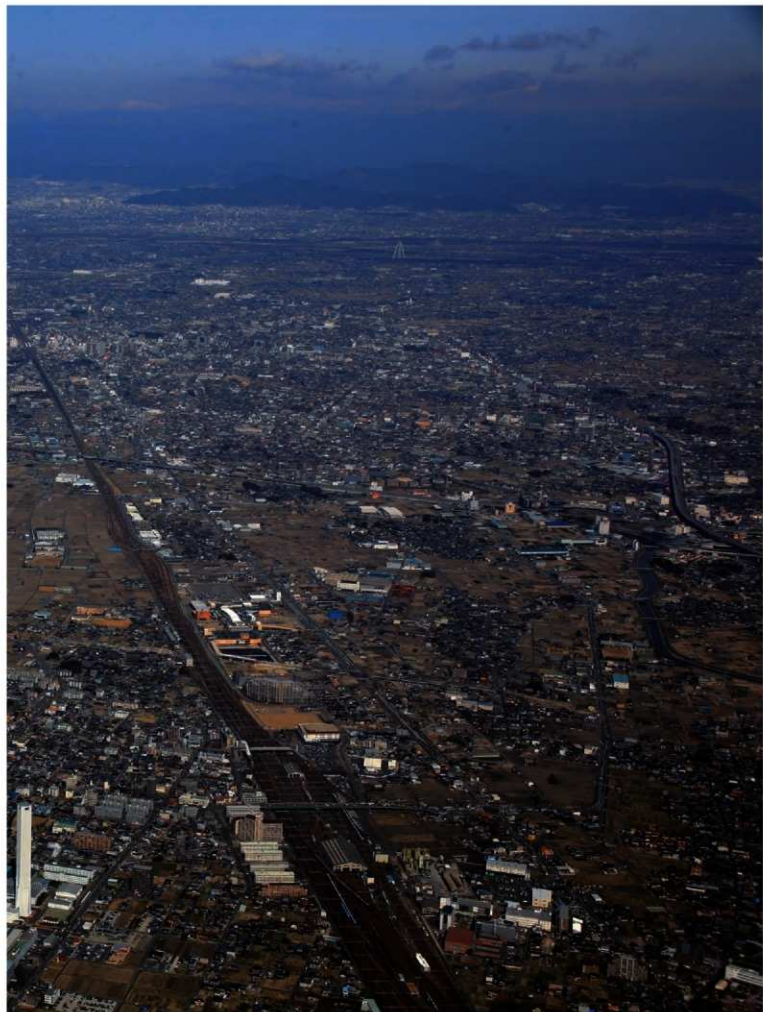
一方、塔の越遺跡では⑧期に区画溝が設けられた09C区周辺に再び溝が掘削されるが、屋敷地の様相は窺えない。西方では水路状の幅の狭い水田がいくつか検出されており、畠地帯を貫く用水（帯状水田）があり、そして所々に樹林が島状に点在する景観であったのだろう。



塔の越遺跡写真図版 1



2 塔の越遺跡写真図版



長野北浦遺跡・塔の越遺跡から北方を望む



08G区 西部2面近景 西から



08G区 011SD周辺、噴砂検出状況 南東から



08G区 西部2面 南西から



08G区 検出2 遺物群2 南から



08G区 検出2 遺物群2



08G区 検出2 遺物群2



08G区 検出2 遺物群2

4 塔の越遺跡写真図版



08Ha区 1面西部近景 東から



08Ha区 010SE土層断面 北から



08Ea区 1面西部近景 東から



08Ea区 2面西部近景 南東から



013-015SK 南から



014SK 南から



013SK 東から



015SK 南から

- 004SK 南から
- 007-008SK 南から
- 011SK 南から
- 012SK 東から
- 016SK 南から
- 017SK 南東から
- 018SK 南東から
- 019-020SK 南東から



08Ea区 遺構



08Eb区 1面全景 西から



08Eb区 1面東部近景 北東から



08Eb区 025SX土層断面 西から



08Eb区 0225K 遺物出土状況 北から



08Eb区 0225K 土層断面 北から



08Eb区 023SK
遺物出土状況 南西から



08Eb区 023SK 土層断面 西から

馬の歯？



08Eb区 023SK 遺物出土状況 南から (鉄クギはスケール代用)



08Eb区 023SK 遺物出土状況 西から



08Fa区 1面遺構近景 南西から

006SK 東から
007BK 北から
008SK 北から
009SK 南から



08Fa区 003SX 遺物出土状況 南から



08Fa区 005SK 検出状況 南から



08Fa区 010SK 土層断面 南から



08Fa区 北壁土層断面 南から



08Fa区 西壁土層断面 東から



08Fc区 1面遺構近景 北東から



017SK 土層断面 東から



018SK 土層断面 東から



019SK 土層断面 東から



024SK 土層断面 南から



08Fc区 022SK 土層断面 北から



08D区 東部遺構近景 北から



08D区 検出1遺物群



08D区 001SK 遺物出土状況



08D区 西部遺構近景 北東から



08D区 009・018SK土層断面



08D区 018SK遺物出土状況 南東から



08Cd区 全景 東から



08Cd区 西部遺構近景 東から



08Cd区 010SD 完態状況 北西から



08Cc区 検出状況 東から



08Cc区 遺構近景 東から



08Cc区 016SI 掘り下げ状況 南東から



08Cc区 014SI掘り下げ状況 南から



08Cc区 014SI完掘状況 南から



08Cc区 015SI成出状況 南西から



08Cc区 015SI埋設土器 南東から



08Cc区 015SI床面掘出状況 南から



08Cc区 015SI埋設土器 東から



08Cc区 015SI掘り下げ状況 南から



08Cc区 015SI完掘状況 南から



08Cc区 015SI埋設土器完掘状況 東から



08Cc区 015SI土層断面 東から



08Cb区 遺構検出状況 南東から



08Cb区 032・035SK 検出状況 南東から



08Cb区 032SK 土層断面 南から

08Cb区 028SD周辺近景 南東から



08Cb区 028SD 土層断面 南から



08Ce区 遺物群出土状況 南西から



08Ce区 焼土・炭化物出土状況 南西から



08Ca区 038SK土層断面 北から



08Ca区 040SX 検出状況近景 南東から



08Ca区 040SX 近景 南東から



08Fd区 1面完備状況 西から



08Fd区 025SK 焼土検出状況 南から



08Fd区 025SK 下部焼土検出状況 北から



08Fd区 025SK 遺物出土状況 北東から



08Fd区 025SK 遺物出土状況 北から



08Fd区 025SK 土層断面 西から



08Fd区 055SK 北から



08Fd区 038SK 北から



08Fd区 055SK 完掘 南から



08Fd区 034-041SK 南から



08Fd区 右上

032SK 北から 050SK 南から



08Fd区 053SK 土層断面



08Fd区 031SD 土層断面



08Fd区 035SD 土層断面 南西から



08Fd区 基盤出土土器 南東から
塔の越遺跡写真図版17



08Fe区 057SD掘り下げ状況 南西から



08Bc区 遺構全景 東から



08Bc区 001ST・004SD 土層断面 南西から



08Bc区 001ST・036SK 土層断面 北東から



007SK 土層断面 南東から



014SK 土層断面 南西から



016SK 土層断面 南西から



018SK 土層断面 南から



020SK 土層断面 南から



021SK 土層断面 南から



025SK 土層断面 南から



024SK 土層断面 東から



024SK 土層断面 南東から



028SK 土層断面 南から



08Bc区 011SD 検出状況 南から



08Bc区 011SD 土層断面 南から



08Bc区 下層確認状況



08Bb区 1面検出状況 南西から



08Bb区 掘立柱建物柱穴群 北西から



077SK 土層断面 南西から



078SK 土層断面 南西から



079SK 土層断面 南西から



080SK 土層断面 南西から



081SK 土層断面 南西から



082SK 土層断面 北東から



083SK 土層断面 北東から



084SK 土層断面 北東から



085SK 土層断面 北東から



087SK 土層断面 南西から



086・087SK 土層断面 南西から



088SK 土層断面 南東から



089SK 土層断面 南から



090SK 土層断面 東から



094SK 土層断面 南東から



096SK 土層断面 南から



101SK 土層断面 南東から



102SK 土層断面 南から



112SK 土層断面 東から



113SK 土層断面 南西から

08Bb区 遺構



08Ba区 遺構検出状況 南から



08Ba区 2面遺構近景 南から



08Ba区 046SE 近景 西から



08Ba区 046SE 土層断面 北東から



08Ba区 055SK 土層断面 西から



08Ba区 047SE 遺物出土状況 北西から



08Ba区 047SE 南壁土層断面 北から



08Ba区 047SE 土層断面 北西から



09C区 1面全景 西から



09C区 2面全景 西から

24塔の越遺跡写真図版



09C区 2面全景



09C区 404・408SK 柱列 北から



09C区 306SP 土層断面 南から



09C区 207SD 遺物出土状況 南から



09C区 305SX 遺物出土状況 北西から



09C区 401SX 遺物出土状況 南から



09C区 305SX 遺物出土状況 東から



09C区 205SE周辺 近景



09C区 205SE 上層断面 西から



09C区 205SE
 上段出土状況 井戸枠上部
 下部掘り下げ 井戸枠上部2
 井戸枠上面 井戸枠側板除去



09C区 205SE 井戸枠側面



09C区 205SE 井戸内曲物



09C区 205SE 井戸枠内部



09C区 208SE 土層断面 西から



09C区 208SE 西から



09C区 251SD 遺物出土状況 南から



08Aa区 1面西部遺構検出 南から



08Aa区 1面西部遺構近景 南から



08Aa区 1面北部遺構近景 東から



08Aa区 002・003SD土層断面 南から



08Aa区 2面西部遺構検出 南から



08Aa区 2面柵周辺 東から



09C区 2面西部遺構近景



08Aa区 101SX遺物群出土状況 北西から



08Aa区 2面北部検出状況 南東から



08Aa区 2面北部遺構近景 南から



08Aa区 2面遺構 東から



08Aa区 遠景 東から





08Aa区 101SX 大塚片出土状況細部 北西から



08Aa区 101SX 焼土検出状況 北西から



08Aa区 101SX 遺物出土状況 北西から



08Aa区 055SD 西から



08Aa区 101SX 灰釉陶器出土状況 北西から



08Aa区 037SD 検出状況 東から



08Aa区 090SD内周土層断面 西から



08Aa区 149SD 近景 南東から



149SD 上部遺物 南東から



08Aa区 149SD 遺物出土状況 南東から



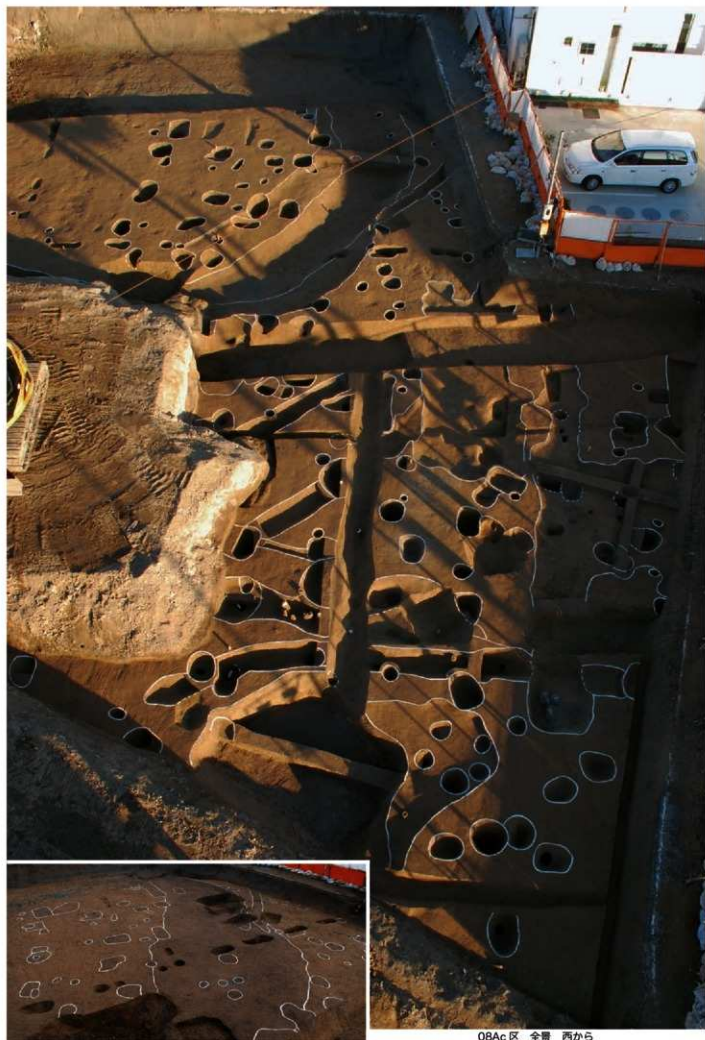
08Aa区 149SD 完成 東から



08Aa区 149SD 土層断面 西から



08Aa区 151SX 土器群出土状況 北から



08Ac区 東部遺構検出状況 北西から

08Ac区 全景 西から



08Ac区 195SK 土層断面 西から

08Ac区 201SK 土層断面 南から

08Ac区 204SK 土層断面 西から

08Ac区 226SK 土層断面 西から



08Ac区 286SK 土層断面 南から

08Ac区 295SK 土層断面 南東から

08Ac区 297SK 土層断面 南から

08Ac区 299SK 土層断面 北から



08Ac区 322-340SK 土層断面 東から



08Ac区 362SK
遺物出土状況 南から



08Ac区 270SX 遺物出土状況 南から



08Ac区 333SE 土層断面 東から



08Ac区 257SX 土層断面 西から



08Ac区 南西部近景 南東から



08Ac区 149SD 付近近景 南東から



08Ac区 149SD 付近近景 北東から



08Ac区 149SD 土層断面 西から



09B区 1面遺構検出状況 西から



09B区 2面全景 西から



09B区 2面全景 北から



09B区 112SE全景 北から



09B区 112SE 東から



09B区 112SE 北西から



09B区 112SE 上層遺物出土状況 西から



09B区 112SE 上層 北から



09B区 112SE 上層遺物出土状況近景 西から



08Ab区 2面全景 西から



08Ab区 2面南西部近景 北東から



08Ab区 154SD土層セクション 東から



08Ab区調査区北壁
154SD土層断面 南から



08Ab区 135-136SK 近景 北から



08Ab区 135SK 土層断面 南から



08Ab区 136SK 土層断面 北東から



08Ab区 175SK 近景 南東から
土層断面 南東から
土層断面細部 南東から



08Ab区 175SK 遺物出土状況細部 東から



08Ab区 175SK 土層断面 北東から



08Ab区 154SD 遺物出土状況 南西から



08Ab区 181SX 土層断面 北西から



08Ab区 167・169SK検出状況 南から



08Ab区 167・169SK検出状況 東から



08Ab区 167・169SK土層断面 南東から



08Ab区 167・169SK土層断面 東から



08Ab区 161・163SK完掘状況 南西から



08Ab区 161・164SK土層断面 東から



08Ab区 157SK土層断面 北から 08Ab区 163SK土層断面 北東から



08Ab区 158SK土層断面 北から 08Ab区 159SK土層断面 北東から



08Ab区 165SK土層断面 北から 08Ab区 160SK土層断面 北から



08Ab区 157SK土層断面 北から 08Ab区 158SK土層断面 北から



08Ab区 182SX 検出状況 南西から



08Ab区 182SX 上層遺物出土状況 西から



08Ab区 182SX 上層遺物出土状況 南から



08Ab区 182SX 中層遺物出土状況 西から



08Ab区 182SX 土層断面 西から



08Ab区 182SX 完備状況 西から



09A区 全景 西から



09A区 012SP 土層断面 西から



09A区 014SP 土層断面 西から



09A区 014SP 土層断面 西から



09A区 016SP 土層断面 北から



07A区 1面全景 西から



07A区 1面全景



07A区 1面東部



07A区 1面西部 東から



07A区 1面東部 西から



07A区 2面西部



07A区 2面東部 東



07A区 2面西部 東から



07A区 2面掘立柱建物群近景 東から



07A区 090SK 土層断面 南から 07A区 092SK 土層断面 南から 07A区 111SK 土層断面 南から 07A区 119SK 土層断面 南から



07A区 128SK 土層断面 南から 07A区 130SK 土層断面 南から 07A区 280SK 土層断面 南から 07A区 344SK 土層断面 南から



07A区 165SK 検出状況 東から 07A区 180SK 検出 西から 07A区 344SK 完掘 南から



07A区 165SK 土層断面 南東から 07A区 180SK 土層断面 南東から 07A区 228SK 土層断面 南東から 07A区 232SK 土層断面 南東から



07A区 165SK 完掘状況 南東から 07A区 180SK 完掘状況 南東から 07A区 228SK 完掘状況 南東から 07A区 232SK 完掘状況 南東から



07A区 170SB 南から



07A区 226SB 南から



07A区 022SD 南から



07A区 044SD
遺物出土状況 南から



07A区 012SD 近景 東から



07A区 004SD土層断面 南から



07A区 007SD層断面 西から



07A区 007SD層断面 西から



07A区 012SD層断面 北から



07A区 012SD層断面 西から



07A区 012SD 遺物出土状況 南から



07A区 012SD 遺物出土状況 西から



07A区 045・048SD 近景 西から



07A区 050SD 近景と土層断面 西から



07A区 東壁土層断面 北西から



07A区 256SK 遺物出土状況 北から



07A区 256SK 遺物出土状況 東から



07B区 1面全景 東から



07B区 1面東部 北から



07B区 700SE層断面 東から



07B区 044SD近景 北から



07B区 726SD近景 東から



07B区 690SE層断面 北から



07B区 045・044SD層断面 南から



07B区 725・726SD層断面 東から



07B区 737SX 検出状況



07B区 737SX 検出状況



07B区 737SX 断ち割り



07B区 737SX 掘り下げ



07B区 737SX 掘り下げ



10区 1面全景 北から



10区 1面全景 東から



10区 2面全景 北東から



10区 2面全景 北西から



10区 21SD 遺物出土状況 北西から



10区 21SD 遺物出土状況 北西から



10区 21SD 遺物出土状況 北西から



10区 21SD 遺物出土状況 北から



07C区 1面全景 東から



07C区 2面全景 東から



07C区 3面全景 東から



検出 掘り下げ4
 掘り下げ1 掘り下げ5
 掘り下げ2 掘り下げ6
 掘り下げ3 掘り下げ7

南西から

07C区 400SE



07C区 621-624SK 検出状況 東から



07C区 380SK 土層断面 北から



07C区 624SK
土層断面 南から (以下同じ)



07C区 623SK
土層断面 南から



07C区 622SK
土層断面 南から



07C区 621SK
土層断面 南から



07C区 624SK 完掘



07C区 623SK 完掘



07C区 622SK 完掘



07C区 621SK 完掘



07C区 582SK 遺物出土状況 南東から



07C区 582SK 遺物出土状況 南西から



07C区 435SB近景 北東から



07C区 435SB遺物出土状況 北西から



07C区 673SB 北西から



07C区 675SB 北西から



07A区 1面全景と万徳寺(右上) 左はJR東海道線 北から



07A区 1面全景 奥はJR東海道線 西から



08A区 2面全景 北から



08A区 005SE 曲物 (中世) 検出状況 東から



08A区 005SE 曲物出土状況 東から



08A区 006SE (中世) 井戸枠検出状況 西から



08A区 005SE 下部砂止めの編笠 南東から



08A区 005SE 土層断面 西から



08A区 031SK (古墳前期) 土層断面 南から

2 長野北浦遺跡写真図版



07A区 碓板出土状況 東から



07A区 碓板出土状況 北から



07A区 碓板出土状況 北から



07A区 碓板出土状況 西から



07A区 0101SE (近世) 土層断面 北から



07A区 050SE (中世) 遺物出土状況 東から



07A区 0101SE断ち割り状況 北から



07A区 050SE 曲物出土状況 東から



07A区 048SE (近世) 土層断面 西から



07A区 050SE 曲物出土状況 東から



07A区 066SE (近世) 土層断面 南から



07A区 中世屋敷地北東コーナー付近 077SD 他近景 北から



07A区 中世屋敷地東部南北溝群 077SD 他(中世)近景 南から



08B区 081SX 近景 北東から



07A区 中世屋敷地北東コーナー付近近景、礎板 左が北



08B区 081SX 遺物出土状況 東から

4 長野北浦遺跡写真図版



08B区 2面柱穴群近景 東から



08B区 019SE (近世) 近景 東から



08B区 022SE (近世) 井筒出土状況 東から



043SK 礎板
出土状況 東から



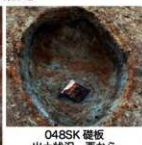
059SK 礎板
出土状況 西から



052SK 礎板
出土状況 西から



2面礎板
出土状況 東から



048SK 礎板
出土状況 西から



048SK 礎板
出土状況 西から



059SK 礎板
出土状況 西から



052SK 礎板
出土状況 西から



051SK 柱根
検出状況 南から



107SK 柱根・礎板
検出状況 北から



107SK 柱根・礎板
検出状況 東から



07A区 005SD 全景 北西から



07A区 北部1面溝群と005SD 検出状況 北西から



07A区 005SD土層断面 南から



07A区 2面古墳前階遺構群



07A区 2面090・086SI周辺の遺構群 北から

6 長野北浦遺跡写真図版



07A区 2面整穴090Si(左)086Si(右)近景 北東から



07A区 2面090Si遺物出土状況 南から



07A区 2面090Si遺物出土状況 北西から



07A区 2面092SK遺物出土状況 南東から



07A区 2面0106NR周辺炭化物層検出状況 西から



08B区 094・095Si遺物出土状況 北東から



08B区 097SK土層断面 南から



08B区 096Si近景 南から



08B区 097SK遺物出土状況 南西から



07Ba-8b区 1面全景 東から



07Ba区 020SE (近世) 土層断面 南から



07Ba区 034SE 土層断面 北西から



07Ba区 020SE 掃検出状況 南から



07Ba区 0227SK (左) 0226SK (右) 礎板出土状況 南から

8 長野北浦遺跡写真図版



07Ba区 2面全景 北から



07Ba区 0140SK 遺物出土状況 南から



07Ba区 0238SD 近景 東から



07Ba区 0238SD 土層断面 東から



07Ba区 0140SK 土層断面 南から



07Ba区 方形周溝 0240SD 近景 北から



07Ba区 0240SD 土層断面 南から



07Ba区 0240SD 遺物群出土状況 南から



07Ba区 0240SD
 通り蓋出土状況
 南から



07Ba区 0240SD 遺物出土状況 南から



07Ba区 0240SD 遺物出土状況 東から



07Ba区 0242SD 土層断面 南から



07Ba区 方形周溝 0241SD (古墳前期) 近景 西から



07Ba区 0243SD (中世) 土層断面 東から



07Ba区 方形周溝 0242SD (古墳前期) 近景



08C区 1面全景 北から



08C区 016SK 礎板
出土状況 南から



08C区 053SK 出土状況 南から



08C区 074・075・076SK 礎板土層断面 南から



08C区 030SK 礎板出土状況 西から



08C区 054SK 礎板土層断面 南から



08C区 0146SK 礎板出土状況 南から



08C区 052SK 礎板出土状況 南から



08C区 054SK 礎板出土状況 南から



08C区 0133SK 礎板出土状況 北から



08C区 052SK 礎板出土状況 南から



08C区 054SK 礎板出土状況 西から



08C区 0100SD 礎板出土状況 南から



08C区 077・078SK 礎板土層断面 東から



08C区 0173・175SK 礎板土層断面 南から



08C区 0174SK 礎板
出土状況 南から



08C区 009SK 柱根
出土状況 南から



08C区 033SK 柱根
出土状況 南から



08C区 0132SK 柱根
出土状況 南東から



08C区 0175SK 柱根
出土状況 南から



08C区 0128・0130SK 柱根土層断面 南から



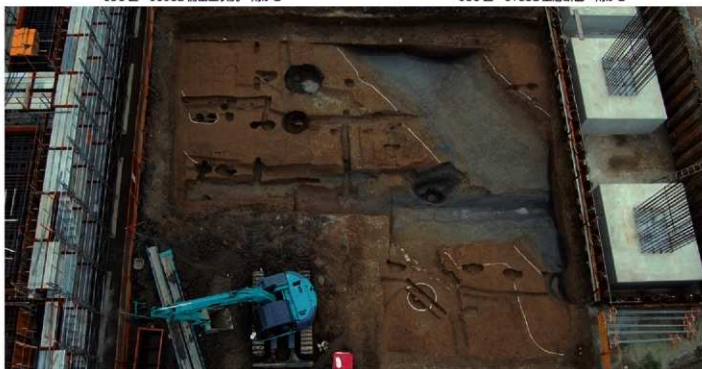
08C区 051SK 柱根出土状況 南から



08C区 050SE 桶出土状況 南から



08C区 018SE 土層断面 南から



08C区 2面全景 北から



08C区 088SE (中世) 土層断面 東から



08C区 088SE 曲物検出状況 東から



08C区 088SE 土層断面 東から



08C区 088SE 曲物内山茶碗出土状況 北東から



08C区 0104・0105SE (近世) 土層断面 南から



08D区 1面検出状況 西から



08D区 035SD 全景 西から



08D区 001・002SE (近世) 土層断面 南から



08D区 方形周溝北溝048(古墳前期)近景・土層断面 西から



08D区 048SD土層断面 東から



08D区 050Si・051Si近景 西から



08D区 050Si・051Si近景 南から



08D区 051Si出土壺出土状況 南から



08D区 051Si出土高杯出土状況 南から



07Bb 区 1 面全景



07Bb 区 1 面北部近景 部北から



07Bb 区 1 面南部近景 北から



07Ba 区 0232SE (中世) 木材除去後 南から



07Ba 区 0232SE 検出状況 南から



07Ba 区 0232SE 下部變と曲物 南から



07Ba 区 0232SE 南西から



07Ba 区 0232SE 下部断ち割り 南から



07Bb区 019SD (古代) 周辺 北東から



07Bb区 259SD (古墳前期) 遺物分布状況、縦方向は019SD



07Bb区 259SD 近景 北西から



07Bb区 0259SD 遺物出土状況 北西から



07Bb区 0259SD 遺物出土状況 西から



07Bb区 0259SD 遺物出土状況 南から



07Bb区 0259SD 遺物集積近景 北西から



07C区 全景 北から



07C区 全景 東から



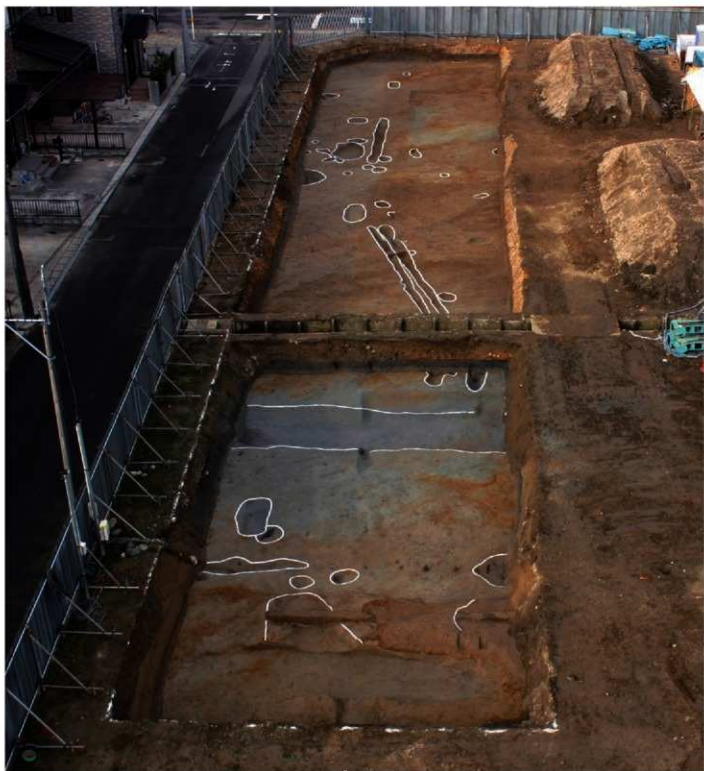
07C区 010SD 全景 北から



07C区 010SD (中世) 南から



07C区 029SD 近景 南から



07D区 全景 東から



07D区 012SK 鐵形石製品出土状況 東から



07D区 012SK 鐵形石製品近景 南東から

塔の越遺跡



07A-140



07A-29



07A-30



07A-6



07A-7



07A-8



07A-13



07A-15



07A-17



07A-18



07A-19



07A-22



07A-23



07A-252



07A-26



07A-28



07A-31



07A-40



07A-44



07A-45



07A-169



07A-27



07A-37



07A-38



07A-196



07A-79



07A-227



07A-65



07C-1



07C-96





08Aa-26



08Aa-10



08Aa-9



08Aa-128



08Aa-145



08Aa-17



08Aa-20



08Aa-188



08Aa-54



08Aa-58



08Aa-36



08Aa-59



08Aa-63



08Aa-272



08Aa-47



08Ab-267



08Ab-3



08Ab-34



08Ab-14



08Ab-11

塔の越遺跡 08Ab 区 175SK



08Ab-12



08Ac-43



08Ac-46



08Ac-47



08Ac-103



08Ac-149



08Ac-181



08Ac-2



08Ac-3



08Ac-4



08Ac-5



08Ac-6



08Ac-7



08Ac-9



08Ac-10



08Ac-11



08Ac-12



08Ac-16



08Ac-23



08Ba-1



08Ba-8



08Ba-1



08Ba-2



08Ba-31



08Ba-3



08Ba-4



08Ba-5



08Ba-6



08Ca-20



08Ca-41



08Ca-5



08Ca-28



08Cb-37



08Cb-24



08Cb-23



08Cb-20



08Cb-17



08Cb-2



08Cb-1



08D-14



08Cc-7



08Cc-6



08Cd-5



08Cd-22



08Cd-23



08Cd-32



08Cd-25



08Ce-1



08Cd-24



08Cd-6



08Ce-1





08D-10



08D-2



08D-3



08D-13



08Eb-2



08Eb-13



08Eb-22



08Eb-5



08Eb-6



08Eb-7



08Eb-8



08Eb-29



08Eb-52



08Eb-53



08Eb-54



08Eb-1



08Eb-4



08Eb-56



08Fa-10



08Fa-9



08Fc-15



08Fd-56



08Fd-58



08Fd-57



08Fd-61



08Fd-62



08Fd-63



08Fd-62



08Fe-1



08Fe-17



08G-1



08G-5



08G-4



08G-3



08G-17



08G-20



08G-18



08Ha-1



08Ha-2



08Ha-35



08Ha-21



08Ha-37



08Ha-45



09C2-18



09C2-19



09C2-58



09C2-47



09C2-10



09C2-11



09C2-4



09C2-6



09C2-17



09C2-5



09C2-16



09C2-13



塔の越遺跡 09C 区 205SE

09C2-M-42



07A-251



08cb-19



07A-189



07A-30



07C-33



07D-2



08Aa-8



08Aa-149



08Aa-243



08Aa-249



008Bb-14



08Ca-10



09C1-54



07C-063



09C2-93



内面：漆付着



08Eb-68

塔の越遺跡 07B区 400SE



068a-18



068a-22



09C2-S-36

09C2-S-35



07A-S-004

長野北浦遺跡



09D-49



08A-001



08C-13



09D-007



07D-S-016

07D区012SK



07Ba-221



08C-109



07Bb 区 0259SD



07Bb-256



07Bb-260



07Bb-263



07Bb-259



07Bb-264



07Bb-265



07Bb-262



07Bb-266



07Bb-257



07Bb-261

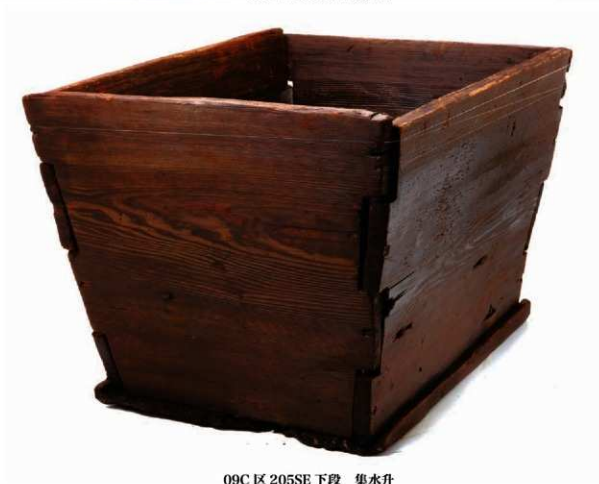


08D-44

塔の越遺跡



09C区 205SE 上段井桁



09C区 205SE 下段 集水升



09C区 205SE 最下部曲物



09C区 205SE 下段集水升 長辺側板



09C区 205SE 下段集水升 短辺側板



09C区 205SE 下段集水升 底板

長野北浦遺跡

09C 区 205SE 隅柱



09C 区 205SE 129



09C 区 205SE 131



09C 区 205SE 130



09C 区 205SE 132

08A 区 006SE 横棧



08A 区 006SE 036



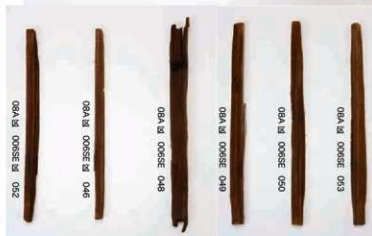
08A 区 006SE 035



08A 区 006SE 032



08A 区 006SE 031



08A 区 006SE 032

08A 区 006SE 046

08A 区 006SE 048

08A 区 006SE 049

08A 区 006SE 050

08A 区 006SE 053



07B区 187SD 021



07A区 003SD 004



07B区 187SD 022



07B区 156SD 015



07A区 050SE 002

報告書抄録

ふりがな	ながのきたうらいせき・とうのこしいせき
書名	長野北浦道跡・塔の越道跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第171集
編著者名	石黒立人・樋上 昇・永井邦仁・早野浩二・鬼頭 剛・奥野絵美・鶴岡雅弘・宇佐見 守
編集機関	公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県赤富士前ヶ須町野方802番24 TEL 0567(67)4163
発行年月日	西暦2012年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながのきたうらいせき 長野北浦道跡	あいちけんいなぎわし 愛知県稲沢市 ながの 長野	23220	090072	35度 15分 25秒	136度 49分 04秒	2007.4.1 / 2008.3.31 2008.4.1 / 2008.10.31	5,500 1,500	都市再生総合整備事業 3-3-14 稲沢西春緑 建設
				35度 15分 25秒	136度 48分 57秒	2007.4.1 / 2008.3.31 2008.4.1 / 2009.3.31 2009.5.1 / 2009.8.31 2010.4.1 / 2010.4.28	2,500 6,150 710 90	
とうのこしいせき 塔の越道跡	あいちけんいなぎわし 愛知県稲沢市 ながの とうのこし じょうまる 長野・塔の越・治郎丸		090009					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長野北浦道跡	集落	古墳	墳墓・竪穴住居	土師器	
		中世・近世	孤立柱建物・井戸・溝・土坑	中・近世陶器	
塔の越道跡	集落	古墳	円墳・方墳	土師器・須恵器・埴輪	
		古代	竪穴建物・孤立柱建物・井戸	須恵器・灰輪陶器	
		近世	井戸・溝・土坑	近世陶器	

文書番号	発掘調査報告書(1)号 2007.3.10	発掘調査(2)号(1)号 2008.3.10	発掘調査(3)号(1)号 2009.3.20	発掘調査(4)号(1)号 2009.3.20
	発掘調査報告書(2)号 2007.3.20	発掘調査報告書(2)号 2008.3.10	発掘調査報告書(2)号 2009.4.2	発掘調査報告書(2)号 2009.3.20
	発掘調査報告書(1)号(1)号(1)号 2008.3.10	発掘調査報告書(1)号(1)号(1)号 2009.3.10	発掘調査報告書(1)号(1)号(1)号 2009.3.20	発掘調査報告書(1)号(1)号(1)号 2009.3.20
	発掘調査報告書(1)号(1)号(2)号 2008.3.20	発掘調査報告書(1)号(1)号(2)号 2009.3.30	発掘調査報告書(1)号(1)号(2)号 2009.3.20	発掘調査報告書(1)号(1)号(2)号 2009.3.20

要約	<p>長野北浦道跡・塔の越道跡の調査によって、古代に関しては南北方向に大溝が掘削されてエリアを画し、そのなかに竪穴建物群や孤立柱建物群が集塊状に存在している様子を把握することができ、一部は国府に関連する可能性が高い。興味深いのは、8世紀代まではそれら建物群が先行して造営された墳墓群とともに一つの景観を構成している点である。4世紀に始まり6世紀まで長く墳墓群の存在は、この地域が尾尾平野における中心地の一つであったことを示すのであり、その西方に尾尾国府(館)が位置している点は重要である。三宅間に沿う自然地形が安定した高度を保ち、居住環境として他に優越していることは確かであり、尾尾国府を含めた尾尾平野における古代史像を考える上で重要な資料を提供した。</p>
----	--

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第171集

長野北浦遺跡・塔の越遺跡

2012年3月31日

編集・発行 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 新日本法規出版株式会社